

奇譚クラブ

新しい風俗文献誌

12



奇譚クラブ

1971

12

奇譚クラブ 昭和四十一年二月二十日創刊 昭和四十六年三月三十一日発行 第二十五巻第三号 毎月一回 三頁 定価 二〇〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Akatukishuppan
Osaka Japan



12月号 ¥350

雑誌 2805-12

カメラ・ハント楽我記…辻村隆
女体緊縛の醍醐味を語る…塚本鉄三



女体緊縛の華

密視するSMの目	処女縛にとまどう	麻縄に身をゆだね	非情な責めの終末	両手吊りの晒し	柱縛りの完了	素股の人身知りぬ	開股は縄を知りぬ	華麗な開股責め	イルリガートルを前に
佐々木真弓	中河恵子	三浦純子	長井葉津子	長井葉津子	川路叢子	金原加奈子	中河恵子	中河恵子	中河恵子

賣めてみたい藝眼の女	可憐な置物	長井葉津子
酒の肴になる	ながし目の天使	佐々木真弓
妖蛇の洗礼		川路叢子
奔奔されるまに		関谷富佐子
海老縛りの妙味		前田真知子
柱につながれた女		川路叢子
痛さをこらえる異国の女		長井葉津子
		シラ・ゲニ
賣の果の諦観		前田真知子
痛打の一瞬		関谷富佐子
ホステス裸人生		佐々木真弓
		シラ・ゲニ
ハリツケ晒し	左近麻里子	
愉悅のひとつとき	川路叢子	
鏡の前での放恣	前田真知子	
開股縛りの幻想	中河恵子	
奇賣に乱れた黒髪	渡部恵子	
M女二輪の花	中河恵子	
亀甲縛り媚態	中河恵子	
足吊りのある風景	絹川文代	
猫の目のような女	絹川文代	
日本式高手小手縛	シラ・ゲニ	

成構部集編

両手拳に棒責め	柱宙吊りに浮く	後手吊りに苦しむ	どこでも責めて	鞭の法悦境	ムチが痛い、許して	柱を挟んだ連縛	花と蛇の静子です	針責めをしで頂戴	二つ折りの女体	猿ぐつわの哀飲	日本式縛りの白人	マゾの女王に答へ	柱しぼりに恥らう	夫婦様の艶姿	豊高ボインを誇る
川路叢子	長井葉津子	佐々木真弓	関谷富佐子	関谷富佐子	関谷富佐子	渡部・川路	中河恵子	渡部・葉津子	長井葉津子	中河恵子	シラ・富子	関谷富佐子	金原奈加子	花部道好	愛川悦子
これから、どうするの？	美しき吊り	苦痛が悦楽か	逆エビ縛の魔術	愛撫の責めに入る	俯瞰撮影	黒縄と白肌	身動きできぬ境地	ポリウムを縛る	浮上した女体	麗しき背面	汚辱の手縛り	高小手縛り	責めの陶酔境	失神した男	前手縛り悦
長井葉津子	関谷富佐子	関谷富佐子	三浦純恵子	渡部・好美	前田真知子	関谷富佐子	座間明子	中河恵子	中河恵子	金原奈加子	佐々木真弓	関谷富佐子	関谷富佐子	関谷富佐子	関谷富佐子

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

一、応募作品は編集部に於て慎重銓衡の上、入選決定しましたものは速かに筆者に通知致します。入選作品に對しましては掲載の如何致

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年

一、以て御承知のまじり願ひます。移すことを
 一、応募作品は、たとへば未発表の作品の自作の作品
 一、他人の作品を引用する部分がありましたら、他社へ
 一、出延の作品を引用する部分がありましたら、中へ
 一、紙を原稿として使用する場合は、必ず書名など又明記して下さる。原稿用
 一、紙は一枚以上三枚まで。枚数は四百五十語以上換算にてとる。以上互
 一、きは締切日前に毎月十五日入選作品は出来る
 一、だけ早く応募作品は一般の原稿、読者原稿と
 一、区別する。第一頁に「懸賞」とお書き下さる。住所
 一、い、懸賞応募作品は「懸賞」とお書き下さる。住所
 一、者の連絡先を公開し、必ずお書き願ひますが、応募
 一、絶対の氏名を公開し、必ずお書き願ひますが、応募
 一、し、ご致し、若しご原稿は原稿として返戻は致
 一、とせ、ご故、若しご原稿は原稿として返戻は致
 一、一、つ、送、大阪市住吉郵便局私書
 一、箱、第41号、大阪市住吉郵便局私書
 一、送、第41号、大阪市住吉郵便局私書
 一、間、並に持込みは固くお断り致します。直接の訪

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添えて下さるようお願いいたします。御都合に依つて分譲用又は助手介添え或はブレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに関してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号
晚出版株式会社編集部宛

「極最新版」 新人M女性羞恥責め写真集

V 組 百態 大手札印画紙 (9×13 種) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚	八〇〇円
十組十枚	一五〇〇円
二十組二十枚	二八〇〇円
五十組五十枚	五〇〇〇円
百組百枚	八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局私書箱14号

複写による不鮮明な緊縛写真が
出回っているようですが、これは
全部特殊マニアの蒐集用として一
粒選りのネガから直接印画紙に焼
付した極めて鮮明な逸品揃いばか
りです。きつとファンのアルバム
を最高に充実させると信じます。
大阪市阿倍野局私書箱14号天星社
へ前金にてお申込み願います。

☆

9	8	7	6	5	4	3	2	1
蠟燭責後手縛り(富田由美子)	ネどうでもして(高村 浩子)	全裸縛玄閑晒し(三浦 純子)	荒縄柔肌いじめ(前田真知子)	超強烈エビ責め(三浦 純子)	逆エビ凄絶苦悶(前田真知子)	完全二つ折締め(三浦 純子)	トイレ排泄強要(三浦 純子)	足挙げ羞恥責め(深田 菊子)

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
海老開脚強制責(深田 菊子)	淫虐蠟燭の挿入(福井 桃子)	足挙げ責の羞恥(江口 淑子)	雁字搦目の女体(江口 淑子)	大の字片足挙げ(高村 浩子)	開股強制棒責め(前田真知子)	マダム責の哀愁(江口 淑子)	恍惚パイプ責め(江口 淑子)	豊満な女体開陳(福井 桃子)	店での全裸縛り(福井 桃子)	両足吊りの苦悶(江口 淑子)	正面股間縛晒し(高村 浩子)	強烈麻縄の緊縛(前田真知子)	本格的な麻縄責(前田真知子)	鮮烈股間縛の縄(深田 菊子)	柱縛り開股強要(福井 桃子)	菱縄股間縛前面(深田 菊子)	ゴム人形の恐怖(江口 淑子)	胡坐縛りの羞恥(江口 淑子)	後手吊上げ猿轡(高村 浩子)	強烈流腸ポーズ(高村 浩子)	両手拳前面晒し(福井 桃子)	麗しのマドンナ(荒尾 慶子)	正面の妊婦縛り(富田由美子)	菱縄縛正面開放(江口 淑子)	妊婦縛りの庄巻(富田由美子)	羞恥の源を扶る(江口 淑子)

68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37
羞恥責を待つ女(深田 菊子)	尻立蠟燭悦虐責(福井 桃子)	引回される全裸(江口 淑子)	M女を責め尽す(前田真知子)	菱縄悲し女泣く(江口 淑子)	片足挙げ開股縛(江口 淑子)	責めに呻くM女(高村 浩子)	喰込む股間縄責(江口 淑子)	スナックで縛る(福井 桃子)	黒髪前に垂れる(福井 桃子)	股間に喰込む麻(深田 菊子)	流腸責めのあと(福井 桃子)	浴室での流腸責(江口 淑子)	人の字型羞恥縛(江口 淑子)	剃毛責めの結果(荒尾 慶子)	両手両足開責め(三浦 純子)	美肌に映える縄(荒尾 慶子)	料理される女体(高村 浩子)	猿轡に呻く麻縄(高村 浩子)	エビ責めの序曲(江口 淑子)	美しき緊縛女体(荒尾 慶子)	苛酷の宴果てて(高村 浩子)	菱縄股間縛猿轡(前田真知子)	太鼓腹全裸正面(富田由美子)	猿轡に悶える女(高村 浩子)	高々と後手緊縛(福井 桃子)	女体美を晒して(深田 菊子)	後手錠吊上げ責(江口 淑子)	マダム全裸開陳(江口 淑子)	美女の全裸縛り(荒尾 慶子)	麻縄逆エビ惨酷(前田真知子)	全裸立像後手縛(富田由美子)

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69
椅子開股羞恥責(前田真知子)	荒縄後手二つ折(前田真知子)	正座する股間縛(荒尾 慶子)	股間縛の引回し(江口 淑子)	強烈麻菱縄掛け(前田真知子)	引回される妊婦(富田由美子)	開脚を強要せよ(富田由美子)	妊婦大の字縛り(富田由美子)	無惨白肌の縄痕(前田真知子)	がっちり後手縛(深田 菊子)	淫虐に晒す女体(高村 浩子)	柔肌に喰込む縄(荒尾 慶子)	羞恥責臀部露出(三浦 純子)	後手吊上げ責め(三浦 純子)	猿轡咽喉輪縛り(三浦 純子)	海老責の耐久度(荒尾 慶子)	足挙げ強制開陳(高村 浩子)	大の字縛り正面(高村 浩子)	強烈海老責地獄(江口 淑子)	後手胴締股間縛(深田 菊子)	豆絞りの猿轡縛(深田 菊子)	裏門を開放する(深田 菊子)	全裸一直線開股(福井 桃子)	白肌に喰込む縄(荒尾 慶子)	両手両足吊り責(江口 淑子)	嚴重菱縄緊縛責(江口 淑子)	強制足拳臀部晒(高村 浩子)	縄の山と流腸器(福井 桃子)	被縛者のマダム(江口 淑子)	刺毛の女体展開(荒尾 慶子)	凌辱に捧げる体(高村 浩子)	



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文庫を研究する平和で
健康な社会生活を営む真面目な成人を対象
として編集しておりますが、青少年の保護
育成に関する条例には抵触しないよう、十
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
次整えて参りましたが、更に挿入写真の検
討及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
載した文章は十二分に検討を加え、いやし
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
数は最低限度にとどめ、その増大を企てるた
めの努力はいたしません。

奇クサロン

(232)

我が緊縛の記録

深田菊子讃歌

コントニ題

写真「純子のブレイ・フォト」

佐藤満代様へ「M願望」の告白

フォト「麗わしき騎乗者」

マダム江口淑子は叫ぶ

おんな哀歌「哭壁」(1)

マニア記 緊縛風景

M女通信

「夫婦ブレイ」のマンネリ打破

編集部だより

M女性と結婚したい

イメージ画「くつわくらへ」

緊縛フォト雑感

「短信往来」

荒尾 恵子様へ

佐野みさ子様へ

喜多 知子様へ

大谷 美子様へ

美少女無惨絵秘帖「後ろ手切腹」

短歌「裸パン助」

愛読者カメラ・ハント

「深田菊子緊縛仕様書」

願望の詩「駄目さ」

鼻の美の魅力

最近の縛り映画から

オムツの蒐集家・TVに登場

浜浦 順一
鮎川 満
三和 情児
辻村 敬一
三浦 隆
松岡 美男
佐野 寿
T・T 生
菊地 淳子
早木 夢二
高村 浩子
井上 浩
編集部
川村二三夫
名古屋S生
朝野 裕
苦木桃太郎
山田 正輝
責 大造
橋 三樹
桐原 紫門
北川まりこ
大西 弘明
広島 一騎
山井 二良
東山 映史
岩手 信夫

奇譚クラブ

〔第二五巻 第十二号・通刊第二八六号〕

(昭和四十六年) 十二月号 目次

〈本 文〉

- 扉で一言「快楽と苦痛の谷間」……………大月 謙二……………(9)
- 東映作品「性倒錯の世界」のSM描写……………辻村 隆……………(10)
- 佐野さんへの公開書簡「喜悦と至幸」……………中宮 栄……………(24)
- 贗作「花と蛇」……………山光 純……………(28)
- メトミへの期待「女力士の出現を願う」……………増田としろう……………(38)
- 懸賞入選創作「フラスト族の反乱」(上)……………城崎 恭介……………(40)
- 連載・アブ紳士行状記「M派交友録」(22)……………鬼山 絢策……………(52)
- 告白「私と浣腸」……………中野 昭子……………(64)
- 誌上通信(中)「羨望の太股錠」……………柴 利好……………(67)
- 佐原陽一郎様へ……………南 彦造……………(112)
- 連載小説「紫蘭の門」(4)……………風流極道軒……………(70)
- 告白「白粉花の誘惑」……………近藤恵美子……………(84)
- 連載小説「大噴火」(第三十九回)……………千葉 青鬼……………(88)
- S女性出現を夢見て「コンテA」……………森山 壮吉……………(96)
- マダム美代「縄にまつわる私の体験」……………福井 桃子……………(100)
- 女責め図絵の系譜「出歯の亀太郎」……………南 彦造……………(112)

十月号を読んで「夫婦ブレイ雑感」……………渡部 光雄……………(124)

女斗美ストーリー「艶姿土俵祭」(1)……………奮斗士好太……………(128)

コレクション「外国誌から妊婦フォトを拾う」……………松本 一彦……………(138)

被虐の旅シリーズ「イーゼルの責め」……………由利美千子……………(142)

告白「私とブレイした人たち」……………谷山久美子……………(150)

ある下着ドロの哀歌「蒐集日記」……………城 剣太郎……………(156)

SMカメラ・ハント「森川美紗の巻」……………辻村 隆……………(164)

「快楽のスーベニア」……………花影 叢……………(194)

連載創作「幻想帝国」(8)……………大橋美代子……………(200)

襲われた私「強盗残酷記」……………千草 忠夫……………(207)

「花と蛇」の終焉を知って……………芳野 眉美……………(210)

連載・青春の陥穽(20)「ドル・ショック」……………山本 五郎……………(222)

牧高志先生に捧ぐ「和装美の世界」……………鈴木 三三……………(228)

告白「鼻責め・美都子とのブレイ」……………編集部選……………(252)

読者通信……………

読者ギャラリ―Ⅱ「地下の獣人」岡たかし(33)・「人魚?」府和糸男(47)・「針金細工」志羽利也(77)・「大群襲来」府和糸男(87)・「鞭の御馳走」春川ナミオ(98)・「踵の味わい」岡たかし(99)・「伝説」室井亜砂路(119)・「激闘」椿寿郎(133)・「落ちたい!」須坂旭(146)・「女王の腰掛」春川ナミオ(217)・「準備完了」小川茂正(231)

目次カット「お花をどうぞ」……………あらい・かず

扉カット「選択の自由」……………須坂 旭

今月号のハイライト『二人のマダム』

○十一月号の誌上に登場した二人のマダムの責められていた姿を直接印刷紙に焼付けた極鮮明なフォトにて、お楽しみ下さい。

開股縛りの強烈さ

福井 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
桃井 桃子 略号八ちち 五〇〇円
爛熟した色気に満ち溢れた全裸の肢体から滲む開股縛りの凄さ。

逆エビ責めに喘ぐ

福井 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
桃井 桃子 略号八ちち 五〇〇円
逆エビ縛りで前面を露呈した女体が軋々として悶えこころがる。

一直線の開脚縛り

福井 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
桃井 桃子 略号八ちち 五〇〇円
踊りで鍛えた柔軟な肢は真一文字に開かされて責め抜かれる。

菱縄縛りの種々相

福井 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
桃井 桃子 略号八ちち 五〇〇円
きつちりと皮肉に喰い込む厳しい菱縄が悶える度に描く花模様。

抜きとるブローズ

福井 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
桃井 桃子 略号八ちち 五〇〇円
純白のブローズ、それも後手に縛られた上に剥ぎとられてゆく。

逞ましき臀部強調

福井 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
桃井 桃子 略号八ちち 五〇〇円
脂ぎって肉の乗った臀部を惜しげもなく晒して緊縛女体は行く。

後手縛りを見せて

福井 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
桃井 桃子 略号八ちち 五〇〇円
身動きの出来ない嚴重な後手縛りで全裸の姿態は羞恥にもがく。

赤裸々な羞恥責め

福井 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
桃井 桃子 略号八ちち 五〇〇円
剥貝のように前面を晒し或は両脚を高々と挙げ徹底的に責める。

悦虐涕泣のポーズ

福井 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
桃井 桃子 略号八ちち 五〇〇円
縛られた全身からにじみ出るM愛好マダムの涕泣を見よ。

柔肌に喰い込む縄

福井 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
桃井 桃子 略号八ちち 五〇〇円
牝豹のようになやかな肢体も縄によつていびつかなる。

高手小手縛り哀感

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
マダム淑子の裸身のすべてを緊縛によつてあからさまに暴く。

苦悶するエビ縛り

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
女体の神秘を探る縄は油汗を流させながら体臭をかきまくる。

翻弄されるマダム

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
縄尻を握られて振り回される縛られた女体は法悦境を彷徨う。

愁いある目と猿轡

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
歯と歯の間に猿轡を噛まれたマダムの目は妖しく輝く。

悦虐天国への階段

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
床の上に投げだされた女体は、みずみずしい芳香を放って泣く。

いたぶられる媚態

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
まかせきつた全裸の女体は縄の媒介によつて火と燃えたぎる。

紅閨へのいざない

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
向うに見えるのは閨の室か猿轡の白さも鮮かにマダムは濡れる。

後手高手小手三態

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
変幻きわまりなきポーズの型に依り高手小手の縛りも変化する。

開股縛りの醍醐味

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
手摺りを利用した開股縛りによって女体の魅力がたまらない。

強烈股間縛り点描

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
双臀に深々と埋まれるように喰い込める股間縛りの見事な描写。

強烈足吊りの苦痛

江口 大手札三枚一組 略号八ちち 五〇〇円
淑子 略号八ちち 五〇〇円
厳しく締めつける縄にも増して揃えた足を吊られる激痛は凄く。

T字型生理帯着用

深田 大手札十二枚一組 略号八ちち 五〇〇円
菊子 略号八ちち 五〇〇円
T字型の生理帯を着用し始めより終りまでを連続写真に纏めた。

前開型バンド着用

深田 大手札十二枚一組 略号八ちち 五〇〇円
菊子 略号八ちち 五〇〇円
前開き式のメンスバンドを着用してるところを連続撮影した。

◎御注文はすべて前金にて略号御記入の上、大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛お申込み下さい。送料当方負担にて急送致します。



須坂 旭・画

快楽と苦痛の谷間

人間誰しも、苦痛とか不快とかを避けようとする気持を本能的に持っている。これは人間の生存のためにも必要な本能であって、生理的に苦痛とか不快とかを避けることによって、人間としての個体の生存を守っているのである。

しかし、この一見して誰にでも、苦痛とか不快としか見られない行為に対して快楽を感じる人達がいる。これらの人達をマゾと呼んでいるが、必ずしもマゾと呼ばれない人でも、苦痛を快楽と感ずる場合の例が少なくない。

人間の皮膚上には、冷点とか、圧点とか痛点とかいう神経が分布していて、それに刺激を加えられると、冷たいと感じたり、痛いと感じたりする。だが、その刺激の加え方や強弱の反覆などによると痛点に加えられた刺激に依る痛覚が快感に変化することがある。我々はこれをマッサージ、按摩、或は鍼や灸などの治療行為の中に見出すことが出来る。

それともう一つ、心理的な面が大きな役割を果たすことがある。対人的な愛情が太い絆となつて、苦痛即快楽へと変化する過程を我々は恋愛の中に見出すことが出来る。恋慕する対象の行為は、しばしば苦痛を快楽に脱胎せしめるのだ。

東映京都撮影所作品

セックス・ドキュメント

『性倒錯の世界』のSM描写

辻村 隆

企画 天尾完次

構成脚本 中島貞夫 掛札昌裕

金子武郎 関本郁夫

監督 中島貞夫

(この脚本は、あくまでも構成の為の、一つの目安に過ぎない。素材の実際的選択、撮影の進捗状況により、大きく変わり得ることもあるであろう)

手渡された構成脚本の巻頭に、こう書かれている。ドキュメント映画に、きまったシナリオがあれば、それは既にドキュメントでは

なく、フィクションの世界である。こういった性倒錯の世界に、目を向けてみたいという一つの目安に過ぎないのは当然であった。

性倒錯の世界を語る時、SMの世界の占めるシェアは非常に大きい。偶々そのパイロットに選ばれた私は、生憎とSの面の方が、かなり強い人間である。嗜虐について、あれこれ語り、実践しても、被虐願望の真髄には、かなり精神的に程遠いものがあつた。世にゴマンとSM願望者はあつても、さて映画に協力するとなると二の足を踏み、自ら進んで俎

上にのる人は稀に近い。そこは乗りかかった舟、ついおセツカイ焼きの根性が出て、M願望の人を探し出すのに奔走し、果ては私自身の、辻村隆ならぬ素顔まで登場する羽目になるのであった。

八月十八日から四日間、スタッフと共に耽溺した、SMの世界の撮影日記。映画観賞のメモともなれば幸甚である。

八月十八日(水)

シナリオ構成の中に(T・T氏の世界)という、数ページに亘る想定脚本がある。

——シナリオ拔萃——

『我々はここで、以下の三氏に集まってもらい、対談を企画してみよう。』

沼正三——「家畜人ヤプー」の原作者である、著名なマゾヒスト

団鬼六——SM作家

辻村隆——緊縛研究家

晴雨の描き続けた残酷美の世界に始まり、そうした世界へ惹かれてゆく人間の魂と、倒錯せる性の諸様相について、三氏の忌憚ない意見をきいてみよう。

(辻村註・上京したが、結局、沼正三不参加の、鬼六さんと私の対談になったのは、既報の通りである)

話はやがて、サド、マゾの世界に及んでゆくに違いない。

だが、この対談が、その世界に踏み込む前に、倒錯せる性の世界へふみ込んで行ったT・T氏個人を、一つのサンプルとして、我々は追ってみよう。

T・T氏の世界

T・T氏——関西で衛生関係に従事する技師である。

その日常を追いながら、何故、かかる世界に足を踏み入れたのか。

そのテーゼをなげかけてみよう。

夜、T・T氏のもとに集まる女達。

彼女達は主婦であり、魚屋の娘であり、喫茶店の会計係であり、女優である。

何故、彼女達は集まるのか。

T・T氏のもとに集まる男たち。

彼等は外科医であり、弁護士であり、一流会社の幹部であり、いずれにせよ現代社会の成功者達である。

何故、彼等は集まるのか。

彼女達へのインタビュー。

彼等へのインタビュー。

そして、T・T氏へのインタビュー。

その声をバックに、カメラは、T・T氏の密室へと潜入してゆく。

そこは一流ホテルの一室である。

密室に用意された様々な道具立て。

和服、セーラー服、流腸、鞭、ロープ等。

裸にされるV嬢——。

捕縛するように、V嬢の柔肌に絡みつく口

ープ。

白い鞭が空間に唸る。

肌に走る赤い傷跡。

V嬢の白い肉体が宙にのけぞり、床に転がされる。が、その顔には、苦痛をおりませにした恍惚が溢れて……。

その作業は、数時間に亘って、延々と続けられてゆく。

いつかその背後に、沼正三、団鬼六、辻村隆の、サド、マゾの世界に関する対談が流れて——。

異様な快楽と、苦痛の織り混ぜられた世界は、いつか現実のドキュメントを超え、暗黒美の極致へと導かれて行くだろう。

かくて、我々の狙いである、性倒錯の世界の探究は、かすかにではあろうけれども、果たされるに違いない。

だが、その世界とは、果たして愉楽の極みなのか、あるいは又、果てしなき地獄の様相を示す世界だったのか——。

血の池に、うごめく無数の男女。

真紅の炎に包まれて、のたうち、うごめく男と女。

苦痛と快楽——

地獄と至福。生と死——。

倒錯せる世界の極みは、残酷美と破壊への欲求をはらみつ、果たしてどこへ流れてゆこうというのであろうか——」

構成のシナリオは、ここで終わっている。

T・T氏は、「性倒錯の世界」における、最後の大詰めに登場する設定であった。

T・T氏というのは、勿論、辻村隆のインシャルをとった、私に外ならない。

構成脚本家の一人、掛札昌裕氏が、以前に石井輝男監督と一緒に、私宅を訪問したことがあるから、SM人間の私を念頭において、仮設を組んで書いたものらしい。

そうあれかしと願望しても、所詮は想定に過ぎないのであって、現実の私の、日常の生活とは、かなり違ったものである。

反面、非日常の私は、簡単に書かれたシナリオ程度では、一寸、言及出来ないのではなからうか——。

ドキュメント映画である以上、先にも述べた如く、仮設の脚本と違ってくるのは当然であって、そこで、いよいよホンモノのT・T氏、即ち私が登場することになる。

約束の当日、幸か不幸か、家内と長男は、二女の幼児、私にとって二人目の孫の宮詣り

というので、長男の運転で、嫁ぎ先へ出掛けの留守で、広い家の中には、私と末っ子の娘の二人きりであった。家の近くまでスタッフフが到着したら、電話連絡してもらって、自宅へ案内する手筈になっている。

午前十一時過ぎ予定通り天尾氏より電話。すぐさま、指定の場所へ車でかけつけると、

ロケ用の大きなマイクロバスが停まっていた東映撮影所の車に、何事ならんと辺りの人々が、ぞろぞろ出てきての人ばかりである。

狭い隘路の自宅前までは、到底、乗り入れられそうもない。最寄りのモータープールに頼んで、マイクロバスを入れて貰い、分散して、三々五々、私宅を訪れるスタッフは、最小限度に絞っても、占めて十一人——。

到着するや、直ちに撮影の場所を求めて右往左往。忽ちにして父娘二人の静かな、たたずまいは一変して騒々しく蹂躪される。

私の日常生活は至って平凡、健全そのものである。本職の方も恰度、夏季の閑散期で、とり立てて私の仕事振りをカメラに撮るほどのこともない。辻村隆という人間の、意外性を期待した監督さんも、少々は当て外れの面持であった。

離れ座敷の、書斎兼同好者用の部屋の、あ

ちここに、私の座右銘の（日々是好日）の字句が、色紙や壁掛けに、しるされているのに目を止めたカントクさんは、それらにカメラを向け始める。

苛烈な太平洋戦争中、ウェーキ島の一面で生と死の極限の状態にあった時、擱んだモットーである。

飢餓と栄養失調症で、毎日のようにバタバタと死んでゆく戦友達を目の辺りにして、この陸軍主計軍曹は、炊事軍曹の要職を、専ら腹心の兵長に一任しつつ、暇さえあると、貪るように本を読んでいた。

自暴自棄的に、使えぬ金でバクチ三昧の部下の兵隊は、私の漁読を可笑しげに笑っていた。明日、死ぬかも知れぬのに、本ばかりよんで、どうするのだと、いうのであった。明日、死ぬかも知れぬから、生きているうちに一冊でも多く読みたいという、私の願望は、凡そ部下の兵隊には理解しかねた様である。

その日その日の一日が、最もよき日であることを希って、生と死の境を彷徨しつつも、敵の上陸作戦でもない限り、この陸軍主計の炊事軍曹は、最後まで生き伸びてやろうという確信を秘かに抱いて、お題目のように「日々是好日」を唱えては、生き続けてきたので

あった。

その「日々是好日」に眼を止めたカントクさんの慧敏さが、私には嬉しかった。

かくしていても変化もないと、末っ子の娘に声をかけたが、すっかり恐れをなして、隠れてしまう。

フト思い立ったのが孫のことである。これならカメラおもしろいだろうと、近くに住むのを幸いに、長女の子供、私にとっての初孫を急抱つてくることにする。

「ヘンな映画に出すのと違うの？」

と長女は少々不安気である。なだめすかせて孫を車にのせて引返す。一年二カ月の、よちよち歩き。親バカの可愛い盛りである。

極く自然に振舞うには、物心のつかぬ、こんな孫が最も手頃であった。

裏の芝生へ出て、幼女と戯れる私を、書斎から、アルミサッシの硝子越しに、カメラが自在に隠しどりする。

自然に振舞っているつもりでも、内心かたくなっているのは私の方で、遊ばせていても何となくギコチない。カントクさん始め、天尾氏も、一言も言わずに、唯、黙々と、私達の行動を追っているのが、反ってシンドかった。

この幼女エミ、大した娘で、年端もゆかぬ一年二カ月というのに、頭の回転と記憶力が抜群で、

「チュウをして——」

という、よちよち歩いてきて、私の頬ぺたにキスをしてくれる。博愛主義だから、

「チュウをして」と言う輩には、誰彼なしにサクラランボの如き唇を近づけて、頬ぺたに愛らしき唾をつけてくれる。

そこを撮ってもらうつもりで、

「さあ、エミ、チュウをして」

と、私はしきりにいうが、あどけない幼な心にも、スタッフの十人近い眼が、やはり気になるとみえて、今日に限って一向にチュウをしない。何となく雰囲気の様子が、幼女にも分かるのであろうか。

暫し戯れてのち、孫を末っ娘に預け、書斎に戻る。

私にとって宝庫にも似た、耽奇房の鍵を開き、請われる俚に、数冊のアルバムをとり出して。更に未整理のフォト、未貼入のアルバムなど、次々引っ張り出してきては、フォトの整理を始める。カメラは、そうした私の一連の行為を追いつけている。背後から近々と接近するカメラを意識して、私は露出の

緊縛フォトを隠すのに一苦労である。いつも言うように、カメラ・ハント掲載のフォトは氷山の一角に過ぎない。膨大なフォトは、すべて、一枚一枚が異なっていて、同じネガは二枚と焼かない方針である。コレクターにとって、一枚あれば充分だからである。

私はビデオを操作する。VTRにSMプレイが充満している。静かに独り愉しむ私。そして、その映像は、やがて時の推移と共に消されて行き、新たに又、次のプレイヤーが、鮮烈な映像をテレビに投げかけている。

そんな書斎の私をカメラは追って、午後一時——、私の日常性は終わる。

所詮、これらは非日常の私の行動に対する刺身のツマに過ぎない。長々と撮っても、SM同好者にとって面白いシーンではないからである。時間にして二時間近くかかって、映画館でうつる、私の日常性のシーンは、精々、二、三分が、いいところだろう。

スタッフが風と共に去ってしまふと、台風一過の静けさに似て、私はしばし、机上に散乱するフォトを片附ける気にもなれず、呆然としていた。リラックスしているように見せかけていても、矢張り、緊張していたのだらうか——。急に空腹を覚えだした。

八月十九日(木)

辻村隆、SMプレイ大奮斗の一幕である。

演ずるは、谷山久美子、渡部好美と、その旦那の計四人である。

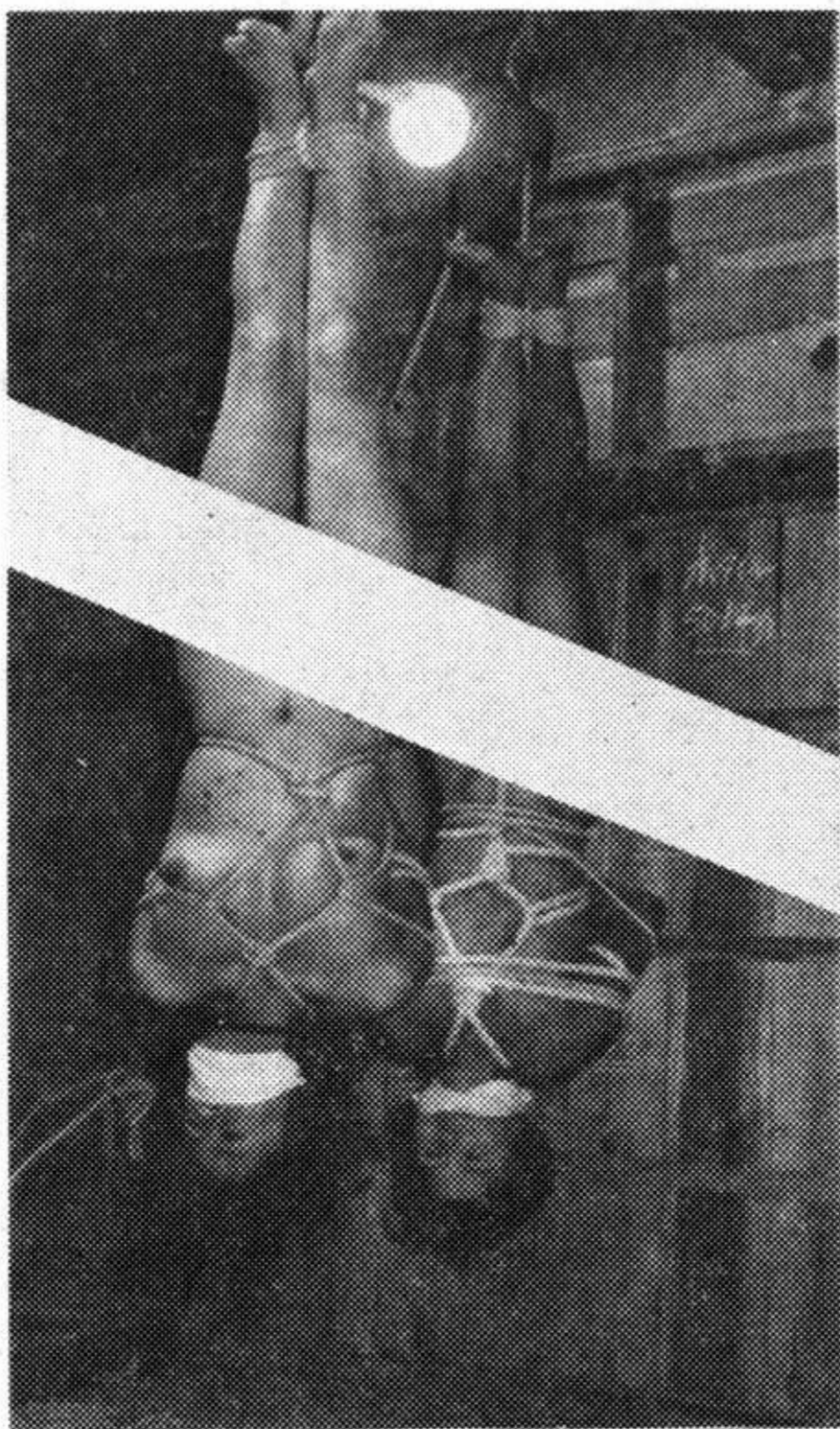
谷山さんも渡部さんも、映画の協力は快く承諾してくれたが、全国的に撮り出されるものだけに顔が、まともにうつされることを懼れた。強烈なSMプレイのシーンだけに、ごもっともである。

京都駅前で落ち合い、広島県に居住する谷

山久美子は昨夜から泊り込みで、約束時間前に待っていてくれる。私の車で、一行四人、東映京都の太秦撮影所へ直行する。

活気に溢れる撮影所で、テレビでおなじみの、あのスター、この女優さんに、物珍しげにキョロキョロであるが、私達も隠れたドキュメントスター、やることは彼等より一枚上である。大いに自負心を持ってよろしいと、内心、狂狹たる彼女達を督励する。

メーカーで、少し顔を変えてもらうべ



く、天尾氏に頼んで美粧部へ連れていってもらう。SMプレイは、すべて一任されているだけに、さてどうしようかと内心シンドイ。

最初の予定は、嵐山近くのホテルの予定であったが、私は逆吊り、流腸責めなどしたかったので、天尾氏にその旨を告げると、それじゃと急拠場所を変更して、オープンセットの一隅にある、人気のない倉庫に決まった。

下見してみると、少し狭いが梁も頑丈で、滑車や机などの小道具も、すぐ揃うので、直ちにきめる。忽ち倉庫の二カ所に鋸が入られ、四角い穴があき、カメラはそこから、倉庫の中の私達をねらう。

渡部光雄と手早く打合わせ——。私とよく似たS思考だから、意見は忽ち一致する。

午後二時、開始。

全裸になった二人の女性の前に長机を運びこみ、私は谷山、渡部光雄は妻の好美を、机上に犇々と緊縛してゆく。

長机の上に、頭と頭を合わせて縛りつけられた仰向けの二人に、前触れもなく平手打ちが飛び、縄束の鞭が、容赦なく、力任せに叩きつけられてゆく。猿轡をかませた奥から、苦悶の呻きが、期せずして、双方の裸女の紅唇で交錯して、私達、男共の嗜虐の血を弥が

上にも、かき立てて行く。

もう私達、SMのプレイに耽溺する者にとって、スタッフの存在は無に近かった。いやむしろ、ひめやかな、秘かな覗く眼に、反って興趣は盛り上がってゆくようであった。

机上から垂れた、谷山久美子の両脚を抱え込むようにして、すべやかな双臀を、真赤になるまで打擲する。

絶叫する苦悶の悲鳴が、むしろ快く悦虐のハーモニを奏でているようであった。

渡部光雄も又、私の行為に歩調を合わせて容赦なく愛妻の裸身を、存分に責めさいなんでいた。まるで、愉しくてたまらぬかのよう——。

二人の裸女の悲鳴と、切迫した私達の激しい吐息と、平手打ちのパリパリという音が、狭い倉庫一杯に充満して、快虐の修羅図は、傍若無人に展開していった。

ついでローソク責め——。

私は赤いクリスマスの飾りローソク。彼は白い太目のローソクに点火すると、激しく昂揚する嗜虐心は、情容赦もなく、赤い炎を肌に近々と傾け、忽ちにして灼けつく蠟涙を全身くまなく降らせ続けてゆく。

渡部好美にくらべて、谷山久美子は蠟責め

には弱い。好美の押し殺した呻きに比して、谷山久美子は派手に声限り喚きちらして、齒をむき出して絶叫した。肌とローソクの距離は僅か二十センチ。灼けつく熱蠟は、じかに犇と肌に強烈な熱さを伝えていった。

一息つく間もなく、いよいよサジストの夢を現実にする、緊縛裸女二人の完全逆さ吊りの圧巻が始まる。カントクの命令なのか、私達の行為に対して、一言の声もなく、シーンとスタッフ一同、声を殺して、私達の行為を見守っている。そしてプレイを演ずる私達も彼等の存在は最早、全然、気にならない。

吊縄は、足首をしっかりと縛り合わせた縄だけにかけてあるから全体重は、もろに足首にかかっている。被虐願望の強烈な女性ならでは、到底たえられたものではなかった。

その点、谷山久美子も渡部好美も、M性の激しさは抜群で、強烈そのものの逆吊りプレイには、正に最適であった。

渡部好美に始めて出会った一年前、彼女は吊りを極度に懼れ、鞭打ちに対する被虐の快感には開眼していなかった。それが僅々一年の間に、その被虐度の進展は眼を瞠るばかりに進展し、今では、むしろマゾヒスティックアニマルを自認する谷山久美子以上に、被虐願

望は強く、被虐の欲びを、かよい女体一杯に現わすようになっていた。それは渡部光雄の嗜虐の昂進に比例して、日夜調教した結果であろう。

蠟燭責め、針責め、吊責めと、すべての点で二人を比較して、今や渡部好美の方が、強靱な忍耐力と欲びの面で軍配が上がった。

しかし反面、夫から愛虐を受ける心の支えが、一抹の安堵感と共に、好美をリラックスさせていたのかも知れない。

二人がかりで、まず谷山久美子を、ついで渡部好美を、大滑車で高々と太い梁に、逆さに吊り下げる。スタッフ以外の覗き見を防ぐため、外側からしっかりと施錠してもらっている。三十センチ平方ぐらいの角穴から、二台のカメラが、上下から撮りまくっている。カントクさん始め一同、一言も容嘴しないので、私達は思うが儘にプレイ出来た。

逆吊りの二人に、縄鞭が激しく飛び、平手打ちが炸裂する。二人の女性の肌は、みるみる朱を染めた様に赤らんできて、くっきりと鞭縄の痕を烙印する。

裸身を振り廻すようにして、回転させ動揺させる。その裸身めがけて、五彩の羽根針が次々と飛び交う。音もなく、羽根先にとりつ

けた注射針が、白い肌に深々と突きささってゆく。みるみる針のささった肌から血がにじみ、糸を引く様に裸身を伝って流れ始める。

凄惨なプレイの場は、最高頂に達して、私と渡部光雄は、眼を血走らせて、嗜虐を満喫し、堪能していた。

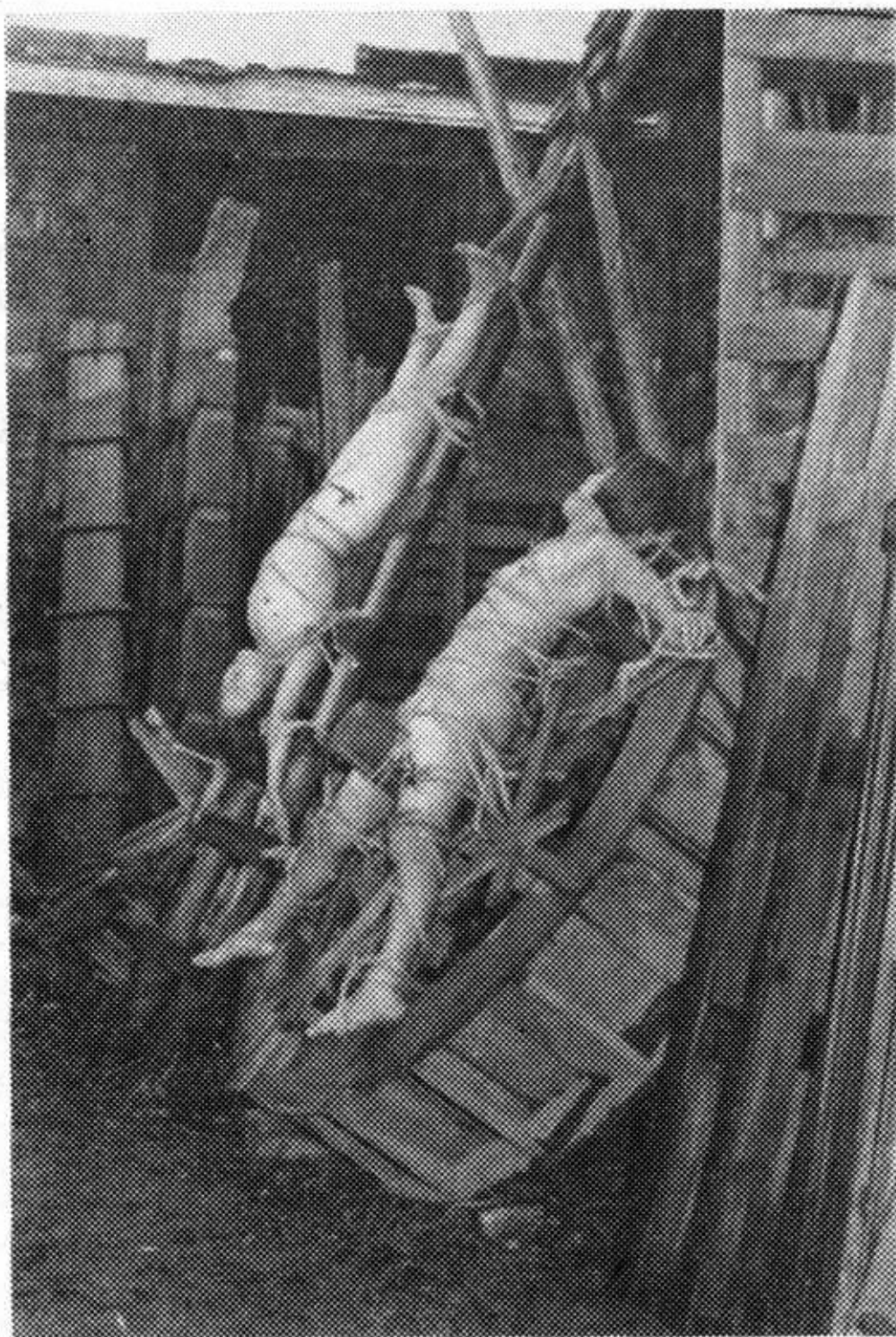
猿轡を通して苦悶の叫声が尾を曳いて、倉庫にワーンとエコーし、充血した逆さの顔面

は悦虐と恍惚に陶酔を泛かべて呻く――。

全体重のかかった足首の縄は、深々と皮肉に喰い込み、既に両足は暗紫色に変わりつつある。

後手の十指が、鞭と共に虚空を掴み、鮮血は羽根針のつきささった数力所から滴り落ちていた。

プレイの限界――既に朦朧と混濁する意識



の中で吊り下がっている女体に嗜虐の限界を感じて、匆々に降下する。冷徹なカメラが、このSMの最高のプレイを、何処まで撮し出してくれたことであろうか。

× × ×

小雨が降っている。

私達は次の責め図を野外に想定して、暗鬱な倉庫を出た。

オープンセットの谷間――。雑草が生い繁り、ぬめつく地肌は青苔に蔽われている。

使い古しの梯子、壊れた水車、転がる大小の材木。陰惨めいて、野外の責めには最適であった。雨天のためか、幸い、オープンセットのロケ隊も、いない。

スタッフが四方を囲い、ライトなどの準備をする間、私は今日のスター、超M性の持主の二人と雑談を交す。

全裸の上から、借着の浴衣を纏い、二人は流石に緊張に、頬を紅潮させていた。

美女を見馴れたスタッフにとって、谷山久美子、渡部好美は、野暮ったく、平凡そのものに映じたに違いなかった。既に、若さもなく、女の盛りを過ぎ、女体そのものも豊満とはいえない。渡部夫人は華奢であるし、谷山久美子は、独り暮らしの気尽さで、SMプレイ

と荒淫に明け暮れる生活が続いて、女体はますます、たるんでいる。

軽い蔑視を感じたのは、私だけではなく、渡部夫妻も、谷山久美子も一様に、それを感じ、何とはなく、いわれなき劣等感を味わっていたようであった。

それが、今の逆吊りの強烈そのもののプレイで、スタッフのイメージは一変していた。あの凄まじい鞭打ちと逆吊りに耐え得る、恐るべき被虐の甘受性に、一種の尊敬の念すら泛かべて、みつめているようであった。

プレイに美醜は関係ない。サド、マゾ性の真性が、美醜を超越して、そこに息をのむような迫真の、演技でないSMの真髄を発揮するのではなからうか。

カメラ・ハント女性の中にも、素晴らしい肉体の持ち主、又美貌の女性もいるのであるが、ナマのサド性をぶつけることの出来る女性には少なかった。

谷山、渡部の二人を選んだのは、彼女達が芯からのマゾであり、そのマゾ性が露出趣味を誘発して、多人数の面前で虐めぬかれ、さいなまれる事に、むしろ激しい歓びすら見出す女性であると確信したからに外ならない。「痛かった？」

ねぎらうように、どちらへともなく声をかける。

「ええ。逆吊りの時は足首がね……でも大丈夫よ」

と谷山久美子。

「奥さんは？」

と渡部夫人の意見をきくと、

「ええ、痛かったですわ。だって、こんな凄い逆吊りにされるの、生まれて始めてですもの。でも、我慢出来そうです」

と、案外二人ともケロッとしている。

「先程、スタッフが驚嘆していましたよ。あんな凄い逆吊りと鞭打ち、それに注射針をブスブス体に突きさして、タラタラと血が流れていて、死にそうな声を挙げていたのに、降ろして縄を解いたら、二人とも平気な顔をしていたのでビックリしたのですね。Mの真髄をみせてやったようですね」

「若いながら、何処もおケがありませんかと心配そうに声をかけてくれましたわ」

好美夫人はナヨナヨと笑っていたが、芯の強さがまざまざと感じられるのであった。

支度が出来たらしい。進行係が私達を呼びにくる。さあ、もう一番、スタッフを圧倒してやろうと、一斉に立ち上がる。

谷山久美子は粗木の梯子に逆さはりつけ、渡部好美は水車に大の字縛り。いずれも全裸で、荒縄で犂々と縛ってゆく。

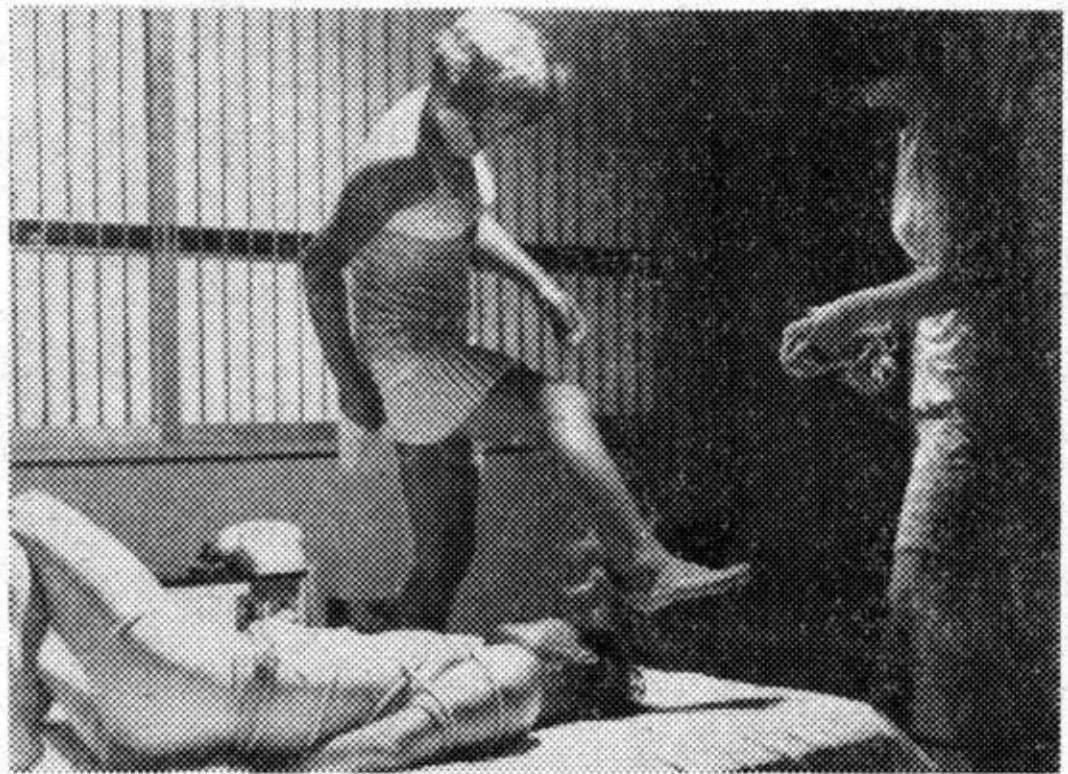
意心伝心、渡部光雄は、私の簡単な説明をすぐのみ込んで、テキパキとやってゆく。嬉しくて、愉しくてたまらぬかのように――。

梯子は立てた筈、固定してあるので、この梯子に谷山久美子を逆さにはりつけるのは、一苦労であった。スタッフの手前、余りモタついてもおられないので、手早くやるが、逆さに縛り終わると、体重が足首にかかり、踵がみるも痛々しげに梯子の横木に喰い込んで最初から苦痛そのものであった。

二人とも、気を揃えたように剃毛してあって、疎らな短毛が、蒼丘に芽生えていた。カメラは何処を狙っているのだろうか。勿論、公開の映画、露出部分は巧みにカットするとしても、蔽いようのない全景を、どう処理するといふのであろうか。まあ、そんな危惧はカッドウヤに任して、私と渡部光雄は、専ら如何に愉しく嗜虐に徹するかに腐心すればよかった。

荒縄を束にして、力任せの鞭をふるう。

私は谷山久美子――、彼は最愛の妻好美を。



再び五彩の、いろとりどりの羽根針が、裸身に飛ぶ。

シートと鎮まり返った、オープンセットの谷間で、小雨に濡れて、私達は淫靡なSMのプレイに耽溺した。

谷山久美子の踵の激痛は極限に達したらしい。必死に声を張り上げて、降ろして、降ろ

してと泣き叫ぶのであった。嗜虐の血の昂まりは、その必死の哀願すらも、甘えに聞こえる。

二人がかりで、荒々しく降ろしてやると、その俛、青苔のはえた、ぬかるむ地肌へ叩きつけるように押し転がす。

負けじと許り、渡部光雄も、濡れそぼった荒縄とくのも面倒と、好美の肌と縄の合間へ縄切りを押し込んで、グサグサと荒縄を切り刻み、水車から抱え降ろすと同様に地べたへ転がし、泥をなめさせて足蹴にする。

泥まみれになった二人に、私達は銘々襲いかかる。私のランニングもパンツも泥まみれである。

ぬかるみに、ぐいぐい顔を押しつける。谷山久美子の顔面は、みるも無惨な泥に蔽われ歯を喰い縛って、苦悶の声を殺す。

のしかかる私——。その刹那、大脳神経がエレクトに似た作用を私の下半身に伝えた。

立ち上がる。太いホースの水で、バシバシと女体の泥を流してゆく。強い水圧は、女体に水責めに似た痛みを伝えて、二人は同時に悲鳴を挙げた。

凄まじい白昼夢の葛藤——。

泥によごれた二人を、テレビ映画のスタジオ

オの風呂まで送ってゆくと、カメラ待ちの、若いチョンマゲ姿の連中が、一斉に二人を、ジロジロとみつめた。

カントクさんの紅潮した頬が、ニンマリと綻んだ時、私は彼の満足感と充実を知った。

脚に出来た腫物のため、ビッコ引き引き、カントクさんは引き上げてゆく。苦痛をこらえて、リアルなSMを追求しようと懸命な彼に、何とか期待に応えてあげたいという気持が、強くにじみ出してくるのであった。

悪鬼さながらの様相で、ムチを振り上げ、打ちおろす私が、大きく画面に、のさばるであろう。謂わば、私もそれなりに真剣だったのである。

八月二十日（金）

昨夜おそく、私宅を訪れて泊まっていたM派交友録の一人、新宮の東氏と、車で撮影所に到着する。

彼のようにMを自認し、そのM性を公開して憚らない人は実に稀である。

撮影協力の件で、私の手紙に対し、彼から電話のあった時、偶々、芳野眉美が彼の家を訪問中であったのは意外であった。

東氏と代って電話口へ出た、久し振りの芳野眉美の声は、しきりに恐縮していた。

関西の私を一飛びして、交通不便な、和歌山県新宮の奥地まで訪れるところに、やはり類は友を呼ぶ、M派の交遊があるのだろう。私はS、彼はM派の神酒奉戴派とすれば、所詮、SMの生きる道は別々なのも無理からぬ次第であった。

東氏も又、汚物崇拜症のM派であるとすれば、何処かに、意気投合するところがあるのであろう。だから、芳野眉美が私を無視したところで、私は一向、気にも止めない。久濤を叙す私の言葉に変わりはなく、只管恐縮しているのは彼の一方的な感覚からであった。昨夜、東氏の持参した、カセットテープ、数本の秘蔵ハミリをみて、大体、彼の趣好を知る。M派の感覚に弱い私も、大枚を投じて女王様を拝見し、専ら虐めて貰って、果てはネクタール、コートを、たんまり戴く気持も分かるような気がするのであった。

彼のハミリには、一つの設定がある。寝乱れて眠る美女を、そっとカメラで盗み撮りする。

入浴中の女体を、秘かに窺い、のぞき見して悦に入る。

用便中の美女の、トイレの扉の隙間から、その排便のさまをハミリに撮ろうとする。

着換え中の女性の寝室に、忍びよって、女体をうかがう。etc……

そして、必ず女性に捕まって、踏まれ、蹴られ、弄ばれ、縛られ、果ては、いやだ、いやだ、やらないぞ、やるものかと連呼しながら、ハルンをのまされ、人間便器の役目をして舌の奉仕をして、桃源を舐触し、女悦させて終わる――。

その為に大金を投じて惜しまないという、一風変わったM派の社長である。

その、東氏御指名の女王様二人と、東映撮影所の正面入口で正午に落ち合うことになっているが、既に二十分経過して、当の女王様は現われず、東氏もソワソワ、イライラ。私も又、スタッフに約束した手前ジリジリして、今やおそしと、女王様の出現を待ち兼ねている。一人はスナックのマダム。そして、もう一人は、マダムの相棒ということになっているのであるが――。

心落ち着かず、東氏は電話している。食堂の窓越しに、私は正面入口に心を配る。

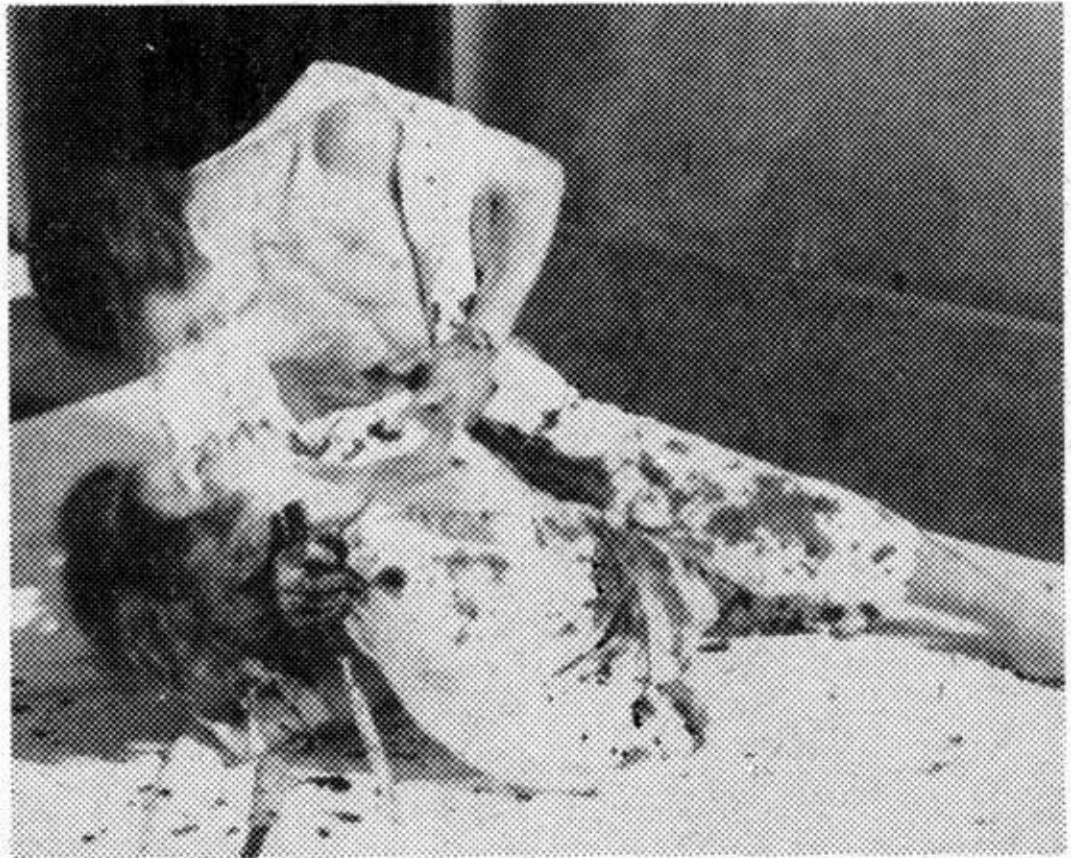
その時、二人の女性が、おそおそと入口の守衛さんのところで、何か訊ねている。

一向に女王様らしくない、野暮ったい若い娘二人である。



直感で、私は慌しく飛び出し、「東さんをお訊ねでしょう」と声をかける。救われた様に、二人の娘は私を、まじまじと、みつめた。

「辻村です。さあ」と守衛に連絡して引き入れる。これが東氏の謂う女王様かと、又してもその意外性に、改めて二人の娘を観察する。



眉毛の濃い、肥った方の娘が、マダムの相棒で、以前に一度、マダムと一緒に、東氏にMプレイをしたが、もう一人の娘は、今日が始めてという心細さであった。柔らかい感じのお嬢さんタイプで、果たして、こうした倒錯のプレイが出来るのかどうか、甚だ心もとない思いにかられるのであった。

肥った経験のある子が、ノンコ。ズブの素人の、今日が始めてという子が、アコ。

どうやら、公開の撮影所、天下の東映だからとタカをくくって、小遣い稼ぎのつもりらしい。手早く説明して、「アコちゃんと、いったね。あんた、出来る？」

と、きくと、

「ハイ、何とか」

と、いともあっさり、応える。いいのかなと思って、念のため、ダメを押して、

「全裸でやるんだよ」

と判っきりいってやると、タレ眼をびっくりしたように吊り上げて、「まあ、全部、脱ぐんですの。それじゃあ、ノンコ、約束と違うわあ」

と、傍の経験者ノンコに、なじる。

今更、とやかくいっても始まらない。東氏は、経験豊かなマダムが来ないので、幾分、失望の色を露にし、もし差支えなかったら、東映の若手の女優さんにでも虐めてもらえたらと、ヌケヌケといい出す始末であった。演技はしても、誰が中年男の女王様になる

ものかと一蹴して、全裸云々は有耶無耶のうち、とも角、美粧部へつれて行って、適当の化粧を施してもらうことにする。

場所は嵐山のホテルの一室ときまって、スタッフは準備の為に、既に出発する。

私達一行四人は天尾氏の案内で、化粧が出来次第、あとを追うことになった。

やっと美粧部から出てきた二人。ノンコがケラケラと笑って、

「ああ、おかし。今そこで、チョンマゲのスターさんが私達を掴まえて、（あんた達、どこのプロ？ 怪談映画に出るの？）ときくじゃない。私達の顔、そんなに怖いかしら」

と、私にきくのであった。Sの女王という設定を、どう取り違えたのか、眼尻吊り上げ青黛いやが上にも濃く、正に白昼にみればオバケに近い顔のつくりである。

苦笑してせかせ、天尾氏の案内で嵐山のホテルに急ぐ。今日、始めてというアコ。案外平然と声もなく、その気で揺られていた。

× × ×

自己顕示欲の強い東氏。M派的一幕。カントクさんに売込んで、いよいよプレイ開始。東氏独特の、いつもの窺視趣味は、時間の都合上、省略して、そういうことがあったこ

とにして、すぐさま、女性二人に、いじめ始められる。

ノンコがリードをとって、その友達のアコはスケの役で応援といったところ。

東氏を全裸に剥ぎ、縛るシーンで、もたついて私と交替。縛と縛り上げる。東氏にとって、私の緊縛は、かなりこたえるらしく、後手を、しきりにくねらせていた。

娘達の細縄が、東氏の男性自身を結び、両方から引っ張り始める。いつしかノンコの女王様ぶった独白が流れていた。

危惧をもって見ていたアコも、始めてとは思えぬくらい、結構やるではないか。

傍観する私にとって、これは意外の面白さである。

「どうして覗いたりするのよ……承知しないから。うんと虐めてやるわ……男なら、もっと、しっかりなさいよ。イクジなし。何なのこれ。ホラ、ホラ、みたいでしょう。みせてあげようか。アコ、もっときつく引っ張ってよ。思いきり縛り上げて引き千切っちゃおかしら。どうなのよ、何とかいいなさいよ。ホラホラ、みえたでしょう。犬になるの。のぞいたバチ(罰)よ。あとで、たんまりのませてあげるから、二人でうんと、おいしいのを

ごちそうしてあげようか。這ってチンチンしてたべるのよ。ホラホラ、ほしいでしょう。

さあ、のみたいと、いいなさい」

と、ざっとまあ、こんな調子のノンコのあざけりと、気をそその言葉が、踏む、蹴る、転がす、押えつける、なぐるという動作の間に、絶え間なく流れるのであった。

ノンコにつられて、アコも次第に雰囲気になれてくると共に、昂揚し始めてきたのか、「イクジなし」「さあ、私のもよ」「ホラホラ」「うんと虐めてあげよう」「なめるのよッ」「みせたげようか」etc……

ノンコに負けじと紅唇をついて、大胆な言葉が吐き出される様になっていた。

それまで、ブラジャー、パンティの二人はカントクの私へのサインに応じ、立ち上がって指図する私の合図で、プレイ中にそろそろ脱ぎ始め、躊躇していたアコも、ノンコの全裸



につられて、思いきりよくパンティを、ずりさげて裸身をさらした。意識してか、顔面はいつも東氏に向かって、背後のカメラには、背をみせているようであった。アコの、そうした、オドオドした、ぎこちなさが反って新鮮で、懸命に演じるノンコに悪いが、監督はむしろアコの、その新鮮さが気にいったようであった。ノンコには幾分の演技を感じるのであろうか。そう東氏から指図され、マダムから教え込まれたノンコである。彼女のリード故にアコもいつしか、のびのびと振舞えたが、こうしたMプレイの導入は、やはり一種



の芝居気なくては、やり難いに違いない。

演技のリーダーがいらないから、女王様のいじめ方は、いつ迄もドウドウ巡りである。

いよいよ二人のミックスの御馳走となったが、これはそう簡単に出ない。

ナマのプレイなら、当然排泄が一幕かうが
 そうもゆかない。異臭も辟易するし、アコは
 困惑しきった顔で、今は両手で蔽うこともせ

ず、裸身を曝して、つつ立っている。

己むを得ず、カレーで代用。言葉のプレー
 で足舐めをさせ、喰べさせ、東氏の顔面一杯
 に、なすりつけてゆく。のたうつから、純白
 のシーツは、カレーでドロドロに汚れる。

最後は神酒奉戴シーン――

狭いバスに移動して、湯責めの東氏の髪を
 アコが掴んで顔をあげさせる。それに跨がる
 ノンコが、その気になって力んでも、
 反射神経が萎縮したのか、一向にネク
 タールの雨は降らない。辛うじてポト
 ポトと千天の慈雨、数滴垂れて、ノン
 コは、しょげてしまった。

スタッフ一同に固唾をのまれて待ち
 受けられては、若い娘、心はその気に
 逸れど、尚更に出るものも出なくなっ
 て、いと物足りない結果で終わってし
 まった。

「結構、愉しかったわ」

とアコは、もとのタレ眼に還元して
 ケロリという。割り切った現代娘の一
 面を覗く思いであった。

京都駅前で二人の娘を降ろした時、
 「辻村さん。又、呼んで下さいね、お
 願い」

と、交互に握手を求めてくる。

「私は縛る方だが、それでも、いいかね」
 「いいわねえ、アコ」

ノンコはアコに同意を求める。彼女はコッ
 クリと、うなづく。この奇妙なイトコ同志、
 お互いの裸身を曝し、ハレンチなプレイをし
 て共同の秘密を持ってニッコリ顔を見合わせ
 ていた。ちょっとしたレズ気もあるのかなと
 後日のハントのネタに残して、潔く別れる。

数百米走って、東氏が降りる。唯一人、京
 都の女王様に拝謁してくるのだそう。

ちよつとやさつとのプレイでは物足りぬの
 か、この堂々公認のM紳士、夕暮れなずむ古
 都の一角で、にこやかに手を振っていた。

九月二十一日(土)

約束の二十一日を、どう聞き違えたのか、
 二十三日と思っていたKホールの社長。あわ
 ただしく準備に大童で、白衣だ、シーツだ、
 手錠だ、短刀だなど、物騒な品物買いに八方
 に走らせる。

先般紹介した、女同志のSMプレイ。相対
 死の、ねはんの地獄の快楽図。この二つのシ
 ョウを撮るため、一行は、狭いKホールを右
 往左往している。

ショウの内容は、重複するので説明を省く

が、五彩のライトの交錯する、仄暗い舞台で演じてこそ気分も乗るのであるが、撮影のカラーフィルムのためとあって、最少限ながらライトを補充して明るくなると、流石にやりづらいか、この二つのショウ、先日観覧した時に較べて、幾分、迫力にかけていた。

それは、再度同じものを見る目の、一種の馴れと、感激の薄れかも知れないが、交歓の部分は、フィルムを意識してか、あっさりと流してしまったようであった。

私とマイクロバスの運ちゃんは、俄仕込みの観客——。スタッフ一同、真剣にとりくむ中で、私と運ちゃんは、折から運ばれてきた料理とビールで、すっかり、いい御気嫌である。タダで喰ったのんで、その上、又と見難いショウを眼前真近く、クローズアップで眺めて、こんないいことはない。これぞ正に役得というところであろうか。

土曜日というので、遊客がそろそろ立てこんでくる。入口で客を捌くのに大童である。

社長とカントクさんの対話——録音。

そこで、私のパイロットの役は終わった。SMの世界の深淵さに、中島貞夫監督の、私に対する想念は、かなり訂正されていた。いつか裸のつき合いが出来るかも知れない。

撮り終わったあと、流石にカントクさんは疲労の色が濃かった。一つのドキュメント映画を完成するための、彼の並々ならぬファイトと努力。腫物を切開いたあとが未だ痛むのか、軽いビッコをひきひき、彼はまん丸い童顔を綻ばせて、私の労を犒ってくれた。

性倒錯の世界において、SMはその一部分であつても、或は本命であるかも知れない。この四日間のSMの道に匹敵する対抗馬が、性倒錯の世界にあるだろうか——。

私は私なりに大きな自負心を持っていた。観る人々は、好む道によって、それを本命とみるだろう。

それは映画「性倒錯の世界」が解決を与えてくれるのではなからうか。

営業方針で、十月第一週の予定が、十一月第二週、封切に変更したらしい。

この一本に賭ける東映の期待は大きい。

劇映画「同期の桜」など、ずっと東映の劇映画を手掛けてきた中島監督が、「セックス猟奇地帯」「日本浴場物語」と、続いてドキュメントを撮り、この「性倒錯の世界」を、その集大成として、全智全能を傾けて必死に取組み、これをドキュメント映画の打止めとする覚悟すら洩らしている。

私の関係したシーン以外の、他のショッキンクな倒錯の世界は、全然関知していない。それは、すべて未知のハプニングで、きらびやかに彩られていることであろう。

八月二十七日に上京して、二十八日あわただしく、オーソドックスな緊縛モデル二人を撮ったのは既報の通りである。

残された上京中の時間を、私は私なりに有意義に費っていた。その時間は、再び元の私に還元した、カメラ・ハント以外の何ものでなかった。

雅叙園ホテルでゆきずりに出逢った謎めいた女、森川美紗——。

その交際は、既に、この稿での範疇ではなさそうである。

私の日常性と非日常性を、すべて剔抉した映画「性倒錯の世界」で、SMプレイの果たす役割、その底流を貫く思想。そうしたものを幾分でも汲みとって貰えれば、これに過ぎた喜びはない。

—(了)—

(註・掲載フォトはカラーフィルムからの焼付であり、ストロボを使っていませんので多少、ぶれております)

佐野みさ子さんへの公開書簡

喜 悦 と 至 幸

中 宮

栄 (カットも)



中宮 栄・画

佐野みさ子さん。

感激の御返信に接しながら、すぐ飛脚の使いのように折返して御返書致さなかったことだけを悔みつつ、足早やに秋を迎えた今も、「喜悦」「至幸」に要約される私の心は、いささかも変わらずにいることを、まず、お伝えしておきます。

公開書簡という特質をふまえた上でお答えすれば、御提言と御希望は必ず実践する、とお約束して置くことで、御安堵いただきたいと思います。

基礎的な信頼と理解は一応、今回をもって果されたと考えた上で、具体的に実現化を目指したいものです。自惚れからではなく、二人は読者の「注目」を浴びる立場に至ったと考えられ、その事からも「起承転結」をつける見定めは必要でしょう。幸に、将来性と融和合致の可能性が期待されたなら、その後も読者間の友情に範を垂れるような近況報告などの形で「奇クサロン」に顔を出してゆきたいと思っています。

あなたから、こうしてお名指しを受けた以上は、「呼応しあった甲斐」のある歓喜反響を知っていただくためにも微力ながら工夫・研鑽・努力を続ける覚悟でありますから、御懸念される逸脱については何卒御無用に。また、単に気やすめのためではなく、不安警戒の心が自然消滅して行くまで、常に奇ク誌を

手挟んでお持ちいただき、私の言行一致か否かの比較・批判に目付け役の睨みをきかせて下さってもよい事です。仮にも私が、あなたの要請を度外視し、制約限度を超え禁忌を犯したなら、あなたの麗筆は慚愧誹謗ともどもに告発という形で、私を誌上に曝すことに向けられるでしょうし、その被害者意識が女性側に強いというだけで同情的な「利」をもたらすことに役立つばかりです。そうしたレポート程、不面目なことはありませんから、私も自重し慎重に接点を見つけ、協調進展を期したいと考えている訳なのですが……。

勿論、その逆の場合「アンチ山形」の一例の裏付けある報告となって、至福讚美で、あの忌わしい不名誉な、読者へ衝撃を与えた記述の記憶を、やわらぐことになるでしょう。

さて、編集者の御厚情によって紙幅をさいていただけたのを幸、面識交わす以前の最終意見表示を綴らせていただきますが——未掲載に終わった一文は、手もとに残るメモから内容要点を拾いますと、「奴隷化への方法序説」ともいえるもので、①無変化、無刺激な、退屈に等しい夫婦生活なら離別して自活の途をひらくべきではないか。②（当時懐妊の報告があったもので）将来を考え子供は産むべきではない。を二本柱として当時のあなたが望んだ生活の実現可能な手引きをまとめ且、説論を試みたのです。

従って、今回のお便りにあったように山形氏の一文で、それまであなたの心を占めていた「哀訴するような」積極的態度が、怖れと警戒で自重後退した今は、第一信にこだわりを残してはいけないと思われるのです。この点は、正直に云って残念です。夢破れた思いで、ニッキキは山形氏よ、と当たりちらしたくもなりません。

しかし、調教を望まれ、観賞用女体への改造飼育も期待して下さっておられることは、将来あなたの一大決意を促すようになる楽しみの芽であるかもしれません。それまでの間は、人妻の定期的SMプレイの楽しみをお相手するとうまたの楽しみで終わることにとどまり、精々不満解消の願望に安心恭服の姿勢で没入して下さることで「選ばれた者の光栄」に甘んじるつもりです。

何しろあなたへの私の想念は、脱生活の被完全支配を懇望する一女性の存在にとらわれおりましたから「みさ子の五つの誓い」を履行させる者は私をおいて他にない……程の意気込みと執心をみせたのです。妄想では大変な野心と露骨さで「完全支配」を企図し、甚だ驕慢です。その一例が七月号「秘密クラブ」「ヘル・ファイヤー」のカットです。あなたを念頭においたもので、つまり「調教中」はこんな恰好にさせておく」と説明ふうに描いたつもりのものです。

S人士にとって、M女性は「生きている財宝」です。自らの手で「M化馴致」したならなおのこと、手放したりはしないでしょう。自分の好みの鑄型にはめる「調教」でも、逃げられたら目もあてられぬとばかり予防対策するものです。留守するにしても、天災・失火・不法侵入など起こらないと不慮の事態を否定した上で、拘束拘禁しておきたくなるのも、変形した愛情とは云え、損得以上のいとおしさがあったることとされます。それを熟知して「好みの女」に変えられて行くのが楽しめるなら、危険のない調教です。

調教は、嫉妬や憎悪からの報復手段とは違えます。苛責なき強制はあるにしても、表には出さない慈愛をこめて、より優れたものへと昂揚させる督励なのです。ですから本来調教は、速成されるものではなく、終日連夜の長期間に及ぶもので、精神的にも肉体的にも洗脳、没個性の女体飼育が目的を達するまで厳格に行なわれ、生命依存という生存感だけを残して、他の一切の感情・概念を奪取してしまうことです。

人命尊重という基本姿勢は不動でも、人格は無視され、ささいな反抗心でも懲罰、折檻の対象となって、主従関係が発効した日以前の半生は全く「過去」として記憶から漂白化されるのです。人間の成育の過程で云うのなら、肉体は成熟そのものでも胎内復帰した状



態が「調教」の期間といえるでしょう。新たな個性としての出生まで、「胎教」のような教唆と美容管理の訓練、淑女性と娼婦性を区分し使い分けるためのオールランドなマナーの修業などを教課に盛り込んで、与えられるもの、強いられるものに歓喜する知覚動物化を推しすすめるわけです。

その陶然とした生活を経て、新たな個性化

がほぼ完了した時、形式的な拘衣・枷の類は不要となり、知覚退化を防ぐプレイは存続させながらも、SM飼育からエロス飼育へと変化させて行くことになるでしょう。

SM飼育が「女体管理」なら、エロス飼育は、将来性を考慮しての「生活管理」です。

あなたの「五つの誓い」が発表された折、私は未投稿に終わりましたが、次の様な「短

信往来」用原稿を書いておりました。

「……あなたの『五箇条の誓約』は結構なものでした。だが、いつ何処でその誓いを実現させ、ファンに嘘ではなかったと安堵の吐息をつかせてくれるでしょう。」

私は白い手の労働者（昔から文士、著述業関係の机上作業者に向けられた言葉）ですから、資料調達・分類整理・文書作成等を規則的な勤務状態ではなく、暦の運行や時計の針に無関係で稼働している人士で、どちらかと云えば夜行性です。従って机に向かう時は昼間でも戸を立てカーテンを閉めるなど、人工光線下で頭をひねっています。それ故第三条の適用を次のように行使します。

ヘルス・ビューティ・マシン（または自転車その物）に自転車用発電機を設置して、私が仕事中一定の光輝が保たれるようペダルを踏み続けさせます。ヘッドライトをスタンドに作りかえたその明りで読み書きをするので、すから、目障りや気が散るチラツキは許しません。

マシンは衝立の向こう側ですが、予め万端準備したキッチン・ワゴンを側に置き、息抜き一服のサービスも、マシンの上からさせます。そのサドルには、デイドルを固定しておき、上体の留め具の役目を果たさせます。

来客があった場合は、ボトムレスのルームメイドであり、相手の要望によってはショウ

ダンサーにもなり、ローマ時代の浴場の美妃^{タイリス}たちのように献身するのです。

食事時にかかり、店屋物が届いたなら食卓に早替りして、御機嫌を損ねないよう静かに一定のポーズを崩さずにいるのですが、内密の話は知られたくないので常時嚴重な耳栓をさせておき、下命の伝達は杖の先の決り、乗馬鞭での叩き、アナルへのエアリリースによる信号などによります。

こうした日常生活化した調教が行き渡り、何処へ出してもはずかしくない馴致済み「奴隷牝」になった後は、小生の秘書または代理人として外出を許しますから、期待を裏切らないように涉外・資料蒐集等を落度なく敏速正確に処理して信任に応えて下さい。

その他日課として代筆が出来るようにペン習字や、写真撮影・暗室操作が助手としてつとまるよう職業的訓練もさせて、倦怠のない計画的な暮らしを築いて行くようにしたいと考えています。云々……

これらの意図は、綺語的な調教を実生活の中で活かしたいと思ったからで今もって変わりありません。個性に適應した生活環境を与えることから出発する打算性のない相互関係なら、いわば純粹にこうした理想が現実化されて、興味本位の猟奇惹句のマスコミ用語「変態・異常」の現象、指弾をはずれたSM世界を出現させることになると思います。

SMの強度な関心は、性的知識欲と性衝動の旺盛な一時期に湧くものと考え、受けとめるべき事柄です。更に人格のかくされた一面での、S並びにMの発露は、総合的には人格淘汰に益するよう仕向けられるべきで、さもないと生活破綻者としての自滅へ暴走する事になります。

あなたは恐らく、^{マルチプル・クライマックス}多回数絶頂感を性愛の極致と考えておられるのでしよう。そのために前戯の多様化を望み、男性を挑発する媚態演技力を被虐嗜好に置き、性癖化してしまわれたようです。人が苦心惨憺してパートナーを変革させる頂点へ自ら登りつめたあなたをお相手する醍醐味は格別なものと思われ、快楽追求を側面援助する役まわりが「S」風な気分なのかも知れません。しかし「調教」の名のもとでは逆に、ささいな事で多感反応する淑かさへ引戻す訓練^{トレーニング}も考えられるのです。禁欲の静寂も強制されたものであれば、被虐感興を生む筈ですから。

あなたと出会った時からの交際は、多種多様な事が考案され、お世話になった「奇ク」にはその一つ一つが報告され、欲びの還元としたいものです。

「今まで通り、特定のパートナーと信頼出来る範囲内のプレイを楽しむのが一番良い」とされたからには、私のひとりよがりな空想の完全実現化は出来なくなりました。鑑賞用女

体への飼育を共鳴して下さっても、檻正用狹窄具を連日着装させたり確認したりする事は不可能でしょう。勿論、明快に御主人に対して「あなたの為に美しくなりたいから」と、美容上のことに転嫁する才覚を持って下さるのなら、エリザベス朝時代風の胴着^{ホルセット}や皮製キヤミソル、更にオール・イン・ワンでの重装備も可能となるわけですが。

都心のビジネス街にある関係で、平日は午後七時には店を閉め、日祭日は休業という喫茶店が私の息抜き場所です。

その店を利用してのプレイなら、あなたの甘美な陶酔や恍惚の楽奏も遠慮気がねはいりません。時には横浜と場所を限定せず、足を運んで下さると嬉しいのですが、いかがでしょう。

私にお求め下さった「三角木馬」の絵を御覧に入れます。日曜大工で出来るように案出してあり、押入れの下段にも格納出来ます。高低の調節と、前後のゆさぶりが可能ですから、古典的な木馬とは違った嗜虐性が湧出するものと思いますが、御感想などおきかせ下さい。尚、参考フォトは野暮用が多く改めて焼付けているひまがなかったので、アルバムからの切りはがしであり見映えも悪く、甚だ不本意なのですが、お好みに近いものと推察致します。御笑覧下さい。

贗^が
作^{さく}

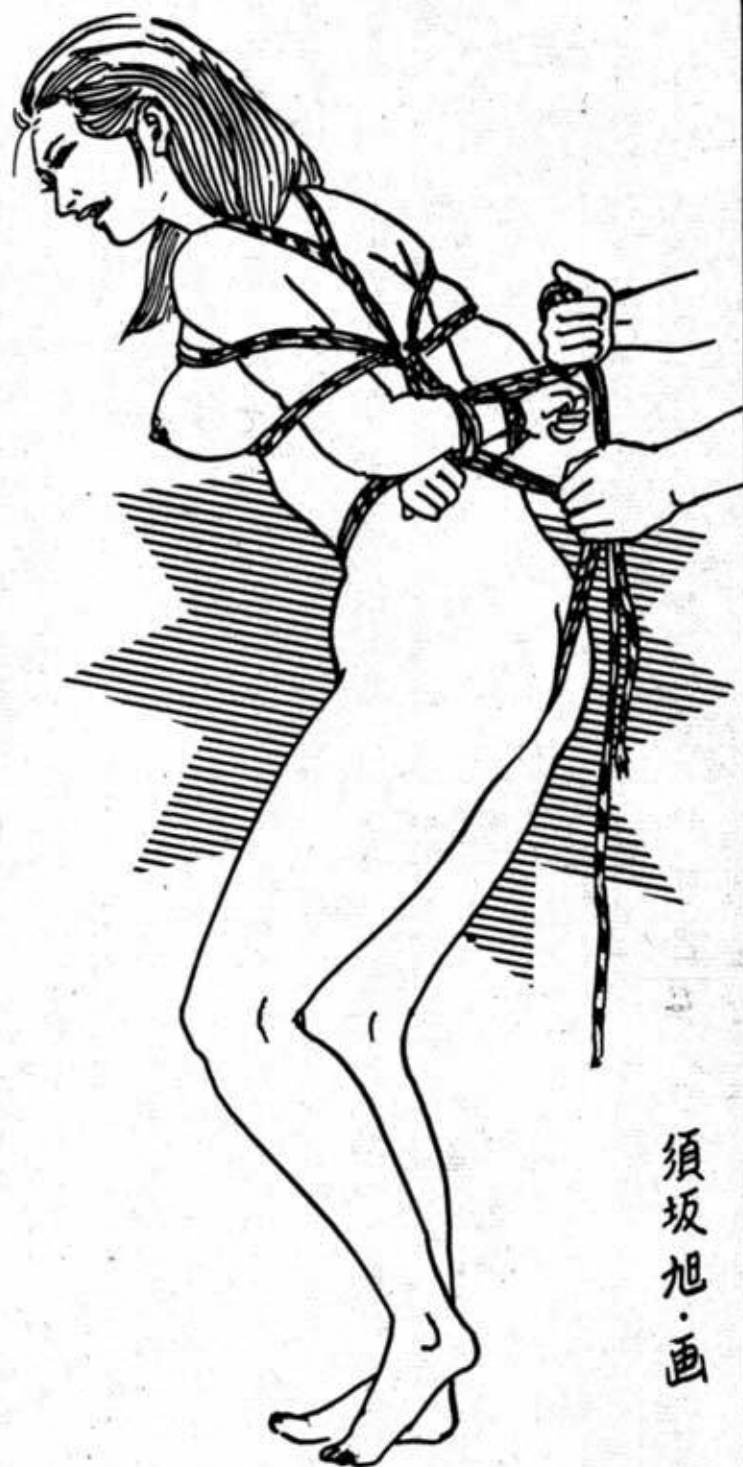
花

と

蛇

山
光

純



須坂旭・画

肉体の借出し

ところで、静子や京子たち捕われの美女たちこそ、なにも知らないのだが、彼女らをモデルにした写真や、8ミリ映画、テープ類は俗に『鬼源モノ』とか『森田モノ』とか呼ばれて、好事家の間では今や抜群の好評を得ているのだ。これが、流れはじめたとき、大げさではなく斯界では恐怖をひきおこしたものである。

ふつう、この種のものは、どんなによくできたものでも、何となく後ろぐらゐ陰惨な感じがつきまとうものである。それに反して、『鬼源モノ』は、これまで製作された、あらゆる国産、外国モノを、はるかに凌いだ、すばらしいブツばかりといって過言ではないのだ。

揃いも揃ったモデルの美しさの上に、彼女らの演技そのものが、すこしのつくりごとも感じさせない迫真力にみちているのが決定的に、ずば抜けていたのである。しかも最近はずきづきと仕草、ポーズもエスカレートし、いかげんな映画スターなど足もとにも及ばない、年若な美女たちが妖しく続ける、大胆

で淫靡きわまる肉の交わりの数々は、よほどこの種のフィルムを見なれた好事家でさえ、ただ唸るばかりである。かくて『鬼源モノ』は、出はじめから大衝撃をあたえ、今や、常識をはるかにこえた比肩するもののない作品として、垂涎の的となるに至っているのだ。

うちの数本をみた、ある著名な芸術派の映画監督と、大会社のプロデューサーは冗談ではなく、あのスターの誰とでも、ただちに契約して劇場映画に出てもらいたいものだ、うなつたくらいだった。なかでも、二十六、七の、あのふるいつきたいほどの美女と、ぜひ面談したいものだ、いろいろと手を廻して関係筋へ執拗に申し入れている。しかし、この種のものの通例として、フィルムの出先は、沓としてわからず、しかも『鬼源モノ』の金主は、よほど金をもっているのか、単なる商売というだけでは、どんなに札束がつましても取引きは成立しないというのだった。

絶対的な抜群の人氣にささえられた『鬼源モノ』は、ごくつまらない普通のブルー・フィルム^①の十倍の価格でも手に入りにくい存在となっている。販売ルート末端の売捌き人は普通のを十本、売る中で、やっと一本の『鬼源モノ』をまわしてくる次第で、ことに

トーキー・カラーものともなれば一財産が必要であるなどと囁かれる始末である。じつさい、それをみた者は、ただその女体の美事さと、演技のすばらしさに、嘆声をあげるばかりであるから値段の高さは、充分それに価するのだった。しかし一方では奇妙なことに、それほど価格をよんでいるフィルム、写真がまったくの無料で、さして大ものでもない人物に多量に贈られたりすることが、しばしばあるのだ。

このことは『鬼源モノ』を製作する一派がまさしく商売だけを目的にしているのではないことを、はっきり証拠づけ、むしろ、面白半分^②に女主人公たちを、さいなむ手段にしているのではないかとの想像さえ、いだかせるのである。

かといって『鬼源モノ』の絶対的な価値はそのことによって、いささかも失われない。むしろ、謎めいた全裸美女群への関心は、いっそうたかめられ、それが、さらにフィルムの貴重さを、あおった。

なかでも、これまで流れたものの中の最高傑作は、「美女と野獣」「美しい牝」とか「肉の饗宴」などといったもので、成熟しきった完全な肉体を持つあの麗人が、見るもけ

がらわしい大男に、ほしのままに凌辱されるサド的傾向のつよい作品である。

総天然色、トーキーつきの大長尺もので、そこでは、男が女から絞りとることのできるあらゆる快樂が集大成されている。女の濡れ光った唇から洩れるピンクの舌。なめらかに光った双臀の微妙な慄え。まるでセックスそのもののように、すこしのかたくずれもない豊かな乳房。ひらかれてゆく内腿を彩る羞恥のくれない。高貴な、しかし、どんな男をも蠱惑させずにはおかぬ女主人公の美貌——それを、毛ムクじゃらな、涎をながす怪奇な男が、ほしのままに犯しつくすのである。

フィルムをみるものは、まばたきもできず豪華な虹が、めくるめくように体内を、かけめぐるのを覚えるのだ。それらの場面^③の一つ一つは、そのまま泰西名画にある「襲われる妖精」に似ている。ながいながい時間——そのように見物には思われた——を通して……やがて絹をひきさく絶頂の瞬間がくる……はげしい腰のグラインド、タワタワと揺れる乳房。まっ白い喉元をのけぞらして、ハスキーに女は叫ぶのだ。「ゆるして……」……まだ全身を波打たして打ちふるえている麗わしの裸女を邪険にひきおこし、ニタリニタリと笑

うゴリラに似た加虐者は、ふたたび双丘の紅いグミのような乳首に、つづく攻撃を加えはじめるのだ。

こんどはヒロインを犬のように這わせる。あまりの淫猥きわまる姿態に、すこしでも裸女がためらいをみせると、容赦ない平手打ちが双尻に炸裂する。熊のような紅い手形をカラーは刻明に描写する。必死で許しを乞いながら、かきくどく全裸の女のセクシーなささやき。白い肌に流れる汗。豊かな黒髪をうちふって悶える美しいハダカの女……。そしてエンド・マークはなく『続く』

このすべての文字による描写をこえた抜群のブルーフィルムは、その価値のゆえに、官憲の手にわたったものは一本もない。ましてブルーフィルムのこのスターを、失踪した静子令夫人と結びつけるものなどは、まったくいなかった。

いまや森田組は、静子夫人の財産を横領して富豪になった千代の後押しと、セックス・スターたちの稼ぎのせいで羽振りをきかせている。色と欲の二股をかけたチンピラどもも続々と組に入ることを希望して押しよせ、暴力団同志のつきあいでも、すっかり安定した地位を持つにいたっているのだ。

○

そうした或日、関西の岩崎大親分から、森田あてに、一つの依頼がとどいた。使者の若い者二人が、親分専用の外車にのって、東名神高速道路をとばしてきて、書状を手渡したのである。

巻紙に筆太の文字で書かれた書状には、『拝啓、森田組殿も近頃、隆盛のようで誠に慶賀に耐えない。(中略)』

扱、先般拙者訪問の節には、誠に満足すべき歓待に預かり感謝する。今後共、水魚の交わりを続けることを願う。就ては願いついでに貴組にて飼育中の美女の一、二疋を当組にて暫く借用したく、此段、申し入りたい。

(後略)』

文面は、いつものように尊大で高飛車な調子で書かれてある。全国組織をもつ岩崎組の優位さがそのまま、でている。

もともと森田組が今日の隆盛をみたのも、以前は、岩崎組の厚い庇護をうけていたからである。もし、遠山静子という上玉をくわえてこまなければ、千代の財産も存在しなかったし、まして大向こうをうならすフィルムなぞ製作できなかったろう。そうなれば森田組はとくに岩崎組の下部組織に吸収されてしま

っているはずで、静子令夫人は、森田組の救世主ということになってしまふ。その恩人のはずの令夫人は、捕われて以来、一糸もあたえられず、男と乳繰りあわされては嘲笑される性地獄におとしこまれているのだ。しかしこれは矛盾したことではない、もともと世間は、強いものが弱いものから一方的に奪うことによって成立しているものなのだ。

岩崎親分の書簡には、『貴組にて飼育中の美女の一、二疋を当組にて暫く借用したく……』

とある。もちろん岩崎組は大組織であるから、こうしたフィルム収入などをアテにしているわけではないが、関西方面の需要を若干みたしてもいいし、それより音にきくスターの実演をじっくりみたいという下心のほうが格段に強いようだ。この依頼は、かつて静子夫人の軀を張っての奉仕に完全にしびれた大親分の、じきじきのお声がかりによるものと思われるのである。したがって森田組としては、慎重な扱いが必要で、幹部連中が集まっているいろいろ考えたあげく、とりあえずスターの一人を関西に貸し出すことをきめたのである。

白羽の矢は、今のところ稼ぎがよくない桂

子にたった。

○

「おやおや、桂子。三下たちと暮らすのが、よっぽど性にあっていいらしいわね。ちょっと見ぬまに、大変色っぽくおなりだこと。じつはね、お前としばらくお別れしなくちゃならないんだよ……」と千代。

誘拐されてきた当時、まだセーラーのよくにあう高校生だった桂子も、どんな下等な娼婦もおよばぬ肉の調教をうけて、すっかり成熟した身体つきになっている。

もとより一糸すらまとうことを許されず、男たちの野卑な視線から全裸をかくすすべもない。八十七センチの形くずれのしていない腕のように丸い乳房。思いきりくびれた腰。それに、なだらかに下方へ連なってゆく双臀の量感。静子夫人の熟れきった肌とはちがう小麦いろの脂でなめらかに光った肩の線。両手首が尻の割れ目あたりで、ゆるく縛られている。

ミニスカートを、さっそうと着こなして、声をかけようとする男たちに一瞥すらあたえず街路を闊歩していたお嬢さんは、まだあどけなさをのこしている可愛らしい容貌を、ふせる。すでに数えつくせぬ凌辱に屈服した、

従順な森田組配下のセックス奴隷である。千代の言葉にききいつている伏目に、一粒の泪が星のようにきらめいているのだ。

「……というようなわけね、お前に関西へいってもらうことにしたのよ。なあに、あちらへいったって別にとって喰われるというのでもなし、まあせいぜい狎々どものエジキにされるくらいだろうよ。お前も使われたってべつに減るものじゃなし、毎晩これまでよりもっと楽しい思いができるって寸法なのよ。ホホ……あら、恥かしい。あたしとしたことが、こんなお下劣なことを。ホホ……。ところで、朱美。あっちへ行ってから行儀作法は、ちゃんと仕込んでくれたんでしょ。ね。森田組の恥になるようなことはしないように、よく云いきかせたの？」

桂子をここへ引きたててきたのは、朱美である。頬骨がたかく、ひきつれ眼をしているうえに、トウモロコシのように黄いろいパサパサした髪で、みにくいとしかしいようなないズベ公である。片田舎から家出をし、ラーメン屋の給仕を皮切りに、靴ミガキ、女工、などを転々とした。小ずるく、平気でウソをつくところがあるため、商店の女店員はおろか女中にも使ってもらえなかった。都会の最

下層でうごめきながらの二、三年は、そうした性格を、いよいよ助長した。

同じ年頃の若い娘が、美しい衣裳でスマートな男性と腕を組んで花のように笑っているのを見ると、堪えようのない憎しみが、こみあげてきた。もともと陰険なところもあり、給仕をしていた頃には、わざと同年輩の娘のスカートを井をぶちまけたことさえあった。詫びを言わなかったためにラーメン屋をやめさせられ、ズベ公グループの葉桜団にはいったときは、屋台のトウモロコシ売りをしていた。みんな自分のせいだとは思わなかった、あたいがこんなにみじめなのに、あの娘たちはケラケラ笑ってやがる……いまに思いしらせてやるから覚えておいで。中学校すら卒業していない朱美には、飛躍した理論は、お手のものであった。

葉桜団にはいつてからは、森田組のチンピラと肉体関係もでき、もっぱら喝アゲ専門でいいところをみせた。もちろん、同年輩の良家の子女とおぼしい女性ばかりをねらったのである。Gパンをはいてタバコを、すばすばやり、黄いろい髪をかきあげながら鋭い眼ですぐむと、いっぱしの女チンピラの絵になった。逮捕歴が三回、ぎりぎり未成年ですべり

こんだのだが、いずれも、そのきっかけになる「お嬢さん」への憎しみが、いやが上にも増した。

すっかり姐ご株になった朱美が、非常にたのしい思いをさせてくれるのは、一つに千代夫人の庇護のもとに、この邸に入ったからであり、次に『お嬢さん』の桂子を自分の好きないようにしているからである。

朱美は桂子を専属の性奴隷にしている。同じ年輩では美津子もいたのだが、美津子は姉の京子との関係で、たびたびお座敷がかかるし、何といっても桂子がいい。朱美の生れ故郷の大金持の娘と、よく似ていたのである。同窓生だったその娘は、父母の血のいいところばかりをもっていた。容姿も、ふるまいも教養も、いっさいが月とスッポンであった。家出をしたのも、そのコンプレックスに耐えきれなかったことも、からんでおり、その頃から同じ年頃の『お嬢さん』への憎しみが芽生えていたにちがいがなかった。

朱美は、復讐の快感をおぼえて、貧弱な胸をそらせ、大声でわらう。

「よしてくださいよ、千代奥さん。あたいがこの女を、腕によりをかけて仕込んだんですよ。夕べから徹夜で、さんざんにヤキを入

れてやったんだから。ええ、一睡もさせずにね。森田組のメンツがかかっているんだもん」千代は、金齒をすっかりむきだして野卑にからかう。

「ほんとうなの？ それにしては、お嬢さんのカラダには、キスマークのあと一つさえないみたいじゃないの？ さあ、桂子。カラダをすっかり開いてごらん。みんなで調べてあげるから」

例によつての難題であった。全裸にむかれた美少女は呼びかけられた瞬間、ビクリと両肩を震わせる。豊かに波打つ黒髪がバサリと額に落ち、顔もあげられない。

「あたしの言うことがきけないのかい?」

と、いささか気色ばんだ千代。

「まあまあ、千代奥さん。あたいにまかしていただくいな」

朱美が、自信たっぷりという。

「さあ、桂子。みなさんが見てやろうとおっしゃるのよ。いつものポーズをとって……」

厚いジュウタンの上に、きっちり膝をそろえて正座していた桂子は、朱美の命令に、はっと、うろたえる。オロオロしてあげる明眸が憐れだ。涙がっぱいにたまった睫毛、上気した首筋。ためらい、ためらい、しかし

桂子はスラリとしたむきだしの両足を前にのばし、膝をわずかに曲げた姿勢で、ゆっくりと左右に開こうとするのだ。

朱美が、桂子の専任調教を買ってでたのは、ほかに理由があった。朱美は、三下の竹田に思いをよせていた。惚れていたといいなおしてもいい。竹田なんぞは、組員の中でも、いちばん下っぱで、いかにも頭のわるそうな顔つきで、ショーの手伝いばかりをやらされているチンピラであるが、不器量なねじくれた根性の女には、ぴったりのところかもしれない。

しかし、葉桜団をきりまわしているつもりで朱美には、自尊心があった。姐御として、三下なんぞに思いのたけをうちあけるわけには絶対にゆかないのである。ただ、何くれとなく優しくふるまおうとした。——そうしたある日、朱美は竹田に抱かれて双臀をくねらせながら悶えに悶えている桂子をみたのであった。

△この女は、絶対にゆるせない。人もあろうに竹田さんを誘惑したりして！ おぼえておいで、桂子。あたいの復讐が、どんなに恐ろしいものであるかを。どんなにゆるしを乞うても、決してゆるしてやらないから。あんた

読者ギャラリー『地下の獣人』岡 たかし



が女のカラダをしていることを、つくづく後悔するような目にあわしてやるから！ おぼえておいで、桂子▽

桂子の日常

朱美が桂子の専属調教師になってから、桂

子は森田組の下っ端たちの玩具として下げ渡されたような恰好になってしまっている。静子夫人や京子のような大スターたちのショーの手伝いをさせられて、にえたぎっている三下共のイライラは、朱美の許可によって、桂子の体に爆発するのである。手伝いばかりですこしも本番にありつけないカタルシスは、

やがて押さえきれなくなってしまうのは分かりきったことで、鬼源さえも見ぬふりをして

いる。
ショーの終わったあとは、きまって朱美は見えない手綱をもって、全裸の桂子を三下たちの寝起きしている邸の二十畳の間に放し飼いにするのだ。

美しい犠牲^{いけにえ}、ピンクの牝——桂子に調教を加える口実は、いくらでもあった。朝夕の挨拶のしかた、ベッドでの睦言の囁きかた、写真撮影のときのポーズや表情の一つ一つにも朱美は、いいがかりをつけて、徹底的に憐れな美少女を、しぼりあげるのだ。

もちろん、刃物やムチなどは、いっさい使わない。主として、言葉による叱咤やさげすみ。静子夫人さえケモノのようになった例の媚薬。それに桂子の秘密の部分にサイズを合わせて作らせた特製の道具などを縦横に駆使する。

桂子の裸体への加虐は、いつも乳房への、いたぶりから始まる。たっぷりとした八十八センチの胸乳は、いっさいかくすすべもなく女のからだだが、いちばん珍しい年頃の三下たちの前に、さらされているのだから手を出すなというのが無理というものかもしれない。

桂子のカラダがすっかり気に入っている三下たちは、桂子のあわれな心根や、教養や、お嬢さんだった頃のセンスにあふれた姿などにいっさい考慮をはらわない。ただ、この若く美しい肉体からひきだせる快感を、むさぼるのに夢中なのだ。必要なのは、可愛い容貌とたっぷり、掌にあまる乳房、ぷりぷりとする双臀、AとVとM、だけである。

三下たちは、丁半サイコロなどの手なぐさみで大負けをすれば、そのうさばらしに桂子をひきよせた。勝てば勝ったで、酒をくらってスベスベした裸女を膝にかかえあげる。

桂子の肉体は、いつもひんやりしていて、抱き心地は満点である。三下たちは、入れかわりたちかわり面白半分、裸女のヌードの弱い弱いところ——性感帯をききだして、さっそく、そこを試みるのだ。

わななき、わななき、首筋をまっかにしながら桂子は、じぶんのカラダの秘密を、ひとつずつ教えてゆかなくてはならない。

「……桂子のネ、いちばん弱いところは……おっぱい。とくに乳首のまわりを……ゆっく……掌でつつむようにしてモミモミされると、桂子は、もうダメなの……。ワキの下のくぼんだところ。おしりの割れたところの、

ちよつと下。リズムをつけて……されると、

——もうお許しになって！」

もとより、女の哀願を受けいれるような手合いは一人もない。

「……キ、キスされながら、両足の内がわをくすぐられると。でも、ク、クリちゃんを責められると、もう、だめ……」

巨大な臀部をグラインドさせながら、きれぎれに告白している桂子をみてみると、朱美はさらに憎しみがこみあげてくるのを感じるのだ。

桂子に体罰を課す口実は、いくらでもあった。ファックのときのスタイルが悪いと叱りつけ、バスがながすぎるといっては、その埋め合わせをさせるのだ。

このため、哀れな若い裸女は、すこしのあいだも一人きりの時間がもてなくなってしまうっている。

朝っぱらから、つい数週前に組のバッジをもらったばかりの最下級のチンピラの膝下に顔をうずめていることもある。男の膝に背をむけてすわり、双尻をもくもくと動かしながら愚劣きわまるエロ本を男に読みかしている屋さがり。アクロバットのように上体をそらせ、両肢を八の字にひらいて特製の器具に

呻きつづける夕べのながいながい時間。「すんだら、オレのとこへ来な」と耳うちする別の三下。

全裸の美少女は強いられるピンクの嵐のなかで、ただ悶え、ただうち震える。なま臭いものが喉の奥まで侵入してきて食欲にうごめくとき、桂子はこのセックス地獄のなかで、どこまで生きつづけることができるのかしらと思うのだった。

しかも、悲しいことに、桂子の健康な体は男のいたぶりが重なれば重なるほど、ぐんぐんと開いてゆく大輪のバラのように、より豊かに、より艶やかになってくるのだった。

グミのような乳首は、男のリードによってますます敏感になり、内腿は攻撃をうけるとたちまち、うるおった。むきだしのヒップに器具の冷たさを感じると、双丘はたわむれにそなえて、タワタワとうごめきだすのだ。

容赦ない朱美の要求と、男たちの玩弄は日々にエスカレートする一方で、すこしでも不興を買えば調教に名をかり、どのような目に合わされるかは知れたことだった。

ようやく二十才をこえたばかりの元のお嬢さんは、肉欲に関する、あらゆるテクニクを、くりかえし叩きこまれた。男たちの体液

は、彼女の血液のなかを濃く濃くながれ、そのためだろうか、ピンクいろの、やわらかいうねりをみせる美肌は、いよいよ光り輝いてくるのだった。

まるでボロギレのように凌辱されつくし、トロンとした瞳を宙にまわせる桂子は、もはや人間のメスになりはてたのだろうか……それでは、あまりにもこの美少女がかわれというべきではないだろうか。

せめて桂子は、たんなる肉奴隷、ダッチ・ウィフの代替品でないという、わずか一片の慰めのことばでも、のぞむのさえ許されないことなのだろうか？

「お前は、いい女だな……」

などという言葉は、のぞむべくもないとして、せめて

「いい気持だったぜ——」

だけでもよい。乳房をゆすって這いまわる美少女に、ねぎらいの言葉をかけてやる者はいないのだろうか？

しかし桂子！ それはお前の甘えというものである。お前のカラダは、さまざまな反応をしめす興味つきない玩具なのだ。玩具にねぎらいの言葉をかける愚かものが、どこにいるというのか。

桂子は、やっと二十才になったばかりである。どんなに玩弄をかさねたとしても、三年や五年は使用に耐える。それから先は成り行きまかせである。聞くところによると、香港九竜街あたりの魔窟では日本女性の密輸に大金を払うというではないか。いや、もっと酸鼻な、ドック&ホワイト、モンキイ&ホワイト用の女の需要が、きわめて高いというではないか。しかし、そんなことも桂子の知ったことではない。邸のものがお前にあき、お前が用済みになるまで時間はたっぷりある。とりあえず関西の岩崎組へ出張させるから、森田組の名を恥かしめないよう、全身全霊をこめて奉仕することだけを考えていればよい。

身柄の引渡し

千代は、例によって金壺眼を、すっかり細くし、金歯をむきだしにして笑っている。

「お前と自分お別れになるのは、組の下っ端には淋しいだろうけれど、森田組には、とってもいいことなのよ。森田組には、新しいスターが入って、いま調教中だから、お前がいなくなっても充分やっていけるわ。だから、こちらのことは心配せずに一生懸命やってく

るのよ。いいわね。何度もういけど、もし森田組や、あたしの名を汚すようなことがあれば、承知しないから……」

桂子は眼を伏せ、千代の命令に、かすかにうなづく。後手にゆるく縛られたヒモのほか体には何一つ、つけていない。盛りあがった乳房をつきだすようにして、大きな尻をジュウタンに落としている。膝をわずかに曲げて両足を大きく拡げているポーズである。

千代は、芝居気たっぷり、眉をひそめながら、

「それにしても、そんなに可愛い顔をしていくせに、どんな男とでもナニするなんて、どういふんだらうね。ふん、お前のママの静子も静子なら、桂子もたいしたものね。最低の尻軽親子じゃないか……桂子、お前はやっとなんたになったばかりだろう。それなのにもう星の数ほどの男たちと乳繰りあってきたりしてさ。……なんなの？ そのいやらしい恰好は……あたしは同性として、つくづく恥かしいよ。ホホ……」

さすがの千代も、あまり白々しいのか、とってつけたような照れ笑いをする。

桂子は明眸をあげる。星のきらめきのような涙がいっぱい浮かんでいる澄んだ瞳。ピン

クの唇がピクピクとふるえる。けれども、拡げきつた淫らなポーズは、くずせない。もし許しもないのに、かくそうしたりすれば、どのような体罰をうけるかは、わかっているのだ。

「だって……だって千代さん。……あたくしは……」

「おお、そうなの。岩崎組へいって、精いっぱいやってきてくれるっていうのね。そうだわね？」

桂子は耐えきれないように首筋をのけぞらせて、額にかかった艶やかな黒髪を振った。豊かな乳房もブルンと揺れる。拒むことができないのは知れていた。

「ええ、千、千代さん。桂子はおっしゃる通り関西にまいます。そして、いっしょうけんめいあちらの皆さまのお相手をしてきますわ。でも、ほんとうは、まだまだ森田組の皆さまと、ごいっしょにお仕事をしたいのですけれど。朱美さんも、そのようにおっしゃるし……で、でも、あたくし、あたくしはせめて、ここにいたい……」

「何がしたいの、桂子？」

口をはさんだのは朱美である。朱美は三角の目をして素っ裸の美少女を睨んだ。

桂子は、ぶるっと目にみえるくらいは、はつきりと滑らかな両肩を震わせる。

心理学の実験にパブロフは犬を使った。ベルを鳴らすと、犬は食物が貰えることを知って唾液を流した。条件反射である。桂子の場合、ベルの代りに叱りつける言葉がある。桂子は両足を思うさま拡げ、愛液をしたたらせる準備をするのだ。

「すみません、朱美さん。桂子、泣いちゃったりして……ごめんなさい。あたくし、あちらへ参っても皆さまに教えられた通り、いっしょうけんめい、岩崎組の皆さまをお慰めしなくちゃならないのね」

「では、話はききましたと。じゃ、桂子お嬢さん。関西から、はるばる出張してこられた、おニいさんに、ごあいさつをするのよ。いいわね。うんと色っぽくふるまって、気にいられるようにネ」

ようやく許されて拡げた両足を閉じようとしたとき、

「ちょっと、まった！ おめえ、もうすこしこっちへよるんだ。足をもっと、いっぱいにひらいてみせな。そうじゃねえ、一直線に、そう、さけちまうくらいにだ！」

「えっ！ ど、どういことですの……よ、

吉沢さん……あたくし……」

はっとして桂は、うるみきつた瞳を向ける切れながの明眸に、おどおどした狼狽のいろが走る。

むだ毛の剃り落とされた美少女の、もっとも恥かしい個所の辺りに、吉沢は目を、とめたのである。もともと、そんなことには、きわめて目ざとい連中なのだ。一座の視線は、たちまち興味をたたえて、ヌード女のうろたえ顔を伏せる風情に集まる。

「まあ！ いやらしい……」

つきさすような、かん高い声をあげたのは千代である。

開ききつた裸女の、滑らかな内腿の一部が電灯の明るい光をうけて、何かを塗りつけたようにネトリと、にぶくひかつてみえるのだ。それがどういことかということは、女性の扱いになれきつた邸の連中には、すぐに合点がいった。

「桂子。それはどうしたことなの。いってごらん、叱りやしないから」

面白半分千代は、いう。しかし、返事次第では許さないようにも見える。一糸まとわぬ可憐な美少女のうろたえぶりは、みるもあわれだった。

「ああ……お許しになって。どうか、どうか……あたくし……」

全身に紅をちらして桂子は、身のおきどころのない羞かしめに、身もだえする。もじもじと双臀をゆすり滑らかな肩に顔を埋める。黒髪が、ぱっさりと落ちる。

「うふふふ……ばれちゃったか。皆さん、ほんとうにお目の早いこと」

含みわらいしながら朱美は、

「おわかれのご挨拶の前に、もう一度だけな

んて、あまりに竹田さんが、せがむものだから、めんどくさくなって、つい、お好きなようにしたら、というわけなの。でも、いいじゃないのさ。桂子だって、お名残りおいしいだろうしさ」

「そうかい、おわかれの歓楽の一ときを過ぎたというのかい。それにしても、お前、ずいぶん、おさかななことね。あきれかえって物もいえやしない。たいせつなお目見得の寸前まで乳くりあっているなんて、いったい

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

どういう神経なんだろう。でも、まあいいわね、特別の日なんだから。まあ、森田組の殿方はじめ葉桜団の皆さんにも、お前たち、公衆トイレ、みななお嬢さんがいるからこそ、けっこう面白おかしい思いをさせて貰ったんだから……すこしくらいは、大目にみなくっちゃあね。ははは……」

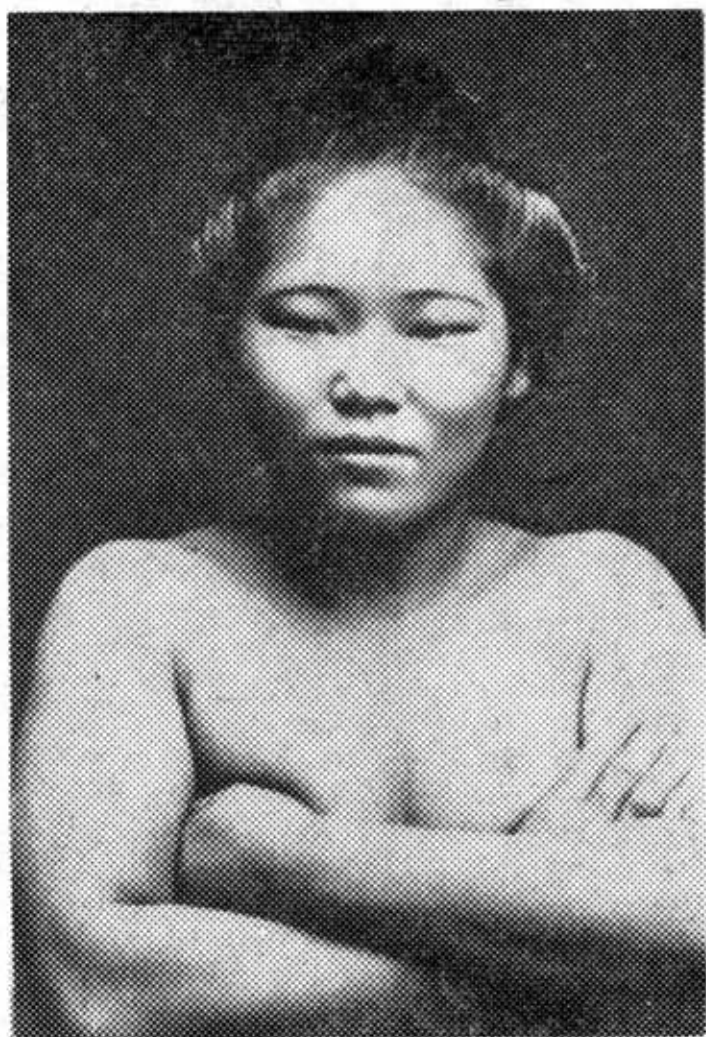
公衆トイレ。あまりにも美女をさげすみきったこの言い草に、満座は又しても淫靡な笑い声をたてる。鬼源がそれを制し、

「名残りは、つきないだろうが、もうこの辺でいいだろう。桂子——いつものように、できるかぎり色っぽくふるまって、関西の客人们的の気にいられるようにするんだぜ。今夜は客人と一緒にこの邸にとまって、明日は出発だ。せいぜい濃厚なサービスをしておくった。向こうへいってお前が何をされるか知らんが、うまくゆくと岩崎親分の妾くらいになれるかもしれん。わるくいても八廻しにかけられるだけだろうから……べつに取って喰われるはずはねえし。それもこれも、今夜のテクニク次第、心をこめてやりな。じゃ、客人をご案内するからな」

そう言っ、酒やけのテラテラと光る赤ら顔をしゃくるのだった。

(未完)

大正時代の興業撲相女力士



メトミへの期待

女力士の出現を願う

増田トシロー

メトミへの追慕久しく、女性相剋の美を求めて、巷間に資料や文献を漁りながら、もう何年を過ごしてきたことであろうか。

メトミという言葉も、現在では既に普遍的なものとなって我々の間に通用しているが、

然しその源を考えると古いもので、土俵四股平こと栗津実氏が、大正十五年（一九二六）頃、京都山科の地にメトミ（女闘美）研究所という看板を掲げ、有志の女性達を集めて、実際に相撲を中心に訓練を行ない、又、

それを応用して、体育と共に美容体操として女体美を養うように努力されたものが、その基となった。

なお、これより先の大正十年（一九二一）に、当時の大阪毎日新聞紙上に「メトミ」の語が活字として初めて現われたのだが、好奇と讃歎の声はやがてメトミ讃美に変わり大変な人気を博したも

のであった。

だが、この「メトミ」道場も、終戦を機に女性訓練生達も四散してしまい、やむなく解散の羽目となり、唯、メトミという言葉だけが残って、以後、雑誌や記事、記録等を通じて、その意味や内容を偲ぶのみとなった。

メトミといえば、すぐに女子プロレス、又は昔の興業女相撲、もしくはそれに似たものを連想しがちであるが、ショーとしてのそれらに、僅かにメトミの一端を味わい得るのみで、筆者は、本当に健全なものの出現を期待しながら果たし得なかったのである。

女子プロレスリングを見た或る友人は、筆者にこういった。

「スピード性はあるし、闘技もかなりのもので、演出も加味されて見応えはあるが、あまり激しさのみにとらわれて、彼女達の体が長続きするかと心配になる」……と。

又、女性の観戦者はこういった。

「雄々しさや、りりしさには惹かれるが、それ以上の何も感じないし、まるでガウンや水着のショウウみたい」云々……と。

女相撲も、今から約十五年くらい以前に、東京でその興行の旗上げ公開があり、一時は都心の人気を得たが、内容は旧態依然としたもので、肌色のランニングシャツに白パンツに巾広の白の締込みでの相撲ではあまりパツとしない上に、相撲甚句や腹上の餅搗きの力

業を売物にするとあっては、自然に飽きられて何時ともなく消え去ってしまった。

筆者は、何となく満たされないままに「新しいメトミ」そのものを期待しつつ過ぎてきたのであるが、今年の六月頃から、突然のように現われたテレビ番組「女相撲日本一決定戦」のタイトルに、眠気をふきとばされた

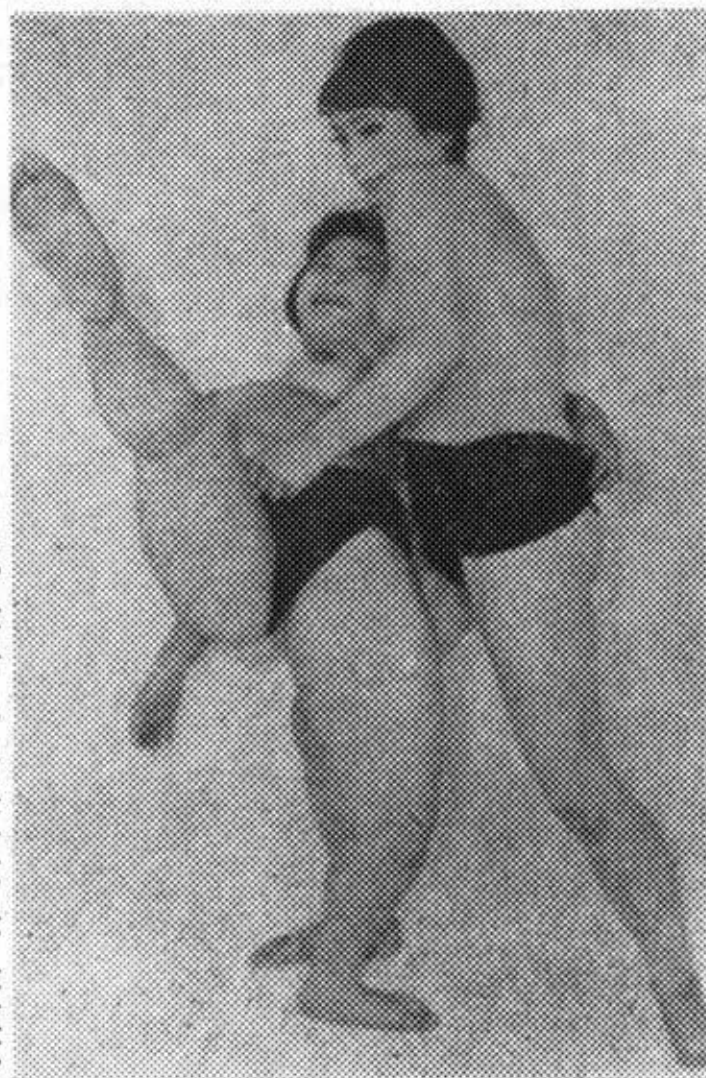
想いになった。

全国から集まった主婦や未婚女性、O・L芸者、仲居等々多士済々。まったく「気はやさしくて力持ち」の女力士達が、文字通り、ケレン味も八百

長もなく、力一杯の熱戦をくりひろげる真剣さには、思わず手に汗を握らされる思いであった。

女相撲と銘打たれてはいるが、ポロシャツにホット・パンツ、胸と背にゼッケンをつけてのマラソン・スタイルで、相撲のイメージからはかけ離れた感じもなくはないが、マットレスの土俵狭しと組み合い、めくれたシャツから肌がちらりと顔を出し、胸の双丘の激突も見られ、多分にお色気相撲を狙った企画とは、いい条、内容は案外に健全ムードの中に終始したことは大変に好ましい。

出場した「女力士」達は、全くの素人で、まわりの人達の協力によって、「ワザ」の練習にはげんで来たものば



モデル嬢による女相撲圖

かりとか。体格も、身長一六五、体重六五、バスト九五、ヒップ一〇〇という、女力士として、横綱級の立派な人が居たことは感激である。

この番組を機会に、相撲好きの女性が、自ら土俵に上がることを目標にして本格的な練習をつみ、美しい技量を持った女力士として健全な真剣勝負を公開してくれれば、どんなに楽しいことであろう。

単なる大力というのではなく、土俵上に真の技をぶつけ合う、大兵肥満の女力士が出現する日を、筆者は心から期待してやまないのである。

——(おわり)——

テレビ番組「女相撲日本一決定戦」





カット・志羽利也

懸賞入選創作

フラスト族の叛乱

(上)

城崎恭介

一

性は畑、名は彦六。三五才、独身である。

当人は高倉健ばりの、いい男とおもっているが、面立ちに多少、似通ったところがあるにせよ、あの精気、あの凛々しさは、望むべくもなく、ふやけた高倉健、自堕落な高倉健腹に肉のつきすぎた高倉健である。

容姿に自信がありすぎてハイ・ミスになる女が多いように、彦六もハイ・ミスターになつてしまった。

『女は顔じゃない、心だ。心のきれいな人と結婚するんだ』

と、カッコのいいことをいっていても、やはり、どうしようもないくらい面喰いで、美人でなければ人類にあらず、とおもっているのだから、始末が悪い。心のきれいな人は、顔も美しいという、少女小説のさしえみみたいな女性観を抱いたまま、中年すぎまで右顧左眄をくりかえしてきたわけだ。

こうなつてしまった原因は、最初の見合いにある。

二十七才のころ、郷里の父母が画策して、市会議長の娘と見合いをさせたのだが、これがおそろしいくらいブスで、おまけに東京の女子大を卒業したという学歴をちらつかせる

ものだから、定時制の商業高校を出て、下町のしがたない靴下工場の経理係だった彼は、いたく劣等感を刺激されて、東京へ逃げ帰ってきた。

『いくら何でも、馬鹿にしてやがる。大学も出ていなくて、安月給で恋愛もできない、ぐずだとおもつて、あんなカタワをおしつけようとしやがった……』

と、一カ月あまりも悶々としたあげく、生涯かけても、みかえしてやろうと決心して、経済面では、高校時代の先輩のやっている経理事務所に入れてもらつて独立し、結婚の相手は、山本富士子にも匹敵するような美人を

もううんだと、こどもじみた誓いをたてた次第なのだ。

しかし、性格的には、恋愛不能症である。

三十五年間の人生のうちには、好きだとおもう女性にも再三めぐりあったことはある。しかし、好きだとおもうと、おじけが出て、そばにも寄れなくなる。何よりも恐ろしいのが、求愛してふられた時の、敗け犬の哀れさなのである。

『死んでも、他人から笑われたくない』

という妄念に、こりかたまっているのだから、ちょっとばかり容貌がすぐれているという優越感を、失恋によって奪われたくなかったのだ。救いがたい虚栄心である。自己愛である。

彼が見染めた女性は、愛嬌もあり、美貌でもあったので、あれこれ逡巡している間に、さっと他の男に掠めとられて、結婚してしまった。それも内心、軽蔑しきっていたような醜男とだ。

『ちくしょう、選りに選って、あんな野郎のところへ行かなくなつて、いいじゃねえか。だから女は豚だというんだ。くそ、男の値打ちも、わかりやしねえ』

彦六は、独りで地団駄ふんでくやしがりな

がら、へあんな女に未練はないが、なぜか涙が流れてならぬ……と、人生劇場の唄の一節を繰りかえし、夜もすがら、うたいつづけて磯のアワビの片想いに破れた虚しさを、かみしめるのだった。

酒も飲まず煙草もやらず、スるのが嫌で、競輪、競馬、麻雀、パチンコの類には絶対に手を出さなかった彦六も、ピンク映画とストリップには、目がなかった。

二十代のうちは、ガール・フレンドの一人や二人はいたが、さすが三十代にもなると、だれも気味悪がって相手にしてくれず、欲求不満のはけ口は、スクリーンと舞台という虚構の世界に限られてしまった。

彼を、こういう世界にひきずりこんだのは

テレビ・ライターの竜岡浩平だった。

浩平も同じく三十五才。彦六よりも、わずか半年ほど年長だっただけに、只、毅然とした貫禄を備えた独身中年だった。

父は、大正期から、昭和初期にかけて活躍した情痴小説の大家で、今では忘れ去られた過去の名声を、浩平はわがことのように誇りにおもい、陰に陽にちらつかせて、自慢していた。それというのも、倅には父ほどの才能もなく、テレビのお子さま向け番組のライター

ーということでお茶を濁しているが、実はこの年になっても、半人前の親がかりだったからだ。

性格は彦六に酷似していて、劣等感にうらうちされた妙な気どり、禁欲的恋愛観、片おもいに破れることで蓄積された女性憎悪の怨念、こどもっぽい美貌信仰など、どれをとっても瓜二つだった。

「おい、今日のフラスト指数は、どんなもんだい？」

と、ほとんど一日おきに、浩平は電話をかけてくる。フラストというのは、いわずとされたフラスト・レーシヨンの略で、二人はたわいのない陰語を交わして、少年のように、たのしんでいた。

「うん、八十五ってとこかな」

と、彦六。

「ほほう、だいぶ重症らしいな」

受話器の向こうで、にやにやしている浩平の顔が、みえるようだ。

「よし、船橋に行こうや。完全オープンでムチムチつきらしいぞ」

ムチムチというのは、二人だけに通じる責めの陰語で、鞭を二つかさねて、肉感性をもたせたつもりだ。

「よし、行こう！」

彦六は、責めときいただけで、動悸が昂まる。鬱曲した女性への関心は、もはや尋常の手段では、癒されなくなっていた。

白い裸身にからみつく、どす黒い縄目は、魔王の愛撫の手のようにおもえ、鞭の嵐をうけて、のたうつ女体は、この世で最高の美と映じ、官能の極致と感ずるのだった。

両手吊りの女の腋窩を彩る叢毛をみて、あまりの艶っぽさに、射精寸前まで行ったことがあった。背後から驚嘆みにされて、ぐりぐりと揉みしだかれる乳房の苦悶の表情。臀部を締めつけた縄目から盛りあがる、純白の肉塊の逞しさ。打たれても打たれても、尺取虫のようにうごめきつづける、紅潮した女体の強靱な生命力。

——もっと、哭け。もっと、苦しめ！

と、悪魔のような怒号を浴びせかけながら彦六は舞台の虚構にのめりこみ、緊縛の美女めがけて、ありとあらゆる怨念を、ぶちまける。この忘我の瞬間を味わったら、麻薬にも似た妖しい魅力にとりつかれてしまう。そして、禁断症状に耐えかねて、果てしなく犠牲を求めて彷徨する、嗜虐の巡礼と化す——。

彦六は、こういう性癖を植えつけた浩平を

うらめしく思うことがあった。奇譚クラブのグラビア頁を拡げ、梨花悠紀子の華やかな被縛図をみせつけながら、責めへのあこがれを説いて、催眠術師のように彼の心を支配してしまっただのが、浩平である。

「いいか、この世に、異常と正常とを、はっきり分けるものなんか、ありやしない。百パーセント正常な人間なんて、最も不気味な異常人間だろう。要するに、正常だともいえないでる奴の中にも、何パーセントか異常性がかくされてるんだ。異常が五十一パーセントをこえれば、いわゆるヘンタイ……それ以下だとマトモ人間だ。どっちにしろ、程度の問題で、本性に差があるわけじゃない」

少しでも、責めへの疑問をもらすと、浩平は、こういう論理で彦六をいいくるめ、むしろ確信をもって、ヘンタイ性の追究に励もうと煽りたてた。

浩平の博識ぶりは、ものすごい程で、九才の時に漢文の根本を読みふけたと豪語するだけあって、古今東西の艶書、春本はいうに及ばず、生理学、心理学、哲学と、あらゆる学識を駆使して、滔々と責めの正統性を説くものだから、こういう教養など、とんとなかった彦六は、

『どうも、ヘンタイじゃないと、マトモでないみたいだな、いい方だな……』

と、内心では多少の抵抗を覚えながらも、しらすしらすのうちに洗脳されて、浩平を崇拜するようになってしまった。

「われらフラスト族よ。いわれなき差別を強いられたフラスト族よ。われらは真善美を追究せんとするがゆえに、異端の座にすえられたのだ……」

浩平は、喫茶店のコーヒースタンドをすりながら突然、美文調の演説をはじめて、彦六をおどろかす。

「そうだろう、六さん。おれたちは人間らしく生きようとしただけだ。それを台なしにしようがったのは、社会だ、国家だ、過去の因習だ。それから、そんなものにがんじがらめにされてることがマトモだと思ってる人間どもだ。異常なのは、社会だよ。歪んでいるのはマトモな、やつらだ。悪徳の栄え、美德の不幸、サドは前世紀はおろか、今世紀だって超越して……必要なのは価値の転倒。正常を異端とし、異常なるものを、正統の座にすえるフラスト革命……フラスト族に栄光あれ」

いうことは少々荒っぽかったが、手真似をまじえ、眸を輝かせて力説する浩平には、教

祖めいた妖気と、一途なこどもっぽさが、奇妙に共存していた。

「よこれちまった悲しみを、知ってるのは、おれたちだけだ。はじめから、よこれきっている奴らに、よこれも悲しみも、わかるものか！ おれたちフラスト族は、ただちに叛乱をおこして、マイホーム主義者どもの脳天に鉄鎚をあげせ、醇風良俗の番人のつもりでいやがる、PTAばああの脳ミソを、白日の下に晒けだしてだ……」

と、主張していることは激越だが、やることといえば、せいぜいストリップ行脚か、ピク映画めぐり——革命や叛乱に、こういう風に結びつくのか、その点は、あやしかったが要するに、

——浩平の、てれかくしだ。

と、おもうと、彦六も気が軽くなった。

漢籍、儒書の類を読みすぎたせいだ、浩平には、妙ちきりんな儒者気取りがあり、ストリップの入場券も自分では買えない、意気地なしの面があった。

——失神するまで苛めて！ SMレズビアンショウの陶酔と昂奮！

と、原色を塗りたくった派手な看板の前までくると、浩平の饒舌はフツとなりをひそめ

て、彦六に千円札を握らせると、自分は電柱のかげに身をひそめてしまう。

そして、もぎりの小母さんの前を通過する時は必ず、きこえよがしに呟く。

「ま、ついでだから、みておくか……」

わざわざ残酷ストリップがみたくて、地下鉄をのりつぎ、のりつぎ、二時間もかけてたどりついたのに、ついででもないもんだとおもうが、当人はすこぶる大真面目で、きかれもしないのに弁解の先手をとるから傑作だ。

そのくせ、いったん暗い場内にもぐりこむと、中年男のいやらしさを百パーセント發揮して、鷹のような目で、かぶりつきの席をあっさり、気に入ったところにすわれるまで、二回も三回も同じショウを眺めながら、ねばり抜く。遊園地に行つて、気に入ったのりものに乗れるまで、帰るといわない、だっ子の子様に。

浩平にとって、芸の巧拙、露出の過少は問題でなかったようだ。裸の女とくれば、貪婪に眼を据える、偏執狂的なところがあった。

場末のストリップ小屋ともなると当たり外れが大きくて、嗜虐の血をたぎらせるような傑作に出あったかと思うと、看板に偽りありの上底^{あげぞこ}ショウで、気のぬけたラムネのように

客を小馬鹿にしたものもあった。

縛るといっても小手先だけ。縄の端を被虐者が握りしめて、辛うじて落下を防いでいるようなやつにでっくわすと彦六は、とたんにいや気がさして、さっさと表へ出たくなるのだが、浩平は謹厳実直、飽きもせずに眺めいていた。

しかし、そういうことに鈍感かというところ、これが全くの逆で、いったん小屋を出ると、被虐の魂のなさを、あしざまにののしるのは浩平のほうだった。

「ちくしょう、入場料泥棒め！ 縛られて、エヘラエヘラ笑ってるやつが、どこにいるんだ！ 年増にセーラー服させて、女学生でございと、とぼけてるほうが、まだ罪が軽い。スピリットを抜きにしたSMプレイは、犯罪なんだ……」

この豹変ぶりが、面白かった。

うまいものばかり喰っていても、食通になれない。まずいものの味も知っていてこそ、真の食通なんだ、というのが、浩平の持論だったが、要するに根っからのSMマニアで、ゲテモノ趣味もあったのである。

ある日、彦六のアパートに、小包が一個、

届いた。

あて先は、たしかに彦六のところになって
いるが、差出人は「東京戯作社」とあって、
さっぱり心あたらない。

ためしに、包をほどいてみると、ダンボー
ルの箱に、くしゃくしゃになったゴム製の何
かが、入っている。拡げてみると、どうも裸
女人形のようなだ。

——浩平の仕方だな。

と、直感的に悟って、さっそく電話をして
みると、浩平は、

「ほほう、やっぱり届いたかね」

と、ひとごとのようにいう。

駅売りの赤新聞をみて、彦六の名前をつか
って、申し込んだようだ。いわずと知れた、
ダッチワイフまがいの大人の玩具である。

浩平は、自分の家でも、SM癖をかくして
いるらしく、自分の大量の資料を、ひそかに
彦六のアパートに運びこんで、保管をたのん
でいるくらいだ。

しっかり者の母親の眼が光っているので、
わが家では猫のようにおとなしくしている。
そして、彦六のアパートを、秘密の研究室に
仕立てあげて、コソコソ通ってきては、彦六
を相手にSM談義をたたかわせて、鬱積した

ものを発散させるわけだ。

こういうところは、高校生のように純情で
あった。

彦六のしらせをきいて浩平は、すっとんて
きた。そして、さっそく風船をふくらます要
領で、二人がかりで息を吹きこんでみた。

「何だい、こりゃあ……マネキン人形より、
芸がねえや」

浩平は、露骨に不満の色を浮かべた。

要するに、風船人形なのである。顔は全く
の無表情。髪の毛は、ただ描いてあるだけ。
胸の膨らみだって、アマシヨク状に突起して
るだけだし、腹部は枕のように、のっぺりし
ていて、臍なし蛙である。

キューピーのように、手足が別々に胴部に
とりつけてあるが、これがかえって人形らし
さを誇張する結果となり、ダッチワイフとい
う陰微なイメージは、どこにもなかった。

「まあ、たいがい、この手のものは、こんな
ものさ……」

と、彦六は慰め顔。

「でもさあ、夜のペット四千五百円也が、キ
ューピーのお化けじゃあなア……」

浩平は、未練げに、両足をこじあけて、の
っぺりした人形の尻をのぞきこみながら、あ

きらめのつかぬようすだった。

彦六は、そんな仕ぐさを傍観しながら、ふ
と、妖しい胸のときめきを覚えた。

浩平に足首をつかまれて、折り曲げられた
り、引き伸ばされたり、いように玩弄され
ている人形の足が、不思議になまめかしく見
えたからだ。

「竜さん……」

といったら、囁れ声になった。いささか気
が昂ぶってきた。

「縛ってみようか、ロープはある……」

「腹いせに、折檻してやるか」

「その価値は、ありそうだぜ」

「六さんも、相当のマニアだな」

「冗談じゃない。竜さんが、こいつを買いこ
んだのは、縛るためなんだろう」

二人は、気むずかしげにロープを捌いて、
人形の膝を折って、足首と大腿部を連結させ
た。いままでは、空気が十分に行き渡らず、
ゆるんだストッキングのように小じわを浮か
べていた人形の肌が、折り曲げられると、ぴ
んと張りきって、おもいがけない瑞々しさを
みせるのだった。

脚部を縛り終えて、彦六と浩平は、おもわ
ず顔を見合わせた。結果良好である。

それを合図に、二人は手あたり次第に、ロープを持ちだして、がんじがらめに、人形を縛りはじめた。浩平は、両腕を背後に捻じって、高手小手に縛りあげ、胸に二重、三重にロープを巻きつける。彦六は、膝にロープを通して、首に結びつける。いわゆる海老縛りである。

全身を縄目に閉じこめられてしまうと、あまりにも人工的にみえたゴム人形が、生きた表情を見せはじめた。ゴムの弾力は、ほどよい括れをつくり、縄目からはみ出た肌の盛りあがり、奇妙になまめいて見えた。

しかし、残念だったのは、人形に重量がなかったことだ。成熟した女性ほどの背丈もあり、量感もあるゴム人形も、ふっと息をはきかけただけで、ゆらゆら浮きあがってしまうのでは、興奮めである。

「磔だ……逆磔で行こうよ」

こうなると、二人の呼吸はピッタリ合う。

鴨居に釘を打って両足を拡げて固定し、手は鴨居の下に据えつけた卓の足に括りつけた。

四肢をヒトデのように拡げたまま、ゴム人形は逆磔となり、卓におしつけられた顔が、かすかに歪んで、苦しげにみえるのも予想外の効果だ。

浩平は「SMカメラ・ハント」の辻村大先生を真似て、さっとバンドを引き抜くと、人形の背後にまわって、鞭打ちをはじめた。

——ぴしっ、ぴしっ！

と、わりあいリアルな音が響き、そのたびに人形のポーズは微妙に変化して、ものいわず唇から、苦悶の絶叫がもれそうな錯覚を覚えた。

「イレエヌ、まだか？ まだ、いじめてもらいたいのか？」

浩平は、サジストの役まわりに、すっかり酔って、時おり、あらぬセリフを口走りながら、悪鬼の形相でゴム人形を打ちすえた。

この時以来、ゴム人形には、美女イレエヌという名前が与えられた。

イレエヌは、責められる時以外は、がんじがらめに縛りあげられて、彦六のアパートの押入れに幽閉される奴隷となった。

浩平は、やはり通信販売で手に入れた奇妙なパンティを穿かせて、たのしんだ。人形は全裸の時よりも、衣服をつけた時のほうが、はるかに迫真力が滲みでた。

彦六は、百貨店の特売場で、ワンピースやネグリジェなどを買ってきて、着せた。

中でも秀逸だったのは、かつら屋で、デル

タ用のかつらを手に入れたことで、これをゴム用の接着剤ではりつけると、ぐっと淫靡な魅力を増した。

浩平は、あらゆる知識を総動員して、マジック・インキとサイン・ペンで美女イレエヌに、女としてあるべき筈のものを描き与えてやった。それは陰影にみちた、みごとな出来栄で、すけすけのパンティなどを穿かせる、実物かと見まごうばかりだった。

イレエヌに、手を加えるたびに、愛着は深まった。無表情だった顔も、眉が引き直され、頬をアイシャドウが彩り、唇の形が整えられ、と、みちがえるくらい凄艶になり、奴隷の飼主たちの心を悩ませた。

二人は、イレエヌに恋していた——。

二

毎月「奇譚クラブ」を仕入れるのは、彦六の役目と決まっていた。

浩平は、気恥かしいことがらを、全て彦六におしつけて平然としていた。

小心者で見栄ツ張りの彦六にとって、奇クを買うのは、少々気骨の折れることだった。

彼の住んでいる近くで、奇クを売っているのは、T書店という新刊本屋と、F書房とい

う古本屋の二軒だった。彦六は、毎月、同じ店で買うのが、妙に気がひけたので、T書店とF書房とを、交互に訪れて、時々買うだけだ、という印象を与えようとしていた。

今日は、T書店の番だった。発売日を待って、彦六は義務を果たしに出かけた。

開店間ぎわの、客のほとんどいない頃を見計らうのが、長い経験から得た秘訣だった。

本屋の主人も書棚に、はたきをかけたり、床を掃いたりしているので、どさくさにまぎれて奇クを手に入れてしまえる便利があった。

彦六は、まっすぐ奇クのおいてあるコーナーに向かい、ほとんど頁を繰らないで、だまってレジーにもって行く。立ち読みしてから買うのは、相当の勇気が必要とするからだ。

この店の主人は、七十に近い老人で、非常に不愛想だ。ちらりとも客の顔をみないで、黙々と本を袋に入れ、釣銭をぼつりと本の上に置く。うんともすーとも、いわないで、取引がすすんでしまうので、てれ屋の彦六にとって好都合だった。

ところが、この朝の主人は、少々様子が違って、ちらっと上目づかいで彦六に一瞥をくれると、
「これ、預ってるよ」

封筒をとりだして、釣銭の上においた。

「な、なんですか、これ？」

彦六は、あんまり唐突だったので、少なからず動揺した。

「ほかのお客さんが、あなたに渡してくれて、預けてったんだ……」

あいかわらず、ぶっきら棒な調子で、いい捨てて、主人は顔をそむけてしまった。

「すみません……」

彦六は、不審の点を確かめる余裕もなく、封筒ごと本の袋を抱えこむと、あたふたと店を出た。何とも居心地の悪い雰囲気だった。

小路に入ってから、ようやく封筒の中味を改めた。彦六は、一瞥するなり、ぼうッと、顔が赤らむのを覚えた。

桃の花をちらした女用の便箋に、美しい女性の文字で、次のようなことが、書いてあったからだ。

私も、奇クの愛読者です。

よろしかったら、お茶のみがてら、私宅まで、足をお運び下さいませんか？

私の亡夫に、あまりにも面影が似ていらっしゃるのです、失礼とは存じましたが、おもわずペンをとってしまいました。

御無礼の段、平に御容赦下さいませ。

宮井加奈子

彦六は、あまりのことに、呆然としてしまった。

呆然としながらも、脳細胞をフル回転させて、記憶のひだをかき分けながら、宮井加奈子という人物が、何者であるのか、推理しようとした……。

あの本屋に手紙を預けていったからには、あそこで奇クを買うところを、目撃した女性にちがいない。彦六は、素早く奇クを買うことばかりに専念していたので、いつの場合も周囲にどんな客がいたのか、記憶にとどめる余裕はなかったが、

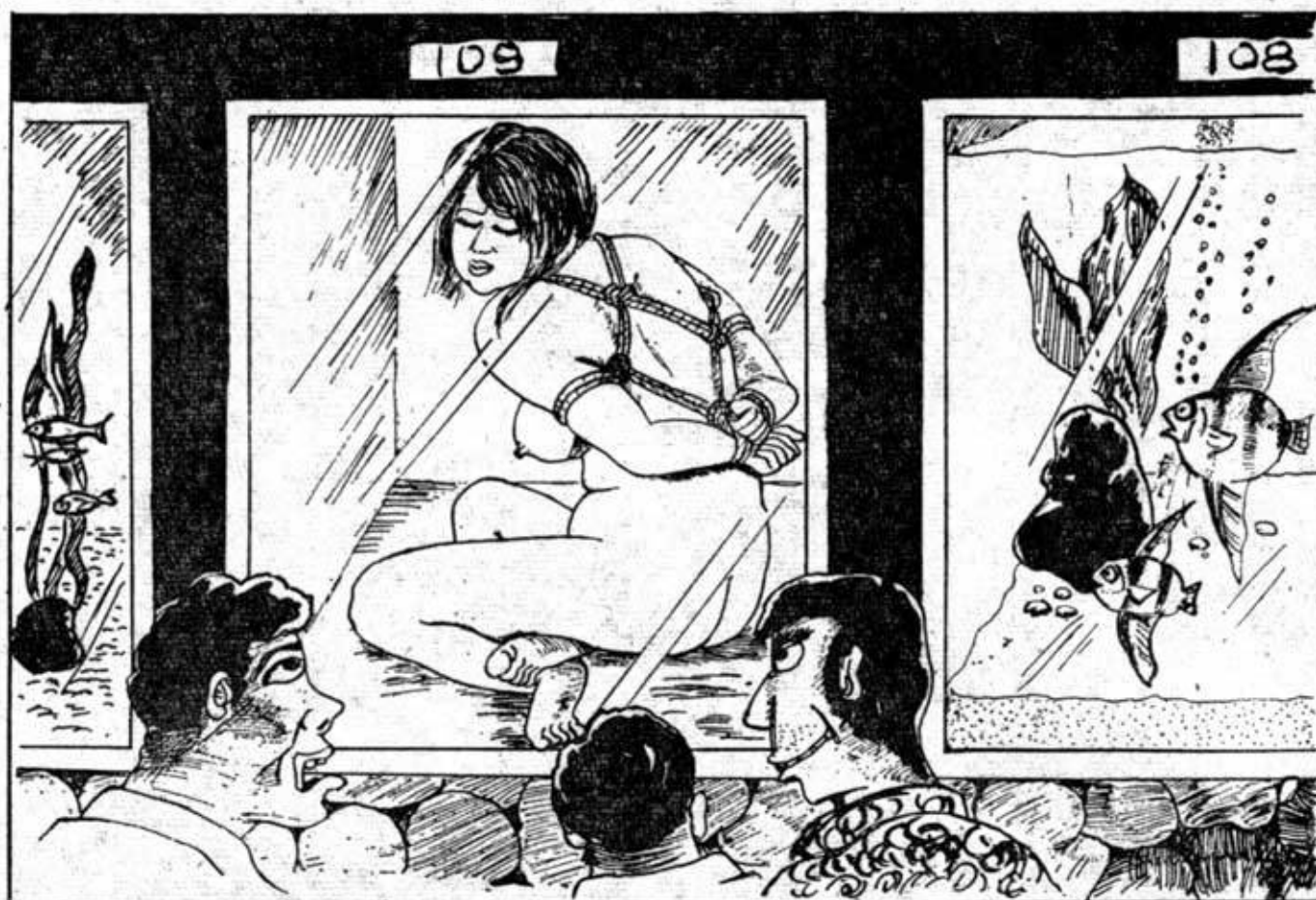
——そういえば……

と、ふとしたきっかけで、一人の女性が浮かびあがった。

数カ月前、T書店の店先で、婦人雑誌の附録を拾い読みしていた人妻風の美女を、おもいだしたのである。彦六は、その女性がいるだけで、店に入るのが、妙に面映ゆかったのだ、覚えていた。

しかし、奇クを置いてあるのは書棚の一番奥だったので、女性の視線を避けるようにし

読者ギャラリー『人魚?』府和糸男



て店内に忍びこみ、奇クに手を伸ばす際も、あらためて婦人客が立ち読みにつけていているのを確認したのだが……。

手紙の末尾には、宮井家に至る地図が丁寧に書きこまれていた。彦六のアパートの目と鼻の先だ。とにかく、探るだけは、探ってみなきゃあ——。

引込み思案の彦六が、珍しく果敢な行動にでたのも、記憶の女性と、現実の宮井加奈子が、はたして同一人物であるかというところに絶大な好奇心が湧いたからに他ならない。

しかも、同じ町内に、それも異性の同好の士が存在するということは、戦慄的な発見だった。しかし、それが戦慄的であればあるほど、警戒心と猜疑心をひきおこした。

自分の性癖に目をつけた、姿なき敵の挑戦かもしれない。宮井加奈子という女性は、何者かが彦六に仕かけた甘い罠かもしれない。

彦六はむしろ、そういう疑惑の渦巻きの中へ身をなげかけるのが、爽快だった。三十五年の人生のうちでも、冒険らしい冒険を試みるのは、これがはじめてだった。

宮井加奈子の家は、閑静な住宅街の真中であつた。

石垣を組んだ堂々たる構えで、こんもりした植込みのかなたに、瀟洒な二階家が覗いていた。

門札は「宮井剛」となっていた。門の脇のガレージは、コンクリートの地肌をのぞかせて自動車の姿はなく、赤い三輪車が一台、ひっそりと放置してあった。

彦六は、この門構えをみただけで、すぐさま引き返そうと思った。こんな豪邸の女主人に会うのは気おくれがしたし、幼いこどもがいるらしい様子を見るにつけ、自分のような異常な性癖の持ち主が踏みこむのは、罪悪のようにおもわれたからだ。

踵を返しかけると、

「もしもし……」と、女の声がする——。

なんの心の備えもないままに、ふりむきざま、顔を合わせてしまったのが、いつか書店で見かけた、宮井加奈子その人である。

「あらー！」

加奈子も、まぶしそうに、頬を赤らめた。一目で彦六を見破ったらしい。

こうやって、真近かに会ってみると、想像以上に美貌で、衿足から覗いた純白の肌が匂うような、若尾文子ばりの美人である。

本屋の店先で見かけた時は、家庭着姿だったが、今日は、外出帰らしく、渋い小紋の和服を着て、優雅な若奥様ぶりを発揮していた。

「やっぱり、いらして下さったのね。どうぞどうぞ、お入りになって……」

加奈子は、十年の知己の如く、彦六を中へ導いた。あんまりうちとけた態度だったので彦六は「やあ」とか「どうも」とか、わけのわからない挨拶をしながら、あっさり応接間に通されてしまった。

「こどもが幼稚園に行ってきたね、送り迎えが、たいへんなんですの」

と、気さくにいいおいて、奥で着更えをしていたが、やがてサイケデリックな模様入りの、派手なワンピースを着て、出てきた。

「はじめまして、宮井加奈子と申します」

服装がフランクになったのと逆比例して、コトバつきが、あらたまった。

「ぼく、畑彦六です……」

彦六も、直立不動の姿勢をとって、礼をした。にわかに動悸が昇まって、コトバをつづけるのに窮した。

「ホ、ホ、ホ……どうぞ、おすわりになつてよ。ここは、学校の職員室じゃないんですから……気楽になすってね」

白魚のように美しい指先を反らせて、彦六に椅子をすすめながら、加奈子は艶然と、ほほ笑んだ。

「まさか、昼間のうちから、いらして下さるとは、おもいませんでしたわ。どういうお仕事をなさってらっしゃいますの？」

加奈子は、それとなく探りを入れた。

「ぼくは、つまり、経理コンサルタントでありまして……」

彦六は、あわてて名刺を差出した。まさか三十面をさげて、経理士見習いでもあるまいということ、経理コンサルタントという怪しげな肩書を用いていた。

「まあ、日本橋に事務所をもってらっしゃるんですか……なつかしいわ。うちの主人も、日本橋に会社をもっておりましたの」

先輩の事務所、机一つ借りているだけのお粗末な境遇だったが、それでもハタタリが

通用したのか、加奈子は急に饒舌になって、自分の身の上話を、あれこれ、はじめた。

加奈子の夫は、某製薬メーカーの創始者の御曹子で、日本橋に原料をつくる小会社を持たされていたが、行く行くは父のあとをついで、製薬会社の社長に収まるはずだった。

ところが、去年の夏、大阪へ商談に向かう途中、高速道路で自動車事故にあい、あっさり昇天してしまったのだ。

「実家のお祖父ちゃまはね、うちの正志クンを次の社長にするまでは、絶対死ねないっておっしゃって、がんばってますの……こんなだっ広いところに母子二人ぐらしですよ。あたしは、手ごろなマンションにでも移りたいのに、それも許して下さらないし……まるで、宮井家にやとわれた、正志クンの哺育係兼女中ですわ。いい人がいたら、正志クンをここへおいて、かけ落ちでも何でもしたいんだけど、こんなお婆ちゃんじゃ、相手にして下さる方もいらっしゃらないしね……」

加奈子は、挑むような眼差しで、彦六を見た。黒目がちの眸が、妖しく輝いて、アルカイックな微笑が漂っていた……

彦六は、深い淵に落ちこむような、鋭い目まいを覚えた。

招きよせるような視線にひきずられて、彼女に躍りかかり、素裸に引き剥ぎ、鞭の雨をふらせる、野獣的な妄念が、脳細胞を爆発させ、心臓を灼きこがした。しかし、はやる心とうらはらに、三十五年にわたって掛け放しにしてあった禁欲的ブレーキが、一瞬の間に働き、欲望の火をかき消してしまった。

「ホ、ホ、ホ……ごめんなさい。未亡人は愚痴っぽくて、いけませんわね」

しばらく間をおいて、加奈子は高笑いをすると、金縛りにあったように、身を堅くしている彦六に、仇っぽい一瞥をくれて「お茶をいれましょうね」と、部屋を出た。

その後姿には、心なしか、失望の色が滲んでいた。

——ちくしょう、またしてもだめか！

空虚な部屋に独り残されて、彦六は、自身自身の疎んだ心に、苛責の鞭をふるいつづけた……。

その晩、彦六は美女イレエヌを、責め苛んだ。

サイケ調のワンピースを着せられたイレエヌは、海老縛りに丸められ、彦六のうちおろすバンドの鞭の勢いに煽られて天井近くまで

舞いあがった。

彦六は、あれからしばらく加奈子の家に居たのだが無為に終わってしまったのだった。

奇譚クラブのきの字も出ぬままに、一方的に繰り出す加奈子の饒舌の相手となり、昼食には寿司を黙々と平らげ、午後になって幼稚園から戻ってきた一粒ダネの正志クンに、怪獣ゴッコの怪獣の役割をおおせつかって、部屋の中を這いまわり、

「おじちゃん、また来てね」

と、五才の坊やに手を振られて、すごすご宮井家を辞したのである。

——えーい、とんだ三枚目だ！

表へ出るなり、悔悟の念がこみあげた。

どう考えても、彦六は意気地なしだった。

加奈子が「奇クの愛読者」と名のって付け文したからには、SMへの強い願望があったに相違ない。もしかしたら、あの白い裸身を曝して、プレイに応ずる意志があったのかもしれない。

それがどうだ、SMの話の一口も切り出せないで、五才の坊やの守りをしていたとは！

彦六は、羞恥にまみれて、二度と再び、宮井家の門をくぐれぬような気がした。

——据え膳くわぬは男の恥……。

胸中にこだまする悔悟の念は、やがて底なしの自虐の怒りとなり、イレエヌを叩いて叩いて叩きつくしても、一向に晴れる気色は、なかった。

『加奈子、許してくれ。おれは、惚れてしまったんだ。お前に恋をしてしまった。愛してるから、だめなんだ……こうしてやりたくても、だめだったんだ、加奈子』

海老に丸めたイレエヌをかき抱いて、彦六は臆面もなく、愛の告白を繰り返した。

冷たいゴム人形も、抱きしめているうちに生命が通い、弾力を秘めた腿部を愛撫するうちに、加奈子の大理石のように滑らかな膝頭をおもいだして、いっそう、いとさが増してくるのだった。

『加奈子、愛してるよ。おれは、もう……』

彦六は、狂ったように、人形の顔に接吻して、激しく頬ずりをした。

次の日から一週間、彦六は部屋にとじこもり、雨戸を閉ざしたまま、イレエヌを抱いて過ごした。

事務所には病気のため当分、休むと電話しておいた。浩平からも、ちよくちよく電話がかかってきたが、どうにも会おう気がおこらず

「ちょっと、身体の具合がおかしくて」と、ことわった。

「六さん、大丈夫かよ。見舞いに行つてやろうか？」

と浩平は、いつてくれたが、

「竜さん、男のたのみだ。しばらく独りにしといてくれ」

彦六は、ほんとうの病人みたいな、みじめな声を出した。

「はあ、ホルモンの変調症らしいな」

すべてを察した気配で、しばらくは電話をよこさなくなった。

彦六は、フトンの上で、考えられる限りの縛りかたを、イレエヌに施し、それを肴に、自淫にふけた。

生命のないゴム人形でも、加奈子の面影をしのぶのに、不自由しなかった。

彦六は、イレエヌの中に、加奈子の幻影を

——加奈子は、喘ぎ、叫喚し、涕泣し、失神すらした。加奈子は、あくまでも、可憐だった。妖艶だった。貞淑だった。ハレンチだった。

「加奈子、死のう……おれと一緒に、死んでくれるな」

もの狂おしく責めたてたあと、あられもな

い肢体を晒けだして仰臥する人形に、やさしく添い寝をしてやりながら彦六は、かき口説いた。

すると、不思議なことに、一点を凝視したまま仰向いている幻想の美女が、かすかに頷を引いてうなずいたではないか。それは、彦六の想念の中にしのびこんだ錯覚だったかもしれないが、たしかにうなずいたのだ。

「加奈子オ。おれは、もう……おれは、もうお前だけなんだ。お前だけなんだよ」

彦六は、ひしと人形を抱きしめて、俊寛のように密生した不精髭を、ふくよかな美女の頬にこすりつけた。

たしかに、あと一週間も、こういう状態がつづいたら、彦六は美人人形と心中してしまつたかもしれない。

しかし、青天の霹靂の如く、彼の幻夢をうち砕いたのは、一本の電話だったのだ。

「もしもし。あのう、畑先生でいらっしゃいますか？」

受話器の向こうで、若々しい女性の声がした。彦六は、いまだかつて、先生とよばれたことがなかったので、完全に面喰らった。

「わたくし、宮井伊万里と申します。はじめまして……実は、わたくし……」

と、自己紹介をしかけると、受話器の向こうで「だめよ、やめて……」と、しきりにたしなめる声がする。

——たしかに、宮井加奈子の声だ。

彦六は俄然、緊張して受話器を、握り直した。

「ふ、ふふ……ごめんなさい。あたしの奴隷が、ピーピー、うるさいの。ご存知でしょ、先生に失礼なラブレターをさしあげた、宮井加奈子っていう女……」

つづいて、たまりかねたように、加奈子の声が、とびこんできた。

「先生、ごめんなさい。あたし、とうとう白状してしまったの。悪い女。だって、あんまり厳しく責められたもんだから、ついこの人に、名刺のありかをいつてしまつて……」

「この人とは、何よッ！」

伊万里という娘の怒声がひびいて、激しい打撃の音がしたかとおもうと「ハイ、伊万里さま、ごめんなさい、伊万里さま」と、涙声であやまる加奈子の声。

しかし、それだけでは許されないのか「むう、むう……」、あらがう気配がしていたがやがて「むあああ！」と、のどを鳴らして絶叫が劈き、二声、三声、間欠的に走ったかと

おもったら、静かになった。

「先生、ごめんなさい、余計なこというもんだから、クリップで舌を挟んでやったの。おまけに、オッパイにも二つ……ふっふ、涙とよだれを一緒にこぼして、うらめしそうに、こっちをみてるわ」

と、伊万里の声。

「あんた、やめなさい。ぼくと、その奥さんとは、何でもないんだ。この間、ちょっと遊びに行っただけで……」

「奇クを読んでらっしゃるくせに、察しが悪いのね、先生。奴隷は、こういうふうになさなくちゃあ、よろこべないものじゃないのかしら？」

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御了承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

そうあからさまにいわれると、二の句がつけられないで彦六は、だまってしまった。

「ホッホホ……」

伊万里はさも愉快げに、勝ち誇ったように笑った。

「奴隷の分際で、主人の目を盗んで、ラブレットなんか出すから、こんな目に、会うんだわ。今日は、徹底的に、やってやるわ！ どう、先生。あなたも、立ち合っていただけませんか？」

「え、ぼくもですか……」

彦六は、だしぬけにいわれたので、返答に窮した。

「そうそう。奴隷からも、おねがいさせなくっちゃあ……」

伊万里は、独り言のように呟くと、受話器を加奈子に、つきつけたらしい。すうすう鼻をすする音と、ハッハッと受話器に吹きつける乱れた呼吸音がまじって、加奈子の拷問を想像させた。

「ほら、早くいいなさいよ。いらして下さいって……」

伊万里のけしかける声とともに、「うッ、むむう……」と、いきばるような加奈子の声がもれた。

抵抗する加奈子に、新しい責めが加えられているようだ。

「いいたくないの？ やっぱり恋人に、こんなざまは見せられないっていうのね……そんなら、そうしてなさいよ。ほーら、このクリップ、どこにやろうかな？ かわいいお臍をはさんであげようか……」

鼠をいたぶる猫のように伊万里は、意地わるく責めたてる気配がする。クリップが一つ加えられたらしい。「ぐ、ぐるぐる……」とのどを鳴らして涕泣する加奈子の声が急に昂まり、とうとう、

「えあひて、うだはい……」

と、不明瞭な声もれた。

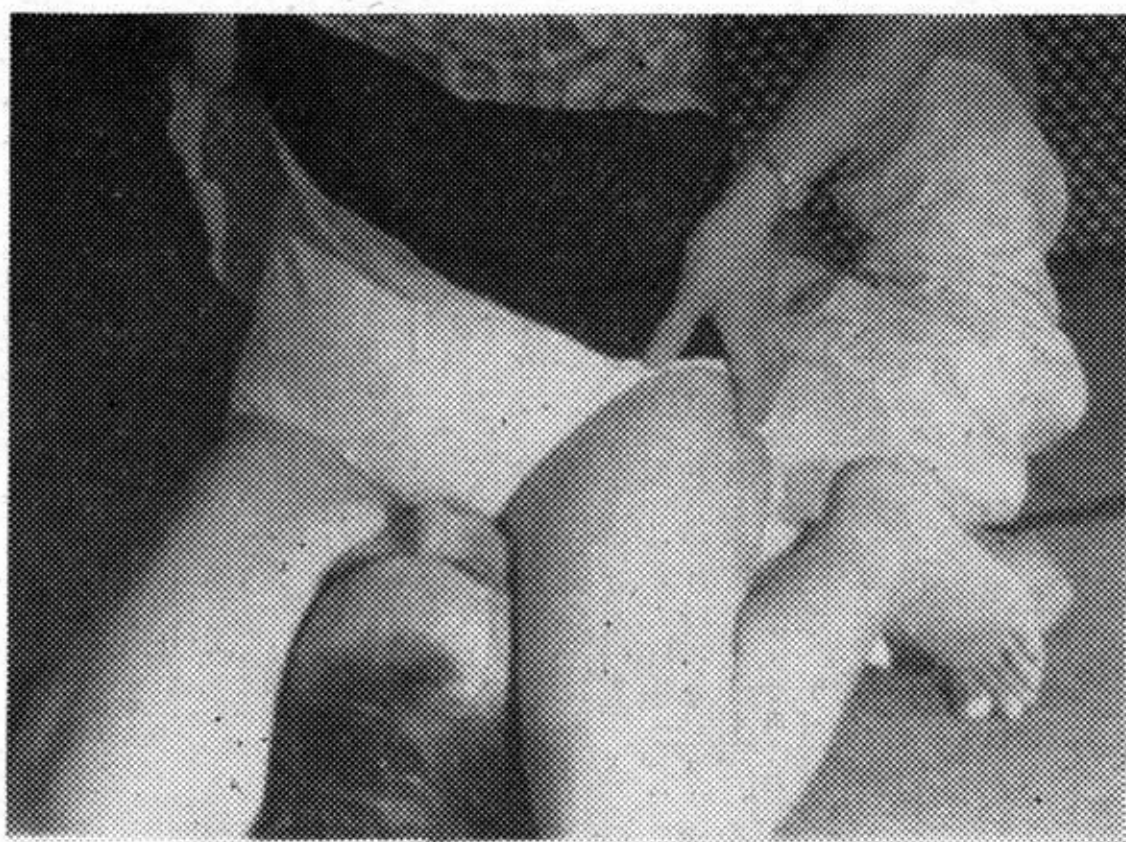
「なあに？ 三つや四つの赤んぼじゃあるまいし、はつきり、いってよ。えええ、あああじゃ、わかりやしないわ」

伊万里は、カサにかかって責めたてるが、舌をクリップで、はさまれていて、どうしていえよう。

彦六は、たまらなくなつて、

「行きますよ、すぐに行きますから……」

と、受話器に向かって、叫んでしまった。



Mは趣味の範囲で

馬場庄平氏は三十六才。鉾山の会社の技師で、高円寺に二十坪ほどの家があり、夫人と六才になる女の子と、夫人のお母さんの四人

連載・アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

馬場庄平の巻(3)

鬼 山 絢 策 (写真も)

暮しである。一度、彼の家に招かれて、奥さんの手料理で夕食を共にしたことがある。彼が奥さんに私のことを仕事の上の先輩だと紹介したが、奥さんは「大変お世話さまになっております」と、下へおめかめ歓迎振りだった。

飯の済んだあと、彼のコレクションを見せてもらった。写真は大したものではなかったが錦絵に、いいのがあった。春信と英泉で、いずれもクニリングズの場面である。本物な

ら、大した値打ちのものだと思う。

「あなたは、奥さんに対しては、どうなんですか、Mに関して……」

「いや、全然ノーマルです。しかし奇譚クラブや週刊誌の切り抜きなどを見られてしまいましたから、もう知っていますね。でもプレイをしたことはありません」

「あ、それじゃあ、私と同じですね」「えっ？」

馬場氏は、けげんな顔をした。ウツカリ私

は本当のことを言ってしまったのである。

馬場氏は由紀さんが私の女房だと思いでいる。最初、何度か否定したのだが、彼は勝手に、そう決めこんでしまったので、しまいに、どうでもいい、女房なら女房と思わせとけと言う態度をとっていた時だから、げんなり顔をしたのも無理はない。

「断わっておきますが、由紀さんは私の女房ではありませんよ」

「ああ、そうでしたね」

彼は決して逆らわない。すぐ肯定するのだが、それでいて内心、女房だと信じこんでいるのである。あるいは私の恋人と思っているのかもしれない。しかし、それも違う。

それはともかくとして、馬場氏の家庭はまことに健全そのもののなのである。家の中は、いつも綺麗に掃除が行き届き、家具や装飾品に生活のゆとりが見られる幸福な中堅社員の家庭である。

だから私も彼を信用し、由紀さんにも紹介して写真の仕事をし出したのだが、最近の彼は、少しMに熱をあげすぎているのではないか。Mに耽溺しているのではないか。私と会えば情熱を傾けてMの話ばかり二時間でも三時間でもする。でも、それは仕方がない。我

々の交遊はMを除けばナッシングになってしまふのだから、それはいいとしても、いままでは空想的な議論や理想を語り合ったものだが、ひと度、由紀さんとプレイすると、彼の話が、なまなましくなってきた。

二回目の写真ができあがったので、優秀な作品はキャビネぐらゐにまで伸ばして、彼に進呈すべく電話し、新宿の喫茶店で、おち合った。見ると彼は、かなり大きな包みを抱えている。「何ですか」と聞くと、

「アルバムですよ。いや、どれにしようかと色々、苦心して、あれこれ見て歩いたのです。まあ、見て下さい」

と包みを開けると、かなりデラックスなアルバムで、一枚一枚の裏表にビニールが張ってあって、その間に、はさんで糊なしで密着するようにになっている。かなり高そうだ。

「いくら、しました？」

「四千五百円です」

それを二冊、買ってきている。恐らく、このアルバムを選ぶまでに相当の時間を使っているであろう。しかも二、三千円で済むものを、九千円も金をかけている。私の作品を丁重に扱ってくれるという意味に解すれば結構なことなのだが、その時の私は、彼がMに対

する打ちこみ方が、少しオーバーになってきているのではないかと危惧した。

健全なMを、たのしむためには、あくまでも趣味と道楽の範囲を超えてはならない。

そのためには、Mを家庭にまで持ちこむのは危険である。何故、危険かと言うと、夫婦間でのMプレイは接触する機会が、あまりにも多いために、どうしても度が進みすぎる恐れがある。また、夫婦のどちらか一方に、それを理解する気がなければ破綻に陥る危険もある。また、仕事をする時間にまで食いこむようでも困るし、小遣いの範囲を超えた失費も、よくない。

前に書いた仁科雅之のように、Mを家庭に持ちこんで破滅した、よい実例がある。

馬場氏は常識もあり、一人前の生活をしている立派な男だけに、破滅などという極端なことはないにしても、多少でも彼の身辺に、Mのためにマイナスになるようなことは、おこしたくないと考えた。

取り越し苦労

馬場氏は写真を見ているうちに、みるみる耳が、あかくなってきた。

「奥さんは写真で見ると、また一層、綺麗ですね。女王としての貫録がありますねえ」

写真を捧げ持つようにしてアルバムの中はさんだ。

「この次は、いつ、やりますか」

と、早くも三回目の催促である。私は、暫く熱を覚ました方がよいのではないかと思つて、黙っていた。

「この前、お願いしたこと、奥さんは承諾して下さいましたか」

私が黙っているのを、次の趣向について考へてるとでも思つたのか、馬場氏は、もうやることに定めていて、それに対する趣向について、この前の希望の件を持ち出してきた。

「何でしたっけ」

私は、とぼけた。あの二つの希望は、馬場氏が酔ったまぎれの、夢想的な発言ではないかと思つていたが、いままた、正気の時に持ち出してくるところを見ると、本気である。

「あれッ、イヤだなあ。まだ、奥さんに話してないんですか」

「あれ以来、会ってませんからね」

私は女房でないことを、この一言でピチリと決めつけてやろうと思つて言ったのだが、「ああ、そうですか。是非、お願いします。」

いつかの、お話では奥さんは、もう何人かに恵んでいらっしゃるでしょう」

とにかく、のれんに腕押しみたいで、私が時々力んで、由紀さんが女房でないことを否定してみても、それはそれで結構という態度で一向に、こたえないのだから拍子抜けしてしまうのである。由紀さんが既に飲ませた経験があると馬場氏に、しゃべってしまったかしら。しゃべったとすれば前夜、飲んだ時だが、泥酔していた馬場氏が肝心なことは覚えており、しゃべらないでもいいことを、しゃべった私の方が酔っぱらっていたのかもしれない。

「まあ、その場になって見なければ分かりませんね、レンズが向けられていては」

「じゃあ、そこだけ撮影しなくても、いいでしょう」

積極的になると、どうしても我が、出てくる。カメラ不要では私の目的が失われるし、ひいては私自身の存在も不要なものになってしまう。馬場氏も、すぐ気がついて、

「何とか奥さんを承知させて下さい。貴重な写真ができるのですから——」

と、つけ加えた。彼は写真よりもプレイそのものにウエイトを、おいてゐるのだが、さ

すがに私の意を汲んで同調した。

それと、もうひとつの希望——。

愛し合ったあとのコンパに対する奉仕という件については、馬場氏は夫婦であると思ひこんでいるから当然、なし得ると思つて、この前は言ったのだらうが、今日は、いま私が否定したばかりなので、さすがに馬場氏も、きり出すのを遠慮したのであらう。

私は私で、第一の希望は彼が本心で望んでいることは分かったが、第二の希望は、どうなのか？ 空想的願望なのか、それとも現実に望んでいるのか、たしかめたかったけれど私の方から言い出す筋でもないので黙っていたが、その話は出てこなかった。

「実は面白いアイデアがあるのですが——」

「何ですか」

「あさってから一週間ばかり、ぼくの家は、ぼく一人になるのですよ。家内が子供を連れて避暑に行くんです。おふくろは弟の家に行っているんで、やもめ暮しになるんです」

それがどうしたのだと思つてみると、彼はとんでもないことを言い出した。彼の家で撮影しては、どうかと言うのである。

「奥さんは旅館へ三人で入るのが、お嫌のようですから、ぼくの家なら何の気兼ねも要り

ませんし、旅館の費用も浮くわけですから、一挙兩得だと思うのですが——」

「そりゃ、面白い趣向ですね」

「では、その期間内には是非、お願いします」

熱を冷やした方が、いいと思っていた私も馬場氏の提案に少なからず興味をひかれた。

私は由紀さんに電話してみた。

「何しろ彼が凄く熱の、いれようなんですね」

「また、人のせいにする。あなたが熱を上げてるんじゃないの」

「そりゃ私も、もちろんですがね。私の熱はいつも平均しているんですよ。ところが彼の熱のあげ方は、あまりにも急でしょう。今度は自分の家で、やってみてくれと言ってきているんですがね」

「面白いじゃないの」

「でも彼の打ちこみ方が度を越してるように思われるので、深みへ、はまっては、どうかと思うのですがね」

「フフ、ひとのことなんか、どうでも、いいじゃないの」

「ひどいことを言うなあ。彼は、ひとかどの紳士ですよ。私の友人でもある。それが、もしも破滅にでも追いこんだら、それは私や、あなたの責任ですよ」

「オーバーね、そんな取り越し苦労していたら何もできないわよ」

私は由紀さんに笑われてしまった。そう言われれば、そうかもしれない。

一回目のもろさに失望した由紀さんが、二回目の時は気乗り薄だったのが、今度は乗り気になってきたので、すぐ三回目は決まってしまった。

階段のM

新宿で由紀さんと夕食を済ませ、八時といの約束の時間に間に合わせるべく、時間を、はかって高円寺の馬場氏の家に向かった。

食事をした時、

「どうも馬場さんは私と由紀さんが夫婦だと思ひこんでるんですよ」

「ふふふ」

「何回も違うと言ったんですけどね。それはそれで否定しないんですが、内心、そう決めるもんだから、露骨には言わないけど話の節々に出てくるんでね」

「御迷惑？」

「とんでもない。身にあまる光栄ですが、あなたこそ、御迷惑じゃないかと思って」

「まあ、そう思うかもしれないわね。奥さんでもなければ、あんなこと、やるバカは居ないわよ。アハハハ」

「この頃は面倒になって、どう思おうと勝手にしろという態度に出てるんですがね」

「あなたは、どっちが、いいの？ 奥さんになってもらいたいんなら、なってあげてもいいわよ」

「それは至上の幸福ですが、最初、彼にそうではないと紹介してあるんですからね。私が嘘をついたことになる」

「あなたも人が、いいわね。フフフ」

「面倒くさい。まあ、どっちでも、いいでしょう。そう言っちゃ、失礼になるかな」

由紀さんは、私などより、はるかに神経が太い。

私は、その点、神経質で臆病である。「奥さんになってあげてもいい」と言うのは、どのへんまで「奥さん」になってくれるのかと質問したかったけれど、その質問をする勇氣もないのである。だから、もちろん馬場氏の第二の希望の件などは、到底、持ち出せるはずがなかった。

高円寺の駅から右に商店街を突っ切って青梅街道を横切ると、住宅街に入って急に暗く

なる。昼間一度、行ったきりなので、曲り角がどこだったか迷っていると、角に立っていた馬場氏がやってきて車の中を覗きこんだ。

迷うと、いけないと思って角に立って待っていてくれたのである。

「どうも汚いところへ、お誘いいたしまして……。よく来て下さいました」

馬場氏は浴衣に下駄ばきだったが、由紀さんに丁寧におじぎした。

狭い玄関だが、三人が入ると馬場氏は玄関に錠を下ろしてしまった。

六畳程の洋間には酒肴が並べられていた。馬場氏が一人で買いあさって支度したのだろう。テーブルのまん中にオールダーが乗っている。由紀さんが日本の洋酒は飲まないことを知っていて奮発したのだ。大変な気の使いようである。

「綺麗な、お住いじゃないの」
「恐れ入ります。お食事は？ ああ、お済みですか。それじゃ、まあ、おひとつ」
「オールダーなんか買っちゃって奥さんにあとで叱られませんか」

私は座を和らげるために、ひやかした。
「いやあ、こりゃ、もらいもんですよ。お酒がよろしければ、お酒もあります」

「じゃあ私は、お酒をもらいましょう」
お酒も、お燗がついている。

「これだけ一人で揃えたんですか。大変だったでしょう」

「いやあ、楽しいですよ。お気に召して頂けるかどうか分かりませんが、お風呂も沸いてますが、あとで、お入りになりますか」

「ふふふ」

由紀さんが無遠慮に笑い出した。

「何が、おかしいんですか」

と私が口を、とんがらせて言った。

「ごめんなさい。馬場さんが、これだけのことを用意するのに、一人でクルクルこまねずみのように動いた様子を想像したら、おかしくなっちゃったのよ」

「今夜は、もう何の邪魔も入りませんから、どうぞ、ゆっくりと、くつろいで頂きます」

「今夜の写真のストリーですがね、今日はひとつ由紀さんに、この家の奥さんになってもらいましょうか。馬場さんが、もちろん御亭主ということで、夫婦のMプレイという形で進行してみましよう」

「鬼山さんは何になるの？」

「サア、何になりますかね。痴漢にでもなりますか」

お酒の方は早々にして、次の間の和室にライトをセットした。

「旦那さんが浮気をしてきた。それを奥さんが責めるところから入りましょう」

「ぼくは浮気なんかしませんよ、こんな綺麗な奥さんを持ったなら」

「だから、あなたは浮気をしていない。ただ会社の女の子の相談に、ちょっと、のってやっただけです。それを奥さんから浮気したと責められる。弁解すればするほど、却って奥さんを怒らすことになる。怒った奥さんが旦那さんを殴りとばす。平手打ちをくれる。そこから行きましょう」

馬場氏は浴衣のまま、由紀さんも今日はブラウスとスカートの、ふだん着のままなのでそのままの服装で、殴るところから足蹴にするところ。馬にして部屋中を這い廻らせ、最後に馬の行きつくところは、トイレまで馬に乗せて運ぶところなどを撮った。

この家は、二階が二間ばかりある。

「どの部屋でも気に入った所を全部、使して下さい」

と馬場氏は言うが、二階の室は平凡な日本間で狭いし、セットにならない。だが階段は旅館などでは撮れないので、階段を使った。

階段を上がったところに馬場氏を坐らせ、その前に立った由紀さんが、足を上げて蹴落とすところを下からアップで撮った。

馬場氏を、頭を下にして、階段に逆さまに寝かせた。そのままでは落っこちてしまうので、両手を階段にかけて止まっていってもらい、上の方で由紀さんが足を、たかだかと上げて蹴つとばしているところを、ライトを下から当てて、何枚か撮った。

「これは今日のハイライトだな。よそでは撮れない写真です」

スカートを捲った由紀さんが、足をのびして、馬場氏の顔の上に足のうらをあてて、踏みつけるところも撮った。アップで撮ると、かなり迫力がある。私は35ミリの広角を使って見た。ここで一本目のフィルムを撮り終えたので休憩に入った。

M 茶 漬 け

休憩といっても私は休めない。階段の上と下に取りつけたライトをはずしたり、あとかたづけに階段を上ったり下りたり、かなりの重労働である。

その間、馬場氏は由紀さんを洋間へ誘って

ウイスキーを、すすめた。

「お風呂へ、お入りになりませんか」

「そうですね」

由紀さんが入ろうとしたので私は、

「ちょっと待って下さい。お風呂は、あとにして、今度は、その洋間で撮りましょう」

いま、風呂に入られては手順が狂う。洋間へライトを移した。ライトを挟んだクリップを、どこへ取りつけようかと迷っていると、

馬場氏が立って、簡単に取りつけてくれた。そこは自分の家だけに勝手を知っている。

由紀さんが馬場氏に酌をさせてウイスキーを飲んでいるところを撮り、その傍で亭主の馬場氏は御飯を食べているところを撮った。「かかあ天下風景も、こういう家庭のムードの出た部屋でないと、ピッタリきませんからね。旅館で撮れないのを撮るときましよう」

だが、由紀さんと同じテーブルで馬場氏が飯を食うのでは対等の高さになって、面白くない。そこで馬場氏のおかずや、お茶碗を床へ、じかに置いて、馬場氏は床に坐って御飯を食べるポーズにした。これだと椅子に腰かけている由紀さんは一段と高くなり、足を、ちよっと上げれば、軽く馬場氏の頭を踏むこともできる。

グラスを片手に由紀さんは、足の指で馬場氏の頬ぺたを、つねったり、額を蹴つとばしたり、いろいろなプレーができた。一応、茶碗に御飯を盛って、それを口の傍へ持つて行ったところや、茶碗を由紀さんの足で顔に押しつけられるところ。茶碗を離すと馬場氏の顔が飯粒だらけになっているところなど、ユーモラスな場面も撮れた。

「由紀さん。ちょっと、椅子から立って下さい。そして片足を椅子へかけて、もっとスカートをグッと上へ、たくしあげて下さい。ダンナさん、もっと傍へ。由紀さんの足元まで接近して下さい。ハイ、そこでダンナさんのお茶碗を取り上げて。コンパの下へ持って行く——。あ、由紀さんはダンナさんの顔を見て下さいよ。お茶碗を見ないで」

そこまでポーズすれば、どういうシーンか二人には、すぐ、のみこめた。

ネクター・シートの最も秩序的なカットである。馬場氏は額を蹴られていた時は、大して昂奮の色も示さなかったが、この時になって、はじめて怒っているのではないかと思うほどの緊張を見せた。由紀さんは、うす笑いを浮かべる余裕がある。

「どうするの。ほんとに御飯にかけろの？」



私が返事をする前に、

「かけて下さい。かけて下さい」

馬場氏が水を求める砂漠の旅人のように、

かすれた声で言った。

「そんなこと言っちゃってうまく出ないわよ。」

「そうすると床を汚すから」

「構いません」

馬場氏は、次第に茶碗の傍へ、すり寄って哀願するように言う。

「ウフフフ、うまく行くかしら」

「ああ、ダンナさん。あなたが、お茶碗を持ってあげて下さい」

スカートが落ちてくるので片手では、やりにくそうなのだった。馬場氏は、お茶碗を両手に持ち、うやうやしく捧げ出すような形をとった。

「ちょっと待ってね」

さすがの由紀さんも、すぐには出なかった。

「これ、ほんとにやったことありますか」

「冗談じゃないわよ。こんなこと、まさか」

「ほんものの旦那さんは、ダイレックト専門ですか」

「ふふふ、ばかね」

言葉を交わしているとリラックスしてきてスーッと、かなり太い線が

出た。私はレンズから目を離さず、この1/2秒ほどの瞬間を、巧みに捉えた。1/2秒は、もう一回あった。

「ハイ——」

由紀さんはちょうど適量に止まったので御機嫌だった。色は番茶より緑茶に近かった。

馬場氏は箸をとると、サラサラと飯を、かっこみ、飯を半分ほど残して、あとは御茶だけを、すすって飲みこんだ。私がポーズをつける暇もないほど、待ちきれないと言った恰好で、一気に済ませてしまった。

「おいしかった？」

「毎日、こうして頂けたら、ほんとに幸だなあ」

馬場氏は御飯だけになった茶碗を何度も、すすった。

「拭いて——」

ハッとして馬場氏が茶碗と箸を置いて、テーブルの上のふきんへ手をのぼそうとした。その時、由紀さんが両手で馬場氏の顔を、おさえた。馬場氏は、すぐに察して、与えられたものを、ていねいにきよめた。

電極のプラスとマイナスが接合したようなもので、ひとたび接着したものを無下に離すのは非情である。そこへ入るのは、ちょっと

ペースが早いと思ったが、事の成り行きで、そうなってしまったものは仕方がない。

カメラの方から見ると位置が悪く、馬場氏の才槌頭ばかり大きく、つい立ての役目をしているので、とりあげるほどのポーズではない。

お役目に多少、位置を移動して、二、三枚撮ったが、あとは手持ち無沙汰である。

ふと見ると、テレビがある。

私はテレビのスイッチを入れた。

テレビから流れた音声は、水をぶっかけたような効果があり、馬場氏は、びっくりして後ろを振り向いた。

「テレビを見ながらってのは、どうです」

「それはいいけど、あのおじさんは困るわ」

見るとテレビには池田首相の顔が写っている。これは、まずい。チャンネルを廻すとピーナッツが出てきた。まあ、この程度で辛抱してもらう。

馬場氏に床に寝てもらったが、こうなると部屋が狭い。ソファの下へ両足を突っ込んで窮屈な恰好で寝そべってもらう。今度はテーブルが邪魔になった。由紀さんに片方を持ってもらって、ヨイショッと隅へ移動させる。上に色んなものに乗っているから落とさない

ように慎重に運ぶ。だがテーブルを片づけてしまうとガランとしてしまって、ソファがあるのにテーブルがないのは不自然だし、殺風景になってしまった。そこでもう一度、由紀さんの手を煩わして、テーブルを写角に入る位置まで戻した。由紀さんは面倒くさがらずに、やってくれた。ソファの下へ両足を突っ込んだ馬場氏は仰向けに寝たまま私達の動きを黙って目で追っていた。自分の家の中の自分の家財道具を、自分が動かせず、他人が勝手に動かしているというところに、緊縛されて自由を失ったと同様な境地を味わっているようであった。

「さてと——さっきの続きですな」

「続きだと、こうなるわよ」

由紀さんは、無雑作に馬場氏の口を、ふさいだ。

馬場氏は、むせぶように咳込んだ。由紀さんの重い身体は微動だにしなかった。

うちのバカ

写真を創る側から言えば、モデルは木偶であっては困る。製作者の意の通りに動いてくなくても表情は、もちろんのこと、肉体の各部

に、それぞれ情感がこもっていなければ、よい写真は創れない。

従ってモデルの情感を盛り上げて行くのも製作者の大切な仕事である。また、それをコントロールすることも忘れてはならない。

映画だとセットや気候の都合で、クライマックスのシーンや見せ場のカットを先に撮ってしまうこともあるが、映画は何日もかかって作るのだから、日が改まればモデル（俳優たち）の気分も変わるだろうが、一日こっきりで終わる私のような場合は、やはりクライマックスを最終にもって行かないと、モデルが死んでしまう。

今夜はUのシーンを最終段階に持って行くと考えていた。更にはSのシーン（これはサドの意味ではない）までできたら、やろうと思っていたのである。

馬場氏が茶漬けをかつこんだところから二人は極めて自然に接合した。もしも、あそこで、そのままモデルの行動を制止しなかったら情感の昂まるままに、一気にクライマックスまで行ってしまう恐れがある。

そこに被写体の間に邪魔ものが現われて、これを取り除くべく、極めて自然な形で中断された。当然、二人の情感に水を差した形と

なつて、二人にとっては興ざめであろうが、私はよいブレーキがかかったと思った。

由紀さんが昂まってくると、一気に男性を乗り潰してしまうことは、これまでも度々あったことで、奴隷が潰れてしまつては、仕事ができなくなる。その意味で、テレビとテーブル異動は効果があつたと思った。

由紀さんとしては無雑作というか、無感動にペタリと坐つたのだが、初対面の時とは違つて、そこには何の加減もなかつた。

馬場氏が咳こんだと思つたのはクシャミだつた。口は開閉自在だが、鼻腔は自分の力で閉じることができない。開きつ放しだから、突然、侵入してきたグラスを防ぐことができなかったのだ。しかしクシャミをしたくもその自由さえ奪われているので、咳込んだ様に見えたのである。

だが、由紀さんは非情だつた。相手の苦しみなどに斟酌（しんしゃく）せず、むしろ手ごたえを快いものにとつて、退くことを知らない。

由紀さんにテレビを見ながら、煙草を喫つたり、ビールを飲んだりして、やんわりと馬場氏を責めてもらった。

主として片膝を立てるポーズをとつてもら

つたので、これだと馬場氏は、かなり楽ができる。

数カット撮り上げたところで、

「さてと、今度はベッド・プレーに移りますか」

両者に熱が上がりぬうちに冷やすようなことばかりやって申し訳ないが、この家のセツトをフルに活用したかつたから、しょうがない。

馬場氏の家は最近、手を入れた茶室風の日本間がある。六畳間だが、工夫を凝らした半折の床の間や違い柵、さては書院風の出窓に新旧をミックスした味のある室で、馬場氏はこの室を見てもらいたかつたのだろう。

馬場氏の寝室は別に六畳の部屋があつたがそこよりも、この茶室を寝室の代りに使うことにした。

こうなると今度は馬場氏が忙しく動き廻る番で、寝室から蒲団を運んできて茶室に敷いた。

「由紀さんの着る、何か寝巻はないですか」

「あ、家内ので申し訳ありませんが——」

タオル地の寝巻だつたが、洗濯屋から届けられたままのセロファンの袋に入つたのをを出してきた。

「これ、着て頂けますか」

「いいわよ」

由紀さんはスカートとブラウス、シュミーズを脱いで寝巻に着替えた。

「ブラジャーを、とつて下さい」

まだ、由紀さんはブラジャーを、はずしたがらない。

「とるの？」

「そうですよ。寝巻を着るのに、どこにブラジャーをつけたままのひとが居ますか」

にらむまねをしながら、ブラジャーをとつた。

馬場氏もパジャマに着替えた。

床は二つ並べて敷いてある。一方に馬場氏が仰向けに寝て、片方に寝た由紀さんが、裸の足をのばして馬場氏の顔を小突いたり、顔の上に足を乗せるところからスタートした。

これは、いつか由紀さんから聞いたことだが、由紀さんが旦那さんを挑発する時は、いつも、こうして誘うのだというので、そのポーズをとつてもらつたのである。

「想い出しますか。背の君は、いまラスベガスか、はたまたロスか——」

「ふふふ、想い出しなんかしないわよ。代用が、ちゃんと、ここに居るもん」

馬場氏は顔に寄せられた足を両手で捧げもち、足のうらを舐めた。

「ところで、それから先は、どうするんですか。お宅で、やる場合は?……」

「ハハハ、いやらしいわね」

「でも、今日はファミリームードで行くんですからね」

「まあ、こんな風ね」

由紀さんは両膝のふくら脛で馬場氏の顔をはさんだ。

馬場氏はゴロリと腹這いになり、はさまれた顔を太股の方へ向かって這い込んだ。由紀さんの方が仰向けになって、股を弛めて、進行を許した。

「うちのバカも、こうよ。ソックリだわ」

〇〇省の倉田課長と言えば、統轄下にある大会社の社長も頭の上がらぬ絶大の権力者である。いま、アメリカに技術研究と業界視察に出張中だが、帰朝すれば業界の指向は倉田課長の発言で決まると言われ、関連産業各社や、銀行、証券各社が注目している人物だが由紀さんにあつては「うちのバカ」の一言で片づけられてしまう。

私は倉田課長の偉大さを知っているが、馬場氏は知らない。しかし、由紀夫人を尊敬す

る度合いは、私よりも高い。

由紀さんは足の先を、たすきにして、両股で首を絞めながら、ふふふと笑い出した。

「ちょっと待ってよ。あたし、御手洗へ行ってくるわ」

その言葉は、そろそろ言い出すのではないかと、私の期待していたものだった。

ビールを時々飲んだり途中でとめたりしたから、もう出る頃だと思っていたのである。

両足の間から馬場氏がチラと私の方へ目を向けた。その目は哀願するようであった。

「これからというところで今日は、よく中断しますね。もう少し、待ってくださいませんか」

「だって、困るわ。シーツを汚したら悪いでしょ」

「あ、それじゃ、お風呂へお入りになりませんか」

たたきつける水音

この家の浴室は一坪ほどで狭かった。

手廻しよく、お湯は丁度、頃合に沸いていたので、すぐ由紀さんに入ってもらった。

由紀さんにはコレと明からさまには言わなかったが、呑みこみの早い由紀さんは、既に

次のシーンを悟っていた。

風呂場は入口が狭く、ライトが、どうしても据えつけられない。で今度はストロボを使うことにした。

「サ、あなたも、お入りなさい」

イザとなると馬場氏は、ちょっと、たじろいだ。

「全部、脱ぐんですか」

「当たり前でしょう。お風呂へ入るのにパンツをはいて入る人がありますか」

「でも、ぼくは湯ぶねには入りませんから、パンツだけは勘弁して下さい」

M派の中には好んで自ら恥かしい服装や醜い形を異性に見せたがるタイプも居るが、馬場氏は、そういう型では、ないらしい。

「そうですね。最初は三助のようなこと、やってもうから、まあ、はいていても、いいでしょう」

由紀さんが湯舟から上がったところで背中を流すところや、足にシャボンをつけて洗うところなどを撮った。

「どうすんの? あたし、もう我慢できないわよ」

まどろっこしいことばかりやってるので、由紀さんは焦れてきた。こっちは、どうい

形に決めるか、次の場面に備えて、構図の具合やピント合わせのテストの意味で撮っていたのだから、気が乗らない。三人が気の乗らないことをやってるのだから、由紀さんが焦れるのも当然である。

「ハイ、じゃ行きましょう」

由紀さんに正面を向いてもらうと、対照的に馬場氏が後ろ向きになる。これは全然ダメである。結局、横向きしかないが、馬場氏の顔が、やや正面を向く位置に、尻餅をついたような恰好で、両手を後ろに突っ張って足を投げ出すような形をとってもらい、由紀さんには馬場氏の足を跨いで向き合って貰った。

「いいの——」

「はい、どうぞ——」

湯殿の中は十ワットぐらいの、うす暗い電灯がついてるだけで、かなり暗い。それだけにピントが合わせにくかった。

由紀さんは、すでに二度目の経験だけに度胸がよかった。

叩きつけるような音が、ひびき、かなり激しい勢いだった。

ストロボは部屋のコンセントから電源をとっているから、六秒置きにしかシャッターが切れない。それでも三回、きれた。

途中でとめてもらって別のポーズをとってもらう予定だったが、あまりの激しさに言い出すことができなかった。

馬場氏の身体がブルブルと、けいれんするようふるえた。馬場氏にとって、鉄のどげ鞭で叩かれた以上の衝撃だったのだろう。

鼻のまん中に穴が、あくのではないかと思われるほどの、最初の一撃は、ストレート・パンチを食った時のように目をつぶり、顔がクシャクシャになった。

四、五秒たってから、ようやく流れの位置が決まったが、とても、おちついて味わっている暇は、ない。

「ちよっと熱いかな。ガマンしなさいね」

由紀さんは手桶で湯舟からお湯を汲んで、

馬場氏の顔へ、ぶっかけた。

続いて、もう一ぱい——

ウワトというような馬場氏は、かたくつぶ

っていた目をあけて、私の方を見た。その目に歓喜の極致に達した色を見た。

更に、もう一ぱい。

容赦なく、お湯を、ぶっかける。

「サ、もういいわ。綺麗になったわ」

由紀さんは湯舟のふちに片足をかけた。

馬場氏は出口に顔を近づけて行った。最早

二人の息はピッタリ合っている感じである。

風呂上がりのせいかな、あるいは完全に男性を征服した満足感の故か、由紀さんはポツと上気した頬を桜色に染めて奴隷の小さな舌の動きを許している。実にいいポーズである。

ここぞと思ってシャッターを切ったが、ストロボが、つかない。予期せぬことに出くわすと、私は大いに慌てる方である。六秒、待ちきれずに又、切ったが、やはりつかない。

調べると、コンセントからソケットが脱け出していた。

急いで、はめこんで戻ってきて見ると、由紀さんが後ろ向きに背を向けている。前のポーズに戻ってくれとも言えずにシャッターをきると、そこでフィルムが切れた。

くさった私は休憩の宣告もしないで、二人を、うっちゃらかして部屋に戻り、オールドバーを一ぱい、ひっかけた。

湯殿で由紀さんの含み笑いの声が聞こえ、何か小声でボソボソと、しゃべっているのが聞こえる。飛んで行きたかったが、放つといてサラミソーセージをつまみ、鳥のとも焼きを、かじった。気がつくとも、かなり腹が空いている。

「そうだ、この鳥の食べかすを、由紀さんの

身体で味をつけて馬場氏に食べさせたら喜ぶだろう。犬派にとっては何よりの御馳走だし絵としても分かりやすい」

もも焼きをかじりながら、ゆっくりとフィルムを詰め替えていると、由紀さんがバスタオルを巻きつけて出てきた。

「鏡台は、どこかしら——」

寝室に鏡台があるのを見つけて入って行った。五分ほどして馬場氏が湯から上がって、食卓の傍へ、やってきた。

由紀さんに潰されたのではないかと心配したが、髪を綺麗になでつけて男性クリームの匂いをプンプンさせて、意外に元気だった。

頬ぺたに変な十文字の痕がついている。

「そこ、どうしました?」

「タイルの、あとですよ」

馬場氏はテレくさそうに笑った。

「大丈夫ですか」

「大丈夫ですとも。ああ——」

と、ため息をついた。

「疲れたでしょう。今夜は、この位にしましょうか」

「いえ、滅多にない機会ですから。よければ御二人とも泊まって行って下さい」

彼も腹が減ったと見えて、もも焼きを、か

じり、ウイスキーを飲んだ。

「どうでした。そのウイスキーよりは、うまかったですか」

「もちろん! こんなもんと比較になりませんよ。最初の、ホラ、あの瞬間は夢中で、とても味なんか分かりませんでしたけどね」

馬場氏は寝室の由紀さんの方を、うかがいながら、小声で言った。

「一番よかったのは、急流のあとですね。あの最後の余滴というのかな。お茶だってそうでしょ。きゅうすをグーッと絞って、最後にポタポタと垂れてくる、あれが濃くて、うまいでしょ。同じですね」

頬についた十文字の痕を、しきりに手で、なでながら、

「この痕があっちゃ、写真を撮るのに、まずいでしょうね」

「いや構いませんよ。却って面白いですね」

「ああ、おなか、すいちゃったわ」

寝巻を着て由紀さんが、やってきた。

「サア、どうぞ」

馬場氏がビールを注ぐ。寝巻を着たままだ居るところを見ると、由紀さんは、まだ腰を落ちつけるつもりらしい。このひとは帰りたいければサッサと洋服を着て「あたし帰る」と

至極、はっきりしてるから、気を使う心配がなくてよい。そういう点は実にサッパリしているのである。

「あなた専用の、烙印を押しましたね」

私は馬場氏の頬を見て言った。

「あら、ほんと。痛かった?」

「いえ、とんでもない。奥さんの奴隷には、皆こういう、烙印を押しとくといひですね。さしずめ、ぼくが家畜第一号というところですか。ハハハ」

由紀さんがサッと足を組むと、寝巻の裾が割れて、匂うような桜色の太腿がニョキリと現われる。

「さてと、寝室のシーンを、もう少し、やりますか」

「今度は鬼山さんも、どうですか。そのカメラ、セルフタイマーがついてるんでしょう」

馬場氏は何気ない風を装って言った。私のカメラにセルフタイマーがついてる事は馬場氏は知りすぎるぐらい知っているのに、この質問に、ある種の謎をかけてきたのである。

由紀さんは、知らん顔して焼き豚を頬張っているが、黙っているのはOKの証拠でありこれから行なわれるプレーの内容も既に分かっている顔だった。

(続く)



告

白

私

と

浣

腸

中 野 昭 子

以前、二度ばかり、同じ題で綴った、つたない告白文を投稿して、幸にも本誌にのせていただいたことがあります、又、筆をとってしまいました。

浣腸マニアと申ししても、生来、弱虫の私は、本誌でよく拝見しますような、縛りや鞭打ちを伴った責めとしてのプレイは、経験もありませんし、恐ろしく感じ、それを望む気持は強くありません。

或は、私が未経験なためにMの醍醐味を知らないからかも知れませんが、現在のところ私の好みは、医療として施される場合の、強

い羞恥心と、病院のもつ独特の雰囲気に限られます。

体の具合が悪いとき、又は独りで寝る淋しさを紛らすため、自ら、いちじくを用いる事があります、そのような時にも、しらずしらずの間に病院での場面を想像しながら、行なっております。

しかし、羞恥心を求める私にとっては、第三者の目がない一人でのプレイは、どんなに頭の中で病院でのことを想像しても、如何にも物足りなく感じます。

そのようなことから我慢しきれなくなると

時々には自分で病氣をつくり、病院を訪れるわけですが、それがうまく行って浣腸をうけるときの私の心理的な高まりを、順を追って説明してみます。

まず、病院に行く前の昼から、わくわくするような期待感で、徐々に興奮状態に入ります。入浴時は特に丁寧に洗い、翌朝も汚さないようにします。

病院を訪れるということ自体もそうですが待合室で待っている間、他人の様子をうかがったり、他人の目を意識したりする落着かない状態も好きです。

次に、診察室のベッドに仰臥し腹部の触診が始まりますと、私の興奮状態は急速に高まって来ます。まるで入学試験の発表を待つような気持になります。運よく合格するだろうか、或は、ただ投薬だけで帰らせられるのではないかしら、などという不安も交錯し、胸がときめきます。

いよいよ浣腸の宣告を受けますと、興奮はピークに達します。

施術を待つ間、どんな状態でされるのだろうと考え、浣腸以外のことは一切、頭の中からなくなります。

準備が完了し、ポーズをとるときは、死刑囚が階段を上る心境と申しあげては大げさでしょうか。下半身を露出した後は、私の神経は一点に集中します。

やさしい看護婦さんの手を肌と感じた瞬間に、私のもっとも恥かしい部分に、看護婦さんの目が注がれていて、冷たい器具の先端が狙いをつけたことを意識し、全身が緊張に、おののきます。

ここまですが心理的なピークなのですが、注入が始まった瞬間から羞恥心は急速に低下し今度は肉体的な快感を期待する気持に変わっていきます。

勿論、異物感、薬液の注入感、静かに下腹部が張って来る感じなど、何れも大好きですが、それまでの心理的な緊張の時間が長いことと比べますと、あまりにも短く、いつも、あっけなく終わってしまいます。

これが、プレイでしたら、きっと満足するほどに施してもらえらるだろうにと、残念に思うこともあります。

それでも注入後は、被害者の立場と、優越感に満ちた施術者の表情との対決の時間とでも申しましょうか、再び激しい羞恥心がよみがえりますが、一方、徐々に肉体的な苦痛が始まります。

正直に申しまして、この、苦痛にたえる喜び、というものは、多少分かるような気もするのですが、私にとっては、今一つ、未開拓の分野のようです。

この苦痛に対して恍惚感を味わえるようになれば、私にとって浣腸は、もっともっと大きな楽しみになるのにと、自分の未熟さを残念に思います。

最後のトイレの場面は、解放された肉体的な快感はありますが、自分の体内の汚れを目の前の現実として見せつけられると、何かたまらない自己嫌悪を感じ、あまり好きな時間

ではありません。

○

次に私の病院遍歴について、ご報告させていただきます。

事前準備

自分で作る病気ですが、目的はあくまで浣腸ですので、数日前から便秘治療の逆をやります。下痢止めを飲み、食物もできるだけ通じのよいものを避けて、お腹の張るのを待ちます。

病院での説明

便秘しているのが昨夜、下剤を飲んだところ、今朝から催すのでトイレに行ったが、出ないこと。お腹が張って苦しくてたまらず、来院したこと。

浣腸の確率

以前は、痛み止めの注射と、下剤投与だけで帰らせられる場合も多かったのですが、最近では、便通を押さえる日数も永くなり、演技力も上手になったせいか、三分の二以上は成功します。

病院の種類

私の経験からいいますと、普通の内科、小児科の診療所では、あまり浣腸を用いない様ですが、外科、婦人科を兼ね、入院施設

もあるようなところでは、患者に浣腸をする機会も多いらしく、比較的、簡単に用いてくれるようです。

○

以下、最近一年ほどの間で、私が浣腸を受けることのできた八回の体験から、その模様を、ご報告します。

器具・薬液

イルリ使用、石けん水、五〇〇cc、二回。

硝子製 五〇cc 二本注入 一回

// 五〇cc 一本 // 一回

// 三〇cc 二本 // 三回

// 三〇cc 一本 // 一回

中身は多分、グリセリンと思います。一度だけ、特に激しく感じました。或はドナンだったかも、わかりません。

着衣

いつも裾の広いスカートでいきますので、そのまま、下着を下げるだけです。下着をとってしまうように命ぜられたことはありません。

ポーズ

横臥、ひざを深く曲げる 七回

うつぶせになり後ろから 一回

この時は、始めには横臥の指示だったの

ですが、私が、ためらっていると、恥かしくないようにとの配慮からか、うつぶせにさせられました。

施術者

医師 二回（内一回は女医）

看護婦 六回

人数 一回だけ二人（イルリ）あとは一人

場所

診察室で、そのまま

診察室のついたてのかけ

別室

施術者以外の人の存在

施術者だけしか、いなかった

医師・看護婦等が同室、又は室に

出入した。

他の患者が入って来た

施術者の態度

特に意地悪く感じた

事務的で比較的冷静

親切な感じを受けた

親切過ぎる感じ

あまり親切に、いたわられたり、いろいろと話かけられるのも、私のように独りの

の楽しみのため、神経を集中している者

にとっては、迷惑に感じます。

施術後

脱脂綿かガーゼをあてがう

ちり紙をあてがう

何もしない

排泄

すべてトイレ。私は、便器は嫌いなので

好都合でした。

一度だけ、内容を流さず点検されました。

言葉

受診の結果で、特に印象に残っているものをあげてみます。

「ここで、すぐに出してあげます」

もちろん、浣腸の宣告なのでしたが、患者の心理を考えて、浣腸という言葉避けられたのでしょうか。

「誰も入って来ないから、大丈夫よ」

イルリのとき、どの位、入ったか見ようと

して、ふり返った際にいわれました。「家でお母さんにしてもらったこともあるでしょう」

親切過ぎると書いた中年の看護婦さん。

○

マニアの方がご覧になれば、幼稚なことばかり長々と記しました。お許し下さい。

佐原陽一郎様まいる

羨望の太股錠

柴 利 好



カット・越原秀美

1

私は八月号「奴隷妻慕情」の中で、羞恥責めの手段としてサイレット、サイリングという言葉を使い、腿環について述べました。処が、折も折、同じ号で佐原陽一郎様による「太股錠」の製作使用に関する写真入りのご報告に接し、我が意を得たりとばかり小膝を叩いたものでした。

佐原氏令夫人と思われる若くて美しい女性の太腿に嚴重に嵌め込まれている「太股錠」のフォトは全く素敵です。

私も、映画「雌猫」の中で、アルヌール嬢が太股錠を掛けられている光景を見ました。が、その時、使われた代物は太い鋼鉄製で、如何にも重く冷たく、皮肉を傷つけかねない印象さえ、受けたものでした。これに反し、貴佐原兄の作品は、管状の鞣し革製ですのできつく締め上げるのに適しています。その赤い色彩と白い柔肌との対比は、さぞかし見事な眺めでしょう。写真がカラーでないのが残念です。

両腿に喰い入っている、二つの環を繋いだ錠前や鉄鎖の有様も充分、拝見できました。お写真の様に、首縄、後ろ手、高手小手縛り

の上に、この「太股錠」の折檻を併用なされば、兄のおっしゃる通り、本当に楽しいプレイになる事でしょう。「けっこう私を満足させてくれる」との、お言葉が理解できます。

胴締めウエスト・バンドの一部がピカッと光って見えるのも、マニヤにとっては堪まりません。この光沢で判断すると、バンドはビニールかエナメル製品のような気がします。が、グイグイ締め上げてある様子が、一見して分かるのも嬉しい限りです。きつと奥様はいくらきつく締め上げても、締め具が際限なく皮肉に喰い込むような、柔軟な肉体の持主なのでしょう。それもフニャフニャしたマシユマロの軟弱さではなく、まるでゴム人形のそれのように弾力に満ちた、若くて活力ある健康美の方であろうと想像しています。

2

私は女性の肉体の中で、形と肌の美しい太腿に、とりわけ魅惑を感じております。そのマニヤ振りが「慕情」での羞恥責めと、太腿縛りについて書かせたと申せましょう。事実太腿の美しい女性は、身体の他の部分までも殆ど例外なく美しいと断言できるようです。従って奥様も必ずや素敵なおプロポーションと

肉付きを持った、お方と推察されるのです。

太腿の緊縛では、その下窄まりの形状と、厚い筋肉の活動の具合によって、縛り縄が、ずれ下がり勝ちのものです。私は、この太腿の縛りについて一計を案じ、「8文字方式」と仮称する緊縛法を投稿したことがありましたが、貴見によれば、「簡単には落ちないことが分かった」と、ありますから、その締めつけは随分、厳しくなさるのでしょうか。

締め具が、単にずり下がらないだけの方法なら、太い生のゴム輪を嵌めるに越したことは、ありませんが、これだと腿肉の弾力に反撥されて、じきに振じれて丸まってしまふことが屢々あります。私の実験によりますと、同じゴムでも、プラモデルの戦車のキャタピラ用のゴムを嵌めると、割合、硬質ですから丸まる気遣いありません。その上、ゴムの表裏にキャタピラらしく拵えた沢山の突起部が、肌に喰い込みますから、絶対ずり下がる心配もないことが分かりましたが、貴兄はお試しになりましたでしょうか。

3

奥様は、この太股錠を嵌められた俣で外出なさったことが、おありでしょうか。街中や

乗り物の中で、ミニスカートの下から、この太股錠が見えかくれしたら、どうでしょう。見えかくれどころか、否でも応でも見えてしまえますねえ。私は、周囲の人達の思惑を気にし乍ら、羞恥に泣き出しそうな奥様とは反対に、得意満面のご主人の様子など想像するだけでも、胸がワクワクして来ます。こういう情景こそ、私の願望する羞恥責めの醍醐味ですから。

既製の太股錠を探し歩き、更には玩具の手錠メーカーを訪ねてプレイ用具としての価値を説かれたりなさった、佐原兄のご執心と勇氣とに、限らない拍手を送ります。ともあれこの太股錠は、「こんなチャチな道具立てでも」とは謙遜に過ぎる、お言葉です。私は、むしろ貴兄の製品の方がナチス・ドイツの物よりも、女囚折檻用のプレイ道具として遥かに、ふさわしい魅力のある作品として賞讃を惜しみません。

それにつけても、写真で拝見する奥様の決意に満ちた、いじらしいばかりの、かんばせと、不自由な立膝姿の見事さは、どうでしょう。この一葉のフォトに表現されたお姿には拘束に身を任せ、諦め切った女囚の哀れさと愛しさが滲み出ています。一体、奥様は、ど

んな罪を犯して、こんなにお仕置されているのですか？ 奥様の罪科が度重なるに連れて拘束具も次第に数を増すことでしょう。若しそうなれば、捕縄による緊縛はもとよりのこと、それに加えて、この太股錠を手始めに、細頸にも、両手首、両足首にも懲戒用の錠枷が嵌められるのではないのでしょうか。更には細腰さえも、その柔肌を太い腰枷で嚴重に絞られ、その俣の姿で刑期が終わるまで許されないのでは？ というように、ついマニアの私としては想像をふくらませてしまいます。

ですが、もし私の妄想を許して頂けるとしたら、これらの戒具の数々は、当然ご主人の奥様への愛の真心を込めた、精魂尽した手造りの労作であるべきです。そうしたら、女囚として身に着ける囚衣も、今のような、お洋服ではなく、特別誂えの物を新調しなければなりませんね。これは奥様が腕を揮るわれる領分ですよ。どんな囚衣がデザインされ、製縫されることでしょうか。全身を隈なく覆う宇宙服スタイルでしょうか。それとも最小極小のビキニスタイルでしょうか。否、両方のスタイルの物が一時に、ご主人から発注されるかも知れませんよ。これらの囚衣は、丈夫な布を基調として、それに、ふんだんに革とゴ

ムを交じえた素晴らしい責め衣、兼用の物として作られるのではないでしょうか。

4

漸く刑期を終えた奥様を待ち受けていたものが「奴隷妻」の運命であったとしたら、奥様、貴女は一体、どうなさいますか？ 素直に新たな緊縛を、お受けになるでしょうか。

「私、奴隷なんかには、なりたくないわ！ 何故って、女囚ならば刑期があつてよ。その刑期さえ勤め終われば、罪は償われて立派に更生できる筈ですもの。それなのに奴隷には期限がないじゃない。一生鎖で繋がれて暮すのだったら、いっそのこと、終身刑を科して頂戴。人格も自由意志も持てない奴隷に成り下がるよりは、女囚として深い罪の償いに泣き暮した方が、どんなにましかしら」

仮に奥様が、こう、お答えになられたとしたら、ご主人は、きっと、こうおっしゃるでしょう。

「奴隷といつても、お前の場合は、ただの奴隷じゃないんだよ。『奴隷妻』という、新しい型の奴隷生活に入る訳なんだ。奴隷妻には全日制と定時制とがあつて、この二つの身分の違いは、時々奴隷になるか、終始いつでも

奴隷でいるかということなんだな。女囚に対しては愛情は禁物だけど、この奴隷妻は、どんな場合でも夫婦愛という裏付けがあるんだよ。女囚も奴隷妻も、形は同じように縄や鎖で縛られているけれど、その心の底に、情愛の繋がりが有るかないかが違うんだ」
こうした、ご主人の説明に対して、奥様は
勿論、納得なさいますまい。

「まあ。それじゃ、今まで、こんな風にして私を惨めな女囚に仕立てて折檻なさっていたのは、どういうことなのよ。私を愛していては下さらなかったのね？」

と逆襲なさるに決まっています。

「馬鹿いうんじゃないよ。そんな筈は、ないじゃないか。これは少し困ったなあ。言い方が悪かった様だ。ねえ、お前。お前だって、そうだろう。ぼくを愛して呉れているからこそ、こうしてぼくのいいなりになって女囚プレイを楽しんでるんじゃないのかい？」
「それは、そうに違いはないわ。そうでもなければ私の立場はありませんもの。ええ分かっています。貴方のおっしゃりたいことは良く分かっていますわよ。でも私、前には、あんなに悲しかった女囚という言葉が、この頃、なんともなく、好きになって来ていますのよ。同じ

様に縛られたり、お仕置きされるのでしたら今まで通りの女囚の儘でも、私構いません。でも貴方、お約束して。女囚になった私でも愛して下さるって。ね、きつとよ！」

「分かった。愛してるさあ。それならそれでも良いんだよ。お前の好きなように、女囚でいさしてあげよう。奴隷妻になりたくなったら、呼び方を変えたって良いんだから」

「まあ、嬉しいこと。でも私は、貴方に身も心も捧げた妻ですわ。罪人の儘でいるよりも一匹の愛の奴隷として、貴方のお好み通りにお仕えする方が、一層、楽しいかも知れませんわねえ。じゃあ、こうしましょうよ。奴隷妻の私が、罪を犯して女囚になりますわ」

「なるほど、考えたな。どっちみち、二人きりの楽しいプレイなんだから、その時々のもう一つに從って、うまくやろうよ。さあ、今夜はこれで寝るとしようか」

「まあ。待つてよ。貴方ったら、こんなに私を縛って、太股鍔まで掛けた儘で寝ろっていの？ 許して。この縄や鍔を外して頂戴」

おおむね、こんな風な甘い言葉のやり取りが交わされはしないでしょうか。筆者の勝手な妄想を、お許し下さい。お心障りの点がありましたら、平にご勘弁願います。

連載・時代S小説

紫 蘭 の 門

— (4) —

風 流 極 道 軒

おんなあり
 こころ乱れざるあいだは
 これを信ずべからざるか

金股流修羅縄

三人の男たち——

それは貴子が（唐人のようだわ）と思った
 とおり陳沈宝、李田客、王晏奴とよばれる唐
 人と日本婦人との混血であり、元禄屋が貰い

うけて世話している男たちであったが、その
 三人のうち、一番背の高い陳沈宝が、
 「日本貴族ノ娘、サスガ美シイ。李、金股流
 畜生縄阿鼻！」

李とよばれたのは、四尺前後の小男であっ
 たが、陳によびかけられると黒い歯を出して
 ニタツと笑い、



カット・岡 たかし

「金股流、唐人ノ繩掛ケネ。ソノウチソ畜生繩、下肢ヲシバル……見ルヨロシネ」

唐服の袖から取り出したのは金色の繩であった。その繩を、必死で振り廻す貴子の腕をかわしながら、左の足首に絡ませ、ひきしぼると、いったん、ぐいぐいと、まるで生木の枝でも裂くようにひっぱって、赤松材の格子につなぐ。

「抵抗スルワルイ。マズコウシテ」

ニタツと、貴子の、もうどうしようもなくなった太股の白さを指さして笑ってから、

「両手、万才スルヨロシ」

と、王と二人がかりで、壁に、いくつもしつらえられてある吊輪に、万才の恰好で、つなぎとめ、雪のように白い二の腕の内側に、黒漆のように輝いている腋毛を、一寸、撫でて、その反応が、脇腹に伝わっていくのをゆっくりと眺め、

「マズ、コノ足ヲココニ乗セル」

と、金色の繩の絡まった左足首を、右股にのせて、嚴重に縛りあげて行く。

それは、日本人ばなれのした、念には念を入れ、幾重にも繩を重ねていくと云う、あくどいまでの緊縛であった。貴子の下半身が、またたくまに、金色の繩で、おおいつくされ

たと云ってもよい。しかし、

「フッフッフ……金股流ノ繩カケ、コウシテ貴メルコトデキルアルヨ。ホレ、ホレ」

李が、伸び縮みする如意棒のような棒を取り出し、くるぶしと、ふくらはぎの間から責め始めた。そこにだけ、見すかされるように空隙をこしらえてあるのだ。

もう、ここに捕えられてから、何人の男たち、責められ、弄ばれたことであろう。

貴子は、じわじわと、せまってくる潮のような屈辱感と痛覚を、全身で喰いとめながら、どんなことがあっても最後まで、前右大臣菊亭家の娘である誇りを護りつづけようと、けなげな誓いを、何度か自分自身にたてるのであった。

そんな、いじらしい女心が、逆に、男心を煽りたてるのだろう。

「コノ女、スコシモ、コタエマセン。王サンモ手伝ウヨロシ」

李は、如意棒を王に手渡すと、醜惡な小軀を貴子の開かれた膝の上にぴよんとおけると丁度、眼の高さにある紅真珠のような乳首を責めたて始める。

唇を喘がせながら、貴子は耐える。
(いかに責められたとて、こんな唐人たちの

梗概——豊太閤五夜のロザリオをめぐって前右大臣菊亭政房の息女貴子姫と侍女久我雅子に対する元禄屋たちの責めが続けられる一方、公儀御用琴師春田和泉の妻豊香と養女千登世も、畏におちる。殊に豊香は、自分に思いを寄せている絵師鳥尾芳年や羅卒の鞭兵衛たちの手で、爛熟した緊縛女体を、賜られつづけ、羞恥の極みに悶えさせる。

前で、どうして、どうして！ 恥かしい姿を見せられましようぞ)

齒を喰いしる貴子の顔を、のぞきこんだ王晏奴は、

「繩掛ケ、衆合ニスルヨロシ。修羅繩衆合ノ方ガ、コノヨウナ女ニハヨイ」

と勝手に、両手の繩をといいき、李をそのままで、貴子の下肢の金色の繩をとく。

「フッフッフ、コノ抵抗、マタ、コタエラレマセン」

自由になるやいなや、手向かってくる貴子の両腕を捕えながら李は、やっと膝からおりと、王の縛りに協力して行く。

金股流修羅繩衆合——日本の菱縄縛りを、更に複雑にした掛けかたで、菱形が、胸部や腹部ではなく、下腹部から、内股をとおり

尻の方にまでかけて形づくられているところに特色があった。従って、王や李、陳たちは被縛者である貴子の下半身に狙いをつけねばならず、そのためには、戸板状の板を斜めにたてかけ、頭を低い方にして、大きくばたつかせる両足を押さえつけながら、掛けて行くのだ。

下半身を空しく宙に突き出された時、先ず貴子の耐えに耐えていた悲鳴が上がった。その両脚を、もうこれ以上、絶対に開くことができぬほど左右に割られたとき、二度目の絶叫が迸った。

あとはもう「Y」字型——勿論、頭部が下の方——に開かれた両脚を、さらに「T」字型にまでひき裂かれて、その一直線の太腿から膝にかけて、念入りに縄が絡まっていったのである。

唐人特有のむんむんする大蒜や、韭の臭気に抵抗するかのよう、貴子の蘭麝の香がときおり漂うのも、なにか女の哀れさを感じさせる。

「女ハ結局、女アル。ドウシテモ男ニハカナワヌ。ジタバタセヌコトアルナ」

縛り終わった王たちは、座敷牢の四隅から四本の鎖をひきのばしてくると、貴子の両手

両足に絡ませ、ぐいぐいと滑車でひきあげて行き、背中の部分に、小さな踏台をひとつあてがう。

「大」の字型に、高さ二尺ほどの空間に浮きあがった貴子の姿態は、惨めと云うほかはなかった。胸、腹、背、太腿、両肘、両膝と裸身のあらゆる部分を縛った縄が、下腹を中心に菱形にかけられている金色の縄に、十本、いや二十本近く結びつけられている。

「衆合トハ、スベテノ縄、一カ所ニ集マルトイウコト。フッフツ、コノ縄一本一本、男ノ象徴ネ」

一本一本、縄目に沿って指先を、白い肌に這わせながら陳が、せせら笑う。

李の責めが始まる。

下腹から太腿、尻へと菱形に縄掛けされている貴子の喰いしばった歯の根から、こらえきれないような呻きが洩れ始める。

一糸もまとわぬ裸身で罵られるよりも、縄がかかっている方が、女の羞恥は少ないと云われる。

が、いまの貴子は、全身に縄をかけられながら、余計に羞恥を覚えざるを得ない縛り方をされているのである。かけられた方がむしろ救われる縄は一筋もかかつては居らず、そ

の不安感……空虚感に貴子は、白蘭の肌を、ただ、くねらせるだけであった。

「ア……アウ……、アア……ウ」

貴子の呻きを楽しみながら、三人の男たちは責めつづけた。

女を責める男たちにとって、時間は異常に早く過ぎる。

初夏の陽は、いつの間にか西に傾き、陳たちが、やっと、貴子を縄から解放して、ひといき入れた時、元禄屋が、領田、肥田、佐渡を案内して座敷牢に入ってきたのである。身も心もくたくたになっていた貴子は、うっすらと切長な眸をあげて元禄屋の七尺近い巨軀を見上げると、あらたに加えられるであろうおぞましい責苦を知ったのか、じりじりと、裸身をこわばらせて板壁に身を退らせていった。

そして、その夜、貴子は、三度、忘我の深淵で、すすり泣かされたのであった。

タルボタイプ

老中領田下野が、肥田、佐渡と共に、長崎は出島、和蘭商館長から献上されたカメラを持って、再び座敷牢を訪れたのは、次の日

の未の上刻であつた。

昨夜、さんざん責め罵られた末、久しぶりに湯浴みをするよう命じられ、つい、熟睡してしまつた貴子は、珍しく許された白綸子の湯文字と肌着をつけて、輝くような崇高さを取りもどしていた。

もう、どこにも、昨夜、男たちに罵られ辱かしめられた無残な面影はなく、犯しがたい気品を漂わせている。

その貴子の前に、四つの床几がおかれ、領田以下が、腰をおろし、陳たちが、貴子の左右に立つ。

「これが、カメラとか云うもので」

「さよう。この陳たちが、扱い方を知っているとは頼もしい。早速、撮らせてみせい」

「その前に、貴子の姿態を考えませぬと」

「まず、一枚は、三つ指について、挨拶しておるところよ」

領田の言葉に、陳が、

「貴子サン。老中様ノ命令キクヨロシ」

と、どすぐろく汚れた荒筵の上の貴子に、土下座をさせる。

もう、貴子は観念していた。何をされるのかは、一間ばかり前方に備えつけられた三脚台の上の長方形の箱だけではわからないが、

なによりも今は、肌着と湯文字を身につけているという安堵感が、従順にさせたのかも知れない。

陳に云われるとおりに、顔をややあげて長方形の箱に向かう。

天窓から、明るい陽光が、さしこんで、貴子を照しだす。ニタツと笑った王が、

「ソノママデ、ウゴカナイコト。マバタキシナイ！」

と、箱から垂れている糸をひいた。

静寂――。

ずいぶん長い時間が経ち、ようやくカチツ

と云う音がして、箱を覗いた王は、

「成功ネ。成功アル！」

と、座敷牢を出て行ったのは、別室で現像するためであつた。

光を利用して、物体の真を撮し出そうと云う試みは、すでに千七百二十七年、ドイツの

ハインリッヒ・シュルツが、炭酸石灰、硝酸銀などを用いて試みている。あと、イギリス

のウェッジウッドやフランスのシャルルなどが研究し、千八百二十四年にはフランスのニ

エプスが、数年おくれて同じくフランス人画家マンデ・ダゲレオが、更に二年おくれてイ

ギリスのタルボットが、所謂、タルボタイプ

の写真機をつくっている。

今、前右大臣菊亭政房を脅迫し、豊太閣五夜のロザリオのうちの丙夜のロザリオを喝取しようと、娘の貴子の責め場を撮影しているこのカメラが、タルボタイプかダゲレオタイプか、それともニエプスタタイプかは、明らかではない。

しかし、王晏如が、鼻うごめかしてもたらししたその写真は、鮮明に、貴子の屈伏の姿を背景の牢格子ともども、現実そのままに撮し取っていたのである。

「バテレンの魔術か。素晴らしい！」

領田下野は、佐渡刑部に、

「刑部。貴子姫の次の責め場、汝が、準備するがよからうぞ」

と声をかけた。勘定吟味役佐渡刑部、松崎金右衛門重勝の創始した一達流捕縄術の免許をうけている。

「ハッ！」

と一言、たち上がるや否や、うむを云わず貴子の肌着をむしり取り、まるで囚衣でも扱うように投げすてると、あらわれた白蘭の花びらのような上半身に、目にもとまらぬ早さで、縄をかける。

捕縄術には本縄と早縄があり、前者は五尋ひろ

後者は二尋半、何れも木綿縄である。早縄は犯人逮捕に用い、本縄は拷問に使う。今、刑部がかけたのは、本縄のひとつ、一達流女胴縄——。乳房の上下を締めあげ、その谷間を連結し、さらに、乳房の下を三重にしめ上げて、女の誇りでもある乳房を、いきいきと豊かに盛り上げ、下腹、へそのあたりに、ぐいっと喰い込ませることによって、豊かな腰を強調させるという、公卿・武家の女にのみ掛ける縄であった。

二の腕の肉に深く喰い込んだ縄目をさぐりながら、佐渡刑部は、

「カメラをこのあたりから、そして、この台の上に……背景は」

など云いながら、お白洲で責められる女囚のように、貴子の周辺に小道具を揃える。

王が、撮影し始めた。

貴子は、もう、諦めきったように、刑部に縄尻をとられて、長方形の箱に、裸身をさらし出していた。

女中頭のお松が酒肴を整えて入ってくる。

元禄屋が、盃を老中領田下野にさし出す。

貴子の写真撮影は、淫らな酒宴のなかで、こうして続けられていった。

その頃——、

麻生六本木にある元禄屋の別宅では、公儀櫛師春田和泉とその高弟新五郎を捕えて、鞭兵衛たちが、快哉を叫んでいた。

養女の千登世が、先ず行方不明となり、続いて、春田家に伝わる丁夜のロザリオを持参せよとの脅迫をうけ、妻の豊香が指定された場所に赴いたきり帰ってこないのを知った主人の和泉は、町奉行所を始め役人に知らせてはならぬとの犯人の指示を守って、駕籠屋という駕籠屋をあたり、当夜の溜池から麻生一帯を探索した挙句、六本木の元禄屋界限が臭いと当りをつけ、千登世の恋人であり高弟でもある新五郎と、周辺をそれとなく徘徊している所を、突然に襲撃され、捕えられてしまったのである。

羅卒の鞭兵衛たちにしてみれば、現在、掌中にある豊香の夫が、この別宅の周辺に現われただけで、身の危険を感じて攻勢に出たのであったが、こんなに簡単に、二人の夫の男を取り押えることができるとは思わなかったらしく、土蔵の中に連れこむと、直ちに本宅の元禄屋に吉報を伝える使いの者を走らせ、歓声をあげたのである。

その歓声は、ただ、丁夜のロザリオともど

もに、それを持っていた春田家の家族を手中にして、秘密を守り抜くことができたという喜びだけではなく、淫らなものを求める楽しみも含まれていたのは当然であった。

「女は、その夫や、恋人の前で責めるに限るさ。第一、責められる女の目の輝きが違う。ただ責められる時と比べて、羞恥心が五倍にも十倍にもなるらしいやフッフッフ……」

鞭兵衛は、豊香に想いを寄せていた挙句、振られてしまった浮世絵師鳥尾芳年と顔見合わせて、ニタツと下卑た笑いをうかべた。

「どうして逢わせてやりますかな。のう、芳年さん。一枚一枚、目の前で剥いでやるか。そのためにゃあ、豊香の阿魔にいったん着物を着せなくちゃありますまい。それとも、素っ裸で亭主の前にひきずり出してやるか」

「それとも、三角木馬に追い上げて、のたうってる所へ、亭主をつれ込むか」

と、青蛇が、盃を口にしながら、

「あっ、しが、抱いて哭かせている処へ、連れこんでやるのも一興ですぜ」

「その役目は、あっしに」

「あっしですよ。ねえ、親分！」

白豚、斑猿、赤狐、黒馬などが、てんでに熱をあげるなかで、

「待ちねえってこと。こっちは、ここ数年の恨みをはらしてえんだ。とっくり考えてよ、一番、恥かしい姿を曝け出させてから、御主人さまと逢わせてやりてえのよ」

鞭兵衛の顔が赤いのは、酒だけのせいではなく、復讐の興奮も押えかねているらしい。

夕陽がその顔をいっそう赤く、その名、地獄の羅卒、赤鬼のように際立たせていた。

夫の見ている前で

鞭兵衛の云うとおり、ひとりの女は、羞恥を感じないし、感じる必要もない。

女は、男がいるがゆえに、羞恥を感じ、その男のなかの男である夫や恋人の前でこそ、最高至極の羞恥を示す。いるという言葉が存在と云う言葉に置き換えてもよい。

女は、男が存在するゆえに羞恥を感じ、また示すものである。そして、女が地上のあらゆる男と情を通じることが不可能であるかぎり、男のなかから、ひとりの男、男の中の真の男を、夫や恋人として選り出す。

つまり、女は、夫や恋人の前で、真の女たり得るというのである。

その他の男たちの前でも、ある程度の羞恥

は、しめ、すだろうが、それは、たいしたことではなく、女が、動物でなくなるのは、つまりまことの羞恥を示すのは夫の前であり、恋人の前であり、その時こそ女は、牝でなく真の女、つまり、人間になるというのである。

「ひとりの女はな、いつも男に飢えており、誰でもよい貪りつくものよ。選択し、選り出して、夫と思ひ定めた男のある女を、その男の前で、責め抜き、牝にしてやる。これ以上の楽しみは、またとあるまいよ」

鞭兵衛の言葉に、白豚が、

「親分の仰言るとおり！ 男ってものがいなりやあ、女は、全然、化粧なんかしねえでしようよ。ハッハッハッ……」

と笑い転げる。

「しかし、親分。柄井川柳の柳多留に、こんなのがありやあしたぜ。惚れたとは、女の破れかぶれなり」って。つまり、女が、惚れたハレタと申すのは、真底、愛していた男に振られた挙句破れかぶれで言うものじゃあ」

「この阿呆！」

鞭兵衛が、怒鳴った。怒鳴るのも道理、彼自身、そして、そばで、黙々と酒をのんでいる鳥尾芳年も、豊香に、てんで、相手にもされなかった男なのである。惚れた、ハレタ、

振られたの圈外にあり、ちよっかいを出したものの、どうにもならなかった。豊香の心はおろか肉体にも、一指も染めることが出来ずただ、やきもきしていたばかりなのだ。

「豊香は、そんな下卑た心境から、春田和泉のもとに嫁いでいったのじゃあねえやい。あの和泉の野郎がいたせいで、こっちは、歯牙にもひっかけられなかっただけよ」

芳年が、やっと、口を開いた。

「すると、鳥尾先生。まさしく理想的な男と女の結合、つまり夫婦ってわけで」

「勿論よ。だから、こうして、夫婦の御対面の場合を考えてるってわけよ」

「ああ、馬鹿らしい。真の夫婦であろうがなかろうが、つまりは雄と雌じゃありませんか。早くその、御対面とやらを拝まして貰いてえもんで」

赤狐が、欠伸をしながら呟くのを、ジロツと眺めた鞭兵衛が、

「違いねえ。じゃあ、芳年さん、ぼつぼつ始めますか。そうだな、青蛇、ついてきな」

渡り廊下を通り、敷石を踏み荒して、土蔵へと歩いていく三人の後姿を見送った白豚たちは、盃をせわしなく交しながら、待つばかりはなかった。

「豊香さん、どうだね。御気分は」

幾種かある土蔵のなかで、取りわけ大きい土蔵の階下。牢格子のなかを覗き込んで、声をかけたのは芳年である。

三日前、娘の千登世を救うために、穴沢流蝶縛にかけられ、白い蝶が、蜘蛛の巣にかかったように身悶えさせられたが、その効めがあったのか、どうやら千登世を、昭吉、和吉の毒牙から守ることができた。その上、男たちは結局、豊香をも犯さなかったのである。鞭兵衛が鼻の油を塗りこめた一尺ほどの棒をはじめ、次々と異様なものでいたぶりはしたが、犯すことだけはしなかった。

（どうやら、禁止されているようだわ……元禄屋に……）

三十五才になっている豊香にしてみれば、男たちの心の動きがわかる。

（なぜなのだろう。なにか、もっと魂胆があるのに違いない。妾たちを、もっともって辱かしめるための陥穽が……）

豊香は、鳥肌立つものを覚えながら、運ばれた食事をすませ、小用に、連れて行って貰った。

（夫が、救いにきてくれるまで！）
ただそのことだけを頼りに、二度目の夜を

すごした。千登世のことは、勿論、誰も教えはくれなかった。

それが、今、目の前に、

「逢いたい人にあわせてあげますぜ」

鞭兵衛と芳年が、青蛇を連れて入ってきたのである。ふたつある引窓から入る陽光だけでは足りないらしく、青蛇が百匁蠟燭を、六つ、七つと燭台に点じていく。

「御内儀さん。逢いたい人に逢わせてやるんだが、どうだね。その姿で、いくかね。その一糸まとわぬ赤裸でよ。それとも、こいつをつけさせてやろうかね。え、どっちにする」

鞭兵衛の手には、三日前に剃ぎとられた鴉色の湯文字と、平織り地に薔薇の花を紗織りで織り出した長襦袢があった。

「た、たのみます。何か、何かを身につけたいの。お願い」

思わず豊香が、とびついてくるのを、

「どっこい。簡単には渡せねえ。なあ、芳年先生よ」

「そうともさ。もっと明るく、青蛇さん」

と云われて、青蛇が、掛燭から、高灯台にまで火をいれて、土蔵のなかに特にしつらえられた、伝馬町を思わせる牢内が、昼のようにあかるくなる。

「よからう。つけて、あげますぜ。さあ、こっちにいらっしゃい」

手招かれた豊香は、よろよるとたち上がり鞭兵衛の手のものを取ろうとした。

「おっと、どっこい。これをやろうってんじやあねえ。儂等の手で、着せてやろうと云ってるのさ」

「な、なんですって！」

「そう驚くたあねえよ。女の湯文字は、剃がせるのも面白えが、素っ裸の女の腰に、つけてやるのも乙なものよ」

鞭兵衛が、湯文字を手にして、すすむ。怨むような眸を、せい一杯開いて、後退する豊香。右方では芳年が、長襦袢を持って身構える。

「早くくるんだ。遠慮するたあねえぜ。早く、この腕のなかへ、とび込んできなよ」

七尺近い巨漢が、毛むくじゃらの腕を伸ばして、二歩、三歩、近よる。

「早くしねえと、お前さんの逢いたがってる人が、昭吉に案内されてやってくるぜ。そのままの姿で、逢おうとでもいうのかい」

その時、土蔵の外で、かすかな物音がして重い銅の扉が開かれる気配がした。

「ああ！……」

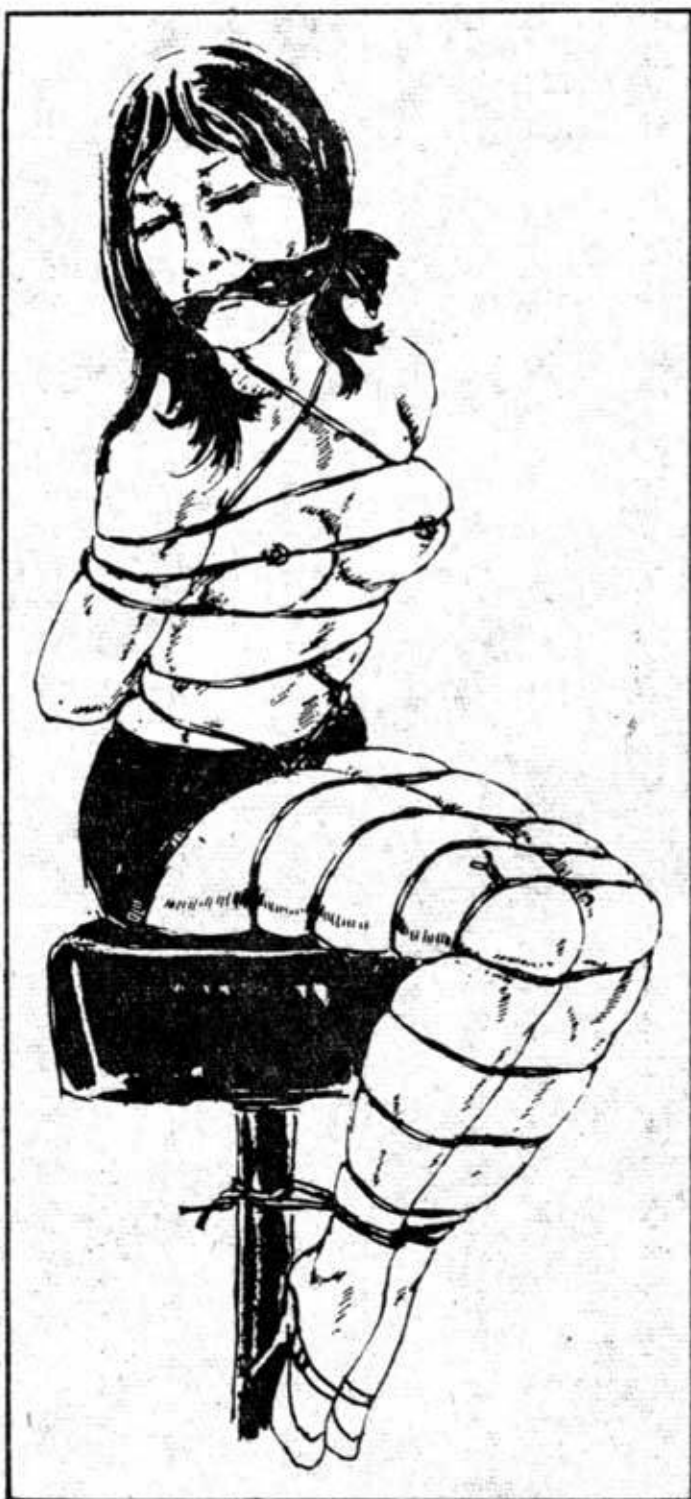
一瞬、大きく、ためらいの表情を泛かべた豊香は、その気配に思わず、

「つけ、つけて頂戴。早く、お願い。千登世にこんなところを見られては！」

叫びながら、鞭兵衛の腕のなかに、爛熟した女体をなげこんだのである。

「そうだ。そうこなくっちゃあ」

鞭兵衛が、がっちり両腕の輪のなかに全裸の豊香を捉え、手渡された鴉色の湯文字を白くむっちり脂肪ののった腰に青蛇が一周り半させて紐を結ぼうとした時――



扉があいて、三、四人の男が入ってきた。

先頭が昭吉。次の人影に、必死の、眼差しをおくった途端、ピクピクと豊香の肉体が、二度、大きく痙攣するのが、しっかりと抱きしめている腕に伝わってきて鞭兵衛は、

「どうしたい。えっ、御内儀さん」

からかうように云い、体臭にまじる留加羅の匂いを鼻一杯吸い込んで肩を揺すったが、鞭兵衛の毛むくじゃらの腕の向こうの人物を虚脱したように眺めながら、豊香は一言も発しない。二呼吸、三呼吸……次の刹那！

「あっ！ あ、ああっ！ あなた！ アッ」

全身の力を振りしぼって絶叫した豊香は、鞭兵衛の腕の輪から必死で脱け出そうとあがき始める。すさまじいまでの女の力であったが、鞭兵衛は微動だもせず、双腕にぐいっと力を加えて、豊香を抱き締める。

「ウッ！ ウウッ！ あ、あ、あなた！」

背骨の折れそうな痛み呻き声をあげながら、猶も豊香は、自由な手や足をばたつかせて、懸命の抵抗をやめなかった。

夫が、そこにいたのである。

昭吉の後から、嚴重に縛られ、猿ぐつわをはめられた夫の和泉が、眼だけをはり裂けんばかりに開いて、立っていたのであった。

「春田さん。まあ、ごゆるりと、な」

昭吉は、暴れはじめた春田を蹴倒し、縄尻を牢格子の一端にかけてひきずると、ぐいっと引きしぼり、吊るし責めの恰好にしてニヤニヤと笑い、両手の埃をポンポンと払う。

「御内儀さん。さあ、どうする！ 御主人さまとの御対面だ。湯文字をどうする」

鞭兵衛は、自分の巨体で、豊香の凝脂ののった裸身をかくしながら、腕の力を緩めたりひきしめたりして豊香の呼吸に合わせながらその驚愕の静まるのを待った。

「夫、夫の和泉だとは！ 非道！ 畜生！

人非人！ 妾は、千登世だとばかり思っていたのに！ それにしても、どうしてここに夫が……失敗したのだわ。妾を救いに、妾たちを救い出しにきて……ど、どうすればよいのよ。妾！ 夫の前で、こんな、こんな裸身を晒すなんて！ あ、ああ！ ほんとにどうすればよいのよう！……」

懊悩の極みに陥った豊香は悶えつづけ、何かが何だか、もう、わからず、ただ、我武者羅に、手足をばたつかせるだけであった。

「どうしなさるね、御内儀さんよ。儂が、手を離せば、あんたは、旦那の前で、赤裸ですぜ。まさか、赤裸で対面なさるわけには」

鞭兵衛は、ねちねちと何度も同じことを繰返しながら、豊香の判断力の回復を待っているのだ。勿論、狂い廻る豊香の顔を、じいっと眺めながら、云うに云われない快楽を味わいながら――。

どのくらいの時間がたったであろう。暴れ廻ったあげく、どうにもならないと思った豊香は、やっと、

（このままじゃあ！ このままの姿じゃあ、とつても！）

思いきって、顔をあげると、

「……」

唇が、わなないたただけで声にはならない。

「ええ。何と云った、御内儀さん！ 湯文字をつけて下さいって、そう云ったのかい」

鞭兵衛の酒くさい息を、もろに額にうけながら、やっと、真赤な顔で頷く。

「じゃあ、お願いしてみなよ。親分に、はっきりとな」

青蛇が、よこで云う。

「広く逞しい鞭兵衛の巨体を衝立のように感じながら、豊香は、やっと、

「早く、ねえ！ 早く、つけさせて！」

ニタツと笑ったのは、鞭兵衛と芳年。

「わかりやしたぜ。御内儀さん。御内儀さん

は、旦那様の前にでるときには、せめて湯文字くらいつけていたい。だから、つけて頂戴と仰言るんですね」

わざと、和泉の耳に聞こえるように大声を張りあげた青蛇は、震える豊香の腰に鶺鴒色の布を巻きつけて、紐を結ぶ。

「ものはついだが、どうするね。芳年先生に長襦袢をきかせて貰っちゃあ。それとも、その大きな乳房をぶらぶらさせて、御対面と行くのかよう」

「お、お願い。その、長襦袢も……」

やっと、人心地ついたように豊香が呟くと

芳年が、そおと、その白い肩に、平織り地をかぶせると細紐をまきつけて、ゆっくりと藤結びにとめる。

「さあ！ 対面しなよ。たっぷりとな！」

鞭兵衛が、毛むくじゃらの腕の輪を解く。

「……」

瞬間――、

ふらふらと、目まいでもおこしたようによろめいたが、

「あ、あなたあ！」

物狂おしいほどの叫びをあげた豊香は、倒れかかるように、吊り責めにされている夫の膝に縋りついていった。

激しく和泉の身体が揺れ、大声で、わめいているのであろう額の血管が、はち切れそうに蠢めいたが、猿ぐつわでは声にならぬ。

「さあ、御内儀。いやさ、豊香！ たっぴりと、楽しんでやるぜ、旦那の前でよ」

鞭兵衛は、昭吉に命じて、酒肴を揃えさせると、

「こんどは、さっきと違って、少しばかり手荒くさせて貰うぜ」

と、夫婦を中心に、半円を描いて坐った子分たちのなかの黒馬に何事か命じ、酒を、ぐ

いっと、あおる。

黒馬が、豊香を、和泉の足もとからひき離す。赤狐が、^{とす}ヒ首の鞘を払う。

ギラリと光るそのヒ首を、和泉の咽喉元に突きつけた赤狐は、

「御内儀さん。よく見なせえよ。御主人の生命は、ただいまかぎり」

その動作にも、言葉にも真剣な凄さがありうつ伏してすすりないでいた豊香の顔が、思わず赤狐の方に向けられた。

「御内儀さん。嘘じゃあねえよ。豊太閤五夜のロザリオのうち丁夜のロザリオを、そっくりと頂いた以上は、お前さん方にもう用はねえ。早速、処分してしまえとの旦那の言葉」

鞭兵衛が、盃をあげて云う。

「ただし、豊香とか云う女の心次第と」

「こころ、心次第とは……」

豊香の視線をうけた鞭兵衛は、

「魚心あれば水心。あんたのその躰ひとつが取得。^{とれえ}農等の云いつけをききさえすりゃあ、

栄耀栄華に暮せようと云うものさ。御主人の生命もとるとは云わねえ」

「つまりだな。農等の云いつけを守る事よ。

ただ、それだけのことで、主人も、娘さんの千登世も、救けてやろうと云うのさ」

「早く答えねえと、グサツと行くぜ」

赤狐が再び身構えると、その切尖を咽喉にあてた。うっすらと血がにじむ。

「待って！ 待ってよう！」

夫のそばにかけようとする豊香の目の前に、ドスツと、長脇差が突き立てられる。

「どっちだ、豊香！ 三つ数える間だけ、待ってやるぜ」

青蛇の、蒼白い顔に血がのぼる。

「一つ……二つ……」

「待って！ な、なります。妾が、何でもお云いつけに従います！」

「フッフッフ……」

鞭兵衛の唇にも、芳年、昭吉たちの口にも含み笑いが、うかんだ。

「そうかい。じゃあ、手始めに、ここに来て挨拶をしなよ。妾は、今から、皆様方の召使

いになりますってよ。おい、青蛇。教えてやんな、口上をよ」

「合点でさあ！」

長脇差を鞘におさめた青蛇が、豊香の桜貝のような耳朶に、うす汚れた唇をくっつけて何事かを囁きはじめた。

「たちまち、あおざめた豊香の顔に、ぱあつと朱がさす。」

「と、とても、そのようなことは！」

「云えなきゃあいんだぜ。赤狐、この女、亭主の生命なんかどうなってもいいってさ。早くやっちゃまいな」

たち上がった赤狐の顔を、悲しげに見つめながら豊香は、遂に、云ったのである。屈辱の最初の言葉を……。

「み、みなさまがた。妾は、公儀御用櫛師春田和泉の妻で豊香と申します。当年とって三十五才……どうか、妾を、思う存分に賜って下さいませよう」

「よう！ やっと女らしいなったぞ」

喝采のなかで、とぎれとぎれに豊香の、男心をとろかすような声が、牢の内に伝わる。

「この豊香は、身も心も、鞭兵衛様や鳥尾芳年先生に捧げます。先ず、妾をどうか、皆様方の手で、あ、あ、赤裸に、む、むきあげていただき……アアッ！ いや！ いやよ、こんなこと……みなさまがたが、存分に、この躰を、御賞味なさってください。きつときつと、御期待に沿うことが、できると思いますが……お願いします。どなたでも、早く妾をは、裸にむきあげて、縛って、くださいませ……」

羞恥に、顔を真赤に染めながら、

「鞭兵衛さまのお誘いをうけながら、おことわりした妾が、ほんとに悪うございました。」

どうか妾をその罪ほろぼしに、もてあそんで下さいませ。どんなことでもつとめさせて頂きます……鳥尾先生、どうか妾を、な、賜り抜いて、ください……ます、よう……」

灼熱した銅の塊を咽喉からながし込まれたように、喘ぎ喘ぎ、唇をからからに干からびさせた豊香は、青蛇の囁く文句通り、

「早く、この長襦袢と、お湯文字をとって、素、素裸にして……ください……ませ」

夫の生命を救う——ただその一念が、豊香に、身を切られるような屈辱の言葉を云わせたのである。夫が救いにきてくれることをただ一筋の光明に、耐え難い羞かしめに耐えて生きてきたこの三日間であったが、それが、このような形になろうとは！

豊香は、青蛇のなすまま、よろよろとたち上がると、二歩、三歩、前にでた。

もう、湯文字の裾が、白豚たちの膝に触れるほどの近さである。

「せめて、せめて、夫を、この場から、どこかへ移してえ……」

必死で頼みこんだものの、返ってきたのは淫らな笑いと、ヒ首に手をやった赤狐の鋭い

目付きだけであった。

(万事、休す……もう、妾の牀だけ……)

膝が震え、全身に悪感のはしるのを必死で乳房を抱きしめて耐えている豊香の腰紐が、すらりとぬきとられて、前が、はだける。

「じゃあ、御言葉に甘えて豊香さん」

黒馬がながい顎を振りたてるように、長襦袢の襟に手をかける。

もう、存分に眺めつくされた肉体ではあったが、こうして、あらたまって、裸にされるとなつては、豊香の胸もとにじいんと、こみあげてくる衝撃がある。

襟がずりさげられ、白い肩があらわれ、乳房をおおっている両手の所どとまった長襦袢の裾を、ひよいと長い手を伸ばして斑猿がひきおろす。

「アッアッ！」

喘ぎとともに豊香が思わず蹲ろうとしたが青蛇が両腋の下に手を入れて、許さない。

「手を回して、両手を、そのまま！」

命じられたとおり、一瞬ためらって背後に回ったしなやかな両手を、青蛇が、さあっとひとつにして縛ると、縄尻を、天井の滑車からおりた釣輪にひっかけ、ひきしぼる。

咲き誇る大輪の白薔薇を思わせる麗わしい

豊香の上半身が、裸蠟燭の光のなかに妖しく映えた。

体臭にまじる留め伽羅の匂いが、男たちの鼻を心地よさそうにうごめかせる。

白くふくよかな二の腕の内側が、あらわに曝け出され、肌の白さを際立たせるような腋毛に、妙に、なまめかしい女体を感じたのであろう。じいっと見つめていた芳年が、たち上がると、

「豊香さん。いい牀してるねえ。三十五だというが、なんのなんの、まだ三十にもなっていないえようだぜ」

職業意識が働くのであろう、五、六本の絵筆をとると、腋毛をなで、脇腹を撫で降ろしおおきな、はちきれそうな乳房のさきの、みずみずしい桜桃のような乳首のさきを、ちょい、ちょいと、筆の穂先で、つついては、豊香の顔をのぞき込む。

「さあ、いいなさい！ 豊香さん。この鳥尾先生に、最後の湯文字をとって欲しいと」

ハッとなって、眸をひらいた豊香は、芳年の視線をもろにうけて、何とも云えない羞恥の極みに達した表情をうかべたが、

「云わねえと！ どうなるか！」

赤狐に、すぐまれて、思いなおしたように

ゴクンと唾をのみこんでから、

「鳥尾先生……妾の、お、お湯文字を、と、
とって下さい」

といい、さらに青蛇に耳打ちされて、

「妾のお湯文字を、剃ぎとって、妾を赤裸になすって下さいまし、鳥尾先生……」

といい直したが、

「アッ、アアア……アア……」

と、激しく首を振って、最後まで、本心からのものではないと抵抗の姿勢を示すのであった。

そんな状態には関係なしで、芳年の女のようにしなやかな指が紐にかかり鶉色の布が、ゆたかな腰で、ほんのまたたく間、ためらっているかに見えたが、さあっと、音もなく床に落ち、豊香は、（アッ、アアッ！）と、二回大きく喘ぐと両膝を必死ですりあわせた。

（夫の見ている前で、素裸にされて野卑な男たちに罵られる！）

全身を、蝋燭の焰で焙^{あぶ}られるような、羞恥とも屈辱とも自己嫌悪ともつかない激情がこみあげる。

ギシギシと縄がきしんだのは、彼女の背後で、猿ぐつわをされ、何ひとつできない憐れな恰好で吊り責めにされている夫の和泉が、

身悶えつづけている音であった。

和泉の血走った目には、十数年、いつくしんだ愛妻の背面が、見える。白い背。細くくびれた腰から、ふっくらと豊かな曲線を描く臀部。むっちりとした脂肪がのって、汚点ひとつなく、すべすべとしている双つの丘。

何を叫んでいるのか、ともかくも、和泉は狂気したように、猿ぐつわをもぐもぐとさせ声にならない絶叫をあげつづけていた。

「木馬責めにかけい！」

鞭兵衛の声が、羞恥で我を忘れていた豊香の耳にとびこんでくる。

「合点ですぞ、親分」

白豚が、牢外からひきずり込んできたのは尋常の木馬ではなかった。高さは二尺位、縦三尺、横三尺の真新しい白木の一枚板が四本の脚の上にのつていた。

その板と云うのが、くり抜かれて、凹の形をしており、双手を頭上に一本の棒のように吊り上げられている豊香を三、四人がかりでその上にのせ、無理矢理、脚を「八」の字に開かせると、脚の鉄輪と足首を絡めてしまった。

豊香の、屈辱きわまる肢体が、真昼のような明るさのなかに無惨にさらけ出されただけ

ではなかった。前部に向かって、くりぬかれた凹型の板であるから、尻のあたりは、空間に浮いており、真正面の鞭兵衛が手をのばすとすうっと、そのまま、いたぶることができるといふ、しかけであった。

「さあ、飲まずえ、どんどんとな」

青蛇が井の中に、恐らく塩水であろう、なみなみと水瓶から液体をそそぎ入れると、豊香の鼻を白豚につまませておいて流し込む。赤狐が、大盃に酒を注ぎ、そのあとつづけておくり込んだからたまらない。

「ゴボッ！ ゴボッ！」

激しくせきこみながらも、どうやら飲みはしたものの、むっちりした乳房から、腹へかけて、水と酒とがしたたりおち、その滴が、草の葉末に宿る露のように閃めいている。

「二つ、三つ、四つ、……十、十二……」

御丁寧にもその水滴を、台に頬杖ついて数えるのは、黒馬であった。

「ええ恰好じゃ、まったく。女にとって、こりゃまったく不様な姿よ、なあ、豊香さん、何とかいいなよ」

両手を頭上に高く、両脚は、厳しく木馬の脚に固定されて、身動きひとつできない豊香は、男たちのなすがままに、揺れていた。

縄一筋かかっていない上半身に、五人、六人と男たちが、白砂糖に群がる大蟻のように喰いつき、野次り、からかい、吸いつき、齒型をあかく彫りつける。

「よかろう。御主人も男、愛する女房の素っ裸は見えてえだろう。向きをかえてやんな」

鞭兵衛の声で、わいわい云いながら男たちが、木馬を、和泉の目の下に据えた。

もう、手をのばせばとどく所に、鬚は勿論鬢もたばもくずれて、洗い髪のようになった黒髪があり、その真下に、乳房と、大きく開かれた太腿が見える。

「どうでえ、春田さん。奥さまが、こんなにされて、男たちに鬪られている所をみるというのも、乙なもんじゃろう」

鞭兵衛が、和泉の紅潮した頬を、荒縄で、ぶちのめして云う。その、け・ば・が、ひらひらと、豊香のふくよかな太腿に舞いおちる。

そうして、小半刻もたったろうか……塩水と酒を咽喉もとまで流し込まれた効果が現われ始め、豊香の下腹が、心なしか膨らんできたのであった。いち早く見つけたのは、熱心に水玉を数えていた白豚であった。

「親分。どうやら膨らんできたようで」「フッフッフ……」

鞭兵衛が、むんずとへ、そのあたりを驚づかみにすると、

「フン、豊香。お前さん、どっかへ行きたくねえかい」

途端、豊香の顔が白蛾のように蒼ざめた。

いままで、あちこちを撫で廻され、我を忘れて呻き喘いでいた身であったが、そう云われて、

「な、なんですって！」

「いやさ、どこかへ行きたくねえかと訊いているのさ」

「人非人！ 外道！……」

裂帛のような言葉とともに、豊香の唇から唾が、鞭兵衛の顔にとんだ。

「な、なにしやがるんでえ！」

「な、なにをするもしないも、女の妾を、こんな、このように身動きひとつできないように縛りあげておいて、その上、な、なにをさせよう！」

憎悪をこめた眼差しをうけた鞭兵衛は、

「フッフッフ、お前さん、なにをさせられると思っていなさる！」

「まさか、女が小用をする処を俺たちが見るとも……」

青蛇が、よこから口をはさむと、

「ヘッヘッヘッ、そうだろう。あんたは、そう思って、先刻、人非人、外道などと、女にしちゃあ、たいそうな口をきいた。ヘッヘッへ、俺たちあ、そんなことは考えてもいなかった。しかし、ねえ……」

勿論、豊香をねちねちと骨の髄まで、いたぶるための芝居であった。最初から、そのつもりでいたのである。それを、豊香が、さきに知ってしまったものだから、逆手にとって鬪っている。

「豊香さん。あんたも人妻でありながら、大層もねえ地獄の底まで考えてらっしゃるよう。そうすると、つい、こっちもその気になりやしてねえ」

青蛇は、自分で、牢の外から、角皿やら大皿やらを持ち運んでくると、

「どっちにする、それとも皿などなしで一思いに、しゃあーと、やらかしても、かまわねえんだぜ」

「フッフッフ、どうするね、豊香姐さん」

などと、白豚にまで云われて、豊香の顔がぽおっと朱くなつたが、内股が、ぴくっとひきしまる。

「ヘッヘッへ。遠慮しなくたって、いいんだ。後始末の方も、これ、この通り」

斑猿が懷から汚れた手拭いを出すのを、いままでも黙っていた昭吉が、例の女言葉で、「豊香姐さま。いよいよね。あたいもみたいと思っていたの。是非、お願いするわ」と女のような所作をつくり、

「ほれ、ほれ、姐さん。もう、こんなに、はりきっちゃって！無理に我慢するとお身に悪いわよ」

和吉までが昭吉に呼応して、形のよいへそのあたりに、華奢な指を這わせ始める。

「フッフッフ、豊香さん。女として、亭主の前で、赤裸にされた上に、小用までさせられる。フッフッフ、まったくこたえられねえよ、これは！」

鞭兵衛と芳年が、自分を振った女に対する復讐の第一歩がこれだったのだ。

（亭主の前で、とことんまで、責め抜き、罵り抜いてやる！）

と云う二人の計画は、着々と進みつつあった。今や、豊香は、夫の真正面で、夫にも見せたことのない場面を、演じさせられようとしていた。

下腹部の苦痛は、どうやら限度に達したらしく、日頃のたしなみも、つつしみも忘れたように、豊香は、内股を痙攣させ、奥歯を力

チカチと噛み合わせて、耐えた。

その蒼白な額から、油汗が、にじみ、すうーと、一滴の玉となって、鼻の右側を唇へと走って行く。

「ア、ア、アア——ン！」

尻あがりの鼻声——。縄一筋かかっている、おおきな乳房が、ぶるんと揺れる。

それでも、まだ、豊香は、頑張り続ける。

夫の前で！こんな、こんな処をみられるくらいなら、一思いに舌を噛んだ方がいい！

途端、和泉が、再び、何事かを絶叫した。

その絶叫を、猿ぐつわの下の叫びを耳にしなが、豊香は、桃色の靄に包まれていく自分を感じ、一瞬、全身の筋肉を、必死の思いで硬直させたが——及ばなかった。

豊香は、深く濃い、未だかつて経験したことの無い桃色の雲のなかで、我を忘れた。それがどれほどの時間であったかも覚えては居らず、男たちの歓声も耳には入らなかった。

「いよお、素晴しかったぜ、御内儀さん」

青蛇がさし上げた蒔絵の大盃には、七分あまり液体が、ところどころ、泡をのこして充たされ、青蛇の手の動きにつれて、ちゃぶ、ちゃぶと、ものがなしく鳴るのであった。

全身の骨という骨が、一度に無くなってし

まったような錯乱のなかで、下をみると、昭吉と和吉が、甲斐々々しく、這いつくばるよううにして拭いている。何か、この世のことではないような想いだった。

豊香は、ふと連陰とした眉を挙げた。そこには夫がいた。そして、眼を閉じ、ふらりふらりと緊縛された身体をただ揺っているに過ぎないその夫が、ひどく、惨めなものに見えるたことであつた。

（なぜ、なぜ、妾をたすけてはくださらなかったの、あなた！妾が、こんなに辱かしめを受けたと云うのに……）

哀願とも不満ともわからぬ心境のなかで、もう、何をされてもいいという観念しきったその姿態を、絵絹に走らせていた芳年が、「いまからだよ、豊香。これからが、ほんとうの責め場。ひと通り、ふた通りの拷問にかかってもらうよ」

と、追打ちをかけるように云うのに、何度も軽くうなずきながら、

「ええ、もう、どうにでもなさって。こんなおばさまでよかったら、お気のすむようになさって頂戴な」

と、艶っぽい眸をむけるのであった。

——（つづく）——



カット・室井亜砂路

今年もまた、庭に白粉花の可愛い花筒が一面に咲き乱れる頃になりました。

この花は花期が長いらしく、一方では花が咲いていながら、先に咲いた花はすでに実を結んで、ギザギザのついた小さなボールのような実をつけ始めているのです。

幼女の頃、この白粉花の黒く熟した実を割って、中から白い粉を出して、掌でほぐして白粉のようにして遊んだものです。

お庭にゴザを敷いて、近所のお友達とママゴト遊びをしたのも、ついこの間のことだと思っていましたのに、年月の経つのは早いもので、一昔という十年の歳月が過ぎてしまっているのです。

丁度、昨年の今頃、やはり白粉花の咲き乱

—＜告白＞—

白粉花の誘惑

近藤 恵美子

れる頃、私は恥かしくも秘めやかなくしごとを覚えてしまいました。

このことは、自分の胸一つにしまっておいて、誰にも、どんな親しいお友達にも喋るまいと思っていましたのに、ふとしたことから貴誌を見てしまい、とうとう、こんな告白を書いてしまうこととなりました。

誰にも言うまいと固く自分の心に誓っておきながら、また反面、多くの方々に、出来るだけ多くの方々に、こんな自分の秘めごとを知っていただきたいという気持も強く動いているのは、皮肉なことでした。

自分をあからさまに、さらけ出してしまいたいという強い気持がなかったら、決して、こんな恥かしい事は書かなかったでしょう。

幼い頃から、小、中学校へ通う頃までは、私は平凡な女の子でした。

身体の大きさも組で中くらいでしたし、成績もいつも中くらいでした。特に先生に叱られるようなこともしなかったけれど、また賞められるようなことも殊更しなかったようです。極めて平凡で、目立たない平均的な女の子だったのです。

そして、高校を卒業するなり、先生や両親の言われる通り、街の中心街より少し郊外にある農協に勤めました。

銀行に就職したお友達なんか、時々残業があると、こぼしていました。私の所は、そんなことは一度もなく、判で押したようにきまった時間に出勤し、定時で帰ってくるので

した。只、農協の事務所が車の往来の激しい国道に面しているので、通勤の行き帰りや、使いに出た時、交通事故に気をつけるようにというのが、両親の心配でした。

お仕事は特にむづかしいということもないかわり、凄く楽しいこともない平凡な記帳の連続で、両親の心配するような外出も余りありません。上役の方や先輩も皆よい方ばかりで仕事の面で苦勞するということもありませんが、熱烈な恋でもしようかというハンサムな青年も存在しませんでした。

両親のすすめる青年と見合結婚するまでの腰かけの職場としては、まあ最も適した勤務先だと思っています。

外出といっても、お友達と時々ボーリングへ行くくらいで、趣味と問われれば、読書と当りさわりなく答えるのが現在の私の状態です。読書の方は、なんでもかんでも濫読する方で、お小遣いの殆どは、本や雑誌を買うのに費しているといってもよいほどです。

雑誌なんか、ほんとに色々多方面にわたって、なんだかんだと買い求めますので、その中に貴誌が混じっていても、両親なんかは不思議に思わないくらいの量なのです。

お小遣いの使い途として、もう一つあるのは化粧品です。これは、金額的には大したことはないのですが、私は年頃になって、お化粧することの楽しさを知ってからは、お化粧

することに時間をかけるようになりました。

女性には、殊に自己愛的な傾向が強いということですが、私はまだまだ若いせいか、異性に対しては強い関心は持ちません。

異性に好かれたいとか、異性と一緒に遊びに行きたいとか、一向に考えません。

それが、思春期になった頃から芽生えておりました自分の身体への関心が、この頃になって、一層強くなってきたようなのです。

自分の身体を美しいと思い、それを一層美しくするために、手入れをしたり化粧したりすることに楽しさを感じはじめました。それは決して、他人や異性に見せるためにというのではなくて、あくまでも、自分で美しく見するために化粧するのです。

トイレに入ったとき、しゃがんだ自分の素足を見て美しいと思ったのが最初です。窓からの斜め光線の配光の加減もあったのでしようが、私は真珠貝のように光る爪先を見て、真実そう思ったのです。

それからはお風呂へ入ったとき、洗面器にお湯をいっぱい入れ、その中に足や手を浸してみるのです。お湯の中で光の屈折があるのか、手足が不思議に美しく見えるのです。

タオルやスポンジに石鹸をたっぷりつけてそれから丹念に手足をはじめ身体を洗います。外国に永らくいた父の好みもあって、家のお風呂は西洋式のバスになっています。

もともと母が純洋式を嫌いますので、洗い場もついた和洋折衷式ですが、私は子供のときから、ベッドで寝かされ、トイレも洋式、お風呂もバスに慣れてきました。母はトイレも和式がいいというので、私の家ではお便所も両方あるのです。

日常でも和服を着ていたいという純日本風な母と、生活様式はすべて洋式でなくてはという父、その奇妙なとり合わせの両親ですが夫婦仲は至って円満なのです。

そんな両親に育った私は、トイレでも浴室でも、和洋いずれでもよいのです。だから、洗い場で身体を洗う日本式の入り方をしたりバスの中で石鹸の泡を立てて、シャワーで石鹸を落とす洋式の入り方もするのです。

石鹸の泡に埋れた自分の身体は、真白いタイルに映えて美しいと思います。そして、念入りに磨き上げながら、自分の身体を眺めては自己陶醉に陥ります。

脱衣室にある姿見は、自分の裸身を写して客観的に自分というものを眺める絶好の機会です。夏は扇風機を廻して身体を冷やしながら、冬はヒーターのスイッチを入れて、乾燥した暖気で湿った身体を乾かしながら、鏡にうつった自分の身体を眺めるのです。

自分の部屋へ戻ると、ゆっくりと長い時間をかけて、身体の手入れをします。マニキュアセットで爪の手入れをしたりしはじめます

が、私の最も気に入っているのは、毛抜きで脱毛することです。

一本一本、毛抜きで毛を抜くのは手間はかかりますが、チクツとする痛さが私には、たまらないのです。脱毛された玉の肌の美しさはまた格別です。

爪切りやヤスリで、時には深爪になるくらい深く爪を切ってしまうこともあります。三日月型の自然の形に切り揃えて、そのあとはムダ毛を一本一本と抜いてゆくのです。

自分の身体を少々痛めつけるくらい手入れをする。そのような極く普通の、ありきたりの行為でしたのが、丁度昨年の今頃、そうです、白粉花の咲く頃でした。ふとしたことから、私は一つの秘めごとを知ってしまったのです。それは、女神のような甘い囁きで私を魅了し、そして悪魔のような執拗さで、私の心を占領してしまったのです。

その日、私は例のようにバスの中で、全身泡まみれになりながら、全身を洗っていました。ムダ毛一本ない、すべすべした白い肌は宝石のような泡に包まれて、輝くような美しさに見えました。それは多分に、一〇〇ワットの昼光色ランプが、タイルに複雑に反射した関係もあったかもしれない。

私はうっとり自分の裸身の美しさに酔いながら、掌を身体中に這わせていました。泡はますます沢山になり、バスの外側にまで、

こぼれそうになります。そのとき、ふと、本当に偶然、私の人差し指が、するりとアヌスに入ったのです。

ぞくっと、身ぶるいするような触感。私は思わず、あっと声を立てていました。

戦慄——と呼ぶにふさわしい凄しいショックでした。なにしろ石鹸の泡の中のことです。私は、両足を硬直させていました。

生れて始めて、私はそんな快感を知ってしまいました。今までとは違った入浴の楽しみを知ったのは勿論のことです。

今までの顔や手足の手入れやお化粧の外にその部分の手入れも念入りにしました。秘かに手鏡にうつしてみても覚ええました。

脱毛する部分がまた一つ増えたのです。

私は自分が、アヌスに対して人一倍敏感なのを知ったのは、それから暫くしてからでした。私は別に便秘をしておりませんでした。なんということはなしに、自分で浣腸を施すことを覚えてしまいました。

最初は勿論いちじく浣腸でした。特に浣腸しなくても毎朝きまって便意のある私は、いちじく浣腸を施しても、そう急激な変化もありません。やがて物足りなくなり、二十℃の硝子製の浣腸器を薬局で買ってきて、石鹼水やグリセリン溶液を用いて浣腸するようになりました。浣腸の珍らしさもなくなってきました。単にその部分をきれいに保っておくと

いう目的のために、何回も何回も浣腸するようになり、器具も五十℃の浣腸器やエネマシリンジを求めました。

私の部屋は三階の隅にあり、トイレが廊下へ出て直ぐ隣りにあるので、鏡や浣腸器、それにコンロで暖めた微温湯なんかを運ぶのに大変都合でした。

と言いますのは、そのうち、私は微温湯の大量注腸ということを覚ええました。勿論、その前に必ずグリセリンによる浣腸をするのでしたが、トイレに石鹼、ガーゼ、浣腸器、オロナイン、メンソレータム、微温湯、鏡などを運び込まねばならず、どうしても、そう度々このプレイを行なうことが出来ないのが残念でした。

トイレ以外に浴室で浣腸、注腸プレイを行なうのは大変都合でしたが、如何に女の風呂が長いといっても、そう長時間入浴しているわけにもゆかず、これも困っています。先日もし入浴していて身体を洗う時間も惜しいくらいにしてプレイに耽ってしまいましたところ自室へ帰って、時計を見て、余りに時間が経っているのに、びっくりしたことがあります。

夏なんか、水道栓から直接の注腸したいと思いましたが、これは怖くて出来ませんでした。なので、ガラス製浣腸器の先にゴム管をつけたので、冷水を注腸したことがあります。

読者ギャラリー 『大群襲来』 府和糸男



ぞくつとする冷たい刺戟は忘れがたいもの
があつて、一遍に好きになりました。洗面器
に冷水を入れておいて、エネマシリンジで大
量に注腸したときは、いくらでも入れてみた

いという欲望を自制できないほどでした。
注腸のあとの排泄は、これまた大変で、時
間がかかりますし、快感ありませんので、
いつもこの時には、二度とこういうことをし

まいと反省するのですが、完全に排泄してし
まったあと、オロナインやメンソレータム、
或は化粧水で手入れしたあと、その部分を鏡
で映して見たりしますと、そんな反省の気持
も徐々に薄らいでゆきます。

括約筋できっちり締められておりまして
もプレイが度重なってまいりますと、やはり
次第に始めの頃のような締めりがなくなつた
ように感じられますのと、自分で無意識のう
ちに緊張を解いて開放する習慣がついてきま
したのとの両方で、口紅のケースくらいしか
入らなかつたものが、この頃ではビール瓶な
んか肩近くまで入るようになりました。

私の今やってみたいプレイは、水道栓から
直接、受ける激しい水勢を、お腹いっぱい
感じてみたいということです。

白粉花の咲き乱れる今日この頃、プレイの
チャンスとしては、好適の気候ですが、私は
強い欲求を持ちながら、まだ一度も果たさな
いでおります。微温湯とかエネマシリンジに
よる断続的な注腸には、もう飽き足りなくな
っている私です。

もしこんな私に、強制的に急速注腸をして
下さる方がおられましたら、是非お願いした
いと思います。時間をかけて、いろいろな浣
腸注腸プレイが出来たら、と、そんな夢を描
きつつ、今は、一人プレイを楽しんでおりま
す。

夕霧の局

饗宴から退出してきた夕霧の局は、ほろ酔いの快さも加わって、大変な上気嫌だった。それもその筈。久しぶりで会った有明から、明晩は伽に出仕するように命じられたからである。伽といっても上臈の場合は、一人添えということとは通常は、あり得ない。大概は、大后貴和とか、エミー司令などの貴妃が左臈（さきよう）、つまり有明の左側に伏して主添（しゅてん）となるから、夜伽番の上臈は右臈の副添（ふくてん）でしかない。マスタ

ーは肉体系具のベッドに寝て、ブランケットなどは掛けられないから、副添の上臈は掛蒲団の代用にしか過ぎないともいえよう。偶々、何パーセントかの確率でマスターのお手がつく可能性はあるだけが取柄でもあろうか。可能性といえば、お枕役の中臈にも全然チャンスがないとは言いきれない。夜伽番の上臈は枕持参で、ご寝所へ伺候するしきたりである。枕といっても、いうまでもなく、自分の局に属する上臈のなかから選んで差し出すのである。これを枕のお中臈という。枕は肉体系具の上の仰臥し、マスターと主添、副添の貴妃たちの「みかしら」を支えるのである。だ

から、有明さえ、その気になれば、この枕を喰べてしまうことについて、誰も反対するものはないわけである。事実、この夕霧の局という美女も、かつては枕のお中臈だった時代に有明のおなさを頂戴して、部屋をあずかる上臈に出世をした経験者なのである。この理屈を極端に援用すれば、哀れな肉体系具の「部品」にだって、自らシンデレラになる好運を否定しざることは出来まい。こうしたプロバビリティの詮議は別にしても、有明の手がとどくところで、一緒に寝られるということとは大そう名誉なことである。だから、上臈にしても中臈にしても、大いにコンピートす



る地位だといえる。次々と、あたらしい獲物が入荷する度毎に、ライバルが現われはしないかと、ヒヤヒヤさせられるのは高官たちであつた。自分が召使っていた者に、追いつき追い越される憂き目に遭う高官も多い。すべて、有明の氣に入るかどうかで決定され、しかも決定された位官序列は絶対である。

しかし、自分の局から上臈が出ると、自分は年寄の称号が与えられ、あたらしい方の上臈が頂戴した新局をも、ある程度、支配できるし、又、莫大な一時金(百万スイスフラン以上)も下賜されるというので、有明に飽きられる前に、お手つき女官を自分の局から出

前号まで「世界の各地から誘拐されてきた数多の美女たちは、ただ有明一人のために畜隷隷従を強いられている。強大な秘密国家の組織は、新入りをベルトコンベヤーに乗せたようにして鍛え抜き、この国にふさわしいように洗脳してしまふ。数々の試練を経て、漸く初お目見得に伺候した女たちの一人、もとミス、ユニバース日本代表だった俗名、**富田茂子E一〇二**号は恥かしい含頭礼のあと、表下使いとして上臈、夕霧の局で、仕込まれることになった。

そうとヤツキとなる上臈もいる。

有明を除いて、女ばかりのパレスエリア、ことごとくがマスターのお氣に入りになるうとして、ひしめき合っている、この世界である。あからさまな嫉妬や争いは厳しく禁止されているし、声に出せば夜中でも、どこでもコンピューターにチェックされてしまう警察社会だから、さすがに誰も表立って、するものはいない。だが、それだけに、目に見えぬ陰湿な対立抗争は、かえって激しくなっているにちがいない。

こう考えてくると、そうした憎妬忿恨の炎をかいくぐって上臈や中臈まで昇進してきた女たちが、単に美しいばかりでは、どうにもならないのだということが理解されるであろう。

よい実例である。この夕霧の局という美女は、秋田の貧しい農家に生れ、父は出稼ぎに行つて行方不明。母は間男をして体裁がわるくなり、中学を出たばかりの彼女を、人身売買も同然な口入れ屋を通じて、女工に出してしまい、男と一緒にドロン。父母共に蒸発というケース。多少でも感受性の強い少女だったならグレない方が、どうかしている。加藤カ

ツ代という俗名だった少女時代の夕霧の局は女番長を地で行くようなズベ公仲間に入ってしまった。そして、その名の通り、万事、勝ち度胸もよかったから、まだ十七才になるかならないうちに、一方の頭分として認められるまでノシあがった。ところが年頃になるにつれて、天のあたえた麗質、美貌が段々に洗われてきて、女としても男どもの食指を動かさせるようになってしまった。ヤクザの社会で美女であるということは、寧ろ不幸だといわなければならない。ある大きな組の親分、といつても未だ四十才にもならない仲々の男前だったが、その親分が目をつけて誘惑したものである。鼻っ柱ばかりは強くても、人生経験のないカツ代は、まんまとダメされてしまった。正式に結婚したとばかり思っていた自分の地位が、何と、妻子もあるし、三人もメカケを囲っている、この男の第五夫人だったのである。その上、彼女を働かせようとして、銀座の目抜きクラブを与えてくれた。しかし、売上げは自分がチャンと毎日、引揚げて行くし、名儀だって人の名前であるやとわれマダムであることさえ、知らされていなかった彼女は、ズベ公時代のクサレ縁をスッパリ切つて一生懸命に勤め、はげんだ。

彼女のセンスと常識とは、この期間の接客経験に負うところが多い。しかし、好事魔多しというか、その若親分、襲名のゴタゴタから他の組員の殴り込みを受けて、アツケなくお陀仏してしまったのである。そうなのは、何もかもアカラサマにならざるを得ない。正妻でないことも、他に大勢、女がいることもマンションもクラブも彼女の名義になっていないということも、一切合切がハッキリしてしまった。結局、彼女は、モト通り裸で追いつ出されるような始末となった。彼女は瞋り、泣いて口惜しがったけれども、あとのまつりである。そうはいっても、一旦贅沢に馴れたら、まさか、もとのヒッピー暮らしに戻ることは出来ない。その弱り目につけ込んだのが、例の麻薬組織だった。有明が斗ってきた、麻薬シンジケートとの、長い対立抗争の歴史の中で、運命が加藤カツ代を彼に結びつけたのには、こうした背景があったからである。その限りにおいて、カツ代は、イーラと同じように、有明によって救われたといえるであろう。カツ代自身、どんなに感謝しても感謝し足りない程の恩恵を受けたと思っている。それだけに、この国へ来てからの彼女の努力、勉強は大変なもので、苦手とした英語も達者

にこなすようになり、色々な稽古とも、素人ばなれがする程までに到達してしまった。

悪に強いものは、善にも強いというが、今では、彼女は夕霧の局であり、有明の国家の有力な支え手の一人であった。彼女は自身自身、大変な努力家であるだけに、怠け者にはえらくきびしかった。厳格にしつけられているだけに、彼女の局に属している女たちは、いつも成績がよかったのである。彼女は、部屋子たちに完璧さを求めた。競走の激しいこの国にあっては、それだけが安心出来る基礎だと確信していたからである。厳しさが彼女の愛情であり、親心であった。

彼女の局には中臈が三名、四品の御錠口が二名、五品のお末五名、婢位の下使いが五名配属されている。総勢十五名が夕霧の命に服する。

上臈の居間（十五畳位）と寝室（十畳位）は、時としてマスターのお成りを期待するから、特に入念にアイデアをこらし、費用を惜しまず飾られている。しかも、局毎に上臈の好みでインテリアが造られることになっている。夕霧の局は椅子セットを用いず、床一面に毛皮を敷きつめ、ウォーターストール、ウ

ォーターベッドを置くことにした。シンプルだが、野性的な雰囲気、よく出ている。色はベージュで統一されている。完成してから有明も二、三回は来たであろうか。局に有明がお成りになることは、上臈にとって大変な名誉である。何故なら、その夜に限り、上臈は副添としてではなく、一対一で有明と過ごせるからである。貴妃たちは局を訪れることがない。

居間に入った正面の、程よく暖めたウォーター・ストールに、せかせかと裸身をあずけながら、夕霧の局は喜びをかくしきれない様子で喋りはじめた。

「皆、聞いておくれ。あすの晩、お伽に出るように、ご命令があったのよ」
「おめでとうございます」

居あわせた中臈以下の部屋子たちは、異口同音にお祝いを言うのであった。居あわせた——といったのは、女中たちは云わば自宅として、又は寮生のような関係で局に起居しているのであって、夫々、全体としての公務や研修乃至稽古事に従事しているから、必ずしも四六時中を局に暮すということではないからである。

下使いの婢が、高官（三品以上）の為に熱い紅茶を運んできた。

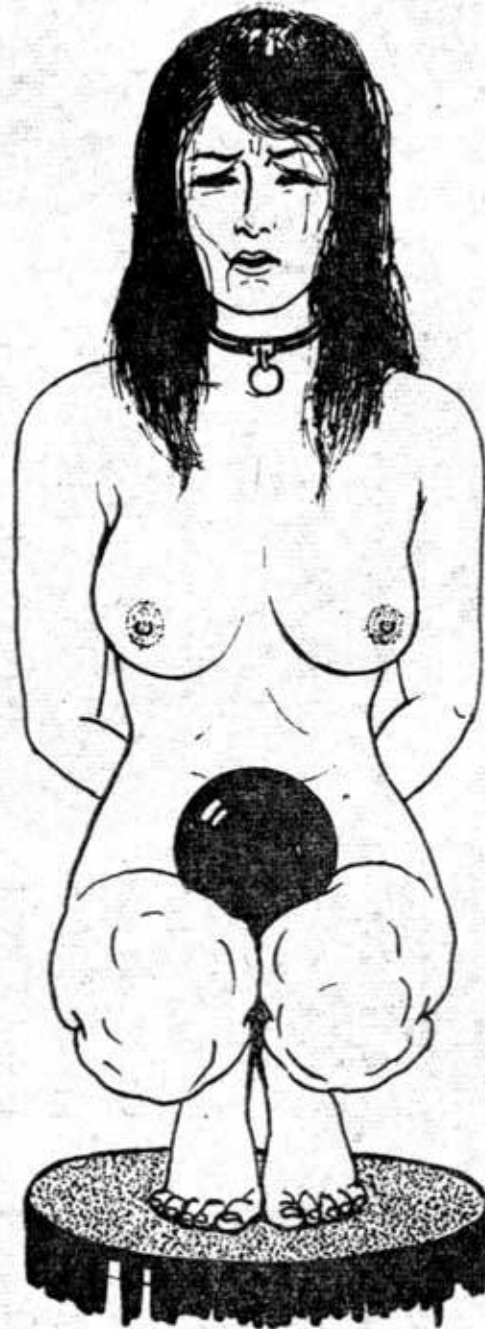
それを、おいしそうに一口、すすった夕霧の局は、思い出したように高官たちを見回すのであった。

「えーと、初お目見得の……そうそう、Eー一〇二号だったね。その者を、ここへ、呼んでおくれ」

「かしこまりました」
一人のお末が素早く立ちあがって、居間を出る。出入口には緑色の房で「房門」が、しつらえてあった。

このことは、緑の三品以上は、この出入口を跨いでもよいが、四品以下は例によって平伏したまま出入しなければならないというシルシである。お末は五品だから勿論、平伏して後ずさりに出てゆくのである。

三品以上は個室を持つことが許されるが、官位によって夫々広さが、ちがう。四品以下は、夫々の役職ごとに二名（四品）五名（五



品）が一室に同居し、婢は十人ずつの追い込みで局の外に全員が雑居し、夫々定められた局へ出勤するのである。そこを婢溜りと名づけている。

やがて先程、宮殿で含頭礼をしてきたばかりのEー一〇二号、ミス・ユニバース日本代表だった富田茂子が、今はもう当時の栄光やプライドを悉く皆奪い去られて、羽根をムシられた小鳥のように打ちふるえながら、房門を平つくばって這入ってきた。入口のすぐそばで、顔を毛皮に埋めるように叩頭したまま動けないのである。

「Eー一〇二号。わたしはマスターから、あ

んたをお預りした夕霧の局だよ。今日から、わたしが責任をもってミッチリ仕込んであげるよ。一生懸命、おつとめしなければいけないよ。いいね」

「は、はい」
消え入りそうに返事が、かえってきた。

「第一、さっきの態度は、あれは何さ。含頭礼は大事な儀式よ。それを立派に、やり遂げるのが、お女中としての礼儀の第一歩じゃないの。少しも身が入っていなかったわよ」

「い、いっしょうけんめい、つ、つとめさせていただきます」

「おだまり。口答えをするんじゃないよ。わからないらしいから教えてあげよう。サア、起きあがって、もう一ペン、開股爪先跪坐の姿勢を見せて、ごらん」

どんなことでも、目上の云いつけは絶対である。蒼白にひきつった顔をあげた富田茂子は先程、宮廷で示したような恰好になった。礼式は膝を横一文字に一ぱい開くことを要求している。相撲では、これを「腰がワれる」といいならわしているが、相撲とりでもない

若い女性が、容易く^{たやす}とれる姿勢ではない。どうしても、せいぜい、上からみて百四、五十度、やっとである。第一、人前で股を開くなんて、慎み深い女の子なら、とても恥かしくて、そうでなくてさえ、少しでも開き方を縮めたいのが人情であろう。それが逆に、インネンをつけられる原因となってしまう。

「そうら、やっぱりダメじゃない。そんな開き方で、よいと思っているの。すくなくともわたくしの局じゃあ、許さないよ。そんなに膝を、くっつけていたいんなら、やらせてあげよう。サ、膝をクっつけてごらん」

ホッとしたようにE—一〇二号は左右の膝と腿とをピッタリ合わせて、普通に跪んだ姿勢になった。

「いいね。わたしが、いいというまで絶対に膝を離すんじゃないよ。それから、手を後ろに回して……」

折角、自由になった両手首を再び後手に口ックされてしまう。一人の婢が直径十五センチ程もある鉄丸を運んできて両膝の間に重そうに置いた。十五キロもあろうか。その重みがズシリとE—一〇二号の膝に、こたえた。

「おとしたら、懲罰だよ」
ピシヤリと夕霧の局がいった。

「……」

声に出さず、E—一〇二号は口の中で悲鳴をあげた。ただし、拒めば、もっとひどい目に遭わなければならない。齒を喰いしばっても、正面からこの苦痛に直面すべきなのである。鉄丸はクサビのように太腿のつけ根に喰い込んで行く。爪先立ち。つまり、足の指だけでは体重を支えるのも大変なのに、十五キロのロードは、それを更に困難にした。限界は、みるみる迫ってきた。

開 股 矯 正

アッという間に鉄丸は股を押し開いて床に落ちた。厚い毛皮の敷物は、その当りを吸収して、鈍い音を立てただけであった。しかしハズミをくったE—一〇二号は、後ろに尻もちをついてしまった。それを待っていたように、夕霧の局がいう。

「どうしたの。落としちゃいけないといったのに」

「モ、申しわけございません。どうか、どうか、お許しを……」

「いいよ。一回だけは許してあげよう。さあ自分でソノ鉄のタマを、もう一度腿にのせて

もとの姿勢にもどってごらん」

ああ——F—一〇二号は心の中で絶望の声をあげた。後手に縛られていて、果たして、そんなことが出来るだろうか。出来るくらいなら、落とすはしないのに——と思う。だが命令は拒むことを許されない。冷たい汗を流しながら、必死に膝頭にハサンで、すくいあげようとするが、そんなことで持ちあげられる重さではなかった。その上、汗に濡れた鉄の玉はツルツルとじりはじめた。

夕霧の局とその左右に居並ぶ高級女中たちは、E—一〇二号の果無い努力を面白そうに眺めている。

「バカだね、お前は。そんなことじゃあ、いくらやっても持ちあがらないよ。少し、頭を使いなさい、頭を……」

一人のお中臈が、見兼ねたように声をかけた。ベソをかけた顔をチラッとあげて、E—一〇二号は哀願した。

「わからないんです、どうしたらいいか。どうか、どうか教えて下さい」

「アグラをかくのさ。そして、タマを股ぐらに抱き込むようにする。それから、両足のうらで、それをすくいあげて、あおむけに倒れ込むようにして、おなかへ乗せる。そうそう

ホラ、うまくいったじゃないの」

なるほど、いわれた通りすると、鉄丸はE—一〇二号の柔らかい脛のあたりにグッとメリ込むようにして乗った。それから、どうするかは言われなくてもわかった。膝を閉じて徐々に上体を起こすと、鉄丸は転がって、もとの位置に落ちついた。それから爪先で跪坐の姿勢になる。

「やっと戻れたね。いいかい、今度、落としたら、もう許さないよ」

冷然と夕霧の局が、おどしをかけた。

いつまでこうしていなけりやならないの——E—一〇二号は、心の中で叫ぶ。いつまでといて、鉄丸を再び落とす時が来るのを待ちかまえているのだということは、ハッキリしている。そして、その懲罰が、おそろしい懲罰が、そのあとに来るのだ。

——もう、だめ——口には出さなくても、E—一〇二号のわななく唇が明白に、それを訴えていた。それなのに、夕霧の局は、三人のお中臈に向かって、

「えーと、誰をお枕に連れて行こうかね」

と全然、別のことを話しはじめるではないか。E—一〇二号は、わざと無視されてしまったのである。

枕といっても、いずれ劣らない裸美人なのだから、ヒョットとしてマスターのお手が、かかるかも知れない。それこそ、千歳一遇の機会といえよう。三人の中臈たちがハッと顔をこわばらせたのも無理のないことであった。火花をちらすような「女のたたかい」が、暗黙のうちにハッシとばかり打ち交わされたのである。

「C—十三号」

そんなことは知るもんか——といった風に無造作に夕霧の局は、一人のお中臈の名前をいった。美人であるというより、どこか、あどけなさを残しているその小柄な女は、全身を紅に染めて嬉しさを表わすのだった。二十才になったばかりの佐瀬直美だったが四年前に捕まったのだから、ここでの体験は充分だといえよう。大実業家の娘として生れ、一貫教育の某私立大学で、すすく、何不自由なく育ったのに、高校へ入った夏休み、軽井沢で失踪してしまったのである。当時は身代金目当ての誘拐ではないかというので、随分マスコミを騒がせたのだったが、迷宮に入るとともに、次第に忘れ去られてしまった。両親とても、もはや命のないものと思つて、泣き

泣き諦めてしまっている。そして、遺品を埋めて墓を立て、失踪した日を命日として献華読経を欠かさないのである。その佐瀬直美が今、C—十三号として有明の宮廷にいる。彼女の地位は着々として高く、上臈になる日も夢ではない。その第一歩が「お枕番」だといえ、その喜びようも理解出来るであろう。

で、お局がいうには、

「あなたは、まだ一度もお枕にあがっていない。お目通りをかねて、連れて行ってあげよう」

「ハ、ハイ、ありがとうございます」

直美は、もう泣かんばかりだった。選に洩れた二人は、ありありと失望の色を見せたがこれとても異議を申し立てたり、不平を言うことは許されない。逆に、佐瀬直美に向かって

「おめでとうございます」

と祝辞をのべるのが仕来りになっていた。二人は口惜しさを押し殺すようにして、年下の直美を祝辞した。他の高級女中たちも、口々に直美に、お祝いをいうのだった。

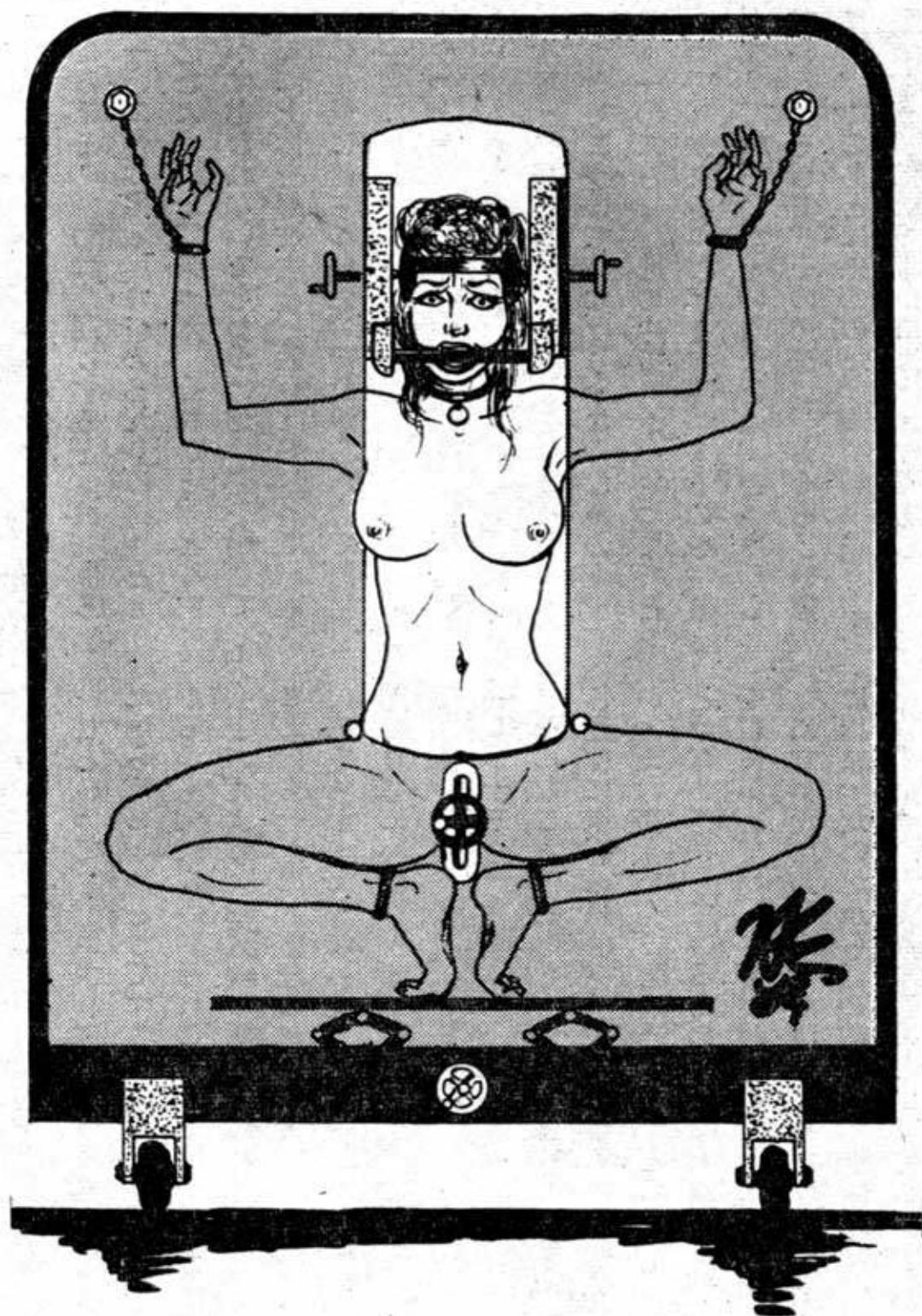
「わたしとあなたは、これから、お清めに入らなければならない」

再び上臈が注意した。

伽に關係する者は、上は年寄上臈から、下は肉体家具にいたるまで、不測の失態を演じないよう、嚴重な消毒、浣腸、その他、身体内外からの精進潔斎を求められる。畜位、物位の女は機械的に、又は強制的にするのだから話は別だけれども、奴婢以上は自ら行なう

義務がある。先ず食事だが、まる一日以上前から特別食（宇宙食のようなもので、栄養価が高く、排泄物を最小限にする）に切りかえさせられる。つまり、畜位、物位の日常食である。

上臈および枕の中臈の二人は、充分な睡眠をとらなければならない。詰め時間の二時間



前に起床。まず、身体中のあらゆる部分を内側からキレイに浄める。特に浣腸を行なって直腸をカラにする。香料に媚薬を配合した高貴薬を使用する。柔軟体操のあと、マッサージをしてスチームバスでタツプリ汗を流す。その上で、高価な香水を身体中にスリ込む。一般に高級女中は有明の好みで、長髪をのばす習慣になっているから、髪の手入は特に念入りに行なわれる。さきの入浴の時、特殊なリンスで処理したので、シットリとした、しなやかさを保っている筈だが、その上、丹念に磨くように、くしけずられる。

書けば簡単だが、実際は、もっともっと面倒な手順によって、これでもか、これでもかというまでに、徹底した準備が終わると、あたらしい白絹で全身をスッポリと、くるまれる。もちろん、手足も例外ではない。だから自分では歩けないので、お錠口掛かり二人が抱きかかえて、奥との境界つまり「お錠口」まで運び、そこから寝所までは、お次という掛かり女中が、抱き運ぶ。このあたりは、いずれ、あとで詳しく触れる。

ここでは、哀れなE—10二号。俗名富田茂子、二十一才の始末だけを書かねばなるま

い。

夕霧の局が、お清めの睡眠を済ませるまで殆ど八時間以上もの間、彼女は汗みどろになつて鉄丸と格闘して来た。お局からストップが掛からない限り、いつまでも止めるわけにゆかないからである。爪先立ちの足は、もうとつくに感覚を失い、膝は早やガクガクであつた。

柔軟体操で汗を流していた夕霧の局は、汗のことから、新入りお下使いのことを思い出したのである。

全身を流れる汗を拭いもせず彼女は、つかつかと居間に戻つた。E—一〇二号は、毛皮のカーペットの上を転がり廻つて、今や十倍以上の重さにも思える鉄丸を膝の上に掬い上げようと必死だつた。

「もういいよ。どうしたって、わたしのいう通りに出来ないんだから。だけど、しっかりお仕置きをしてやるよ。さあ、この娘を矯正板に固定しておしまい」

お末の女中が車のついた衝立を運び込んできた。透明なプラスチック製の厚板で出来ている。真中に巾三十センチ、天地九十センチ程、縦長の穴がクリ抜かれてあつた。その穴の上部に、上下調節できる器具がついてい

て、犠牲者の頭を固定できるようになつてゐる。

お次女中たちは、有無をいわせずE—一〇二号の頭をソレに差し込んで絞りあげた。丁度、唇を横に割るような位置に金属パイプが横に取付けてあるので、嫌だなく口をあけて銜えさせられてしまう。たちまち、哀願の声は言葉を失つて、ウーウーと、うめくばかりである。

後手のロックが解かれ、別々にバンザイをするような形に固定される。夫々の位置に金具がとり付けてあつたから、きわめて容易にそれが出来た。クリ抜かれた穴の下縁が、丁度、E—一〇二号の体にあたるように頭の位置が調節され、そのまま開股跪坐、爪先立ちになれる高さに足板がひき上げられた。つまり膝が衝立にブツかるので、いやでも股をギリギリに開いた姿勢にならざるを得ないのである。

しかし、これだけでは、まだ済まされなかつた。次に、E—一〇二号を襲つたことは、拷問檻でもされなかつた程の惨烈な苦痛であつた。奇妙な突起を持った鉄棒は、先が鉤状に上に曲り、約十五センチ程のその部分だけが柔らかいゴムで覆われていた。それがどう

いう目的のものかということは、いわずと知れている。そして、手前から徐々にネジを回して行くと、腰が次第に衝立の方へ押しつけられてくる仕掛けである。腿のツケ根の上部に、パイプが突き出しているから腰をひねることすらできない。

ウメキ声は一段と大きくなった。E—一〇二号の美しい両眼から大粒の涙が噴き出してゐた。

そして、やがて彼女の体は、衝立にピッタリつくところまで、ひきつけられてしまつたのである。ということは、股が完全に、横一文字に開いたことを意味する。

「……」

何をいつているかは分からないけれど、そのウメキ声よりも、涙に濡れた目つきは、必死に助けを願っていた。

冷然として夕霧の局がいった。

「奥へあがつて、あすの朝まで、このままでいるのよ。だれか、敷物を汚さないように、下に金盥でも、あてがっておやり」

夕霧の局の裸身を光らせている汗は、もうすっかり冷えきっていた。

——カット・矢川 祥彦——



……S 女性出現を夢見て……

コ ン テ A

森 山 壮 吉

サービス精神によるSの演技というわけだが、その演技に、それぞれの型があり限界があつて、どう

ば、たびたびは期待出来ない事だから、写真とテープによって記録して、あとあと迄の思い出とも、楽しみともしたい等と、しきりに思われるのである。

×

×

登場人物

S 女性 長いブーツを穿き、革鞭を持つ。

M 男性 黒ゴム全頭マスク、黒ゴムサポーターのみ着用。

プレイヤー 尻打ち（二十分）

Mに厳しく猿轡し、机、寝台等を利用して尻打ちの姿勢で固定し、充分に尻の鞭打を行なう。Mがうめき、もがくのに構わず、尻全

あれこれと苦心の結果、最近、若干のSMプレイの機会を持つことが出来た。相手をして下さった女性達には深く感謝しているし、それぞれのやり方で、よく私の夢に応えて下さった方（中には一寸、困った人もあったがこれは止むを得ない）もあるのだが、どうももう一つ、物足りぬ感があることは否定出来ない。

心底からSという女性は存在しないと私は思っている。比較的、軽い興味（物好き）と

では、結局どういうプレイが出来れば満足なのか、何がやりたいのかと云う事を、具体的に考えてみたのが、次のコンテである。長時間、或は長期間にわたる奴隷飼育には魅力はあるが、実行上に難点が多いので※通常、比較的、容易な一回、二時間以内程度という条件で設定してある。どなたか、こういうコンテに乗って相手して下さるS女性はおられないだろうか。万一そういう機会に恵まれ

体が腫れ上がり、鞭痕から血が、にじむまで続行する。

プレイ2 ブーツでの戯れ(十分)

Mの縄を解き、猿轡を外す。MはSの足下に平伏し、ブーツにキスする。SはMを蹴飛ばしたり、踏みつけたり、ブーツの汚れを舐めて、きれいにさせたりする。

Sは椅子に坐りMを足台として一服。一寸した物を食べ、食べ残しの小片を床に投げ棄て、ブーツで踏みにじり、手を使わずに、それを食べさせる。ブーツの底についた分も舐めさせる。

プレイ3 全身鞭打(二十分)

Mの両手を上にあげさせて、布ロープで縛り、ロープを梁にかけて引き、両手を上に吊りあげて少し爪立つくらいの姿勢とする。再び厳しく猿轡し、背中、尻、胸、腹を鞭打する。全身に、鮮かな縞模様がつき、至る所に血がにじみ、二、三カ所から血が流れる程度迄、続行。

プレイ4 人間便器(二十分)

猿轡を外し、革手錠で後手に拘束する。Sの尿を尿器にとり、直ちにその尿器をMの口にあてがって飲み干させる。(こぼさずに直接拝授することは、相当呼吸が合わないとき難

かしい。ただし写真としては、直接でないという意味がない)

トイレに連行し、Mをあお向けにし、大きく口を開けさせ、上にまたがって排泄、直接に食べさせる。(沼氏は「夢想家の手帖2」で、「私は初めのうち嘔吐を押えられなかった。しかし、慣れて以後平気になった」と記されている。これは一旦排出された物を口にした場合である。このMの場合、大便是初経験になるが、直接の場合嘔吐の恐れはないと推定する。しかし万一の場合、吐瀉は便器中に来るよう、トイレかその近くでプレイする。便器内の吐物は大体、水洗で流し、飛沫程度の物は舌で掃除させる)

プレイ5 舌での掃除(五十分)

尿器にとった水で、口をすすがせ、その後便器を舌で丹念に清拭させる。又、口をすすがせては、トイレの床やトイレ用スリッパの裏などを舌で清拭させる。口をすすがせるのは、便に接した舌で他の物を汚させない為である。Sは監督し、口をすすがせたり、適当に鞭をあてて励ましたりする。

プレイ6 鼻輪通し(三十～四十分)

革手錠を外し、洗面所で入念に口をすすぎ歯を磨く事を許可(大腸菌の傷への侵入を防

ぐ為)する。革手錠で後手に拘束し、猿轡をし、頭を膝でしっかりはさんであお向けせ、鼻中隔に短い錐で穴をあけ、リングを通す。猿轡を外し、出血部にホルム散でもつけて、綿を鼻孔に詰める。

後手錠のまま、物置かトイレにでも正座させ、リングに犬の鎖をつけて、その鎖の端を柱の上部の釘にでも引っかけ、顔を少しあお向けさせて暫時放置しておく。(その間に出血が止まる)

プレイ7 引廻しなど

綿をとり、後手錠を外し、鼻輪に通した鎖を曳いて四つ這いで歩かせる。鼻輪の鎖を短く使って、四つ這いのまま顔が動かぬよう固定し、鞭打ちする。

時間があまれば、手足を縛り、猿轡をし、鞭痕を狙って蠟を垂らしたり、尻が上に来るように三角縛りにして蠟燭を立てたりする。▽悲鳴をテープにとる為には猿轡をしない方が良いわけだが途中で「もう止めて下さい」と音をあげる恐れが大きいので——それ位でなければ興味が薄い——所要所で猿轡を指定している。

▽写真による記録としては次のようなシーンを考えている。

ナミオ M 画廊

『鞭の御馳走』

春川 ナミオ



尻打ち 鞭のあたった瞬間（アップ）、鮮かに鞭痕のついた尻（アップ）

ブーツ ブーツをなめる。

全身鞭打 半吊りのMと鞭をふるうS、鞭のあたった瞬間と鮮かに鞭痕のついた体（アップも）

人間便器と清拭 大便が口に入る瞬間のアップ。その他、各場面。

鼻輪 鼻中隔に鉗が通っているアップ。リングが通るアップ。その他。

他にゴムマスク、猿轡の顔面のアップを何枚かとり、責めによる苦悶が、眼の部分だけ

で多少とも現われるかどうか注意してみてもはどうだろうか。予想は甚だ否定的だか、苦痛で涙でも浮かべているところでもとれば、このトリックは容易だから記録的意味はないが、自分では面白いと思う。

▽なお、以前、背骨に対する打撃は甚だ危険であるという医書の指摘を、御紹介しておいた？ かと思うが、最近の若干の体験と見聞とによれば、通常の革鞭程度ならば、背中への鞭打に、さほどの危険はないように思う。ただし物語にあるような先端に金具の付いた鞭は金具部分が背骨に当たったら甚だ危険であろうから実用に供すべきではないだろう。プレイ用品店で鞭を扱うところも出来て、鞭の入手は、よほど容易になっているが、まだ普通の商品にはなっていない。二カ月ばかり前ヤング向け週刊誌の掘出物欄に青山のファッショナブルな皮革製品専門店ソルシユールで鞭を一八〇〇円で売っている旨紹介があり早速行ってみたが、とうに売切れていた。たまたまの入荷品を御愛嬌迄に展示した程度らしい。一種のフィーリング商品として取上げれば相当出ると思うのだが、どこも扱わないのは少々不審にさえ思われる。最近はバンドも犬の曳き革も実に多種多様になっており、

これの転用にも興味はあるが、それこそフィ
ーリングとしては、専用の鞭における多彩さ
が望ましいのである。

▽不馴れで身が入らず、鞭さばきの弱い人ほ
ど、鞭が顔や首や頭や局部等に飛んで来てか

えって危険である。そのような急所や、シャ
ツの外に出勝ちな二の腕への鞭打を避ける配
慮があり、緊縛に際しては何時迄も痕を残す
麻縄類を避けて、布ロープや綿ロープを使う
用意があり、しかも、思い切って強い鞭さば



読者ギャラリー

『踵の味わい』

岡 たかし

きの出来る女性は、きわめて得難い「宝」な
のである。

それはさておき、男性同志なら相当苛烈な
プレイも実行されているようだが、残念なが
ら私は男同志のプレイには興味が持てない。

S経験のある女性からは、「いろいろな空想
を描いて申出て来ても、実際にプレイすると
忽ち降参してしまう人ばかりだ」という発言
があるようだが、烈しいプレイを望んで止ま
ないMに対して、それを上廻る位の苛烈なプ
レイでこたえてやろうと、好奇心を起こされ
る女性はおられないものか、巡り会えぬもの
かと期待を胸に抱いて日々を過ごしている。

※ 奇ク十月号奇クサロン所載、宝塚市小山
郁子さんの御投稿には、それがもし事実であ
れば、非常に興味があるのだが、職業を持つ
身としては、せいぜい数日間、程度しか捻出
出来ないから、御採用の対象には到底なり難
い。気ままな若い時代なら一年間位、家畜人
として奉仕してみるのも面白かったろうし、
また、きっとしていただろうと思われる。自
分の青春には自分なりの自持があって、今の
若い人は自由に羨ましいとは露思わないのだ
が、こんな時には、束縛の少ない年代が、つ
くづく羨ましいのである。

—— マダム美美代の告白 ——

縄にまつわる私の体験

福井桃子

私が縄で縛られたときの気持ちを話せておっしゃるのですか？

いやいや、これは又、とんだことを、お約束してしまつて——。次にはどんなことでもお話するって、申し上げましたわネ。それにこうして、わざわざ足をお運び頂きました上は、なんでもかんでも、お喋りしなければ、納まりそうにありませんね。

でも、私じゃ、ただのお喋りだったら、そりゃ、一時間でも、平ちゃらですが、それその、分析とか、心理なんかというのはニガ手なんですヨ。そんなのは学者の大先生にお任せするとして、私じゃ、尋ねられたことだけ

お答えする——まあ言えば、こんなことでお願い出来たらと思つてますの。

だから、縄で縛られたときの気持ちを言えつて尋ねられれば、「痛かった」と答えるより仕方ありませんわネ。

どんなに痛かったかと言うんですか。まあ一番締まつて痛かったのは、やはり手首でしょうね。最初に手首を括られたからかも知れません。だんだんと締まつてきましたね。

そう、皮膚と縄が接した部分、ここが痛くなつたのと、肘が痛くなりましたわね。

二の腕は、あとで見ましたら、縄の喰い込んだあとや擦れたあとが、赤黒く残つていま

したが案外、ここは痛くなかつたですわ。

後手首を挙げ、挙げて言つて、縄で吊つて両肩に回して、胸で結び目を作りましたが咽喉へ縄がきましたとき、私、首が締まつて呼吸が止まるかと思つて驚きましたワ。

私って、案外、怖がりなんですのネ。首を締めるようなことはしないって。そうでござんしょうネ。

両手首を背中であぐらされてしまつて、もうどうもがいたつて、両手を使うことが出来ないって、絶対絶命のピンチに追い込まれて、マゾの女性だったら、もう、それだけで最高に興奮してしまうんじゃないでしょうか。



お前は、どうだったって？
 そりゃ、私もM女性のはしくれ、いやSM女性のはしくれですか、やはり、そりゃ、うれしかったですわヨ。

こう、なんと言いますか、かーっと、身体中が熱くなって、汗ばんできましてネ。無防備の身体の前の方が、羞かしいって言いますのか、なんと言いますのか、もう、むしろ、いらいだしくって、身体の内も外も、一斉に燃え上がってしまいましたワ。

それまでは、私、莫然として、奇クのムードと言いますか、△縛り▽なんかに憧れに似たようなものを抱いておりましたが、始めて自分が縛られてみて、△縛られる▽というところが、こんなに自分の身体に強い影響を及ぼすものと、びっくりしましたワ。

それからは、両足を一文字に開かされたり両足を曲げた

まま開かせられたり、横向きに転がされ、仰向けに転がされたり、そりゃ、もう無我夢中で身体を任せていましたの。

両足を左右に、真一文字に開かせられた時など、踊りをやっていた私にとって、こんなポーズは平っちゃらなんですけど、よく伸びるよく伸びるって、感心して、私の前の方を覗き込まれるのには羞かしかったですワ。

後手に縛られるってのは、いいもんでござんすわネ。胸が突き出て、こう、両膝を合わせますと、お腹がぽこんとへこんじゃって、私のように、子供を産んだことのあるお腹でも、なんとか見えるようになりますものネ。

そう、そうなんですよ。

バストも、子供にお乳を飲ませて、しばんだ風船のように、たれ下がっていても、縄で上と下から締めあげますと、いくらから見られるようになりますものネ。

こんなことを私が喋っていると、SMファンに叱られますかしら。

涼しい風が身体の前を吹き通してゆく感じ。これがマゾの心境でしょうネ。

あらあら、大変えらそうなことを申し上げまして、失礼しました。

縄で縛られたときの気持ちを話せて、言

われて、これだけ喋ってしまいましたの？
私って、オッチョコチョイですから、適当に
カジをとって下さらないと、何を喋るやら、
脱線もしょっちゅうなんですよ。

そのかわり、オダテを使えば、使いようで
切れる缺のように、まあ何とか、半人前ぐら
いには通用する人間でございます。

縄はどんなのが、いいかってですか？

そりゃ、あのトゲトゲの出た、麻縄ってい
うんですか。色もいいし、むくむくと、よじ
れているのが好きですワ。

あら、話を茶化さないで下さいましよ。私
しゃ、真面目な話をしてるんですから。

ぎゅっと、身体に締まってくる感じ、あれ
はたまりませんわネ。身体を動かすたんびに
じり、じりと肌に喰い込んでくるのなんか、
最高じゃないですか。真新しい、白の綿ロー
プって言うんですか、あの縄もいいですネ。

それよりも、貴方の縛り方、中々お上手で
すわネ。あれ、あれって思っているうち、忽
ち、いつの間にやら、括られてしまっ

縄がぴっちり肌に密着していて、気持ち
がよかったですワ。ガタガタだったら、だら
しないみたい。もう、ほんと、身体がくびれ
てしまいうくらい、きついのがいいですワ。



ええ、やはり羞かしいですわヨ。それは、
女性の心理を知らない人が言う言葉よ。

やはり、年齢じゃなしに、身体の線がくず
れてくると、女って、他人に見られるのは、
羞かしいものなのよ。そうよ。

私でも十八や十九くらいの時だったら、自
慢したいくらいよ。ええ、そりゃ、今は今の

よさって、いうものもあるわよ。だけど、女
はなんと言っても、若いうちが花なのネ。オ
バアちゃんになっちゃダメ。

二十五才ぐらいで、そんなことを言っちゃ
いけないって。そうでしょうかしら。

私って、早熟だったでしょ。だから、なん
だか、齢いった気がしちゃって。そりゃ、二



十五ぐらいで、未婚の方も沢山いられることは、いられま
すわネ。

沢山の女の人、縛っていら
れるんですよ。縛るの、本当
にお上手だわ。そんなことは
自慢にならないって。そうで
すわネ。

でも、縛られる方にしたら
スゴク気持ちが悪かったワ。
モタモタしてられたら、こち
ろの方がビビってしまうもの
ネ。やはり手際よく、あっと
いう間に、縛りの形が出来て
しまうと、如何にも、プロっ
ていう感じね。

押し倒されて、ころがされ
て、ポーズをとられるとき
痛いのを辛抱していたのよ。
そりゃ、私も痛かったわ
ヨ。

マゾだから、痛くないだろ
うって？

そんなことないですわヨ。
痛いことは痛いの。だって神

経がありますもの。だけど、こう、なんて言
いますか、指の先を庖丁で誤って切ったよう
な痛さじゃないの。

ジーンとしびれるような、感じのよい痛さ
なんですのよ。なんだか、もっと、もっと、
きつくして欲しい、イタクして欲しいって、
思うような、痛さなんですの。

ええ、そこそこは、羞かしくって、よく
説明できないんですけど、ごめんなさいネ。
仰向けに寝かされたとき、下敷きになった
両手首は、きつく縛られているんで、本当は
スゴク痛いんです。でも、前の方がムキ出し
になってるでしょ、だから、羞かしくって、
それどこじゃ、なかったんです。

そう思っていると、ジーンとしちゃって。
やはり、私って、マゾでしょうかネ。
ええ、もう、それからは、どんなことをさ
れたって、痛くなくなかって——。

快感があったかって？

いやよ、そんなこと聞かないで。意地悪。
私を困らさないで。そんなこと、レディに
聞くもんじゃないわ。

貴方って、案外、女の子を困らせて喜ぶク
セがあるのネ。女の口から、そんなこと喋れ
ないわ。カンニンして——。

そんなことより、まあ、おビール、ぐっと一杯あけて下さいましな。

痛いも、痛くないも、ポーズがどんどん変わってゆくし、カメラのフラッシュがピカピカッと光って、目はくらんでくるし、もうなにがなんだか、わからないのよ。

どんなポーズが好きかって？
やはり女ですもの、一番自分が美しく見えるポーズが好きだけど、これは、まだ写真を見せてもらってないから、何とも言えないけど。その次に、そりゃピントを、あそこへ当てられたとき、ええ、わかりますわよ。

そこを狙ってるなア、と思っただけで、身体中がカーッときてしまうものさうです、いくら羞かしい羞かしいって、言ってるって大部分の女の子は興奮するんじゃないですか。

縄で縛られただけで、興奮するかって？
女の縛られた写真を見るのが大好きな私ですもの、本当に自分がじかに縛られたら、私



の身体がどんなになったか、貴方の方がよくご存じのクセに、意地悪ネ。

全裸で逆さ吊りなんかも、してほしいと思うけど、私のように肥っていちやダメね。
体重ですか？ 五十三キロありますの。堅肥りなんで、案外重いです。

後手に縛られた上で、一本の棒のように足

首で吊られて、高く高く吊りあげられたら、さぞ素晴らしいことだろうと思ってるの。こう、なにか荷物のように、クレーンで空高く高く、吊り上げられたらと……。

そうなんです。私の空想で――。

先日、お友達と、神戸まで遠出したことがございますの。いえネ、そんなじゃないんです。ただの遊び、気晴しに。

いいじゃございませんか
そんなこと。どうしても、私を浮気女に仕立てたいみたい。こうみえても、私は品行方正でございます。

神戸港の埠頭で、船から荷物の積みおろしをしてるのを見たんですけど、あの、クレーンって言うんですか。アレ、大変な高さなんですのネ。何屯という大きな機械でも、軽々と持ち上げて――。

私、あのクレーンを見ていて、自分も逆さ



吊りで吊りあげられたらなあって、空想してしまいましたワ。ええ、勿論、素裸で——空想だけじゃダメだって。

そりゃそうでしょうけど、いくら奇想天外なことの起こる現代だって、そんなこと、実際に起こせるわけはございませんものネ。あら、もっと現実性のある空想を話せてですか。

じゃ、話を私の縛られた初体験というのに戻すことにしましょうか。

割りかし平気なように見えたでしょうネ。

身体をブルブルと、ふるわせたこともないし、いやだいやだと、駄々をこねたこともありませんものネ。でも、あの時の三時間あまり、十分満足しましたわヨ。

縛られてる時もよかったしいろいろと変ったポーズを無理矢理とらされてる時もよか

ったワ。私、ずい分と協力したような気もするけど、どう見えたかしら。

それから、あとでアノ時のこと考えたら、縛られていた時より、いいのよ。

いろんなこと、空想するからかしら。笑わないでヨ。私はネ、空想の中では、三人、四人の男に縛られたり、責められたりしてるのよ。この方が現実性があるでしょう。

S M雑誌の読みすぎかしら。でも、やはり自分の身体の中に、もともと、そんなケがなかったら、ピンとこないわけネ。

その責めの中で、いろんな小道具が出てくるの。そりゃ、勿論、パイプも出てきたワ。

あら、私がエッチだったら、貴方は助平ってわけネ。そんな喧嘩はよしでしょう。今はこの前のお約束通り、私のエッチなエッチなお話を、お聞かせする筈でしたわ。

暇かって？ 九月の始めは、もともと水商売はヒマなんですヨ。なにか、こう谷間って感じ。お彼岸が過ぎると、またお客さんも寄ってくるんだけど、夏でもなし秋でもなし、冷房していいのか、窓を開けたらいいのか、わからない気候。お客さんも、なんだか寄りつかないのヨ。

円の切り上げとか、ドルがどうしたとか、

週刊誌なんか読むと、大変な不況がくるらしいわネ。私とこみたいなの、ちっちゃな水商売が、いの一番に被害を受けることになるワ。その、ドルがどうかしたら、一体、どうなるのヨ。

あら、そんなムツカシイことは聞くな、なんて、そんなこと殺生よ。それでも、私、真剣なんヨ。聞かせて――。

そんなことを心配するより、縛られてろって。そりゃ、私じゃ、一年中で一番ヒマなときなんですから、存分に縛って、弄んで、いじめて下さいましヨ。江戸ッ子じゃございせんが、煮て喰おうと、焼いて喰おうと、ご存分になさって下さいまし。

冗談はさておいて、もう、責めや縛りや、いや、もっと、その他のSMの実験台、たとえば、浣腸の実験台って、ものが必要なときは、この私を使って下さいナ。

マダム美美代こと、本名福井桃子、当年二十五才。この身体をお預けしますってネ。

ええ、どのように料理して下さいっても、異存はございません。泣かせて下さっても、呻かせて下さっても、また、責め役に使って下さっても、結構でございます。

私って、話のわかる女でしょう。

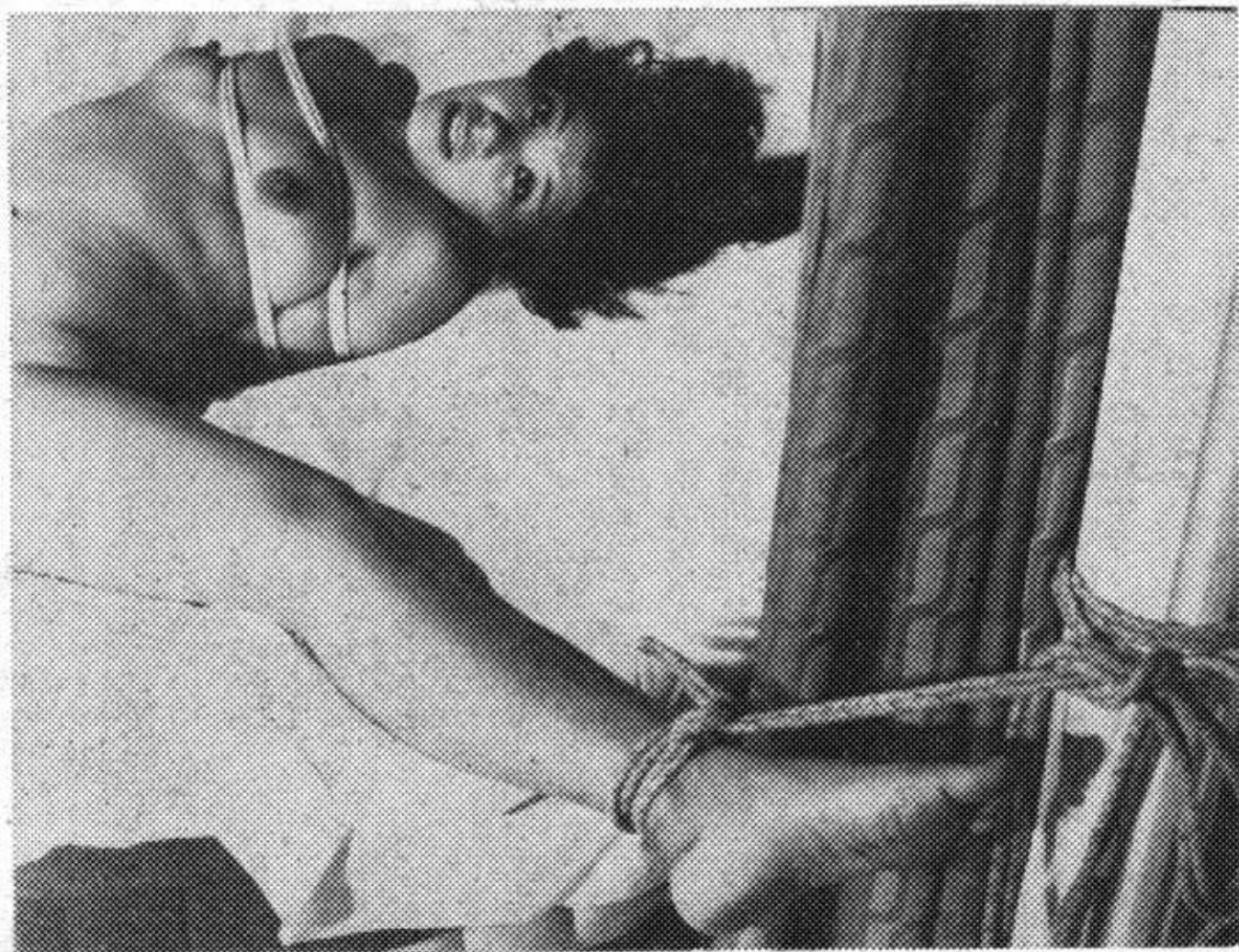
話がわかり過ぎるから怖いって。私、そんなに調子がいいかしら。

でもネ、縛られて、いやなことあったのよ。縄を解くときにネ。膝頭のウラの方、あの柔らかいところネ。あそこに縄が掛かっていたのを、ほどくとき、ピュンと引っぱったのヨ。

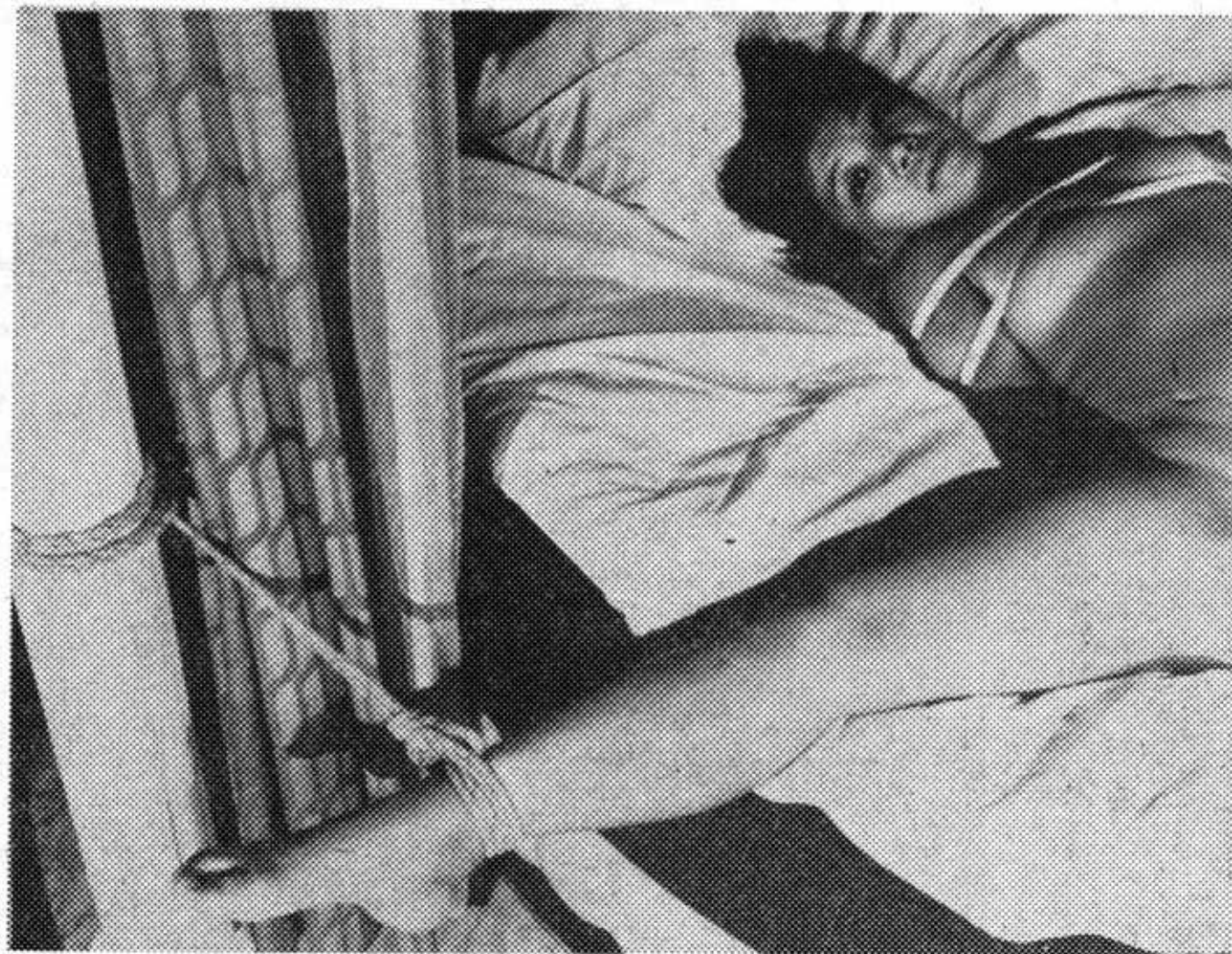
縄って長いでしょ。だから、ずうっと擦^{こす}ったみたい痛かったワ。あんなときの痛さって、快感にはならないのヨ。もう少し、お手やわらかに出来ないかって思ったの。

私って、こんな性格でしょ。だから、そのときはなんにも言わなかったワ。でも、あとでお風呂へ入るとき、ヒリヒリするので、見たら血がにじんでるのヨ。

あら、私が喋ったからって、なんにも、そう謝まることはないわヨ。そんなこともあった



って話だけ。水商売をしてると、あとで独りで涙することだって、たんとあるのよ。



いくらマゾの女性だからって、責めるときは責めるとき、縛るときは縛るとき、やはり

いたわりというものがあれば有難いわ。

これは、これは、マゾとしたことが、とんだことを申し上げて申し訳

ありません。

マゾ女性を代表して申し上げますと、やはり、責める中にも愛情というものが欲しいんです。でも、これはゼイタクというものかもしれませんわネ。

誰かさんが、憎いから責めるのじゃない。可愛いから責めるのだ——と奇クに載っていたように思うんですけど、それが本当じゃないでしょうか。

私のような者が、そんなことを申し上げる資格はございません。そのことは、よくよく存じておりますがこれも、私のおセツカイかもしれませんわネ。

とんだ釈迦に説法を申し上げますと、大変申し訳ございません。どうか、お有

し下さい。

罰に一責め加えてやろうかって——。

それは私の望むところでございます。責めを加えて頂く理由がございまして、私も、その罪の報いに、息のネの続くかぎり、存分にお仕置をお受けします。

はい、愛情とかなんとかは、決して申し上げます。マゾと致しましては、それは途方もない、思いついた考えでございました。どうか、平にお宥しのほどを。

いえ、罪の償いなんて、そんな大それた考えで申し上げたのでは決してございません。私の方から責めて頂くなんて、そんな恐れ多いことを思し上げるつもりは、決して、そうでございまして。すべて、貴方様のお考え通りに。あら、あら、いやいや、そんな手荒らなことをなさっては——。

あーあ、とうとう縛られてしまいましたのネ。自分の着ているものを取れてですか。それは無理ですわヨ。こうして、両手が縛られているんですよ。それが、どうして、脱ぐことが——あら、痛い、痛い、宥して。

ええ、脱ぎます、脱ぎます。なんでも、貴方様のおっしゃる通りに致しますから、どうか手荒なことだけは、なさ

ないで。

あら、手荒なことは、最初から計画通りだと、おっしゃるんですか、ごもっともで。

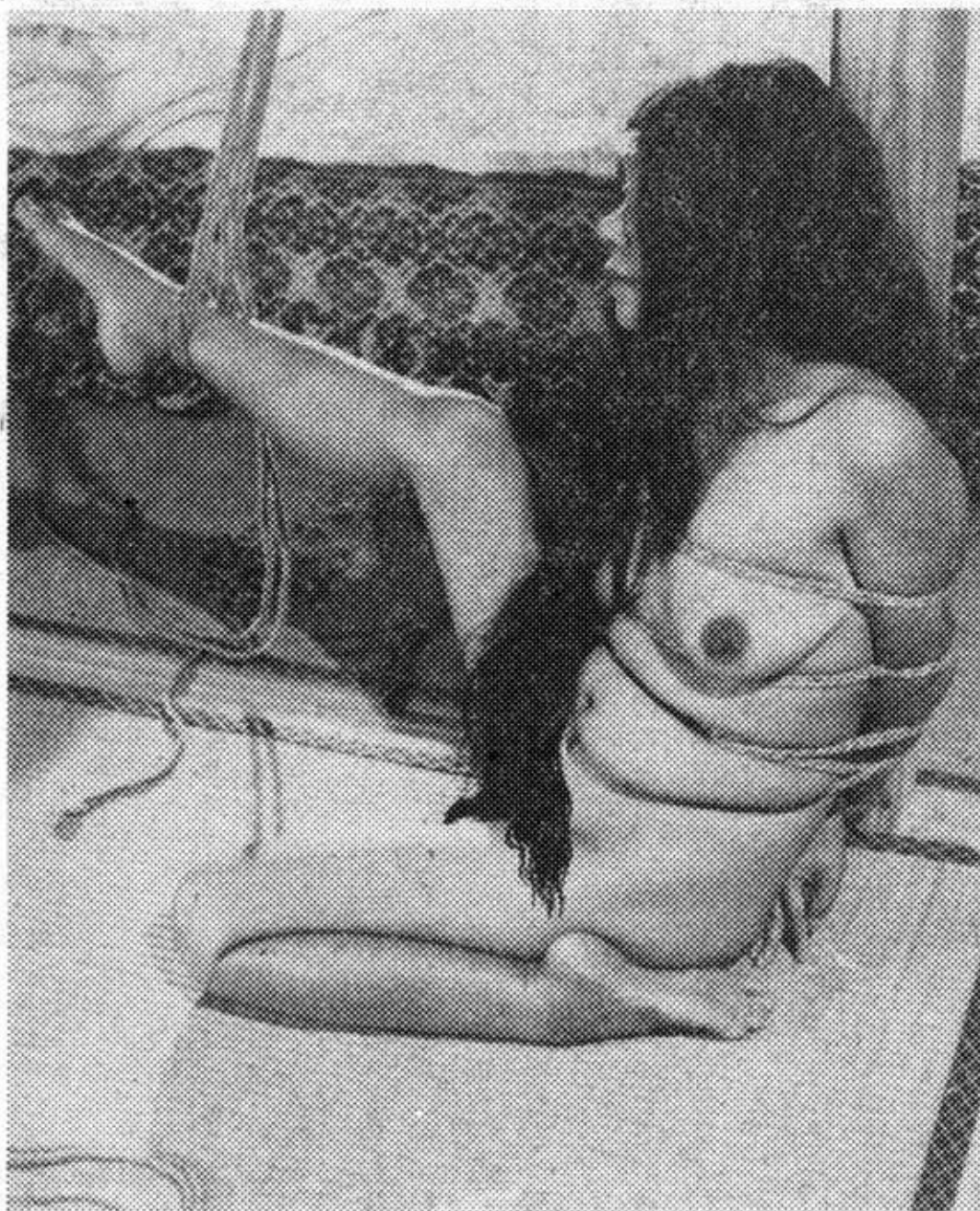
ほんとうに、口はワザワイのもとして、申しますが、本当でございますわネ。

こうして、裸で縛り上げられるのも、もとはと言えば、この私の口が、あることないこと、ベラベラと喋りまくるからでございます。どうか、上の口ばかりではなく、下の口の方も、ご存分にお仕置下さいまし。

さあ、もう、身体には何も、つけておりません。色で鍛えた、この身体です。どうか、もうネを挙げるまで、責めて下さいまし。

あら、痛い！ そんなにきつく縛らなくても、私じゃ、逃げかくれはしませんよ。覚悟してらんですから。今日は、トコトンまで責めて責めて、責め抜かれるんだって——。

毛深いってですか？ そんなに見つめないで下さいヨ。両手をうしろで縛られていちゃ私じゃ、もうどうすることも出来ないんです



からネ。それが嬉しいんだらうって。

私じゃ、これでも女ですよ。羞かしくって羞かしくって、消えいりたいくらいですわ。

そりゃ、もう、「花と蛇」の静子夫人以上にですワ。

ええ、そんなになぶらないで、一思いに失神させてしまつて。あら、どこへ連れて行く

うっていうの。素裸で縛られた私を、廊下へ連れて出てトイレへ押し込めるんだって。

冗談でしょ。それ。そんなので、ないわ。カンニン、それだけは。

それ以外だったら、貴方の言われることだったら、なんでもするワ。だから、それだけは宥して。そのこと以外だったら、なんでもきくワ。

お詫びのしるしだから、なんでも聞けっておっしゃりたいの。私がいやだってことを、無理矢理したいとおっしゃるの。でも、私、とことんまで頑張り通すわ。

こんな私が憎いんなら、縄をもっとタクサンかけて、ぎりぎりと縛りつけて。お願い。手も足も、胸もお腹も、股間縛りでもなんでもいいわ。うんと縛って、痛くして。



責めて責めて、責め抜いて頂戴。

擦るの？ 私、辛抱する。足の裏でも、脇腹でも。ああ、許して、そんなにヒドイわ。抓るんですもの。擦るのだけじゃなくて、抓るのも責めの中ですよ。それもそうね。じゃあ、抓ってもいいわ。どうせ抓るなら、身体中、アザがつくくらい、思いっきり、ヒ

ドク抓ってほしいワ。

この身体、もうこうなったら、責めの実験台に提供するんだから、貴方のお好きなように料理してもかまわないのよ。それ、海老責めというの？ 私の身体、よく曲るでしょ。でも苦しいわヨ。お喋りの私が、口をきくのも辛いみたい。ああ、胸が苦

しくって、吐きそうヨ。今さっき、朝ごはん食べたところなのよ。朝ごはんといっても、午後の二時に食べた朝食兼用なんだけど。

この縄、もっとゆるくならない。それが責めだっていうの。痛かあないけど、なんだか胸が苦しくって。

それだったら、痛くしてやるって？

いやッ、そんなに転がしちゃ。まる見えじゃないの。ねえ、カンニンして——。

うあー、腕と肘がスゴク痛いわ。

ゼイタクを言うなって。だって、喋れ喋れって言ったのは、貴方なんですよ。お前は喋ってないと、カスみたいな女だなんて、さっき私に面と向かって言ったばかりじゃない。だから私、サービスのつもりで、うんと喚いてやってるんだわ。そうでもしなきゃ、この痛さは辛抱できないんだもん。

ねえ、そんなところからは撮らないで——。

仰向けにしたら、手首が痛いじゃないの。文句を言ったら叩くって？ 叩くんだったら、お尻にしてネ。叩きいいように、お尻を突き出したポーズをとってもいいわ。

ねえったら、早く、このポーズ変えて。いや、そうじゃないのよ。手首が痛くって。背中の下敷きになってるでしょ、自分の体重

が全部かっちゃって——。

ええ、それもあるわヨ。私が興奮してるのがわかるって。いやだワ。男の方だったら、いつも、そんなとこへ目がゆくネ。

でも、それが本当だったなら仕方ないわネ。神様の前で白状してしまいますワ。そんなとき、何て言ったらいいの。

いやーだ。そんなこと、自分の口で言えると思って？ それこそ、穴があったら入りたいくらいだワ。いや、いや。また、そんなことを言う。どんだけ、私をいじめたら気がすむっていうのヨ。

もう、いやッ。早く解いて——。

まだ、お仕置がすまないって？ だったら早く次のお仕置をして。こんなままで、放っておくので、私じゃ、いやよ。

いずれ成仏させてやるって？ そんなんじゃないのよ。こんな、あけっぴろげのポーズのまま——、痛いッ、なにすんのヨ。

足で蹴って、私をころがしたわネ。

あーあ、ツーツー。肘が肘が、痛いよ。縄をゆるめて。そこじゃないの。畳に肘のかが、こすれて、イタタタ。

二の腕に縄が掛かってるから自由がきかないのヨ。先ときは、こんなにヒドクなかつたのに、今日は、又、凄くいじめるのネ。

やっと、足だけ解いてくれたのね。手首と胸は、まだなの？ このまま、次のお仕置をするっていうの。

これでフィルム、何本ぐらい撮った？ 縄をゆるめたら、また無駄口を叩くって。だって、何枚ぐらい撮ったか知りたいもん。

一服すいたいワ。この縄ほどういて——。

ゼイタク言うなって？ そんなこと言っても、すいたいもんはすいたいワ。だったら煙草に火をつけて、くわえさせて、お願い。それだったら、このまま縛ったままで、放っておいても構わないワ。

ああ、有難う。おいしかったワ。

だんだん冷えてきたみたい。冷房がききすぎてんのかしら。お尻の方が冷たくって。

いやヨ、そんなに触ったりしちゃ。

おトイレ行きたくなかったワ。

ねえ、じらさないで、解いて。お願い。

ここへ出してしまえって。そんな無茶な。

畳の上へ垂れ流せると思って？ ええ、今のところ、催しているのは小だけなんですの。

早く解いて下さらないと、畳やお蒲団を汚しても、私じゃ知りませんヨ。

あーら、そんな無責任なこと。

手もしびれてるし、早く解いて。いやいやそんな、お腹押したりして。意地悪ネ。辛抱できないじゃないの。

煙草すわせてくれたし、だったら、貴方の言うことも一つはきいてあげようかしら。でも、ここじゃ、いやヨ。私の縄尻を引っ張って、トイレか浴室へ連れてって。そこだったら、貴方のお望みの写真撮らしてあげるワ。

恩にきせたら、いけないっていうの。だったら、写真を撮って頂きます。これでいいんですよ。そんなにきつく引っ張っちゃ、いやですよ。手首がちぎれるじゃないの。

お尻を蹴らなくなったって、歩きますよ。歩きゃいいんですよ。トイレは狭いから浴室の方がいいって。私じゃ、どっちでもいいんですよ。でも、さっき私がお風呂へ入ったとき石鹸を使いましたから、滑らないように注意して下さいましヨ。いえ、貴方じゃなくって私の方がです。

なにしろ、こう両手をがちり縛られてるんですから、滑ったら最後、すってんころりなんですからね。縄尻をしっかり握っておいして下さいましよ。

ええ？ なんですって。これから写真撮影の準備をするから、このままで待っていていろっ

てですか。こんな冷たいタイルの上で――。

もう私、辛抱できないんですヨ。早く準備をして下さいネ。

女は、いっぺん出したら、そりゃもう、止めようと思って止まらないんですから。殿方とは違いましてネ。

では、浴槽のふちに腰を下ろさせてもらって、しばらく休ませて頂きましょうかね。

あら、タイルって案外、冷たいのネ。ぞくぞくしてきちゃう。ねえ、まだなの。早くしてよ。

あら？ こんなポーズで――。それだけは有して。写真にはならないじゃないの。さまにならなくなったって、かまわないって。でも私が羞かしいじゃないの。

羞かしいのが、いいだろうっていうの。何でもかんでも、ご存じのクセに、私を困らせないで――。

第一、出ないじゃないの。そんなにカメラを向けられてちゃ。

鳴くまで待とうホトトギスだって。仕方がないわネ。

負けたワ、私。顔をそちらへ向けていて。

一、二、三でやっちゃうから、素早く撮ってヨ。いやッ、そんなに見つめていちゃ。

あら、こんなに汗びっしょり。急にタイルが温かく感じてきたわ。

変ネ、あんなに、さっきは冷たく感じていたのに――。

冷たくって、ガクガクしていたのよ。それに今は、こんなに身体中が熱くって、かっかしてますわ。

ホレ、縄が濡れるくらい汗がにじんで――。そうです、私って、汗かきは汗かきなんですのよ。

でも、今の今まで寒くって、冷たくって、ぶるぶるしていたのが、こんなに汗をかくとはネ。

いえ、冷汗ではないんですの。緊張してたからなんでしょうかね。

ええ、大分、汗も退いてきました。スーウとしましたワ。

なんだか、身体が軽くなってしまったみたい。

羞かしいワ、そんなこと、おっしゃっちゃいやですわヨ。

全部、写してしまっただって。きっと音も録音されてるでしょうネ。一遍聞いてみたいワ。悪趣味でしょ。

天井が低いからかしら、それともタイルだから反射するからかしら。それ、ストロボっていうの。よく光りますのネ。目がいかれちゃって、目の前がぼーうと霞んだようになってしまっただけ、困りましたワ。

これで一役、果たしましたんでしょ。縄をほどいて下さいナ。私、お風呂へ入りたいワ。

その上で、また、ゆっくりと次の責めを受けますから。

縄を解く前に、もう一役、果たさせてですか。一体、何をすればいいんですの。

ええッ？ そんな大きなものからゴムの管で私のお腹へ、お湯をいっぱい入れるんですって。そんなの無茶ですヨ。いくら今、排泄したばかりだといっても洗面器にいっぱいのお湯が入るもんですか。それをしないことにはお風呂へ入らせてくれないっていうの。

ハイ、ハイ、承知致しました。

もう、こうなりました上は、どんなことでも、貴方様のお言いつけ通り、素直に従いますでございます。

では、失礼して、お先にお風呂へ入らせて頂きます。

(挿入写真は写真部撮影)

— 女 責 め 図 絵 の 系 譜 —

出 歯 の 亀 太 郎



南 彦 造 (カ ッ ト も)

SEX映画の代表国——と云えば、北欧諸国、西ドイツだが、最近ではアメリカ独立プロの作品が、物凄い勢いでSEX旋風を巻き起こしている。

現代のアメリカでは——各州によって条件は違うが、ニューヨークとか、サンフランシ

スコなどでは、堂々とブルーフィルムまがいの作品が上映され——情報によれば内容の描写も、本屋で売られているポルノグラフィックその儘のドギツさだ——と云う。

そうしたもので、SEX映画の決定版と、大評判を呼んだのが「のぞき穴」(原題

『悦びのゲーム』(ザ・プレジャー・ゲーム WHERE・THE・ACTION・IS! ・一九七〇年度 A・WODWO・PROD UCTION・カラー作品・一時間二十分) である。

物語は——期せずして、週末に集まった見知らずの四人の女と三人の男が、原題どおりの「悦びのゲーム」を開始する——と云うもので、不能者の父親は——覗くことで欲望を満足させていた。この異常とも云える覗きこそ、父親が週末ごとに、楽しみにしていた『悦びのゲーム』であったのだ。

だが——それだけでは意味がないので——父親の云っているゲームの意味が分かった息子は、自分が、やはり父親の血を引き、SEXコンプレックスを持っていたのに気付き、真の性愛に眼ざめる——と云った、オチが着てある。

テーマがテーマだけに、性描写は全篇の3/4以上だ——それを計画的に演じさせようとする父親と、計画と知りつつ演じる男女七人の愛欲図絵には、SMの交錯した異様な心理と覗きの愉悅が織り込まれ——軽犯罪法ではあるが、不可解な人間心理の盲点としての覗く、及び盗見の恍惚境——と云ったもの

に「楔」を打ち込んでいて、意図が斬新で衝撃的だ。

○

戦争前に、私は隅田川畔の越前堀にあった「東京税関の映画検閲室」で、輸入映画の申請に関係していたので、いよいよ「上映禁止のカット部分」の試写にお目に掛かったが——あるアメリカ映画で、年頃の娘の入浴を鍵穴から覗き見る父親のシーンがあり——カットの対象となっていた。

豊かな娘に成長した、わが子の立派な肢体に憧れ——秘かに盗み見たい欲望に駆られた父親が、やっとの思いで考えた無難な方法が——それであつたのだ。

その部分が——どうして不可なののか？ 湯屋覗きのように、やはり、法律に抵触するからなのだろうが——元来、覗きほど、日常茶飯事的な行為として、親しみもてる悦楽は、ないのだ。

故佐賀潜氏（弁護士）も、青春時代には、金十銭也（？）とかを献じて悪友の家の二階から「女湯」の光景を観察した、とか？

そうした秘めたる体験は、誰しも想い出せば、無きにしも非ずの——愉快な秘密で——それが、どうして悪いのか？ もっとも、人

間というものが、高度な精神生活を続ける以上、野放しは許されまいし、本能むき出しでは霊長たり得まい。やはり「規律」と云うものが無ければいけないし、無軌道では、社会秩序は維持されまい。

現代の教育は変わった。のびのびと育てることに、重点を置いての構想だが——結果として、二十数年たったいま——再考の時期に來ていると云うのだから「自由の範疇」もむづかしい。

覗き行為を例にとっても、自由だったら？ と思えば、やはり、心細くて、心配になる。自由と野放しとは、違うのだが——。

○

我国では——覗きを「出歯亀」と云う。明治四十一年、東京新宿は大木戸の飲み屋で、一杯やった「大工の亀太郎」こと、通称「亀さん」が、ゴキゲンな千鳥足で、西大久保の自宅へ帰る途中——暗い路地裏の「森山湯」だったか（？）銭湯の扉で小用をたしたくな

った。当時の大久保界隈は、むしろを抱えた夜鷹（売春婦）が出たほど淋しく、日暮れともなれば人通りも断えていたので、人眼につかない暗がりに廻れば、目的も果たせたのだ。

ちょうど、手頃の暗がりがあったので、前を向けると、眼の高さにフシ穴があった。

なにげなく覗くと、湯気のたちこめた向こうにありありと女の裸が見えたではないか？

しかも——凄年増の美人を、真正面から拝見してしまったのだ。

その美人が殺害された人妻——郷田エミ子（28才）さんで、亀太郎は「はッ」と、思わず呼吸のつまる思いで、眼を凝らした。

しかし、それだけだったなら、別に問題でもないのだ。日常茶飯事の出来事として眼の保養位で済んだ筈なのに——亀さんは堪まらず表に廻ると——エミ子さんが出て来るのを待ち構えていた。

従けられていたとも知らず——彼女は、湯上がりの香りをプンプンさせ乍ら、素足を覗かせ、明るい路地から暗い空地へ——そこで劣情に狂った亀さんが、矢庭に背中に、飛びつき——暴行に及んだと云う次第だ。

近頃だったら、さして珍しくもないエッチな事件も、当時は忽ち大評判となり、亀太郎が出ッ歯で、通称「出歯亀」のニックネームで呼ばれていた処から、以来、覗き行為や夜道で女に抱きついたりするのを「出歯亀」と呼ぶようになったのだ——と云う。

○

事件の見方によっては、見えた粗末な構造であった女湯の造りが悪いのであって、男にとつては△天恵の余得▽とでも云うべきものなのに——亀太郎の品性の無さが、何ともはや救い難い結果をもたらしたに他ならない。

世間には、△西洋小咄▽や△フランス滑稽譚▽的な△愉快なアクシデント▽が、余りにも多すぎるのだ。

だから——モノローの映画ではないが、地下道から吹き上げる風で、通行中の女学生のスカートが逆に吹き上がった——見上げる階段上の貴婦人が下着をつけて居なかったり（？）するような、眼のやり場に困る——と云ったアネックススペクトリナドラマも珍しくはないのだ。

一般に△出歯亀派▽は△外向型▽で、分かり易く云えば△ピンク映画▽の△愛好者▽に多い——と云う。肉体もがっちりとした△労働型▽で、ヒ弱な△インテリ派▽ではない。

それと——全く、対照的なのが△ストリップ愛好型▽で、なよなよとした△知能派▽タイプだ。性格は、所謂△内向型▽だから、思いを心に秘め——絶対に行動には、現わさないから——一見△紳士風▽で△むつつり助平

型▽に属するタイプである——と、社会心理学者は説明している。

そう思えば——確かにピンク映画の観客層は、明朗で、開放的で、問題のセックス・シーンにでもなれば、ワイワイ、トントン、膝を叩いて、共感の溜息を洩らしたり、まるで画面の主人公にでもなった調子だ。一方△ストリップ派▽の場合にはそうはいかない——実に深刻・冷静・沈黙研究型で、孤独の情緒に浸っている者が多い。

つまりは、人それぞれの思考が孤立しているのだ。△素晴らしいパイオッだ！▽と驚嘆型もあれば△触れてみたい！▽と感覚派——恋人のそれと比較してみる△医学派▽など、多種多彩だ。

また——あるいは△離婚した旧妻▽のすべとと比較考察（？）している者もあろうし、△情婦の場合▽には、愛のテクニク（？）などを練っている御仁もあろう。

とにかく——ピンク映画派とストリップ愛好派とは、似てるようで、全く、対照的な型なのだから——劇場側は、両者とも個定したファン層を堅持して居り、共に栄えているのが現状だ。

しかし——両者にも共通点があり、それは

やはり△覗き▽を楽しむ△耽美派▽と云うことだ。

○

少年の頃であった。私の隣家に、凄くグラマーで色白の若奥様が住んでいた。御主人もなかなかのハンサムボーイで、共に新婚ホヤホヤの二人だけの生活をエンジョイし合っていたし、その仲睦まじさは隣近所の大評判であった。

私は、この若奥様が大好きで、よく遊びに行つたものだ。

ある午後。私が不意に行くと、部屋の中は奥の方まで、ガランとしていて、障子も襖も明け放された尽の無人の状態だ。閑散としてゐる。呼んでも答えがない。おかしいと思ひ裏側の勝手口に廻ると、微かに、水を使う音がする——どうも湯殿の辺りの様子だ。

私は、ふと禁断の部屋でも覗く、罪意識に悩んだが——それでも、そっと足音を忍ばせて、水音のする方へ廻って行った。

勝手口に通じる扉の内鍵が外れていて、そよ風に揺れている。私は、窓の方から——見では不可ないものでも搔間みる想いで躊躇い乍ら——斜めに視線を向けたのである。

と、意外！ 巨大なオヒップのクローズ・

アップが、真ぐ眼の前にあったではないか。

私は、稚拙なりに仰天して、生唾を呑み込んだ。瞬間——再び、この巨大な肉の塊りは前屈みに屈曲して二ツに割れた白い桜島大根を想わせた。そして二の腕が腋毛も露わに、前に伸びて——たわねにほどけた、みずみずしい黒髪を洗いに掛かったのだ。

美しい若奥様の顔は、洗面器に向かっているので見えない。見えるのは、桜貝のようなピンクに色づいた耳の形と、濡れた海藻のように、くねる長い髪の毛の——黒々とした縞の模様であった。私は、思春期の潔癖さから愕いて自分の勉強部屋へ逃げ帰ってしまったので——そのイメージは一瞬の幻想的なカッティング・シーンとして脳裏に灼きつき、印象的な洗い髪の濃艶さは——その時の尽だ。暫くしてから行くと——若奥様は、巻髪も爽やかな浴衣姿で、ニコヤカに私を迎えてくれた。

私は、気になるので先刻……誰かが、お宅の方に行きませんでしたか？と訊いてみた。若奥様は「そうねえ、そう云えば誰か、玄関の方で呼んで居たようですよ……お風呂に入っていたから失礼しちゃったのよ」と恥かしげに黒い瞳の睫を伏せた。

私は「ほんとに分かりませんでしたか？」と重ねて訊くと「御用聞き」の「坊や」かしら返事しないと、すぐ帰っちゃうのよ」と、別に気づいた様子もなく、艶っぽい眼で、私を瞞めた。

私は、その御用聞き「坊や」に嫉妬めいた羨望を、感じた。

と云うのも、彼が、先刻のような立場に出合った（？）としたら——果たして——私のように逃げ帰ったであろうか？——と邪推したからだ。

その後——私は、しばしばチャンス求めて、不意に訪問したが——あの日、あの時のような素晴らしいアクシデントに、二度と恵まれずじまいであった。

惜しむらくは、あの時の私に「現時点の如き図々しさ」と「前向きの姿勢」があったら若奥様の気づかぬ（？）を——僥倖に、より冷徹な観察眼で、若奥様の審美的要素を——あます処なくキャッチした（？）であろうにと思えば、返すがえすも慚愧の極みだ。

昔語りに、ある木樵が、山で働いて居ると切株にぶつかって失神せる野兎に出会い、労せずして、一匹を得たのに味をしめ、翌朝から仕事をやめて、切株の前で待機したが、激突

失神せる野兎には、二度と再び、お眼には掛かれずじまいであった——と云う。全く、さもありなんで、聽て若奥様は、御主人の栄転で引越してしまい、その秋——腹膜炎で亡くなった（？）とか——母から聞いた。美人薄命とは、かくの如きか。

○ 太平洋戦争が始まった。その頃——私は新橋界隈のあるビルで——報道関係の仕事に従事していた。

御承知のように、東京の新橋と云えば「芸妓」の街だ。朝夕——綺麗どころを眺め乍ら夜ともなれば、酔客のだみ声と、三味線や絃歌のザンザめきに夜更けを忘れる紅灯の巷と化する。

私たちは、遊興族の乱痴戯ぶりを横眼にし乍ら、せっせとサラリーマン業に専心しなければ生きて行けない我が身の辛さをかこち乍ら——「どんな奴等か？ 野郎の顔が見てえや！」とばかり、自棄半分で、アナ場へ覗き穴を探しに専念したものだ。

しかし——必要に迫られると、早急に見つからぬもので、諦めていると——夜警の親爺さんが、意味あり気に、ニタニタと北叟笑んで「日時、場所、人物の出現」などの分

類表など——詳細なデータを示し、アナ場を教えてくれた。

なるほど——データの時刻ともなれば、アナ場から眺める光景は、まるでスクリーンに映し出された映像のように鮮明だ。しかも、フィクションに非ず、真実のドラマの展開だから——凄い！

アナ場には、チャンと予約が出来ていて、順番があるのだ。それに——観る人、それぞれの好みに応じた（時刻と人物の細目）により、手際よく観る方も交替するので——同好の仲間以外には、絶対の秘密であった。

私は、思いがけなく、臨時の仲間に加えて貰った勘定だが——お蔭で、宿直の夜でも楽しくなった。

○

ある夏の宵であった——例によって、外部の状況を窺っていると、ビルの直下にあった芸妓置屋の、女将の態度が可訝しい——のに気付いた。何時もだったら、三時を過ぎれば明るい裡に入浴して抱えの芸妓ともども、一夜の化粧に入るのだが——今夜だけは妙に、よそよそしいムードなのだ。

データにある名簿の旦那も現れないし、部屋全体の調子が変であった。夜警の親爺も

「今晩は、何か起こりませう！——と首を傾げた。

私は、ちょうど宿直日だったから、夜にでもなったら、状態を観察することにした。三階の宿直室の隙間から、その置屋の奥座敷は丸見えなのだ。しかし、まともに眺めては失礼である。やはり、そこは互いのプライバシーを尊重しなければ社会生活は成立たないと知るべし——で、秘密裡の観察場所が作られてあったのだ。

五時の社員退社後は、僅かに電話の女性交換手と夜警の親爺さんだけの——のんびりムードだ。

例によって講談雑誌か何かを読み乍ら——夜闇の訪れたビルの外を観察し始めると——珍しく置屋の裏口附近は、真暗である。普段だったなら——明るい電灯の光で、冷蔵庫の中の物まで、見渡せるのに——今夜に限って扉も閉めてあり、真の闇だ。木戸にも錠がおりていた。

奥座敷と云えば、屏風で囲ってあり、襖は開いて居たが、内部の構図は見えないので、まったく、見当はつかない。

時々——着飾った肥り肉の女将が、何やら夜の道具を足繁く搬び込んでいる様子で——

どうやら、見えたのは寝具の派手な踞模様だけだ。

手前の座敷には、酒肴の膳があり、そこはどうやら個人的な接待らしく、慎ましい。だが、秘やかな宴の場であることだけは察知出来た。夜警の親爺が、そと来て、アーン！——運がええな！——マクロやでエ！——と耳打ちして部屋から出て行った。

「マクロ？——と私は、反芻してみたが——何やら、妙に心残りするだけで、内蔵する言語の意味が、さっぱり分からない。

間もなく、午後九時に近い頃——女将の瘡高い世辞笑いが聞こえて、慌しい足音——まどろみかけていた私は、不意に、置屋の座敷を見下ろした——するとまだ、乙女っぽい細ぎすな芸妓が、ただ一人——手前の座敷の片隅で、怯えた眼付で坐って居た。廊下に近い襖を背にした女将が、何やらしきりと八口説い、居る様子だ。

喋って居る言葉は、聴き取れないが——どうやら相手の芸妓の方は、涙を浮かべ始めていた。暗い裏口附近の湯殿では、何時になく遅れて現われた——データの名簿にある旦那が、酔っているのか（？）湯舟に漬って、心地よげに艶歌放吟の態であった。たすきがけ

の釜炊女が△流し場▽に入ってきて来て、介添え姿も、忙しげに旦那の背中を洗い出した。

夜警の親爺が来た。△いい気なもんじゃ！女は泣きよるにイ！▽と舌打ちして（戦時下じゃ云うに、女は泣かせちよるッ。あの芸者ええ恋人が居るんと違つかッ？ 無法にも買いよってエ酷い奴ちゃア！▽と、にがり切っていた。

間もなく、旦那も風呂から上がり、丹前姿で座敷に現われた。女将は愛嬌をつけさせようと、後退りする芸妓を掴まえ、引立てるようにして、押出す。旦那を相手に酒の酌だ。芸妓は観念した——とは云うものの——やはり嫌悪の心情は隠せず、笑顔にもなり切れなでいる。

女将と旦那は、さしつさされつ互いに盃を交わしている様子だったが——ツイと女将が芸妓の近く寄ると手首を掴んで旦那の膝に抱かせた。すると、旦那の部厚い唇が、小さな芸妓の唇を蔽った。

悶え苦しみ逃れようとする芸妓の肩を掴んだ旦那は強引だ。のけぞる芸妓、女将の疍高い嘲声——逃げようと藻掻く小鹿のような、細い肉体が折れそうであった。

芸妓稼業の現実を、初めて垣間見た私の心

臍は凍った。この芸妓のルックスは瞳も大きく、頬は円く——成熟した女体美に溢れていたが——哀願するような眼射しは、セクシーそのものであった。男と云うものは△嫌がる女には征服慾を駆りたてられるものなのだ▽とは、定説だが——天与の美貌に加え、水商売向きに磨き上げられた、この芸妓の痴態には、男の性欲を唆るにたる——十分な魅惑があった。逃げるたびに強烈なエロチズムを発散するのだから——扱う好色男にとっては堪まるまい（？）と思うのだ。

やがて捕えた鼠を虐む猫のような時間が終わると、旦那は有り余った欲望を持て余す性鬼のように、荒々しく、次の目標たる、奥座敷の屏風の影に入った。

すると——女将が、芸妓の肩を押す。△行け！▽と云う指図に違いない。芸妓は怨めしげにたじろいだ。女将は、いきなり近づき、隠し持った細身の扇子で△ピシッ▽と芸妓の太股の辺りを、したたか打った。

「キャッ」と愕き、慌てて身構える蒼白な顔——迫る女将の、陰悪な眼光。女将は、もう一度激しく芸妓の膝の辺りを叩いた。手向かう芸妓——そうになると女将も怒り心頭に達した模様で——曝き出しの、憎しみを込め——

芸妓を追い詰める。続けざまに△しっしっ△△はッし！▽と、ところ構わず、叩き廻るのだから堪まらない。

逃げ場を失った芸妓は、窓辺の欄干に手を掛けた——と、女将は（危い！▽と悟ったのか——芸妓を引き戻し、俄に両戸を閉め始めた。外界との連絡は遮断され——私も視界を失った。

その後——どうした狂態が奥座敷で繰り広げられたか（？）知る由もないが——想像するだに残忍な終末が、芸妓の身に蔽い被さった——であろうことは——忍ぶに難くない。

○

芸妓の△水揚げ▽を△覗見させる▽商売もある。水揚げ——とは△芸妓の処女蹂躪▽である。一般には——性技に堪能な老爺が、雛妓の処女を優しく破る——場合が多いのだ。

百戦練磨の娼妓なら、いざ知らず——初めて男を迎えるハイティーンの雛妓にとっては意外にも重ねて意外な羞かしい行為のお祭りだけに、女体は勿論のこと、精神的にもまいってしまふのが多い——とのことだ。

しかし——そこは商売女で、馴れれば、男より扱い易い肉体の構造だから、逆に、男を恐れぬ、したたか者と化するのも早い。

女を△美醜別に分ければ、美人ほど羞恥心が弱く、醜女ほど強い△とは、変だが△美人は幼い頃から、男に可愛がられ、男ずれして居るのに反し、醜女は、余り男の対象物とはなり難いから、大部分が△男ずれ△して居ない。△水揚げ△は△醜女に限る△そうだ。

昔から△高橋お伝△△姐妃のお百△△笠森お仙△など——淫婦、姦婦が、美人揃いなのは、キザな男たちの甘やかしのせいなのであらう。とにかく——男子たるもの、すべからく美形に油断は禁物と知るべし。

私の知友でも、美人に失恋し△自殺△した者や、美女にうつつを抜かして居る中に、家業を失い没落した者など——昔語りの浦島太郎よろしく、乙姫様に現を抜かして居る中に白髪老人になってしまった——と云う、世間知らずの輩も、少なくない。

だが——天下の美女を手中に納めて、日夜毎——酒池肉林に耽る楽しみも、また男の生甲斐だ。歴史上——英雄は色を好む——と云われているが、英雄とは、総ての面で常人よりは優れているのだから止むを得まい。

慾望の尽に、権勢の許す限り、天下の美姫を求め、世界中を荒し廻った覇者王侯の物語が——つまる処、世界史なのだから、人間の

歴史は勝者の歴史であり正義なのだから——醜い！△兵よ！進め！征く手には限りなき財宝と、美女と豊かな天地が開けているのだ！△とは、軍の士気を鼓舞した——侵略者や霸王などの合言葉なのだから女の掠奪——しかも女性にとっては最も残酷な△女狩り△が△戦争の主目的△だったのだ。

故に△弱小国家に美姫は少なく、強大なる国家に多い△のも道理——戦勝の獲物として敗戦国の代表的な美姫は△拉置し去った△戦禍の歴史によるものだ。

個人に於いて△然り△だ。所謂、力のある者は、好みの婦女を得るも、犯すも△可能△なのだ。△水揚げ△とは、物心ともに強大なる者が、逆に無力な処女の堅い花の蕾を、残酷にもコジリ開けようと虐む処に△官能的な魅惑△が存在するのだ。

男だったら、誰しも生まれ乍らに芽生え、潜在的に持続し来たったサディスティックな△本能△を、相対的に意識させる△異性△に向かつて、無遠慮に攻撃をし掛ける△愉悦△を求める。

普通だったら△女権の尊重△を、たて前に△平等の立場△で、互いに△異質の性的な喜び△に浸るべきものなのに——一方的に△肉

体の機微△を無視した——強引な門扉の開放を行ない——

潤滑油の、未だ十分ならざる蝶番を『ヒイ！ヒイ！』と軌ませ乍ら、闖入しようと企てる。

未知の△大奥△には甘い蜜もあるうが——妙なる余韻を、残した——女の△驚愕△△悲鳴△△号泣△などのパーソナリティックなドラマが男にとっては、現実のものとは思えない（？）ほどの、新鮮さで△征服慾△を煽るのだから、どうしても△病的△となり、後を引くことにもなる。

それだけ△男の官能△と云うものは、我が俎であって、常に新しい刺激を求め、向上精神に燃えているものなのだから——年令とは無関係で、しかも△エネルギー△であるのだ。

○

美に対する人間の憧憬は△永遠△にして、△不拔△だ。対象は△美形△に限る。

美しき対象の△変化△△動揺△△反応△などを、常軌を逸した空間と時間に於いて△観察△し得る興趣は、普段みられぬ△異常な瞬間△であるだけに、男にとっては、また△高価な代償△を、支払わねばならぬ破目に陥る

僕のイメージ画集『伝

説』室井亜砂路

伝説

亜砂路絵



——結果となる。

稀少価値は需要が供給を上廻る場合に於いて△最高の高値▽を呼ぶものである。かくて残酷な犠牲を求める信奉者たちは対象の△美醜▽△嗜好▽△発育▽などの状態により、最高のダウもいとわず△落札▽に執念を燃やすことになるのだ。

だから——よき対象を得た者の喜びは大き

く——△水揚げ▽の方法についても、かつてない△創案▽をこらし、期待に胸を躍らせるものなのだ。

○

旧前の話で恐縮だが——奇クに掲載されて好評になった文献で△発花杖▽と云う△花柳界での特殊な道具▽の図解があった(?)のを、記憶している。

筆者のネームを忘失して、失礼とは思うけれど——それは、物干竿の両端に穴をあけて紐を通したようなもので——女体をハの字なりに両手を伸ばせば、その紐穴の位置に、両方の手首を縛りつけられる長さで——云わば磔柱の横木のようなもの——その両端にある紐で、両手腕の自由を束縛するため、竿に縛りつける。

両足腿の方も左右に拡げて、同様の形になるよう紐穴の両端で、足首を縛りつける。

これで——女体は、大の字に開いた俤、動けなくなる。あとは力を加える男の自由で、女体は△屈曲位▽△蹲踞位▽△捻り▽△臀背位▽△後側位▽など——極端で自由なポーズが演出できる仕組みになっている。

たった二本の竹竿と紐で、かくも△女体を自由に拘束し得る▽なんて正に△専売特許▽に価する、便利な△緊縛具▽ではないか。そして、これが△どんな場合に於いて?▽△どのように?▽また△どんな女性に、利用されるのか?▽は別として——読者が瞠目し△なるほど?▽と評判を呼んだのも無理はない。

○

最近、見た、覗きの映画に「ザ・ボディ」(長篇ドキュメンタリー・1時間33分・カラ

1・1970年度イギリス作品)がある。人間の△性の神秘▽とか△生殖活動▽を、ズバリ! 女体内の各臓器に△レンズを挿入▽し表から見ることの出来ない△内部の構造▽をカメラの眼で捉えた——ところが面白い。

医学の進歩は△表面的な覗きの研究▽から△体内の真実▽や△未知の現象▽を探り出す——と云う、破天荒な△内部観察の欲▽を満喫させてくれる。

一例をあげれば——人間の「ふるさと」である子宮内部のクローズアップ。人間の皮膚は、剥いで比べると約1・8平方メートル。眼・耳・口の内面と働き。食道から胃を覗き

——肝臓・胆嚢・腸内のゼン動(小腸は約6メートルで、食物は1分間に約2・5センチの早さで約15メートルの大腸から肛門へ)膀胱内部と排尿(腎臓から膀胱へ尿が送られる瞬間——小さな穴(輸尿管)から「シューッ」と、吐き出される尿。ペニスの内部(勃起すれば日本人は平均12センチとなり、イギリス人は約15センチとか?)更に、心臓(日に10万回も鼓動し9千リットルもの血液を排出)する。肺、気管支の内部——こうした体内の撮影には、細いチューブやグラスファイバー(電流を流す化学繊維)が使われ、レンズと

照明で、体外のカメラが反射鏡の映像を、見事にキャッチする仕組になっていた。

最近の医学では肉体内部の△疾病の有無▽を、レントゲン線などには頼らず△内視鏡▽による検査が盛んだ。胃鏡、腔鏡・肛門鏡など△鏡▽のつく臓器の用語は、すべて△内部を覗く器具▽と思って差支えない。

『では△眼鏡▽は?』と問われて困った一幕もあったと云うが——それは例外だ。

とにかく——秘境に対する研究心は、誰にでもあるもので、医者たらずとも——体内の秘境は知りたいし酷い時代には△生体解剖▽まで横行していたのだ。

生きている人間の内臓を見学することは如何なる立場でも許されないのに、第2次大戦では、かなり秘密裡に行なわれていた様だ。

満州に於ける軍事、医学の研究や、ドイツに於ける同様な研究の他に、有名な「ユダヤ人収容所事件」など——とても人間業とは思えない。

当事者らは△自国家に対する忠誠とか愛国心▽などで、この△非人間的な行為▽をカモフラージュしているが、根源的なものは、当事者ら個人の△歪曲された人間性▽に基づく△嗜虐▽に外ならない——と思うのだ。

文化が進んでも△戦争▽と云うものは、こうした△異常者▽には、常に好都合な△大義名分▽を与えるものなのだ。

だから勝者が△敗者▽を捕えた場合には、暴君ネロの昔語りと変わらない△生体実験▽が、学術の名を借りて——実は△興味本位▽に行なわれたり、また、婦女子の場合には、徹底したサディズムが一枚加わるのだから、その苛酷さは、野蛮な時代のそれと、少しも変わりなく、見方に、よっては、諸科学が進んでいるだけに、むしろ、それ以上の残酷さが待ち構えていたのだ。

例をあげれば——ある妙齡のユダヤ婦人はドイツ兵に捕えられるや——消毒の名のもとに、全裸にされ、多くのドイツ兵の見守る中で、眼瞼を強く翻転され検せられた上で△眼薬▽らしからぬ、劇しい痛みの△劇薬▽を注がれた。

悲鳴をあげ、逃げようとしたが、兵たちに寄って、たかかって押えられ、今度は△耳疾検査▽と称し、所謂△耳鏡▽なるものを耳深く押し込まれた。拡張の痛みに——泣き喚くが仔細かまわず——グリグリと△耳垢▽を理由に掻き廻され——終われば△咽喉鏡▽による△口腔検査▽だ。これには確立した理由があ

り、金歯やダイヤモンドを隠匿してないか？と△歯科用の外科器具▽で、歯列の裏側まで突き廻され、金冠があれば容赦なく△釣具▽で引き抜かれる——と云った騒ぎだ。

こうして△五臓六腑▽を、くまなく検せられた女体の最後には、牛馬の如く△屠場▽が待ち構えていた。いや——その前に、成熟した婦人だったら、最も恥かしい用途が待ち構えていたのだ。

○

また——ある中老の婦人は我が子と同年輩ぐらいの若い医学生△実験材料▽とされた。彼は自分の母親ぐらいの、上品な婦人を△腔鏡▽に掛け、ふるさとを観察した後——拡張度を調べるべく、行なってはならぬ方法で、無理に拡大具を駆使した。動物的な悲泣の交錯する裡に、貴重な検査は、終わった。

しかし△肛門鏡▽を使つての△精査▽が始まる。理由は——腸内に於ける貴金属の有無を探検するにあり——と云うのだ。その前に浣腸する。結果は、隠匿の事実あり——と見て△排便促進の医学的実習▽などと、まことしやかな理由づけがされるのだ。

この若きドイツの医学生には△マザー・コンプレックス▽があり、その△精神的な治療

法▽の一環として、こんな中老婦人に対するサディスティックな△検診▽が、必要とされたのだ。

彼は、この母親と同様な年頃の老婦人の肉体を、医学的な△実験材料▽とするよう、教授から命ぜられ、実行したに過ぎないのだ。

我が国に於いても一人前の軍医にするための、養成を、こうした△非人間的な実験▽により、教育した——一時期もあった(?)と伝えられる。

○

昭和十七年の頃であった。中国大陆は山西省奥地での話——この△軍専用の慰安婦▽にも△定期検診▽と称する、性病の有無を調べる女性自身の検査が△毎週一回▽宛に、行なわれていたのであるが——ある早朝——不意の△非常召集▽が掛かった。現地では△抗日中国人▽のゲリラなどが出没するので、不随意に部隊の集結が行なわれており——女たち15人も、急いで兵營の前に行った。

すると、部隊の軍医長が、やって来て△正午に身体検査を実施するから、体を清め、定時に、診療室へ来るように▽との命令であった。検査は先日すんだばかりなのに——と、みんな顔を見合わせていると——内地から附

添って世話をやいている「オトウサン」が、「若い軍医さんが……来られるんでな！」と意味あり気に、かきこまって附言する。△なるほど——顔見せなのか？▽と思ひ、風呂に入つて部隊内の診療室へ行くと、何時もの様子と違い、体長計測の柱から、農作物の計り台——はては、平板に両手の位置と両脚の位置を手型や足型で、かなり拡げて描かれたもの——また、三方を高い衝立で囲った、明るい窓際など——異様な、たたずまいだ。

何時も助手を勤める「お兄さん」みたいな衛生下士官も、今日だけは、妙に緊張している。△何か？ 恐ろしい検診でもなければよいが？▽と、ひそひそ話し合つて居ると——オトウサンが△今日は、各隊付の若い軍医さんたちの、勉強会でな▽とだけ云った。

△勉強会？▽と聞いて、女たちは、思わず頬を紅らめた。何時もだったら、年とった軍医長だけが、神妙な手つきで、女たちを調べていたのだ。

それなのに——また医学生のような、あどけない軍医が、落着きのない表情で、室内に6人も現われた時には——女たちは当惑のムードになっていた。

軍医長は△君たちにも、いよいよ国家のお

役にたつ時が来た。ここに集まった見習士官は隊の優秀な軍医だが、「検診の実際」を知らぬので不肖、本官が実技の指導に当たることになったのである。こんな立派な御奉公はあまるまい」と云ったような訓辞であった。

軍医長は、大阪出身の有名な婦人科医だから、恥かしいなんて気持は少しも起こらないのだが、現われた6人の軍医たちは、いづれも、24才か25才ぐらいの平凡な、見習士官としか見えなかったもので——女たちが、本能的な羞恥心で、迷った——のも無理からぬことであった。

女たちの「非常呼集」は、実は、こうした見習軍医たちの「検診実験台」に供されることだったのだ。

15人の女たちは、それぞれの位置で、衣服を脱いで、6人の、若い軍医たちの視線を浴びた。

軍医長は、医学用語で、女たちの——それぞれの肉体的特徴を説明した後——身長の計測実習——重量検査を指導し——特に乳房の検査などについては、6人宛——実際に握らせ、その硬軟の状態とか、大小弛緩の有無をためつすかしつ診察した後——最後の検査、実技に掛かるのであった。女体は提供しても、

かかる検査は初めてであった。しかも——軍医たちの見守る場所での、裸の検査なのであった。実際の女体を真正面から眺めたことのない、若い軍医たちは、軍医長の説明も、耳に入らぬようなあがりようであった。女たちも、つい尻ごみしてしまふ——。

最後に衝立で囲まれた——内部に入ると、窓に面した方向に背中を見せ——両足裏の描かれた位置に、自分の足裏を合わせると——八の字に両足が広がった。それから——前屈みに両掌を描かれた位置に広げて、伸ばす——ちょうど土俵上の柵錦（現春日野親方）が四股を踏ん張った体型になった。股間の風とおしが、薄ら寒く——両方の乳房が、まるで牛のように床板に伸びそうであった。

女たちは、こうした破天荒な形に仰天し乍らも——御奉公と思い——羞恥心に耐えたのであった。

「徴兵検査」の体験者だったら、忘れられぬにがい想い出として、この「人権を無視した羞恥の体型」を憎むであろう。あまつさえ、堅く締まった菊座を無遠慮に広げられ、覗き込むのだ。女たちも男性と同じ扱いを受けたのである。普段だったなら——全く眼隠しされた個室で、隙間から覗かれる心配もなく、安

心して医師の検診を受けるべき——女体であった。

しかも——診察台に仰臥して町重な看護婦さんの介添えもあり、女体は固定されても、全く逆の体型で、腔鏡を掛けられるのだから——

診察の実態も厳粛——そのもののなのに。

——戦地とは云え、女たちは——最も簡便な検診の型を取らされたのだ。

軍医長は、手馴れた手技で、女体を背後から診察し、若い軍医たちも、それに習った。

しかし、軍医長以下——あくまで謹厳実直——毅然たる態度で、女体を扱ったと云うから——女たちにとっては、せめてもの救いであつたらう。

○

ちなみに「婦人科医」の別名は「覗き屋さん」だ。誰が考え出したのか——うがったニツク・ネームではないか？

然も——厳粛な職業としての「覗き」だから、猥褻ではない。ところが、逆に——世の中には「軽犯罪」に該当する「覗き」もあるのだから、注意せねばなるまい。

最近の「覗き」はまた「視覚的」なものから「聴覚的」へと移行しつつある模様だ。

日本テレビ（46年9月8日）金原二郎シヨ

「△スタジオ陪審席▽」盗聴されたプライバシーが、その一例だ。

被害者の若妻が訴え——加害者であるバーテンの若者が、野末陳平まがいの黒眼鏡を掛け——被告席で、悪びれる様子もなく佇立すれば、金原氏が事情聴取に入る——両者は、千葉県船橋市の某アパートに住む、隣り同志だが——ある日のこと、若妻が、日毎夜毎——夫婦で話し合うプライベートな秘密が、みんな外部に洩れて、近所の噂の種になっているのに気付いた——可訝しいと思った夫婦が、隣室との境に当たる△押し入れ▽の天井裏を覗き見ると△煙草の箱ぐらゐの大きさの▽盗聴器が置いてあるのに、気付いた。

それは、最近——市販され始めた△集音装置▽で、約300メートル以内の距離だったら、FMラジオを利用して——どんな△微音▽でも捕捉し、傍受できる便利な物で——値段も九千円ぐらゐだから、なかなか売れ行きもよく、何らか（？）の役にたっているのは分かるが、まさか——こんなことに利用されて居よう——とは（？）夫婦だって夢にも思っていなかったのだ。

若妻は憤激の余りテレビ番組の陪審員△藤原弘達△評論家・白石浩一△心理学者、など

の諸先生▽に事情を訴え出たのだ。

だが——現行の法律では△罪にはならない▽し△電波法でも処罰できない▽との決論であった。

しかし、別項の法律で、例えば△住居侵入罪▽とか△名誉毀損▽などで△処罰▽は出来るから△法廷に訴え出なさい▽とのことであった。

○

また——NETテレビ（46年9月9日）奈良和モーニングショー△追跡・あなたの私生活ものぞかれる▽でも△人生相談の菊本先生（弁護士）を中心にした討論があり——盗聴器によるプライバシーの侵害に就いての問題——が提出された。

この被害者も、実は——住んでいる家屋の軒下に△盗聴器▽が設置されていた——というのだ。

他人の秘密を△興味本位▽で△盗聴▽したり△録音テープ▽に納めたり——する（？）それだけでも△人権蹂躪▽なのに、喋られてもしたら、大変迷惑する△秘密▽や△秘事▽を、興味本位に吹聴したり、一部の好事家にテープなどを売りつけたりする——悪どい輩が、最近、とみに増えているそうだから、

始末に悪い。

そのため——いたたまれず、アパートを探して引越して行った——団地住まいの若夫婦もあり、この種の悲劇は、次第に増えつつあるのだ。

前記の藤原弘達氏は——いrownな△公害時代▽だが——この△盗聴▽も、重大な一つの△公害▽である以上はなんとかして△防止▽せねばなるまい——と論じていた。菊本先生も△現段階では人間の良識に待つ他はない▽と断じていた。

○

かくて、覗きの心理も、直接に覗いた△出歯亀時代▽から、電波を利用する△盗聴器時代▽へと移行し、将来は△小型テレビ▽の発達で、罪の意識もなく△覗き心理▽を満足させてくれる、間接的な△視聴時代▽へと進展するであろう。

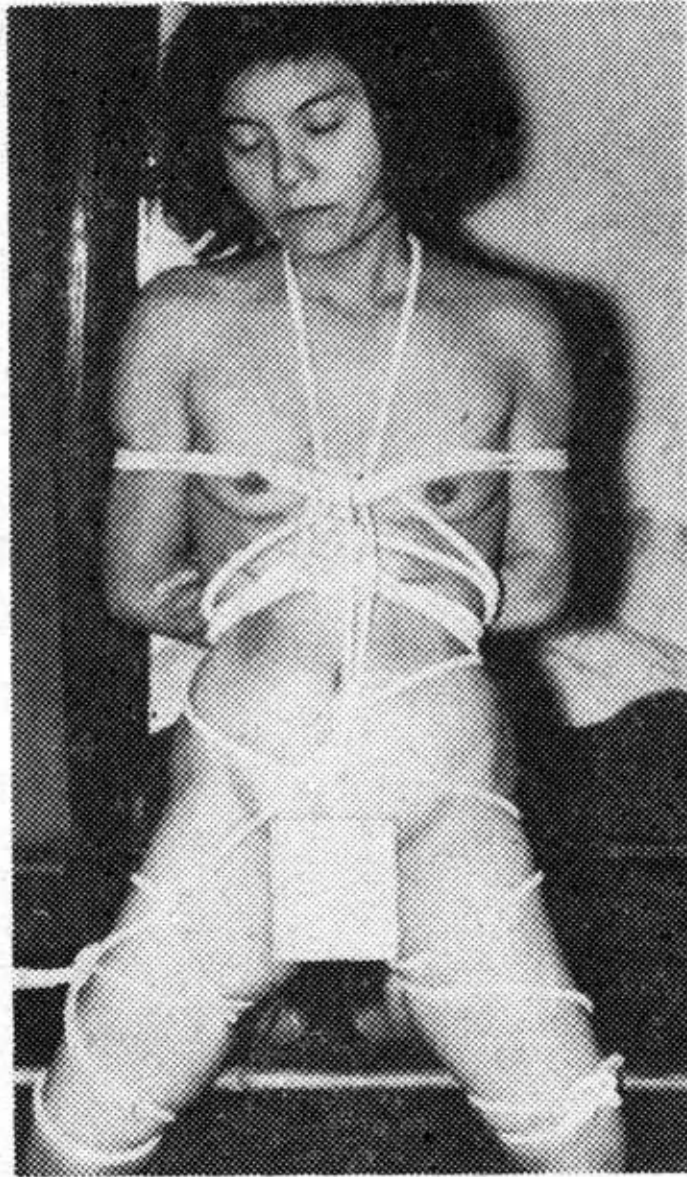
隠すべき手段のたてられない時代——そんな時代ともなれば——その時にはもう△覗きの心理▽とか△覗きに関する犯罪▽なんか、△遠い昔語り▽になってしまふのではないだろうか？

——（終）——

△奇ク10月号を読んで▽

夫 婦 プ レ ー 雑 感

渡^{わた}部^べ光^{みつ}雄^を



てしまうのですが、今年もまた暑さに負けてしまって、十日ばかり、ダウンしてしまいました。そんなわけでした。そんなわけで折角、奇ク誌上で多くの方々から呼びかけを受けていながら、ついついペンを取る手がにぶってしまい、大変申し訳なく思っておりましたが、どうやら朝夕、なんとなく秋の気配を感じるようになって、体調もどうやら上向いてきました。

△1▽
 糖尿病なんていう、やっかいな病気をかかえている私にとって、この暑い夏を過ごすということは、中々大変なことでした。
 毎年、真夏になると、五日ほどは床について

／木山春夫君の手記「好美夫人を縛る」を拝見し、一入感慨深く、読ませて貰いました。あれは四月初め頃でしたから、彼も随分、考えてから発表したらしいです。それにしてもあの日のプレーについては、好美から、くわしい報告を受けて、かなり成功であったと確信は持っていました。が、プレーの様子が活字になっているのを見ますと、好美からの報告とその内容が少しも変わらずに書かれており興味深く何度も繰り返し読みました。

彼が熱望していた好美とのプレーを私が許し、彼のアパートの一室で決行するといった演出が、思ったより効果があったようです。常々彼とは何かと話し合っています。が、文章になったのを読んでみますと、彼の心の底にあるプレーに対する本当の姿を知ることが出来たように思えて、私自身、嬉しくなったり赤面したりする始末です。

好美にも読ませましたが、「いやだ、こんなに、はっきり書いて恥かしいわ」などと言いながらも、万更でもないといった顔をしています。と、いっても、彼を私達夫婦の間に迎えるには、色々な試行を繰り返しての結果なんです。夫婦間に第三者を招き入れること自体がとりかえしのつかぬ結果を招くことになりかねない要素を多分に含んでいるからですが、木山君は、私のこうした試みに、大変協力してくれて有難く思っております。

今でも時々、我が家を訪れては、夕食を共にしたり、三人でプレーに汗を流したり、また、好美と彼の二人だけで、かなり強烈なプレーをやって、好美を悦虐の極に引ずり込んだりします。好美を責め抜き悦ばし続けるテクニックは、中々堂に入ったものです。

私の長い間の夢であった「愛妻が自分以外の男性の手によって丸裸にされ、恥かしい格好を強制され、縛られた上で、やがて自ら被虐を求め、セックスまで求める」といった願望までを十分満足させてくれ、時々訪れる彼を私は心待ちにする様にさえなっています。

好美も、若者の手によって思う存分、責められ、その後にくる性の悦びを、この上もない幸せと感じているようです。しかし、一旦

プレーから離れた彼は、至って行儀のよい、少し控え目な明るい青年で、子供達とも大の仲よしで、今では家族同然の親友となっていますが、またと得難い同好者として、長く交友の続くことを願っております。

△ 2 ▽

十月号で「わが妻は最良の協力者」を発表されている縄木縛太郎氏の告白文、大変楽しく、すがすがしい気持ちで一気に読ませて頂きました。なにか、私達がSMプレーを始めた頃を思い出させてくれる文章でした。

そうして、あまり他人様のプレーについて意見めいたものを好まない私ですが、何か縛太郎氏には話しかけたい気持ちが、しきりに致します。

常々思いますのは、夫婦のSMプレーの大原則は、何といたっても、妻の理解と協力であるうと思えます。夫がS性の場合、特にこの原則を守らなければならぬでしょう。時として、夫だけが、カッカッと燃え上がってくるとS性をどうすることも出来ず、無理矢理、妻をねじ伏せ、縛り上げ、ムチ打ちだ、蠟責めだと、自分だけの感情の高まりにまかせて一人よがりをして、潮の引き去った後のむなし

さだけが残り、妻からもアイソをつかされたという話をよく聞きます。

また、そこまで行かずとも、自分の性癖について、妻に打ち明け、協力を求めることがあります。妻の方は、そんなことには関心がなく、夫のたつての頼みならと、心の中では、かなりの抵抗を感じながらも、裸になり縄を受けカメラの前に立つことになります。

そこまでは協力が出来ても、色々責めてみたくなるのもS性の気持ちであり、ついつい、責め始めることになります。妻にしてみればそこまでは心の準備が出来ておらず、「こんなことなら、もう一生、協力しない」という造反がとびだし、折角のプレーも台なしにしてしまうことがあります。

これは私の経験的に見た失敗談ですが、貴殿はその点、奥様の協力が、とてもうまくゆき、抵抗も少なく、スムーズにプレーに入っ

てゆかれたことを大変、羨ましく思います。毎日の夫婦生活の中で、時々何か変わった刺激がほしくなるのは当然ですが、SM同好者は、それをSMに求めるわけで、それだけに夫婦SMプレーの場合、セックスを切り離してSMを考える事は出来ないと思います。

夫婦のSMプレーは、本来のサド・マゾと

は少しその次元が別の所にあると思います。
夫婦SMプレーの成功の一つの方法として先ず第一に大切なことは、責めそのものが、苦痛から、やがて快楽へと移行してゆくような責め方を考える必要があります。

これも私の経験からのお話ですが、舐責めにしても、針責めにしても、女性の性的な興奮をかき立てながら責めてゆくことが、やがて被虐の悦びを体自体が覚えることになり、心の奥底にねむり続けていたM性を快くゆり起こし、悦虐の頂へ向かって、燃え上がらせてゆけるものと思います。

貴殿の愛妻飼育が今日まで成功している点は、先にも少しふれましたが、奥様の協力がとても密接なことで、貴殿のテクニックの素晴らしさが相俟って、奥様ご自身が、自らの被虐感を呼びさまされたところにあると、私は固く信じます。ですからその後日「今日は一度、思いきり責めて欲しいの」と奥様が告白されるまでに成長されたのだと思います。

Sであれば誰もがM性を飼育してゆく過程で、この一言をどれだけの期待と興奮を以て待ち望んでいることでしょう。

貴殿の告白の中で、この場面が案外、さらにとして居りますが、本心は天にも登る思い

であつたらうと想像します。

針責めについて、私の考えを少し述べてみたいと思います。貴殿は、木綿針を使っておられる様ですが、これも私の経験談で申し訳ありませんが、先日、マゾヒスチック・アニマルの谷山久美子さんにお目にかかったのですが同好者K氏とのプレーにて、木綿針の責めを受けたと申され、その責め跡を拝見しましたが、かなり皮膚が荒れておりました。

それを見るにつけても、注射針はもともと皮膚を射すように出来ておりますので、軽くつつくだけで結構、強烈な責具になります。

如何に熱心な夫婦SMプレーの愛好家として、ノーマルな時間を過ごす方が長いのですし、いつもプレーによる責め跡をつけたままにしておくわけにもまいりません。その点、注射針に依る責めは、よほど強烈に責めつついても、すぐに跡形が消えますので好都合です。

私達も針責めプレーがとても好きで、よくやりますが、最近では、お尻や女性自身に洗濯用のクリップを、あちこち十個ばかり挟みつけ、その間を針でつつくといったプレーをやっており、かなり強烈なSM感を味わっております。一度、私のアイデアを参考に針責めをやってみて下さい。

それから、貴殿の告白の中で、うれしく思ったことがあります。それは夫婦プレーを始めて五年にもなりますのに、「まだまだ聞きかじり、読みかじり云々」と、ご自分を謙遜しておられることです。性の解放だの、ポルノ解禁と、やたらに騒がれる昨今、夫婦SM同好者の中にも、夫婦交換に依るSMプレーを訴え、口にする人々がかなりある中で、或は貴殿の心の中に新しいものを求める何かを感じながら、それを口にされなかった事に、私は逆に、うれしく思いました。

私も一時は、交換によるSMプレーを夢に見て、幾度か誌上にも呼びかけてまいりましたが、未だに実現せず、いま一步という所まで進展していたカップルとも、顔を見ぬままに終わろうとしております。幾多の試行錯誤を経て、三人プレーの一つの定着を見、それを通して考える時、夫婦交換に依るSMプレーの自然的実現にまでは、まだまだかなりの時間とお互いの努力が必要だと思っています。

少しでも、その実現を望む同好者は、先ずSなりMなりといった次元以前の、人間的結びつきを積み重ね、破ることの出来ない絶対的な信頼感を養い、その上でのSMプレーが夫婦交換といった新しい方向に移行する自然

的条件が生まれるのではないのでしょうか。

私のこんな意見を、貴殿はどのようにお思いになりますか？ いつの日にか、お聞かせ下されば、嬉しく思います。あの貴殿の告白は遠くプレーを始めた頃の、私達夫婦のいろいろな思い出をふりかえらせ、残暑にうだる暑い日の清涼剤として、とても新鮮な思いに浸ることが出来ました。

貴殿のよりよき協力者である奥様と、マイペトスのプレーを重ね、よりマゾ願望の強い女性へと飼育され、再び誌上にてお目にかかれる日を楽しみにしております。

△3▽

月日の経つのは早いもので、辻村氏と交際するようになって、一年が夢のように去ってゆきました。私達にとって辻村氏との出会いが、ただSMプレーだけの交わりでなく、私自身、氏の豊かな人生経験と宗教的理念を通して語りかけられる話の中に「夫婦とは、人生とは、生きるとは」といった人間の心の中に大切にしなければならぬものを、しみじみ教えられたものです。

私達夫婦のSM的指向も、氏の教えのあるかぎり、決して間違わないと信じています。

八月の始め、突然、辻村氏の来訪を受け、いつもの様子と少々変わっているの、何かと書いていたら、「折入って相談があるのだが」ということで、いよいよ、これは大変な話になりそうな予感が、私の頭の中を駆けめぐりましたが、あにはからんや、

「今度、東映でドキュメント映画『性倒錯の世界』というのを制作するについて、私も出演することになったのだが、ついては、あなた夫婦にも、少しばかり協力してくれないか」という話でありました。

思えば、三月十五日号週刊サンケイ「異能人間シリーズ」に辻村氏が登場されましたがその時、左端の写真が愛妻好美であることを知って驚き、少々途惑いを覚えた私達ではありましたが、今度、映画となるとは、またこれは大変だと思いつつも、氏のソフトな話し方に、いつしかペースを合わせ、協力を約束してしまいました。

色々と貴具の話が出て、どうしても針責めをやりたいのだが、ただ小さな針でつくだけでは迫力に欠けるからと、次のようなアイデアを考えて来られました。先ず針の尻に羽根をつけて、遠くから女体に投げつけるとい

な発想力には驚き、且、感心しました。

それにも増して、その投げ針の貴具の製作を私にまかされたことは光栄の至りでした。早速、注射針と正月に使う追い羽根を用意して注射針の尻にボンドをつめ、そこに羽根を固定して試作品を三本ばかり作りました。

妻をモデルに使ってみました。羽根がきりきりと回転しながら、女体に突きささり、思ったより、よい結果が得られたので、十本ばかり作ることにして、その旨、辻村氏に報告しましたが、いずれ、明るいライトの下で辻村氏に依って緊縛された愛妻好美の全身に私の作った投げ針が突きささることになるでしょうが、果して、この投げ針が、映画的效果を現わし、SMシーンが表現できるかどうか、期待と不安が交錯する昨今です。

SMという言葉の氾濫する世相の中で、その本筋を守る奇ク誌の中心的存在の辻村氏がテレビ、雑誌、映画と、マスコミにのって、益々有名になられる事を、大変嬉しく誇りに思う反面、何か、そっとしておいてあげたい、また、なんの理解もない興味本位の群衆の中に、氏を八晒し者Vのようにしたくないと願うのは、私一人の思い上がった態度、私一人の思い過ごしでしょうか。



女斗美ストーリー

艶姿土俵祭

(1)

奮斗士好太(カットも)

だがしかし、関東、奥州を巡るいくつかの女相撲一座のうちでは、この緋緘たちの人氣が最も高いのだった。

梢の冒険が成功をおさめた、思えばおかしな助太力試合の日から早くも一年になろうとしていた。

梅雨のあけた灼けるような上州の青空の下を女相撲一座が興行を続けていた。梢のために折角の雇われ仕事を果たせなかった、あの緋緘たちの一座だった。

手がずらりと揃い、それに花錦、桃の里と云った年増がほどよく渋さを加え、そして力相撲が売りものの巨体を誇る梅香森、相撲の巧さと美貌の緋緘を頂点に据えて、今が盛りの華やかさなのだった。

惜し気もなくさらす、はち切れそうな若い裸身に、ただひとつまとった黒緋子の締め込

みの程のよさ。激しくぶつかり合い、もみ合うふたつの女体の生々しさ。鋭い技の応酬の美事さ。若手の真剣な土俵態度と老巧のゆとりある手さばき——女ならではの妖しい魅力に酔わされた男たちは、ただ夢中で彼女たちの四股名を呼び一番一番の勝負に我を忘れていた。

どちらかが必ず敗れねばならぬ勝負のきびしさと無情感が彼等の胸を打った。

勝ち名乗りをうける女力士への歓声にも増して、雷も傾き、乱れた締め込みを整えながら土俵を退る娘力士の背に、惜しめない声援

がおくられた。人気は噂を呼んで興行の先々での入りも上々、しぜん女力士たちの取り組みにも力が入る。激しいけいこにも一段と拍車がかかった。

まだ明けきらぬ早朝から、十三尺の土俵の中に熱気が渦巻いた。

雲斎のけいこ廻しひとつをきりりと身にまとった、はち切れるような若い裸身がぶつかり合った。たくましい足腰が躍動し、激しい気合いが飛んだ。水を浴びたような汗に光る女体の生々しさ。艶やかな肌も、豊かな乳房も、砂にまみれ、汗にまみれて、火を吐くような荒々しい呼吸――。

気の弱い者なら男でも顔をそむけなくなるような光景なのだった。

「おれたちの若い時のけいこは、まだまだこんなもんじゃなかった」

けれども、古手の花錦などに云わせると、

このけいこも甘いのだそうだった。

「おれたちのけいこなんか、へとへとになって、目の前が真っ暗になるまで休ませて貰えなかったもんだ。投げ転がされて起きあがれないと、姉弟子が縦みつをつかんでぶら下げて立たせたり、土俵の外へひきずって行って頭から水をぶっかけられたり、ひどいもんだ

った。それでもおれたちは強くなりたい一心で齒をくいしばってがまんしたもんだ。それにくらべれば、今の若い者は、ちょっと廻しがゆるんだと云って休み、汗をふくと云っては土俵をさがる。おれたちに云わせりゃ、まるで遊んでるようなもんだ」

花錦が云えば、これも古株の玉椿が、大きく頷きながら同調する。

「そうだったよなア。ちょっと気を抜いたことをやろうもんなら、姉弟子たちが入れかわりたちかわり、かわいがってくれたもんだ。よってたかって、まるでおもちゃにされて、一日でも早く姉弟子たちを負かしてやりたいと死物ぐるいでやったもんだ」

「ああいうのがほんとうのけいこっていうもんだ。このごろのなんか、まるでだかおどりだ。齒がみが出るねえ」

齒に衣を着せぬきびしいお叱りなのだけれど、これが花錦の口から出ると、誰の耳にもとげとげしく感じられないのだから、やはり花錦の人徳とでも云うのだろうか。

「また始まった」

と思いつつも、実際それだけの実績を持つ先輩たちへの敬意を忘れない娘たちなのだった。

事実、昔の荒げいこを口にするだけあってけいこの時の花錦は、まるで別の人になったのかと思うくらいに、きびしかった。

磯菊、花の戸、綾桜といった、ようやく素人っぽさの抜けて、女力士らしさを身につけつつある若手に対しては容赦のない猛げいこを要求した。若手同士の申し合いには竹棒を片手に鋭い目を光らせる。さすがに打ちたたくことはしないのだけれど、土俵ぎわへ追い詰められても、ちょっとでも力を抜いたりしようものなら震えあがるような怒声が飛ぶ。ぶつかりげいこには自ら土俵に入って、次から次と引っぱり出しては、汗と涙に顔をくしゃくしゃにしながらぶつかって行くのを容赦なく土俵の砂へ、たたきつける。

相撲は体で覚えるもの。体の方が、しぜんと技のままに動くようにならなければ駄目だというのが、花錦の信念なのだった。

緋緘もまたこの花錦の荒げいこの洗礼を受けた一人だったのだけれど、この考えは間違っていないと思うようになってきたのだった。そして花錦や緋緘の期待通り、この若手の成長はめざましかった。素人っぽかった綾桜は見ちがえるようにたくましくなり、締め込み姿も凛々しく、そのみずみずしい娘力士

ぶりは、お目当ての客も少なくなかった。若駒も、その持ち味だった早い相撲にさらに強さが加わって、ひとまわり成長した感じだった。そして、花の戸、磯菊らの、きびきびした小気味より取り口――。

興行先で飛び入りの男たちの狙う相手は、当然こうした若手なのだった。若々しい肢体を惜しげもなくさらして男たちの相手をするこの娘力士は、しかし、少しのかけひきも手加減もなかった。がっぷりと胸を合わせての四つ相撲――などと、甘いことを考えて土俵へ上がってくる男たちは、たちまち猛烈な突っ張りにはねとばされ、逆に突っ張ろうとすればいなされ、あるいはふところへ飛び込まれて喰い下がられて、まわしをとるいとまもなく気がついたら土俵を割っているという有様ではとんど相撲になる者はいなかった。けれども、こうした真剣な土俵態度がますます人気を呼んで果ては誰がこの娘たちと五分にわたり合えるかということに男たちが互いに張り合ってくるようになったのだから、人気とはおもしろいものだった。

そこへ行くと、年増組の玉椿、桃の里、花錦といった連中の相手ぶりはさすがに年期的入ったうまいもの。年増とは云え、まだまだ

おとろえぬ肌の色艶や胸乳の張りも惜し気なく、がっぷりと四つにわたり合って、寄り合い、つり合いに技と力を競い合い、重ねもちとなつて土俵下へ転落する。相手の男たちに存分に相撲をとらせながら急所は決して譲らない。そのきわどい勝ち方が、若手とはまた別の男たちの功名心をそそのめた。女ながらも玄人相撲のうまさや強さを誇る美事な心意気だった。

一方また看板力士たる緋緘の人氣は、さすがに安定したものだった。鍛え抜かれた強靱な筋肉を女ざかりの脂肪が程よく上乗りにして一段と丸味を加えた体つきは文字どおりの脂の乗った今が絶頂の取り盛り。キリリと締め込まれた黒襦子の一分の隙もない程のよさ。

錦絵から抜け出してきたかと思われるような彼女の肢体は、その土俵上の所作のひとつひとつが男たちの心を捉えてはなさないのだった。そしてその相撲ぶりも今では立派に梅香森と互角の取り組みができるまでになっていた。力くらべの強引な相撲では、さすがに梅香森の巨体と強力に一步をゆずりはするものの、巧さと鋭さのうちに女らしい柔らかさが感じられた。名実ともにこの一座の金看板として、緋緘の名は、他の女相撲一座の間に羨

望と、ねたみのうちに知れわたり、興行先の男たちからは、いつも熱狂的な人氣でむかえられていたのである。

順風満帆とも云えるこの一座。しかし、意外なところに難問が待っていたのだった。前の興行地での好成績に気を良くした一行が、何のくつたくもなく乗り込んだ月野町。そこに先乗りに出ていた親方が思いもかけず、むずかしい顔で待っていたのだった。

「どうしたっていうのさ」
おかみの不審に答える親方の話は、こうだった。

この附近一帯を取り仕切る興行主のところへ顔を出したところ、すでに話をまとめて行った一座があるというのだった。

「そんな馬鹿な……この辺は、こっちの縄張りだった筈ですぜ」

という、

「だって、お前さん方は、おそくなったじゃないか」

という。

なるほどいつもよりは十日ばかりおそくはなったけれど、雨が多かったせいで毎年この時季にこの附近をまわることは十分承知している筈。それを話しても、何故かはっきりし

た態度を見せない。はなしのわからぬ人ではないのに、今度に限ってどうしたとか、女相撲など、どこ的一座も同じようなものだというような口ぶりさえ見せる。

何か裏がある――。

と胸を押えながらやりとりするうち、とうとう

「それじゃ、先に話をつけて行つた方の顔も立てて、今度だけ二座合同の興行にしたらどうだろう」

と持ち出してきたのだった。

おそらく、最初からの腹づもり。成績の上からぬ一座に泣きつかれての苦肉の策だったのだろう。

相手の一座というのは、本来ならば常陸から房州辺を地盤にしている女相撲の一座。この二、三年、不漁が続いて、あの辺の景気がよくないとあって、興行の入りもよくないという話が耳に入っていた。

一座の女力士たちもその大半が年増で、人氣も下り坂という悩みもあった。

「それで、お前さんはその条件をのんできたのかい？」

おかみの問いに

「しょうがねえじゃねえか」

うつぶんがおさまらぬといったような、親方の渋面だった。

「そんな馬鹿な話はない。それじゃお断わりしましょう、と、よっぽど云いてえところだったんだが、この辺りは、入りの多いところだ。この縄張りを手放すわけにいかねえからなあ……」

結局、晴天三日間の二座合同の大興行というふれ込みで、売り上げの方は、双方の勝ち星の数によって分配しようということと話を付けてきたというのだった。

「こっちの成績のいいのに目をつけた奴が、何とかくらくらいついて、おこぼれを貰おうって狙いなんだ」

「きたないねえ、まったく……これがほんとのひとのふんどしで相撲をとろうって寸法じゃないの」

おかみの軽口に笑い声が湧く。

「笑いごとじゃねえよ」

親方は飽くまで渋い顔。

「いいか、今度の興行じゃ、向こうにひとつの勝ち星もやるんじゃねえぞ。けが負けでも承知しねえぞ」

「そんな無理なこと云うんじゃないよ。向こうだって一生懸命なんだろうからさ」

「いいや、駄目だ。おい、緋藏。おめえは短氣を起こすんじゃないぞ。梅香森。おめえはそそっかしいから氣をつけるんだぞ、ほかの者も、いいな」

腹の虫のおさまらない親方のとんだ、とばっちりに、娘力士たちは顔を見合せての苦笑い。けれど、ほかの一座との対抗相撲もなれば、親方の叱言がなくても、お互いに負けたくはないのが当然だった。

娘たちの顔に緊張の色が、ただよった。

花の戸、磯菊たちの若手は早くも顔を、こわばらせるほどだった。

緋藏も不安は、ぬぐえなかった。一瞬の差が勝負をきめる相撲のきびしさは身にしみてはいても、取り口も知らぬ他の一座との取り組みとなれば、その不安は、自信とはまた別の存在でもあった。

「しょうがないわ。何も考えないで、ぶつかるだけだわ」

緋藏は心を決めた。そうと決めれば、あとは、かえって氣が楽だった。

「相手だって同じこと。お互いに噂だけしか知らない同士なんだもの……」

その点では、互いに手の内を知りつくしている一座の内の取り組みよりも、やりやすい

かも知れなかった。

ただ、絶対に負けるな、という親方の厳命には少々困りはするものの、この一座の大関の名に恥じないような相撲をとれば、親方だって無下に叱りはしないということなのだろう……。緋緘は、そう考えた。そして、そう考えることで、自らの心の迷いも、また消し去ることができたのだった。

「それで、向こうの顔ぶれは、どういう具合なんですか」

花錦の問いに

「おお、そうだ」

親方が、ようやく思い出したとでもいうように、割りを取り出す。

「かんじんのものを忘れていくせに、ただ勝て勝てって云ってたって、この子たちはどうしようもないじゃないかねえ」

おかみに叱られて

「どうせ、たいした顔ぶれじゃあねえんだ。もう峠を越したのが大半。あとの残りは、まだ素人同然の子供だ。だからって気を抜くんじゃねえぞ」

まだ腹のむしがおさまらぬと見えて親方は子供っぽく念を押しながら、皆の前に披露した。初日から三日間の取り組みで一日十番ず

つ。

「なかなかいい四股名ばかりじゃないのさ」花錦が、つぶやいた。

対する相手方の陣容は次の通りだった。

大関 利根錦 二十七歳 五尺六寸 二十

五貫 左四つの寄りが得意

関脇 江戸桜 二十六歳 五尺七寸 二十

貫 右四つからの吊りが得意

小結 青梅川 二十八歳 五尺六寸 二十

五貫 立ち合い一気の押しが得意

前頭 那須の里 二十歳 五尺五寸 二十

貫

同 多摩の花 二十六歳 五尺四寸 二

十一貫

同 早瀬川 二十七歳 五尺八寸 十八

貫 随一の長身、吊りが得意

同 吾妻川 二十九歳 五尺五寸 二十

二貫

同 若利根 十七歳 五尺六寸 十七貫

同 琴の沢 三十歳 五尺五寸 二十貫

同 常磐川 二十五歳 五尺四寸 二十

貫

十七歳の若利根、二十歳の那須の里を除いては、すべて盛りを過ぎた葉桜組。相撲の巧さは買えるけれど、若さあふれる取り口は望

むべくもなかった。落ち目の人気を、この興行で何とか盛り返そうとの意気はうかがえるものの、それも所詮かなわぬ望みと半ば諦め顔の女たちでもあった。

登り坂の若駒、綾桜、花の戸、磯菊、今が盛りの若桜、緋緘、梅香森、そして玉椿、花錦、桃の里と程よく粒の揃った陣容は親方の言葉のとおり、戦わぬ前に勝負はきまったかの観もあった。

「親方を、がっかりさせるようなことはしませんよ。ここが、あたしらの力の見せどころだ。なあ、みんな……」

花錦が、きっぱりといい、他の娘も力強くうなずいた。

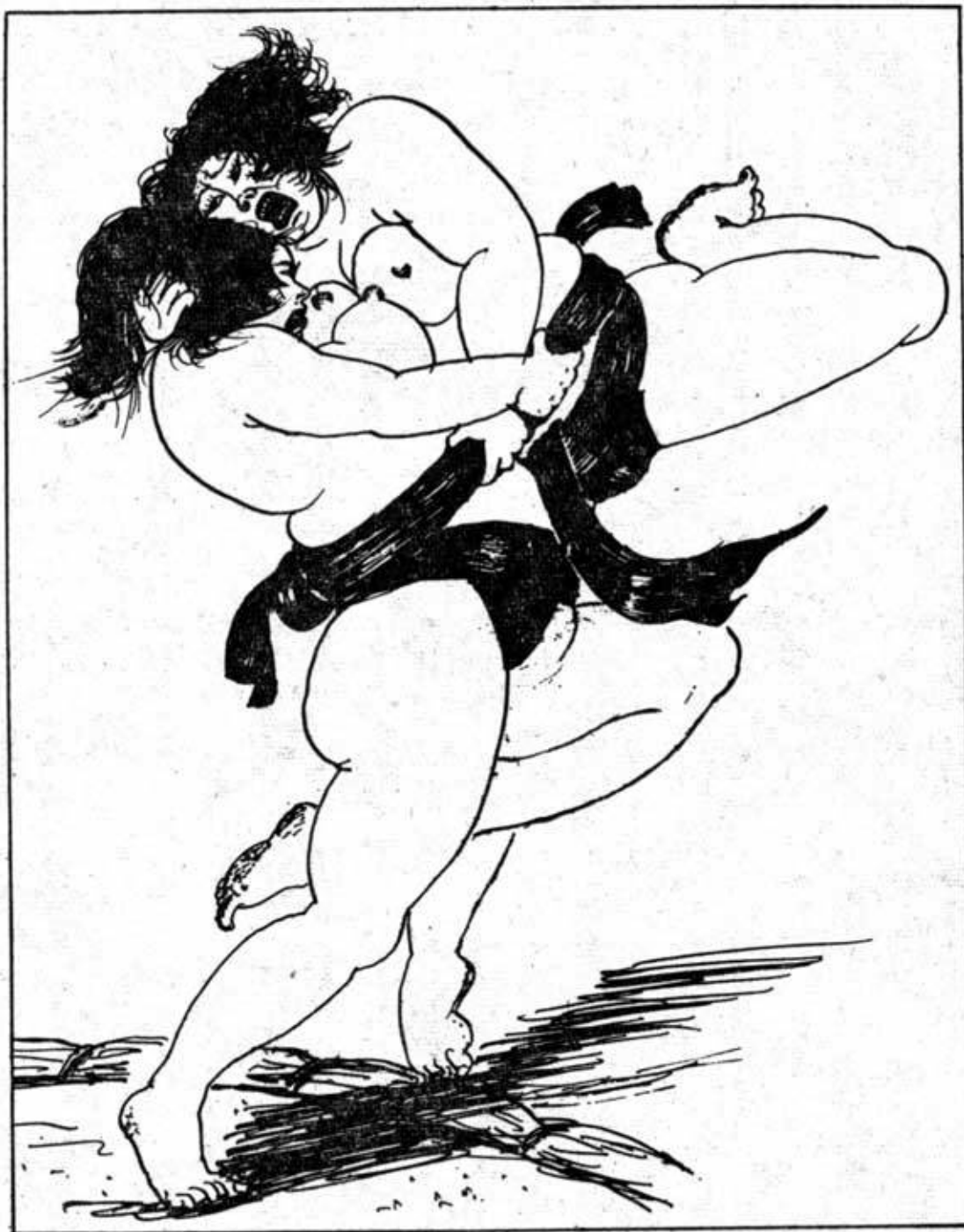
初日が明けた――。

心を弾ます太鼓の音が、小気味よく響きわたっていた。

二座合同の興行という、めったにない催しに見物の足も浮き立って、木戸には溢れるような客の流れだった。なだれ込むように木戸をくぐった観客は、たちまちのうちに機敷を埋めつくした。

人気の筆頭は、もちろん緋緘。毎年この附近で興行を打ってまわるので、名前も通っているし、彼女を目当ての客とい

読者ギャラリー 『激闘』 椿 寿 郎



うのも少くないのだった。
 「どうだい、緋緋は強くなったかな」
 「あったりめえじゃねえか。もう梅香森なんか、齒が立たねえって話だ」
 「いや、まともにぶつかったんじゃあ、まだ無理だろうよ」

「何云いやがる。まともにぶつかるだけが相撲じゃねえんだぞ。動きの早さ、あの投げのきれのいいこと——。梅香森ののろまじゃ、つかまりっこねえよ」
 「そうだ、そうだ。相撲の格が、ちがうってもんだ」

「だがよ。梅香森の、あの突っ張りを、うけてみる。あれを残せる女相撲は、いねえぜ」
 「馬鹿野郎、女相撲は力だけじゃねえんだ。あんな色気も何もねえ、力まかせの相撲しかとれねえ梅香森なんざあ、ありゃ女じゃねえよ。それとも、おめえ、梅香森に借りかなんか、あるのか」
 「そんなのあるわけ、ねえじゃねえか。俺はただ、おめえがあんまり緋緋々々と、のぼせけえってやがるから……」
 「いいじゃねえか。あの女っぷりのよさ。胸乳の張りぐあい……。たまらねえなあ」
 「よだれを垂らすんじゃねえや」
 「だけどよ、緋緋はもちろんいいが、若手の若駒ってえのは、ありゃいい女相撲になれるぜ。あの相撲っぷりの小気味のいいのは一等だな」
 「いや、若手ん中じゃ綾桜がいいな、俺は。あのねばり腰は、どうして大したもんだぜ」
 「けど、あれは、まだ子供だからな」
 「いやいや、そんなもんじゃねえ。さっき支度部屋から顔をのぞかせてたところを見たんだが、もうすっかり娘の色気だったぜ」
 「何だ、この野郎。もう支度部屋を、のぞきに行ったのか」

「俺がのぞいたんじゃねえ。向こうが、のぞいてたんだ」

「わかるもんけえ。きつと、まだふんどしもつけてねえ素っ裸でも見られると思いやがったんだらう」

「そうだ、そうだ。それで張り手かなんか、くらって、ここまで素っ飛ばされたんだろ」

「何を云いやがる。勝手なことをぬかすと承知しねえぞ」

「待て待て。取っ組み合いなら、あすこの土俵へ上がって、やってくれ。こんなところじゃはた迷惑だ」

それぞれのひいき力士の噂話から脱線して一杯きげんのけんかまで始まろうという熱っぽさ。期待と興奮が次第に高まってきて、観衆は次第に、その熱気を押えきれないようなやりきれなさを感じ出していた。

土俵の上だけが静まりかえって周囲とは対照的な姿を見せていた。それはまた勝負の世界の冷厳さを象徴しているようでもあった。

支度部屋はさすがに、ふだんの興行の時のような、のんびりした賑やかさはなかった。たちこめる若い女たちの甘い体臭は、いつものとおりだったけれど、娘たちの表情は、緊張に、ややこわばってみえた。

すでに締め込みを着け終わっている女たちの肌も、いつもの艶を失って、鳥肌立っているようでもあった。

落ち着きなく腰を上げたり下ろしたりしているのは綾桜。若駒は立ち合いの練習を何度も何度も繰り返し、花の戸は腕を組み、唇を噛んで、じっと一点に目を据えていた。

ふだんの興行ならば、お互いに技も気心も知りつくした同志。得意わざを披露し合って勝負の山をつくる——相撲のおもしろさを十分に楽しんでもらおうという取り組みなのだけれど、今日からの勝負は、そうはいかないのだった。

興行成績をかけての真剣勝負——。お互い知らない者同士の本勝負とあれば、落ち着かないのも当然だった。

この興行の土俵に上る女力士の中では、いちばん年若い磯菊が、仲好しの加茂の花に手伝わして締め込みを着けていた。

まだ肉乗りが薄く、若駒はもちろん、綾桜にくらべてさえ細身にみえる磯菊が、甲斐々々しく渋い黒縹子の布地を、そのしなやかな腰にまとい着けている着剣な表情は初々しかった。足を踏み開き、唇を結んで、加茂の花と呼吸を合わせながら、ひと巻きずつ、てい

ねいに締め込んでゆく、娘らしい張りのある肌が紅潮していた。けれども、何か思うようにいかないのか、先程からもう二、三度ほど、やり直しているのだった。

「どうしたんだい、菊ちゃん」

さっきから見ていた桃の里が声をかける。

「どうもうまく決まらないんで……。なんだかキリッと締まってこないんです」

「どれどれ、あたしが手伝ってやろう」

桃の里が代わって、布地を受け取る。

さすがに手なれたもの。分厚い布地も桃の里の手にかかる、見ていて小気味よく締め込め込んで行くのだった。

緊張感が磯菊の頬を染める。

後ろの結び目を形よく整えて、ぐいと縦みつを引き上げる。手の握りひとつを余し、ピタリと端の長さが決まる。

まだ柔らかみの見られる下腹のあたりを巾広く包んだ前袋が、太腿の間へ流れ込んでゆく形のよさ。小ぶりの双臀をすっきりと割る縦みつの粋な味——。素人っぽさの残る磯菊だけに、そのいさぎよい廻し姿は、加茂の花が見とれるくらいに、すがすがしかった。

「みんな、支度はすんだかい」
おかみが入ってきて声をかける。

「おやおや、みんな思いつめたような顔をして……」

ひとわたり見まわして笑いかける。緊張をほぐそうとの心づかい。はち切れそうな裸身に囲まれると、かつては土俵へ上がった大柄なおかみも、かぼそく見えて、娘力士たちの締め込み姿が一層、凛々しく映える。

「そいじゃ、しっかりやってくれよ。なあにおかしな相撲さえとらなきゃあ、お前たちのもんさ。あとは云うことないよ」

「はい。おかみさんは、どうぞ安心して昼寝でも、しててくんない。勝負が終わったらあたしが起こしてあげるから……」

花錦が自信たっぷり云う。

「じゃ、ほんとに寝てようかしら」

「大丈夫ですとも、十戦全勝、目をさましたら枕もとに白星が十ばかり並んでるって寸法ですわ」

気持がほぐれたか、若手の磯菊までが軽口を云う。

「ほんとに嬉しいことを云うじゃないか。この子もおとなになったねえ」

花錦がわざと乱暴に磯菊の背中をこづく。

ようやく支度部屋に笑いの湧いて、女力士たちの闘志は一層、燃えさかった。

やがて取り組みの時刻が来る。

東西の花道から、派手な浴衣を軽く羽織った女力士が土俵下の控えへと歩を運ぶ。

艶々と結い上げた大髷のほどのよさ。頬を染め、唇を結んで進む若手力士たちの初々しさ。軽く笑みを浮かべ、ゆったりと歩を運ぶ年増力士の落ち着きぶり……。そのすべてが男たちを酔わせ、我を忘れさせるのだった。沸きかえるような場内の歓声は、誰が誰の名を呼んでいるのか全く聞きとれなかった。その歓声のつくり出す大きなどよめきの渦の中へ、すべての見物の心が巻き込まれて行った。

呼び出しの美声が喚声を透して響き渡り、一瞬鳴りを静めた見物が、さらに一層の興奮を加えて沸き返る。

まず土俵へ上るのは、東から若駒、西方から常磐川。新進と老巧。まずは、この興行の幕あけにふさわしい対照の妙を見せて、興味満点の取り組みだった。

若々しいのびやかな肢体のつややかな膚に黒繻子の締め込みがにように映えて、娘ざかりの美事な裸身が男たちの目を奪い、若駒の背にわれるような声援が浴びせられた。やや上気した表情ながら、何のためらいも

なく、きびきびと土俵へ上る若駒。

さすがに、この先陣を任せられた重荷に立派に応えうる振舞ではあった。

一方、老練の常磐川は勿論、手なれた落ちつきぶり。見物の視線に笑みを返す余裕も見せる。上背はないが、どこからどこまでも丸味を持った肥軀。厚い胸の上のふくらみは、やや、ゆるみを見せているものの、せり出した巨腹を、渋い茄子紺の締め込みで支え、ゆったりとした手さばきも、若駒とはちがった魅力もあった。

若駒の若さをどうさばこうというのか——気負いの見られる若駒。しかし、思いきりよく、高々と足を挙げて四股をふむ。その股間を引き締める縦みつの妖しい魅力に観客の熱気は、さらに高まるのだった。

「どうでい。いい体つきになったじゃねえか若駒は……」

「あの、尻の丸味なんぞあ、たまらねえな。ふんどしがキリッと締まり込んだところなんか、ふるいつきてえくらいだ」

「おいおい。俺にふるいついたって、しょうがねえよ」

「向こうの姥桜は、何て名前だ？」

「何だっていいじゃねえか。若駒だけわかれ

ば、いいや。おおい、若駒ア。負けるな！」
両一座のこの興行の吉凶を占うに似た大事な一番。ともに負けられぬ勝負だった。

若駒はさすがに全身がこわばるのを感じていた。足が土俵の砂になじまぬ感じだった。

「落ち着いて……」と深く呼吸をとって、前みつをひとつぐつと押し下げ仕切りに入る。視線を常磐川の喉もとに据えて、足もとを固め、腰を割る。

ややたるみの見られる常磐川のふくらみがわずかに揺れて、若駒のはやる気持を誘う。

堅さのとり切れぬ若駒。氣負って突っかけるのを常磐川受けず、次に若駒の焦ら立ちをそるように、わざと早目に突っかける常磐川——。互いに一度ずつの待ったを応酬したあと、三度目。清く立ち上がったふたつの裸身が俵の中に激しくぶつかり合った。

何のけれんもない若駒の突進、わずかに当たり合ったと思う次の瞬間、とっさに右へ変わった常磐川。この辺のかけひきは、さすがに老練だった。

目標を失った若駒。相手側の土俵ぎわまでのめったものの、危うく踏み止まったのは、日頃の、けいこの賜物だった。しかし、向き直ったのが精いっぱい。備えを立て直す、い

とまも与えぬ相手は、双差し、がっちり両まわしを引いて腰を落とした万全の備えから一気の勝負をかけ、寄り立てる。俵を伝って逃げる若駒は、あくまで勝負を捨てず、苦戦にゆがむ悲愴な表情が男たちの胸をしびれさせ、判官びいきの声援が沸きかえった。

若駒の引き足を追いかけ切れず、常磐川の足の運びが、やや乱れを見せる。このあたりは、やはり年齢の差というべきだったのだろうか。若駒の若さが常磐川の追撃をわずかにかわして、捨て身のひねりわざが辛くも利いて、常磐川の丸い体が横転した。

大きく肩で息をしながら勝ち名乗りを受ける若駒。大任を果たした嬉しさが、その全身にあふれ、喜びに頬が染まった。

控えから見上げる同僚の女力士たちの間から、はっと安堵の吐息が、もれる。

この一勝は、まさに貴重だった。

絶対の優勢を逆転された方は、前途に一抹の不安を感じ、拾いものに近い勝利をものにした方は勝負のつきを強く意識して、自らの勝ちまでを予想した。

続いては、同じく若手の花の戸と相手方最年長三十歳の琴の沢の対戦。

これも姉弟子の奮戦に氣負い立つ花の戸の

前には、さすが年期の功も空しかった。

激しい突っ張りの先制攻撃に、たじろぎながらも琴の沢が突き返して反撃しようとする一瞬、出足の伴わぬ隙をついた花の戸の思い切った、ひきおとしに、琴の沢は、もろくも両手をつく。

勢いに乗る綾桜、磯菊の前に、続く若利根は土俵の砂に埋まり、巧者吾妻川も敢えなく土俵を割る。

正に波に乗った者の強さだった。

土俵経験から云っても、実力から見ても、こんな一方的な勝負になるほどの差があると考えられないのだったけれど、先陣若駒の逆転勝ちに氣をよくした若手たちの、こわいもの知らずの思い切った相撲ぶりが、力以上の結果を生み出したのだった。

勝負のおそろしさ、おもしろさ、とでも云うのだろうか。

「何だ何だ、だらしねえじゃねえか」

「これじゃ、まるで玄人と素人の勝負みてえなもんだぞお」

「もうちょっと、力を抜いてやんな。片一方ばかり勝ってたんじゃないか」

観衆の声の中に、相手方への同情もまじるほどだった。

次の一番、玉椿と早瀬川は、かなり力の入った四つ相撲——。

立ち上がり二、三合突張り合ったあと、右四つがっぷりにわたり合う。これは吊りが得意の早瀬川にとっては有利な体勢だった。果たせるかな、一呼吸のあと、早瀬川、腰を落として強引に吊りを狙う。つま先立ってこら

える玉椿、とっさに足をとばしてそとがけに防ぐ。こうした応酬が続いて、次第に土俵につまる玉椿。廻しがずり上がって、吊られる度にゆるみ伸びた縦みつの喰い込むのが痛々しく玉椿の苦戦を物語っていた。殆ど一方的な防戦に玉椿の斗志も、やや衰えた。追い打ちをかける早瀬川の強引な吊り——。遂に玉椿の両足が土俵を離れ、足をばたつかせての

【伝言板】 ○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

抵抗も空しくなった。すっかりゆるみきった前袋を押えながら土俵を下りる玉椿の胸が大きく波をうつ。勝ち名乗りを受ける早瀬川の背にようやく拍手が響いて、控えの女力士たちの愁眉も開く。しかし、このあと再び若桜花錦が勝ち続け、暗雲はやはりこの一座をまだ去らなかつた。

そして随一の巨軀を誇る梅香森の登場。盛り上がった肩をそびやかし、むっくりと突き出した胸のふくらみをゆすって、ゆらりのつしと土俵へ上がる。ふくれ上がった様なその巨体は、しかし少しのたるみもなく、ふれればはじき返されそうに張り切った肌の色艶は取り盛りの圧倒的な迫力をもっていた。

江戸桜とて五尺七寸、二十貫の体軀。相手の刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載していないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。

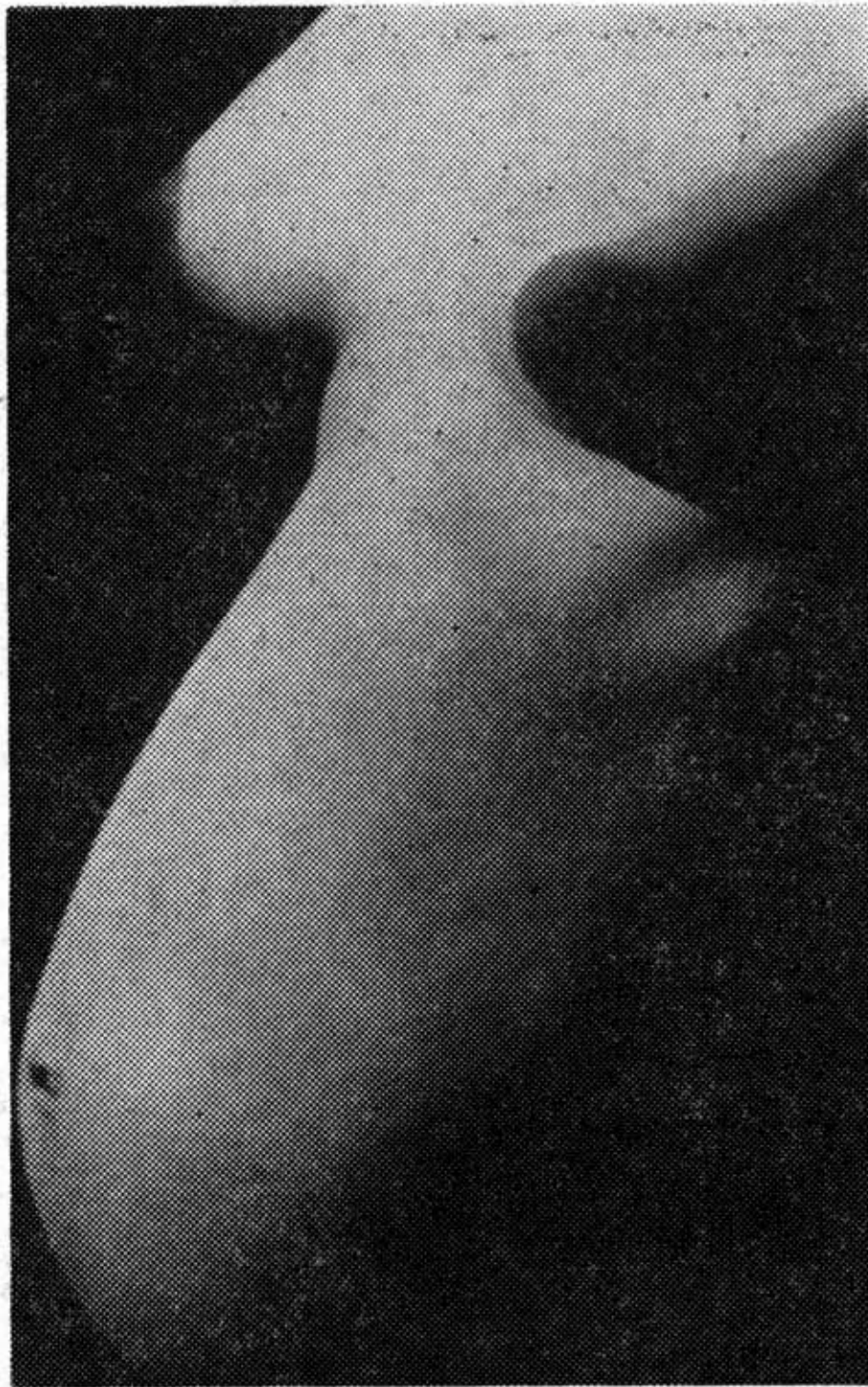
○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号出版株式会社へ願います。

が梅香森でなければ、その見事な女力士ぶりは花形と呼ばれるにふさわしい魅力をもっていた。しかし、力の差は明らかだった。二突き、三突き、文字どおり相手を土俵下まで吹っ飛ばしての豪快な勝ちっぷり。余りのことに江戸桜が唇を噛んで下がる。

味方のふがいなさに頬を染め、奮然とした面持ちで土俵に上がる利根錦。やや盛りは過ぎたとは云えさすがに貫録は十分。渋い小豆色の締め込みに一分の隙もなく、力強く踏みしめる四股に、豊かな乳房がゆれる。対するのは手どりの桃の里、喰いさがって相手に廻しを許さぬ体勢に持ち込めれば、大関利根錦であろうと勝算は十分——と、やや細身のやわらかい体に斗志を漲らせて立ち向かう。

立ち合い、低く突っ込む桃の里を、利根錦は一步もひかず受け止めた。そしてもろざしを狙う桃の里をはね上げるように突き返しておいて素早く左で前廻しをとる。美事な相撲ぶりだった。喰い下がるつもりが逆に反り身にされては詮なし。さすが業師の桃の里も、その足わざの切り札を出す暇もなく、ずるずると後退。利根錦の理詰め相撲の前に土俵を割る。大関の貫録だった。機軸から嘆声もれる。玄人らしい渋い相撲ぶりだった。

スイス版、ピエール・ジュソン著「ラ・ハアム」所載のもの



わがコレクション

外国誌から妊婦フォトを拾う

松本一彦

かつて写真は、フラッシュ撮影がほとんどで、大きな破裂音と瞬間的な閃光に肝をひやすことが多く、このショックが妊婦の胎教に好ましくないから、その戒めからの訓告か？「妊婦が写真を撮られると、生まれた子が早死する」とか、言い伝えられたそうなの……。

現代では写真を撮られるチャンスも多くなったことや、写真技術の発達、小児医学の進歩に因んで、とるにたらないことで、女性自身が拘らなければ、なんら抵抗のない問題となつて、また、時代の風潮にもよるが、異国でも女体の本来の宿命を担う神秘的な「みもち女」の美しさを隈なくネガティブにとどめ、その麗像の讃美を惜しまぬフォト作家が現今俄に際立ってきたように思う。

○

このキッカケは洋書店での覗きみからで、周囲のお客に気を配りながらも、膺へはだVのちがう「孕んだ美しい女体」に眼を止めた時は、たいへんな胸の鼓動で、好奇心のまましばらくは、その妊娠美に魅せられて、ページを閉じるのを躊躇ったものだ。

その代物が、スイス版「LA FEMME (ラ・ハアムII女)」というピエール・ジュソン(仏)のデラックスなフォト集で、翌日

になってこの著本を手に入れた際は満足感がいっぱい、大事に抱え込んでいたのを疑うほどの喜びだった。

明暗／＼のコントラストの中に、妊娠初期の裸体や突き出た臨月腹の白い肉体をリリーフ調（浮彫）を思わせる表現でとらえて、立体的な効果が十分に伺える黒白フォトの妙味である。

大判変形のサイズ（290mm×280mm）が更に視覚を引付ける要因となっている。

まざまざと大きく盛りあがった腹部をアップ。肌毛が艶光りしているのが非常に印象的で、無修正の箇所が極く当たり前のようで、不自然さは、ひとかけらもないアート・フォトであった。

○ この興奮が、まだ覚めやらぬころ、次いで

『フォトグラフィー・イタリアナ』（一九七〇年四月号／イタリア版）を、ひもとくことができた。

乱れた髪が却ってあざやかさを増して柔らかなふくらみを持つ両肩に垂れ、幾分、反り気味なポーズが、二つの乳房と丸く出張った

腹部を剥出しに、その重さを支えた腰が深く黒い影をベッドに落として、可愛い幼女が張り切れんばかりのオナカをスキン・シップする幼氣が実に神聖で、また、若妻の甘い体臭をも酌み取れるほどの詩情のあるファミリー作品であった。

この「まるはだか」なイタリア女の異常なボリュームと艶やかさを見ると、およそ骨太で小柄な日本女性の妊婦容姿とは、どこか風采に差異のある見解を知るビューティフル・フォトであった。

○ 間もなくして、触れてみたくなるような美しいプレグナント・ウマンのフォトとは相対的なドキュメンタリーの生々しい「ア・チルド・イズ・ボオン（赤ちゃん誕生）」なるイギリス版の医学写真集が仲間入りしたのが私の資料を賑やかにした。

ピーター・オウンの編集により、アン・デリー博士の



イタリア版「フォトグラフィー・イタリアナ」（1970/4）所載のもの

フランス版「20ANS」(1970/12) 所載のカラーフォト



立合いのもとでロナルド・スウィーリング夫人の恥も外聞もなんのその……。

はばかりに分娩の実体を克明に撮らせ、披露した、勇気ある写録への挑戦の著本である。

まったく度肝を抜かずかすかすのフォトで、張ち切れそうに膨満した下腹部には、妊娠線がヨダレを垂らしたように幾筋の流れを見受

け、なにより強烈なのは、出産の接写妙技が凄く忠実さで感心させられた。

分娩台の産婦の体が一枚の白い被布も掛けなく、自然のままの仰臥位の恰好で、陣痛の煩悶表情から胎盤流出まで一部始終、写しだされた稀少な「お産」フォトである。

○ 免も角、根気よく都内の洋書店や古書店通

いをしていると、時折、ビックリするようなページと向かい合うことがある。

フォト・マガジンで『ウーマン』(一九七〇年の春と秋の両号にアメリカ版)や、『マガジン・フォー』(一九七〇年七月号にドイツ版)に妊婦フォトが掲載されて、白人女の孕んだ肉塊の素晴らしさ、美しき妊婦の形容そのものの作品を見ることができて、両誌とも妊娠した女体を飾り気なく、被写体を素直に撮っているのが好感だ。

そしてファミリー・マガジンの『エルタアン』(ドイツ版)とか同傾向の『パレンテ』(フランス版)などは、カラー・グラビアの鮮明なページに、プレグナント・ウーマン(妊婦)の姿態や出産状況を未練気もなく紹介しているのには驚きだ。

○ お国柄と言ってしまうえばそれまでだが、かような面での現実度が我が国とは、かなりの違いがあることは確かである。

○ ところで、我が国でも季刊『写真映像』誌のフォト・イメージ③に、多分、エド・フィン・デルエルスチンの作品録の中だったと思うがヒッピー風な妊娠中期の女が前向きオール・ヌードで立っているセクシャリティな姿

態と……。

胎児の頭部が露出した出産場面が惜し気もなくハブリケイションへ掲載Vされ、続いて⑤ではレスリー・クリムスの「化石の部屋」の中に、「裸のみもち女」が数点、収まっている。

その内、海辺に立ってへ豊満隆起の臨月腹をキッチリ締めつけているパンツが破れんばかりで、私の方が懸念したくなる位……V上衣を脱いでいる悠々しくも逞しい女体の様相が忘れられないイメージであった。

○

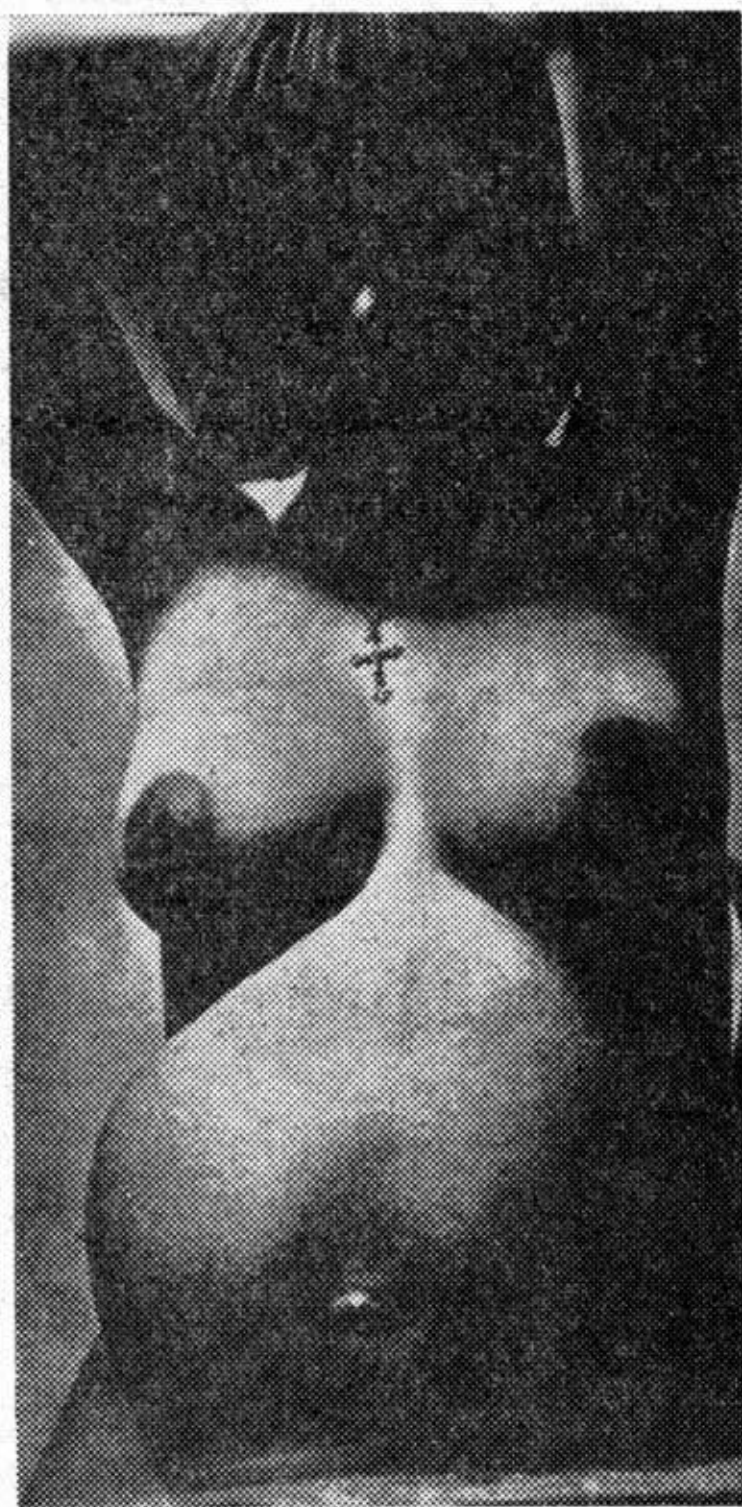
また、異例なことに「カメラ毎日」(一九七〇年十月号)で、スイスの「カメラ」誌と同時特集したというインタナショナルな企画の「彼のもの彼女のもの」のテーマにも、産み月間近な妊婦裸像が見事に写しだされ、お腹の中の胎児とお茶目な二人の幼児が話しかけているようなメルヘンは絵作のようで、感嘆するに価する気持の、穏やかなフォトであった。

その他、「ケイプア」「20アンス」「ルック」「ライフ」誌などで眼に触れた妊婦フォトが若干あったが、それ程かなめのものとは思えないので、内容の記述は除くことにし

た次第である。

○

これは属外だが、我が国でもフォト作家の深瀬昌久氏が「朝日ジャーナル」(一九七〇年十一月八日号)誌のカラーグラビアで「第五象限」のテーマに裸体の妊婦を横側から撮らえており、最近では中央公論社から刊行された、フォト・シリーズへ映像の現代Vの④「遊戯」の著作の中にも妊婦をストーリーに加えているのが興味あるので、添記して置きたい。



フランス版「20 ANS」(1970/5) 所載のもの

寡少ながら、以上が私なりに眼の行き届く範囲内の「異国の妊婦フォト」の内実であるが、最も忘れ難いのはハリウッドの女優シャロン・ティートの妖麗な妊娠姿態が、殺害事件以後に各誌に曝されて、その女らしい孕んだ容色が実に物憂げであった。

いまも尚、薄いアンダウェアの装いを透けて、肉付きの締まった美しいボディ・シルエツトが記憶に残っている。

——(了)——

カット・須坂 旭



被虐の旅シリーズ

イーゼルの責め

由利美千子

かな空気では勿論なかった。ジョンは黙って前方を見ている。サンフランシスコまで随分、遠い感じがした。しかし、街の中に入って、

「モリスホテルだね？」

と念をおされた時、私の胸は急に高鳴ってきた。私は二人の男を二人とも傷つけたくなかった。私は二人とも愛している。どうしたら、いいのだろう。私が悪い子なのだ。お仕置をうけても仕方のない子なのだ。でも、葉山とジョンを会わせて、どうなるのだろう。車はホテルの前へついた。

「さあ……」

とうながされて、私はフロントから葉山の都合をきいてもらった。

日本語のわかる人がフロントにいて、日本人に、あいそがよかった。

葉山は、すぐ下りてくるという。私は、つばをのみこみたいのに、つばがないような感じで葉山を待った。

「やっぱり、来たね」

葉山は機嫌のいい顔で私の前に立った。私がおそくなると電話でことわっておきながら夕食に間にあう時間にホテルへついたので、喜んでくれているらしかった。私の胸は、よけい、痛んだ。

私たちはジョンの車でサンフランシスコへ向かっていった。正確に言えば、ジョンの叔母さんの車だった。

道は、すいていた。日本のように、つながっていない。車の数は多いのだろうに何故なのだろうと思ったが、ジョンに話しかけられる空気ではなかった。

気まずい空気でもない。といって、なごや

「御紹介するわ」

と、私はジョンを引きあわせ、

「送ってきて頂いたの」

と葉山に言った。

葉山は、にこやかにジョンに礼をのべ、ジョンも又、なごやかに握手した。本来なら、それでジョンは帰るべきなのだ。私を送ってきてくれたというだけなら……。しかし、そういうわけには、いかなかった。

「話したいことがある」

ジョンは言った。

それをきいた葉山の顔に、さあっと何かが走った。葉山は私の目を見た。

「昨夜、話したメキシコ村で会った人なの」

私は悪びれずに言った。

「わかった」

と、葉山はジョンにわかるように、英語でいい、

「夕食しながら、きく話とも違うようだ。どこで話合おう？」

とジョンに、きいた。

「ここから一時間ほど離れた所に叔母の家がある。叔母は留守だけれど、そこまで来てくれれば一晩中でも話が出来る」

というジョンに、

「一晩中、話をするなら、先ず、ここで夕食を食べていこう」

と葉山は言った。

「オーケー、実は腹がすいているんだ」

とジョンは言う。

私のおそれていた、男同志の険悪な空気はどこにもなかった。二人とも紳士だった。いや、それ以上に、二人の間に通い合う、やわらかい空気は何なのだろう。私は昨夕、葉山にジョンが被虐を好むということを話した。ジョンは又、私の乏しい英語の説明で、どこまでわかってくれたのかしらないが、葉山と私は縄によって結ばれている友情があると知っている。会うまでは、どんな男かと、お互いに思っていたのだろうが、会った印象が良かったのかもしれない。嫉妬の裏に相手の良さをみとめあう寛容さがあるのだろう。

食事をしながら、仲よく話合っている二人を見てみると、私は楽しかった。私は愛する二人を同時に傍において幸福な思いがした。こういう贅沢を女はしてみたいと思う。それが、つかの間のしあわせであつても、私はたのしかった。

○

「このひとが、何を望むかキミは知ってるの

か？」

葉山はジョンに言った。

夕食をすませ、ジョンの叔母の家の居間でヘネシーエキストラを葉山にすすめながら、ジョンは私と結婚したいと言い出した。

結婚という言葉は私にも意外だった。私自身にプロポーズするよりさきに、自分の心を葉山に打ちあけようとしているジョンの必死さが、胸にジーンときた。

「知っている。しかしボクたちは、うまくやっていけると思う」

「さあ、どうか……。第一このひとは、いじめるより、いじめられることに喜びを感じる人だ。嫉妬で言っているのではない。何ならキミの前で、この人をひどいめにあわせてみようか。そういうことを喜ぶ人だ」

「ひどいわ」

と、私は口をはさんだ。

しかしジョンの目の前で葉山にいじめられたら、それを喜びと感じて葉山を、より一層愛するか。それとも救いをジョンに求め、ジョンをより一層、愛するか。私の心が私自身わかるのではないかと思った。

「ジョン、私は葉山に打たれても仕方ないと思う。その方が私の気持が、らくになる。ジ

「ジョン、みていて」

「いや、ボクこそ葉山さんに打たれよう。それで葉山さんの気がすむなら、打ってくれ。そのかわり、ボクの願いがかなうよう、力をかしてくれ」

ジョンは言った。

「話が少し違った方向へ行っただよう。しかし二人がそういうなら、それもいいだろう。縄は、あるか？」

「ある。しかし縄を此処へ持ってくるより、小屋へ行こう。ガラクタの入っている物置の方が、この居間を使うより、いいと思う」

「オーケー」

家の横に小さな庭をへだてて二階建の物置が建っていた。階下には古い洗濯機や、こわれた椅子や塀の名残りのような白ペンキを塗った板などが雑然と積みかさねる様に、はしの方におかれていた。女一人の生活では、それをかたづけするのも容易ではないのだろう。

段梯子から二階へ上がると、何枚もの絵が壁に、たてかけてあって、イーゼルが大小とりどりに、おかれていた。かたづければベッド・ルームになりそうな部屋だった。

「いいものがある」

葉山は言って、寝かしてあったイーゼルの

立てて、足の金具をかけて組立てた。それはかっこうなハリツケ台だった。

ジョンは何本もの縄を床に放り出した。

私の皮膚は、そのイーゼルと縄を見ただけでチリチリして、乳首がキュウツと、かたくなってくるような気がした。

「先ずジョン、キミからだ」

葉山はジョンの手をうしろ手にまわすと、縄をかけて、部屋の隅に、ころがした。ジョンは一瞬、不安そうに私の目を見た。

もし私と葉山がジョンをおいたまま、つれ立って、そこを出て行ってしまっても、どうしようもないのだ。ジョンの足も縛り、猿ぐつわをはめてしまえば、発見される頃は私ももうハワイへ向かって飛んでいる。

しかし私には、そんな無情なことは出来なかった。

「さあ、ぬぐんだ」

葉山にうながされて、私は着ているものをぬいだ。最後の一枚をぬぐのに、私は躊躇した。ジョンの目が、まぶしかった。

「なに、ぐずぐずしている」

葉山は床の上の太い縄を鞭のかわりにして私を打った。

ピシッと、それは鳴った。

私が悲鳴をあげるよりも、ジョンが自分が打たれたようにピクツと動いた。

「ジョン、日本人の縄のかけかたを教えてあげよう」

葉山は私の首に縄をかけると、のどの下に結び目をつくり、十五糎位の間隔をあけて、さらに二つの結び目を作った。そのさきを背中にもわして、のどの下とその下の結び目の間の縄にかけて引くと、乳房の上に縄がかかり、乳房が、ぐっと前へつき出した。それを背中で交叉させて乳房の下の縄にかけて引くと、上下の縄の間から、乳房が丸く顔を出すことになる。

いつもは縄を背中で交叉する時、すでに後手に縛られているのだが、今日は両手を縛っていないのは、イーゼルにくくりつけるためなのだろう。

高手小手に縛られると、乳房がよけい前へとび出すのだが、今日の縄のかけかたは、乳房の装飾のようなものだった。

私はイーゼルの背に立たされた。

イーゼルといっても、どんな形をしているのかわかって頂けない方もあるだろう。画家が絵をのせる台で、Hという字を大きくしてその中へTをかき、Tの縦線にHの横線から

出ている棒を支えのしん棒としてとりつけて固定させるようになっていた。Hの下方にも横に一本、棒が渡っている。画架ともいうが絵をかく人たちはイーゼルといっている。

私は両手を開かされて、Hの上の棒へ、くくられた。それは両手を一ぱいに開くほど大きくなかったし、両手を一ぱいに伸ばすほど高くもなかった。私の手は、ひじの所で折りまげられ、手首をくくられたので、私の二の腕は、だるく、すぐに痛みを感じてきた。

両足も開かされ、足首は別々にHの下の方へ、くくりつけられた。

Hという字は縦の線が平行しているが、イーゼルは安定をよくするために上部は、せまくなり、下部は開いている。私の足首は、その一番、開いている下の所へ結びつけられたので、普通の開き方よりも、無理に広く開かされた。

私の太腿の筋肉が牽れて痛かった。

そしてそれよりも、床に転がされているジョンの目の前に、私は恥かしい所をさらしているのが、たまらなかった。

「美しい」

ジョンは言った。

「女は縛られた姿が、より一層、美しいと思

わないか」

葉山が言った。

「ま、美しいものを少しの間、静かに拝見しよう」

そういつて煙草に火をつけると、ジョンのためにも一本つけて、口にくわえさえてやった。

私は、ただイーゼルに縛られているだけで痛いことをされているわけではないのだが、五分もたたないのに背中まで、だるくなるような気がした。

放っておかれるより、いじめられている方が、無理なポーズをとっている痛さが、まぎれるのかもしれない。

「らくすぎて、気にいらないうだね」

葉山が、いつものように敏感に私の思いを反映した。

「煙草は、いかが？」

と、私の口へ火のついた煙草をくわえさせた。私は、それを吸うまいとして鼻で息をした。すると、煙草のくすぶる煙が鼻の中へ入ってくる。私は齒のさきで煙草をくわえ、口を横に開いて息をした。唾液が口の中へ、あふれてくる。よだれをたらしたら、みっともないと思うので、舌の裏へひろがってくる唾

液が気持、悪かった。

煙草は、くすぶりながら燃えてくる。私は煙草を吸う習慣はなかったが、吸うより仕方ない。吸って煙を鼻から出す。手を縛られているから、煙草をとって煙をふかすことが出来ない。煙は、のどを刺戟して、私は思わず火のついた煙草を床へおとしてしまった。

「コン、コン、コン」

私は、せきこんだ。

葉山は、すぐに煙草を拾って火を消した。

「よし、首を動けないようにしてやろう」

彼は別の縄をとると、私の首にかけて、H型の両側の棒へ、ぐるぐるとまきつけて、もう一度、私の首にかけると、下へ引いて真中の棒へ結びつけた。私は、もう首を前後左右どちらへも動かせなかった。首枷をはめられたように、アゴをあげて、じっとしていなければならなかった。

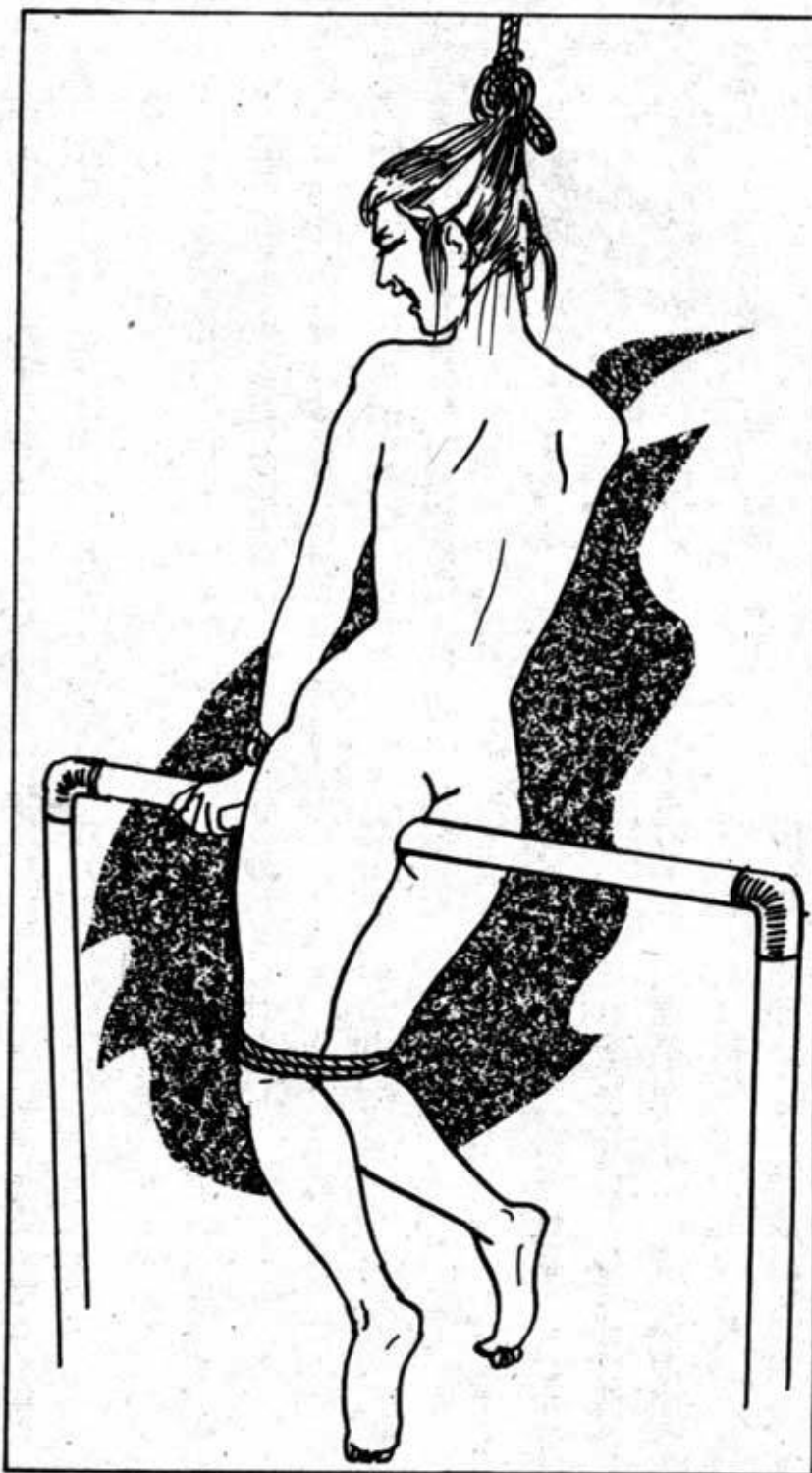
ジョンは、じいっと私を、みつめていた。

私は、その前で葉山になぶられているのが恥しかった。それは、まるで閨房をみられているのと同じ恥かしさだった。

「もうやめて……話合えばわかることだわ。やめましょう、こんなこと……」

私は葉山に言った。

——読者ギャラリー——『落ちたい！』——須坂 旭——



「だめだね。ジョンにみせてやるんだ、キミが、いつもどんなことをされているか。まだ序の口じゃないか。何もいえないように猿ぐつわをはめてくれというナゾか。まあ、これでも、くわえている」

葉山は私の口に、そばにあった太い絵筆を横にして押しこんだ。私は口から牙がはえたように、それをくわえた。又しても、私は唾液になやまされなければならなかった。それ

は痛い責苦ではないのだが、若い娘が、よだれをたらすということが、いかにおかしいかそれをジョンにみられたくなかったのだ。

「さあ、キミの心を言ってみなさい。ジョンが好きか？」

私は縛られたまま、わずかに首を動かしてうなずこうとした。喉がしまって痛かった。

「ジョンと結婚するか」

それには答えられなかった。

ジョンは、まばたきもせず私をみつめている。その目を、いとしいと思ったが、外国人との結婚は、今すぐに、きめられることはなかった。

「したくないんだね」

葉山は聞く。それにも答えられなかった。

ジョンのような、たくましい青年を夫とよぶことは、若い女の子なら誰しも望むことだろう。ましてジョンの家も見だし、この叔母さんの家にしても、ジョンが真面目な家柄の子であることは、わかつている。しかし、外国人であるジョンと結婚するためらいと同時に、被虐を望む彼に、どこまで仲よくしていけるか不安だった。しかし、結婚したくないと云い切ってしまうえないものがあつた。

「どっちなんだ。いえ」

葉山は私の乳房を手の平へ、うずめるようにつかんで、ぎゅうと、ねじった。

「ああ……」

私は思わず口にくわえていた絵筆をおとした。

葉山はそれを拾うと、乳房の上の縄に通してギリギリとまわした。それは手でつかまれるよりは痛くなかった。

しかし葉山は、何本もの絵筆を縄の所どこ

ろにさしこんで、縄をきつくした。

「キミは、こういうことをされるのが、好きなんだね」

私は、だまっていた。

「私はいじめられるのが好きです、と英語でいえ」

葉山は言った。

私がだまっていると、又しても私の乳房を手でつかんで、ねじり上げた。

「さあ、いえ」

私は、つぶやくように、こんな風にされることが好きだといった。

ジョンの目が痛かった。

「彼女がそれを望むなら、ボクは彼女にそれをしてあげる」

ジョンが叫ぶように言った。

「ボクの縄を、ほどこいてくれ。ボクが彼女をいじめてやる」

ジョンの声は泣きそうだった。

「よし、やってみろ」

葉山はジョンの縄を、ほどこいた。

ジョンは自分を縛っていた縄を、わしづかみにして、私の傍に立った。

「ボクはキミの望むようにする。痛くてもいいのか、どうなんだ」

ジョンは縄を鞭にして私の胸へ、ふりおろした。

ピシッ！

「あうっ！」

私は悲鳴をあげる。

ピシッ！ ピシッ！

ジョンは容赦をしなかった。

イーゼルに縛りつけられたまま、私は体をくねらせた。

ジョンはイーゼルのうしろへまわって、私の背にも肩にも縄の鞭を、ふりおろした。

「ああ……あうっ……」

どうもがいても、イーゼルからはなれることは出来ないのに、私の体は勝手に手がく。のどがしまって苦しかった。

「ジョン、やめろ。音が、ひびきすぎる」

葉山が、とめた。

ジョンは荒い息をついた。

私の体は、火傷したようにヒリヒリと痛んだ。首を下へ向けられないので、自分の姿はみえないが、何条もの痕が私の肌を走っている、はずだった。

「ああ、可哀そうに……」

ジョンは、その痕へくちづけすると、私の前に跪いた。

「ボクを打って。ボクは、ひとを打つのは、やっぱり苦手だ。こんな残酷なこと……」

そして私の足の甲に接吻した。

「だから、キミは見ていれば、いいんだ。この人は、まだまだ、いじめられたいと思っている。そうだろう」

葉山にいわれ、私は返事をしなかった。

私はイーゼルごと、のけぞってしまいたいほど、だるかったが、まだまだ、お仕置は終わっていないと思った。

やっぱり、もっといじめられたかった。

ただ打たれるのではなく、もっと、女のいのちの奥底を波打たしてもらいたかった。

「鞭で打つのばかりが、拷問ではない。女をいじめるのは、こうするのだ」

葉山は絵筆のさきで私の乳首をこすった。

私の体に電気が走った。

「この人を血みどろにしてやろう。といっても切るのではない。この絵具で、ぬりたくるのだ」

葉山は、壁にたてかけた絵のわきに放り出してある絵具箱をあけた。

「ジョン、水をとってきてくれ」

いわれてジョンが下へおりて行くと、葉山は私に言った。

「本当にジョンが好きか」

「ええ。でも、自分で自分がわからないの。」

「先生も好き」

「ジョンは、いい青年だ。しかし、外国人との結婚は慎重に考えないと、はたして幸福になれるかどうか、むずかしいと思う。しかしキミは若いんだ。ボクといつまでも、こんなアソビをしているのは、いけないよ。ジョンを愛しているのなら、プロポーズをうけるべきかもしれない」

「今は返事、出来ないわ。日本へ帰って考えると、先生から云って……」

「そうしよう。じゃあ花嫁さんの、はなむけにキミの裸体を、いろいろすることにするか」

「まだ花嫁さんになるかどうかわからないのに……。先生が……。先生がもらって下さるなら……」

私は今まで、口にできなかったことを口にしました。

素裸でハリツケにされているのと同じ恰好の女の口から、それをいうなんて……。

しかし葉山の答は、きかれなかった。

ジョンが水をもって上がってきたのだ。

赤い絵具がチューブから、おし出された。

水彩画の絵具も油絵の絵具も、ごっちゃに

なっているようだった。

何故なら、ピチャツと冷たい筆のさきが私の体にふれるかと思うと、ベトツと気味悪くなりつけられる何かがあった。

ジョンは私の腿へ何かを描いている。

葉山は私の眉間に血がふき出たように、赤い絵具で、いろどった。

頬も、のども、赤い血が、したたっているように、えがいているのだろう。アゴを上向きにして、首を固定されている私には、自分の顔や体が彩色されていくのが、みられなかった。

ただ、葉山の手で乳首のさきにハケを動かされた時、私は私の腿に筆を走らせているジョンに、私の中心部が見えるのではないかと気になった。

葉山は、ことさらに時間をかけて、私の乳首を赤く塗った。

「ああ……うふっ……」

私は、のどの奥を鳴らした。

体に彩色されていくのが、くすぐったく、こちよかった。

「見せて……」

二人が手を安めた時、私は言った。

葉山は私の首の縄を、といてくれた。

私は、やっと首を動かすことが出来た。

私は私の体を見た。

それは、どんなひどい拷問をうけたかと思うほど、赤や青で、いろどられていた。

両方の太腿には蛇が、まきついていて、ジョンが丹念にかいていたのはヘビだったのだ。

両方の腿は蛇に責められ、乳房のまわりからは血がふき出し、私はイーゼルにくくりつけられているのだ。

葉山が細い縄を手にもって私を打った。

「あっ！」

私は身をくねらせた。

腿に画かれた蛇は、腿をしっかりまいて、はなれようとしなかった。

葉山は、そんなに強く打っていない。

それでも私は反射的に体を動かす。

赤い絵具で、いろどられた傷あとから、さらに血が、ふき出てきそうだった。

ピシッ！

と打たれると、

ピクツと体がゆれる。

私はジョンの画いた蛇が気に入っていた。

爬虫類の冷たい感触を太腿に感じるような気さえた。そのくせ、本ものの蛇は大嫌いな

のに……。

(そうだ。玩具の蛇を買ってきて、今度責められる時、手や足に巻きつけてもらおうかしら……?)

私は、ふと思った。そして、今度いつ、こうして葉山に、せめられるのか、そういう日が再びくるのだろうかと思うと、葉山と別れるのは、つらかった。私は、やっぱり葉山から離れられない女なのかもしれない。

「手を洗ってこよう」

葉山は言った。

ジョンは葉山をともなって階下へ下りていった。二人は長いこと上がってこなかった。

私は私の姿に満足していた。

もしかしたら、私はSでもMでもなく、偏執的に自己愛の強い女なのかもしれない。葉山と深くなれず自分の手で自分を喜ばせてしまうのも、そのせいかもしれない。

やがて二人は上がってくると、私をイーゼルからるとき、あらためて後ろ手に縛った。

「さあ、体を洗ってあげる」

葉山が言った。

「バス・ルームへ行こう」

バス・ルームの前で、二人は私の目を布でおおった。

彼等は裸になっていた。私の裸体を見ておきながら、彼等は自分たちの裸体を私に見られないように目かくししたのだ。

「そんなのないわ」

私がいうと、葉山は私の頭を、湯舟の中へつけた。目かくしされていても、葉山の手がジョンの手か、わかる。

うしろ手に縛られ、目かくしされて風呂へつけられるのは、奇妙な感じだった。

湯舟の中へ私をおさえつけて、二人は私の体をシャボンでくるんだ。

片方の乳房を葉山の手が包むと、もう片方を、ジョンの手が包んだ。シャボンをつけて摩擦されると、私は思わず声が出た。するといきなり上から、冷たい水のシャワーが降った。

「あっ、冷たい」

思わず声を立てるのを、二人は声を上げて笑った。

二人は恋敵であるはずなのに、どうして仲よく私をシャボン責めに行っているのだろう。

どんな話が二人の間に、とりかわされたのだろう。

しかし、そんな疑問は一瞬、私の頭を横切っただけで、私は狂ったように波打ってくる

体の中の何かを押さえるのに懸命にならなければならなかった。

体中を走る二人の手の平と指……。

シャボンが、それをなめらかにする。

うしろ手に縛られた私は自由な足をおどらせるようにもがくと、誰かが、その足をかかえこんで足の裏を、くすぐった。

「あっ！」

とのけざると、私はシャボンの泡と一緒にお湯に顔をつけ、鼻の穴からお湯が逆流し、コンコンと、むせた。

目は見えなくても、ジョンの毛深い腕の我触も、葉山の長い指の感触も鮮明だった。

二人は私を玩具にして、浴槽の遊戯をたのしんでいるのだ。そのたのしさで彼等の男の体に変化するのを私の目に見られたくないため、目かくしなのだろう。うしろ手に縛ったのも、それにふれられると困ると思ったからだろう。

(男って女より恥かしがりやなのだろうか)

私は思った。

それにしても、このおかしい三角関係は、どうなるのだろう。

未来のことよりも、一時間さきのことさえわからなかった。 — (つづく) —

白

告

私とプレイをした人たち

谷 山 久 美 子

私が、この田舎の地方都市へ移ってから、早や一年近く、経ってしまいました。

一度SMの甘美な旨酒の味を知ってしまった私は、一人暮しの味気なさから、どうしてもSMプレイをしたく、ある本に投書して知り合ったプレイメイトの人が二人、居ます。一人は三十三才になる八木さん。もう一人

は四十一才の小川さんという人です。小川さんは横浜の人、八木さんは神戸の人で、二人共、見た所は至ってハンサムでフェミニストの、とても感じのよい人達です。

私が今まで逢った人達もそうでしたが、この二人の人も、外見はそうでしたが、一たんプレイが始まりますと、ちょっぴり恐い人達



に変わってしまいます。

まだ、つき合いの日も浅く、今までに逢ったのは、二、三回に過ぎません。でも、十人十色といえますのか、ほんとに、皆、責め方が違います。責められる側の私の方からすれば、このことは、少し興味があります。

今日は先ず小川さんのことから話します。

手紙で時間を知らせてきたので駅まで迎えに行きました。お互いの服装と年令とを、連絡していましたので、それを目当てに、さがしました。大ぜいの人達の中で、わかるかと少し心配しておりましたが、すぐ分かりました。

とにかく、お茶でもということ、近くの喫茶店に入りました。

「遠いところ、すみません」と言いますと、「やあ」と軽く会釈するだけです。

始めてなので、お互いに固くなっています。だが、三十分程、話をしているうち、大体、人柄もわかり、気も楽になりました。

「どこか知ってる所へ行きましょう」ということになって、車に乗りホテルへ行きます。

私に「お風呂へ入りませんか」と云って下さるので、失礼して、お風呂へ入ります。

湯舟の中で色々と考えました。

今日は、どんなことが始まるのかしらと、少し不安になりながらも、新しい期待の入りまじった気持で胸をドキドキさせつつ、風呂から上がりました。

スリップをつけたものか、着てはいけないのか分からず、私が、とにかく着ようとしていますと、彼が、いきなり、どなりました。

「誰が、そんなものを着ろと言った」

始めての人の前で裸を見せる恥かしさで、私は黙って胸を両手で抱きかかえ、部屋の隅で、うずくまってしまうました。

「何を、ぐずぐずしてるんだッ。パンティもなにも、いらん。早く、こっちへ来んか」

と、またまた、どなられてしまいます。

私は、こわごわ、部屋の真中まで、いざり寄って、膝を揃えて正座しました。

「真正面を向いて顔を上げ、足を思いきり開いて、よく見せるように」

そう言われて、もうプレイが始まっていると感じを受けました。言われた通り、目をとじながら、正座のままで居ました。

「目をつぶるな。大きく目を開けるんだ」

目をつぶりますと、次は、

「坐禅を組んでしろ」

と言います。私には、坐禅なんて、どうす

るのかわからず、うろろろしていますと、

「こんなこと位、出来ないのか」

そう言って、私の太ももの所を平手でパシッパシッと叩きます。痛さは、さほどのことではないですけど、皮膚は真赤になります。

私もそろそろ、ムードに馴れてきましたので、立ち上がって部屋の隅へ逃げます。狭い部屋の中のことですから、逃げたところで、しれているのですが、黙ってやられているよりは面白いので、彼がこのあと、どうするかとにかく逃げてみました。そうしたら、

「何故、逃げる？」

そう言って追ってきます。私がまた、すると、その手から身をかわしますと、追っかけてきます。追っかけをやっていましたけれど、とうとう肩をつかまってしまう、畳の上に押さえつけられてしまいました。

足首を持って部屋の中を引っ張り回され、「何故、逃げる。もう逃げないように縛ってやる」

そう言って部屋の隅の柱に、後手のままで縛りつけられてしまいました。

「しばらく、そうしている」

そう言って自分は煙草を吸って知らん顔をしています。ここへ来る前に喫茶店でジュ-

スを飲んでいましたので、トイレへ行きたくて仕方ありません。

「トイレへ行かせて」

そうお願いしましたが、彼は冷淡に知らん顔をしています。でも、何度も、半分ベソをかきながら、お願いしますと、柱からだけ解いて、後手に縛ったまま、トイレへつれて行ってくれました。

「さあ、用をたせ」

そう命令されましたが、あれほど尿意を催しておりながら、他人が後から見ていると思うと、仲々出て来ません。もじもじしていますと、「まだ出んのか」と、また、お尻を叩かれます。

何度も繰り返されているうち、とうとう辛抱できずに、出てしまいました。私は両手が使えないので、ちゃんと拭いてくれましたけれど、やっぱり恥がしかったです。

この人は言葉で責めるのが好きらしいのです。どきっとするようなことを、時々言うので私も、びっくりします。

休憩しながら、お互いの好みを話し合いました。私は何が好きかと聞かれたので、サルグツワをかまされることと、お尻を平手打ちされるのと、お乳を責められるのが一番、好

きだと答えました。

彼は「うん、うん」って聞かいていましたが、「君が好きなことをやってあげよう。さあ、また、ぼつぼつ始めようか」そうして、再びプレイが始まります。柱の傍には、私のはいていたパンティが脱ぎっぱなしのままどころがっています。

「柱のところに頭をつけるようにして寝なさい」と言います。言われた通りに横になりました。足も頭も同じ所に縛りつけてしまいました。「さあ、口を開けて。好きなんだらうサルグツワが？」と言います。

今の今まで自分のはいていた、まだ体臭のしているパンティなので、首を横に振って逃げようとしたら、片手で髪の毛をわしづかみにして、「さあ口を開ける。言われた通りにしないと、もっとヒドイお仕置をするがよいか」と威嚇します。

私はあきらめて口を開けました。パンティを押し込まれますと上から細い紐で頬にくい込むくらい顔を縛ります。顔と足を一緒にして柱に括っけていますので、お尻だけ突き出したような恰好で、叩き易い形です。

「さあ、望み通り叩いてやる」

そう言って大きな手で叩き始めます。途中

までは良い気持だったのですが、しまいには火がついたみたいで、とても熱く感じます。

「手じゃ、こっちが痛いや」とスリッパを持ってきて、それで叩きます。

「もういや、やめてッ」自分ではそう言っているつもりですが、サルグツワをかまされていますので、ただ「ううう」と呻いているだけに過ぎません。スリッパでのお尻叩きが終わりますと、今度はローソクに火をつけて、私の目の前で、ゆすってみせます。

「さあ、今度はこれだよ。うれしいだろう」ポタッ、ポタッとお尻の所へ落ちる蠟涙。落ちてきたその時だけ、とても熱い。

「声を聞けなくちゃ、面白くないナ」そう言ってサルグツワをはずしてくれましたので、

「お願い、もう縄を解いて——」

「うん、もう可哀そうだから解いてやろう」と言って縄を解いてくれました。

「お尻がおサルさんみたいだ」

冗談を言って笑いながら冷たいタオルで冷やして呉れました。

その日は、それで止めて別れました。又、手紙が来ました。「この手紙が着いた日から会う日まで同じパンティをはいてる事。それ



を駅まで、袋に入れて持ってくる事。これは命令だ。それと、もう一つ。今度、来る時はノーパンでくる事」と書いてありました。

その日、私は云われた通り、それを紙袋に入れて持ち、ノーパンティで駅まで迎えに行

きました。喫茶店に入りますと「持ってきたか」と早速、尋ねられました。私が「ハイ」と答えますと、彼は自分の持ってきたハトロンの紙の包みを私に渡して、トイレの中で着てくるように命令されました。

トイレの中へ入って中味を見ますと、ソーセージとゴム製のパンティが入っています。中々入りそうにもなかったけれど無理に入れてパンティをはいたけど、なんだか変な感じ。自然、変な顔付きになって戻ってきますと、「はいてきたか」と彼は言います。私は黙ってうなずいていました。もう最初から完全に小川さんのペースに、はまった感じです。

普通の時は、どちらかと言ったら、割に勝気な私ですが、奴隷ごっこって面白いものです。早速ホテルへ向かいました。

部屋へ入って落着くとプレイの開始です。「さあ、手をうしろへ回して——」

彼の掛声でプレイ開始です。今日は二回目ですから私は素直に言われる通りにします。

「一週間、お前の匂いのついたパンティでサルグツワをしてやろうな」

前の時より色々な汚れもついているパンティでサルグツワをされて風呂場へ引きずられてゆきました。何をするのかと思ったら、床にねかされて足をひろげさせられました。驚いたことに、彼は手に剃刀を持っているではありませんか。

「さあ、これから坊主にしてやるからな」
そう言って私に近づいてきます。今更、逃げることも出来ず、観念して剃られてしまいました。

「うん、可愛い赤ちゃんみたいだ。これから先、おれとつき合ってる内は、いつでも坊主のままだ。よいな」

そう宣告されると、私は鏡の前に立たされました。

「さあ、よく見るんだ。きれいだろう」

そう言って、胸に縄を掛けてコブを二つ作ってタテ縄を下げてゆきます。お乳を責められる事の好きな私に、乳首だけ飛び出す縛

り方をし、タテ縄から股間縛りへ。そして柱を背負ったままで柱に縛られました。

身動きの出来ない私の乳房をワシ掴みにして、ねじった上で、口を寄せて歯を立てました。「痛いッ」と思った瞬間、痛さと同時に体中を何ともいえない快感が走りすぎるのを覚えました。

私にとって、あとで赤くなった乳首が、さわる事が出来なくなる程、痛い乳房を責められるのが、とても好きです。責められているときは、いくらねじられて足で踏みつぶされても、何物にも代えがたい事なのです。

柱から縄を解かれて敷居の所に立たされて両手吊りにされ、足は思いきり上げたままで刷毛による擦り責めにされました。体をよじって避けますと、今度は爪楊子の先で、つつきます。痛い責めと擦り責めとを、かわりばんこにやられて、声を立てようにも立てられず身もだえしておりますと、思い出したように乳首に歯を立てます。

思わず、「痛いッ」と小さな声を出してしまいます。痛い、でも、私は止めてくれとは決して言いません。ノーマルな人とは違い、私は痛さの中に喜びを感じる女なのですからその時が苦しければ苦しいほど、楽しさが倍

加するのです。

お腹がすいたのでお寿司を食べ、もう疲れたので、休もうということになりましたが、時計を見ると十二時を指しています。

そのまま寝るのかと思ったら、「前へ手を出すんだ」と彼が言います。何のことかと言われるまま手を出しますと、私の両手をついに揃えて括り、そのまま自分はグウグウと眠ってしまいました。

翌朝九時になって目が覚めましたが、私の手は縛ったままでした。私は、這うようにして小川さんの側に、いざり寄り、子猫のように、じゃれつきました。

彼は私の前手縛りを後手縛りにやり直してパイプを手にする、朝一番の責めを始めました。パイプ責めは私の好きな責めの一つです。夢心地でいますと、私の乳房を、またワシづかみにして思いきり抓りあげます。

痛さと快感の中で、私は「いやいや、もっと、もっと。いやよ、許して」と、自分でもわけのわからないことを叫んでいました。

足をちぢめたり伸ばしたり、その後で、くたくたになった自分の体の中で、関節の節々や筋肉が痛いのに、びっくりした位です。

小川さんはパイプ責めをしたあとで、やさ

しく接吻してくれて、

「好きだよ、久美」

と言ってくれました。私の好きな事を一生懸命、やって下さった小川さん。これから先も、ずっとおつき合いしてゆくつもりです。

この前に、何の気なしに「氷山の一角」って言ったら、「そうか、今迄の久美は氷山の一角か。じゃあ、物足りないわけだ」そんな意地悪なことを言います。

でも、気が合うといえますのか、一緒にいますと、とても楽しく愉快な人です。

こんなことを奇クに書いたのを見たら、又お仕置のタネになりそうです。二人で行なうこの「奴隷ごっこ」は、今の私には、どんな高貴業よりも、よく効くのです。

先日も遠い所を、私を責める道具を、いっぱい詰めた鞆を車に積んで、訪ねてくれました。ロープを持った彼の手が私の体に触るだけで、もう私の体は燃え上がってエキサイトしてしまいます。

命令されたことをわざと守らないで、責めの口実を彼につくらせることも覚ええました。私は彼とプレイしている時が最高に幸せです。又機会があったら書きたいと思います。

(終)

作六鬼団



決定版

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

● 番号「花決定版」● 定価一、〇〇〇円(送200円)●

△ 内容主要見出し一覧 △

第一章 発端 第二章 人探 第三章 麗者 第四章 援者 第五章 狼の 第六章 魔の 第七章 怖の 第八章 弄の 第九章 淫の 第十章 美の 第十一章 色の 第十二章 美の 第十三章 津の 第十四章 落の 第十五章 密の 第十六章 脱の 第十七章 華の 第十八章 地の 第十九章 翻の 第二十章 一千万円の身代金

第二十一章 身代金奪取の失敗 第二十二章 涙の 第二十三章 連命の 第二十四章 奇妙な 第二十五章 飼育される 第二十六章 悪魔と 第二十七章 屈辱の 第二十八章 逃走の 第二十九章 悪鬼達の 第三十章 淫らな 第三十一章 汚水に 第三十二章 華々し 第三十三章 対峙する 第三十四章 あくど 第三十五章 羞恥の 第三十六章 清純な 第三十七章 人身御 第三十八章 深夜の 第三十九章 小夜子 第四十章 変性色 第四十一章 第四十二章 第四十三章 第四十四章 第四十五章 第四十六章 第四十七章 第四十八章 第四十九章 第五十章 第五十一章 第五十二章 第五十三章 第五十四章 第五十五章 第五十六章 第五十七章 第五十八章 第五十九章 第六十章 第六十一章 第六十二章 第六十三章 第六十四章 第六十五章 第六十六章 第六十七章 第六十八章 第六十九章 第七十章 第七十一章 第七十二章 第七十三章 第七十四章

生れかわるスター京子 激しいスターへの訓練 低脳男と令夫人の結婚 愛弟子を調教する静子夫人 羞恥と屈辱の日本舞踊 悪魔たちの哄笑 地下室の羞恥と汚辱地獄 珍芸を開陳する令夫人 淫靡な時代劇シヨ 華々しきシヨの展開 野卑な妾二人のいたぶり ズベ公達の邪悪な責め 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 悪党の執拗ないたぶり 文夫と小夜子の屈辱的対面 勝ち誇る悪党一味 中国伝来の秘法 緊縛された美女の涕泣 新しい餌食への触手 苦痛と屈辱の生地獄 恐怖の責め続く 結末なき責めの結末 甘美な拷問に悶える夫人 新しい儀の到来と静子の狂態 あくなき汚辱に泣く美女 ニューフェイスに飼育開始 肉体の悪魔に魅せられた女 熱気を帯びたマゾの競演 女盛りの妖美な肉体 優雅な木馬夫人の崩壊 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。 5.58 暁出版株式会社宛



ある下着ドロの哀歓

菟

集

日

記

城 剣 太 郎

「主任さん、何か変わったことなかった？」

あの日、地方新聞の記者である私は、いつものようにフ拉里とS警察署の捜査課の部屋へ、はいつて行った。

「そうだなあ、コソ泥を一人つかまえたが、新聞ネタにはならねえかもしれんよ」

「コソ泥でもいいよ、今日は何もおくるものがなくて弱っていたんだから……」

「それがねえ、下着ドロなんだよ」

捜査主任は黒ブチの眼鏡の奥でニヤニヤした表情を見せながら、調書をめくっている。

「なんだ、下着ドロか」

私はわざと、珍しくもないという口調で、メモ帳をしまいかけた。

「でもなあ、Aさんよ。量がバカに多いんだよ。下の道場へ行ってみな。ちょっとしたデパートの特売場だよ。それが新しいものばかりじゃないから、道場中が、なんともいえないういで……若い刑事連中にはドクだよ」

「へー、ちょっと面白いね」

「ホシは頭が薄くなっているおっさんでなあ何年もの間コソコソ集めたらしく、ダンボー

ルに七個もあったんだよ。しかも、このおっさん、よほど女の下着が好きらしく、自分も桃色のビラビラしたかざり……そうフリルのついたパンティをはいていたんだからね」

私は、すぐに道場へ行って見た。なるほどそこは下着の特売場といった光景である。パンティ、スリッパ、シミーズ、ズロース、ブラジャーからストッキング、ネグリジェまでおよそ、女性の下着と名のつくものは、ほとんど全部そろっている。それも、ピンク、ブルー、黄、黒、水色、グリーン、白、花模様

と、いろとりどりだ。それに捜査主任の言ったように洗っていないものもあるらしく、香水と体臭の入り混じった、なんともいえない匂いが、あたり一面に立ちこめ、独身の刑事ならずとも気がおかしくなるようだった。

私は、その下着の山を眺めて、溜息が出るほどだった。正常な男性だって、女性の下着に興味を示さないものは少ない。私など女性の下着には人一番興味を持っている。デパートの下着売り場を通れば、チラッと、マネキンのつけているパンティに目がゆくし、アパートなどにひらひらと、パンティや、ブラジャーの洗濯物がひるがえってあれば、ピンクのナイロンパンティの一枚も欲しいという衝動にかられることがある。しかし、どうしても理性が邪魔をして盗むことができない。それを、この男は、いとも簡単に、何百点という下着を盗んでいるではないか。

しばらくすると、捜査主任が、犯人という男をつれて道場へ、はいつて来た。百五十七センチの小男で、顔の左半分に、みにくい火傷のあとがある。顔は陽に焼けて、渋紙色をしている貧弱な男だ。オドオドしているのは目の色でわかる。

「さあ、覚えているのから、どこで盗んだか

話してみな」

主任にうながされて、Nは一枚一枚、思い出すように並べはじめた。ほとんどが、薬の行商中、留守宅へあがり込んで、洗濯ものの中から失敬したものだという。

「Aさん、下着どろに興味あるんなら、これを読んでみな。なにか週刊誌のネタくらいにはなるだろう」

と、主任は、私に一冊の古ぼけて、手あかでよごれた大学ノートを出してくれた。ノートには几帳面な文字でギッシリと何やら書き込んである。

私はそのノートを、仕事が一段落した夜十時すぎから読み出した。それは膨大な量である。とても全部をここに紹介することはできないので、その大筋と、部分部分を抜き書きしてみよう。

○

話の順序として、彼のことを少し紹介しなくてはならない。

Nは年齢五十歳。商業高校を卒業した彼はある銀行の地方支店に勤務した。勤務成績は真面目で、上役からも将来を嘱望され、二十八歳で、ある女性と結婚した。その女性――由利枝との新婚家庭は円満だった。やがて男の

子が生まれ、Nの人生にとって、最も充実した、楽しい期間であった。

だが、その幸福な家庭に突然、黒い魔手が襲ったのだ。それはNが三十五歳の夏のある夜であった。

「火事だっ」という声に、Nが目を覚ました時は、木造の社宅は、もう真赤な炎に包まれていた。眠っている長男を抱きかかえるようにして、ようやく逃げ出したが「着物が燃えてしまう」と、燃え狂う炎をみつめて、妻の由利枝が半狂乱のようになっているのを見ると、Nは我を忘れて燃え狂う火の中へ飛び込み、タンスの抽出しを窓から外へ投げ出した。そして、もう一個で出し切るといふ時に、燃え落ちて来た火の塊が、顔から、腹、脚に、どっと、ふりかかったのだった。

駆けつけた消防団員が救い出してくれたため、Nは一命をとりとめたが、顔半分は醜くやけどで引きつり、その上、下腹部に男性として致命的な傷痕さえできてしまったのだ。

Nの日記には、その時の気持がつぎのように記されている。

×月×日

おれは何故、あの時、死ななかったのだろう。顔は醜くひきつり、しかも今日、医師に

はつきりと「男性失格」を宣告されたのだ。男として、これほどのショックがあるうか。包帯の下は一面にひきつり、小児にも及ばぬ小さな魂りが醜く貼りついていてるだけ。手術で尿道だけは作ってもらったので用を足す事はできるが、女性との交渉は一生、持てないということだ。おれは男ではなくなった。妻も、おれの顔を見て目をそらすし、哲一さえこわがって、おれのそばへは来なくなってしまう。生ける屍とは、おれのためにある言葉だ。

×月×日

今日から勤務に出た。支店長が気の毒そうに配置換えになったことを知らせてくれた。窓口から、奥の記帳係にまわされたのだ。化物は客の前には出るなということだろう。同僚の俺を見る眼が何となく冷たい。邪魔者を置いてやっているんだという眼の色だ。家に帰っても、復職を祝う妻の顔付がそらぞらしい。欲求不満のせいに違いない。知っている限りの奉仕で懸命に、ご気嫌をうかがう。犬のような、みじめな存在である。

○

やがて、Nの妻由利枝は、Nと結婚する前に交際のあった男で、Nの友人であるHと親

しくなり、Nの留守中に、Hを自宅に招いて不倫な関係を持つようになった。子供も小学校へ通学するようになり、大っぴらな情事を楽しむことができたらしい。

しかし、この不純な関係は、いつまでも隠し通せるものではなく、疑惑が生じはじめたNは、ある日、勤めに出る風を装い家を出たが二時間ほどして、そっと引返してみた。

足音をしのばせ、植込みの陰にかくれて様子をうかがうと、果たせるかな、由利枝の寝室から彼女の声にまじって男の声が聞こえるのだ。

「うちの主人は、宦官亭主よ」

「カンガン亭主？」

「そう。昔、支那の後宮に仕えたという……」

ホラ、例のはなしがあるでしょ……ウフフ」

「ヘー、なるほどね」

Nは、くらくらと目まいのするほど、激しいショックを感じた。それ以上、聞くに耐えられず、そのまま、蹣跚とした足を踏みしめて再び家を出た。

Nには由利枝を詰問する勇気がなかった。亭主としての務めを果たせない男に、どうして妻の不倫を責める事が出来よう。ただ指をくわえて由利枝とHとの大胆な情事を盗み見

してるのが関の山だった。自分の方から切り出せば、勝ち気で傲慢な由利枝のことだから結果は目に見えている。それは二人にとって破局である。Nは破局を避けるため、見て見ぬりをするこゝろしか出来なかった。

しかし、その恐れていた破局は意外に早くやって来た。しかも、妻由利枝の方から、仕掛けられたのである。

その夜、長男の哲一は、由利枝の母に連れられて、妻の実家へ遊びに行った。Nが夕方銀行から帰ると、玄関に、自分のでない男物の靴がデンと揃えてある。家の中からは、Nの長らく聞いたこともない、由利枝の華やいだ賑やかな声が聞こえる。Nには直感で、Hだとわかった。

Nが部屋の戸をあけると、ソファの上で、由利枝とHが抱き合っていた。

「あら、帰ってきたのね」

由利枝は悪びれた様子もなく、Hの首に巻いた腕を解こうともしない。Hはさすがに後ろめたいのか、Nの顔を見ようとはせず、バツの悪そうな瞳を伏せている。

「Hさん。大丈夫よ。この人は、男ではないんだから……」

由利枝は、痴呆のようにつつ立っているN

を無視するように、自分の方から、Hの唇を求めて行った。

由利枝の傍若無人な態度は、更に続いた。

Hもまた、亭主の眼前で、その妻を「寝とる」という背徳行為に、溺れこんでいるようだった。

Nは飼犬にでも化身してしまったかのよう、無言のまま、ヘタヘタと、床に坐り込み、その狂宴を凝視し続けるだけだった。

「さあ、N、よく見るのよ。男と女のおたのしみとは、こういうものよ」

由利枝は着ていた物をさらりと脱ぎ捨て、

「妻も十分におもひできないあなたなんかはパンティの匂いだけで、いいんだわ」

と、Hにしなだれかかりながら、器用に足の先にパンティをひっかけて、Nの方へ蹴り投げてよこした。

Hは痴呆のように、顔にあたって床へ落ちたパンティを拾い上げた。鼻に押し当てて匂いを嗅ぐと、由利枝の体臭が、快く鼻腔をくすぐってくる。Nはその時、ドス黒い喜びを感じた。

目の前の二匹の獣のなんという絢爛たる美しさ。男性としての力強く、ひきしまった筋肉と骨格の調和。一方、由利枝の女性らしい

ふくよかな臀部から、脚にかけての脂肪ののった曲線の描き出すコントラストの美。それにひきかえて、わが身のなんたる醜さ。

「俺など、この美しい女体を女房と呼ぶ資格はないんだ。せめて、こうしておがませてもらうぐらいにしか値いしない人間なのだ」

Nには、心の底から、そう思えて来た。

狂宴の果ての、のろのろした動きで顔をあげた由利枝は、自分のとった行動を正当化しここで、一気に優位に立たなければならぬと信じてでもいるかのように、

「N。一ラウンド終わったのよ。ぐすぐずしていいないで、あと始末したらどうなのよ」と、激しい語調で叱咤した。

「あと始末って、どうすれば……」

おずおずとNは訊ねた。

「バカね。二人のよこれを拭くのにきまつてるじゃない。ティッシュがなければ、舌でもいいのよ。ホホ……」

Nは、その信じられないような言葉を投げつけられた瞬間に、激しい屈辱感と同時に不思議な恍惚感に全身が慄えるのを覚えた。

○

その夜のことがあったから、Hは三日にあげず、N宅を訪れるようになり、哲一も、ひ

きつった顔が不気味なのか、Nより、Hの傍に居るほうが多くなった。

そして夜になると、いつも、Nという見物客を前に、二人は、二匹の雄と雌になって、あらゆる痴態をくりひろげるのだった。

いつか、それにも飽きた二人は、新しい刺激を求めて、Nに躍りかかり、すっ裸にして細ひもで縛り上げ、ひきつった、ケロイド状の火傷跡を、いたぶりはじめたのだ。

Nは観念した。抵抗しても敵わないのだ。どうでもしろ、と覚悟をきめると、三人に恥かしめられているというのに、異常な昂奮が湧き上がった。長らく忘れていた陶酔が戻ってきた想いだったのだ。

それからしばらく、由利枝を中心にしたHとNの三人による異常な生活が続き、Nの存在価値は、二人の玩弄物であり、刺戟剤としてであった。

○

その後、Nは火傷跡に対する劣等感から、無口になり、同僚との折り合いもまずくなり自分の方から身を引くようにして、銀行を退職してしまった。さらに、Hの中にはさんだけもののような生活にも耐え切れなくなり、自分の方から、由利枝に離婚を申し出た。

由利枝としては、単なる玩弄物でしかなく、なったNに何の未練もないが、ただ慰謝料の問題だけで、自分からの離婚の申し出を我慢していたのだから、Hの申し出は、渡りに舟だった。Nの退職金まで、たんまりと巻き上げ、哲一は由利枝の方で養育することにしてすっぱり離婚に踏み切ることができた。

それからのNは、ある製薬会社のセールスマンになった。年に一、二回、顧客の家庭を訪問し、配置してある薬の中から使用した分の代金をもらい、不足した薬を補充してくるだけの簡単な仕事である。

皮肉にも、あれほどひけめを覚えたNの火傷跡は、この仕事では、かえってお客に気安さを与えた。お客は主に家庭の主婦だが、どこか欠陥がある方が優越感を覚えるものらしい。根が善人であるNには、その火傷跡を利用して、すごみをきかせるなどという芸当はできなかった。

それに、Nは、日一日とセールスのコツを体得し、その上、配置薬だけでなく、コンドームや、錠剤などの避妊薬も携帯するようにした。これは、団地などで歓迎され、大てい

の家庭で買ってくれた。

うになってから、Nの心の中に眠っていた悪癖が目覚ましはじめたのだ。

悪癖——即ち、女性の下着に対する止み難い執着だった。それは、由利枝によって植えつけられたものだったが、さらに過去に遡れば、性に目覚めたころから、彼の体内に根を張っていたのかも知れない。

セールスをはじめてから三カ月目に、Nは生まれて最初の盗みを犯した。それは、S市のP団地に住む、ある若い主婦のパンティであった。その日の日記にNはつぎのように書いている。

×月×日

P団地を訪れる。三軒目に行ったDさん宅の奥さんは、すごい美人だ。眼は、ちょっとケンのある、きつい感じがするが、顔全体の彫りが深く、なによりも身体全体のプロポーションが良い。背も高く、スカートの下で、足が長い。背も高く、スカートの下で、足が長い。背も高く、スカートの下で、足が長い。

あったのだ。玄関に入った時から目をつけていた俺は躊躇することなく、しかし細心の注意を払って上がり込み、乱れ簾の中から、ピンク色をしたナイロンのパンティを抜きとってポケットへねじ込むなり、す早く元の位置に戻った。心臓が早鐘の様に打ってくるのを押えて、奥さんから、お金を受け取ると何気ない態度で出たもののやはり夢中だった。

公園の公衆便所へ入り、パンティを取り出して見た。フリルのついた、かなりの高級品だ。裏を返すと、うっすらと汚れている。その汚れに鼻を当ててみると、成熟した女性の体臭が鼻腔いっぱい広がる。嬉しかった。生き甲斐に行き当たった感じがして、むやみに嬉しかった。舐めると、ちょっと塩辛く、何ともいえない味だ。正に夢の饗宴だった。

○

最初の盗みに成功したNは、その後、同じ様な手口で、次々と盗みを重ねていったらしい。といっても、Nの盗みは、いつもゆきあたりばったりに盗むということではなかったようだ。ほとんどの場合、これはと思う女性のいる家に目をつけると、二回、三回と、ある一定の期間をおいて訪問し、チャンスをつかむというやり方だったようだが、どうしても

チャンスにめぐまれない家の場合は、夜間忍び込んだり、空巣にはいたりもしたらしいし、それでも盗めない場合は、最後の手段として、洗ってかわかしてある洗濯物を失敬することでも我慢することもあったという。

洗濯ずみの下着は、洗剤の匂いが、かすかにするだけで、体臭はほとんど消えており、お目当ての汚れも、よほど古くなったのではない限り、のこっていない道理で、Nとしては余程でないかぎり、洗濯ずみのものには触手を動かそうとはしなかったらしい。

日記によると、盗みをはじめてから一年ぐらいの間にNは、いろいろなことを発見している。

匂いやよごれからみて、割り合い清潔で、色彩的に華やかなのは、ホステスや芸妓など水商売の女性のもの。なかには例外があつて爪をマニキュアしたり、服装なども、かなりゴージャスなものを着、顔も綺麗にお化粧しているにも拘らず、パンティは汚れ放題にしてあるものもあったが、一般的にホステスのものは清潔で、それに次いで主婦、BGといった順だった。

さらに、面白いことは、三枚に一枚位の割合いで恥毛がついていた、という件りだ。そ

のことを発見してから、Nはいつも、盗んできたパンティなどを、自宅に帰ってから、電燈の下で丹念に調べたらしく、必要によっては大型の虫めがねまで取り出して、前面から後面まで、よごれを綿密に調べ、収獲があると思ふと歓声をあげ、丁寧に一本一本、データーをつけて、アルバムにコレクトしたらしい。

Nの日記を、もう少し引用してみよう。

×月×日

一カ月前からチャンスを狙っていたホステスP嬢のアパートを訪問する。ノックしたが返事がないのでノブを回してみると、ドアがスーッとあいた。とたんに、ぞくぞくと身ぶるいがした。若し家の中に人が居た時の用心に、三回ほど呼びかける。返事がない。はやる心を押えて、お勝手にあがり込み、乱れ簞を捜したが、ない。"ぐずぐずしていると人が来る"という焦りと"このチャンス逃がすな"という二つの気持ちに挟まれ棒立ちになる。エイどうでもなれと風呂場の戸をあけて見た。あつた。脱衣場の隅の方に、脱いだばかりの恰好で、花もようのついたパンティとストッキングが一足。すばやくポケットにねじ込むと、後をも見ずに飛び出す。階段の下で買い物帰りらしいP嬢に出合う。すんで

のところだった。もう十秒おくらせていたら、万事窮すだったわけだ。虎口を脱した気持。

ちょっと香水の匂いのしみ込んだP嬢のパンティの匂いは強烈だ。久しくお目にーいやお鼻にというべきか——かかっているに嬉しい匂いだ。舐めてしまふのが勿体なくて、俺は、よごれのひどい、部分を缺で切りとり、カーゼに包んで、ひもをつける。知らない人が見れば普通の風邪引き用マスクだ。明日はこのマスクをつけたままP嬢を訪問しよう。

○

×月×日

由利枝とわかれて二年になる。せっせと集めた女性の下着類は段ボールに二個となる。新しいのが手に入らない時は、時に古いのを取り出してみる。どれも盗んだ時の思い出がある。

最近、T団地で女性の下着類が盗まれるという噂が出始めた事を、お客の家で聞いた。俺のこれまでの経験からすると、下着を盗まれて警察に届け出るのは五軒に一軒位の割合いだ。普通の家庭では何となく届けにくいらしく、結局そのまま泣き寝入りしてしまうようだ。だがT団地にそういう噂がたはじめると、私も、私もというのが出てくること

だろう。ほとぼりがさめるまで、蒐集は少し休むことにしよう。

きょうは止むを得ず、先日失敬してきた女学生のパンティを取り出してみる。メンスが洩れたのか、前面が茶褐色に変色している。これでパンティ酒を作るため、そのよごれた部分を酒の中で洗い出す。これがこたえられない。女性の恥垢というのは、アルコール分によく溶けるためか、完全に酒の中に溶解してしまい、そのかおりといい、味といい、まさに、天下一品、灘の生一本も足元におよぶまい。

○

その後、NはS警察署に捕まるまで、約十年間、せつせと下着蒐集に熱中したらしい。そんなに長い間、捕まらなかったのは、彼の熟練した手口にもよるが、もう一つ、彼は決して、下着以外に手を出さなかったためだろう。現金や、金目のものが、目の先にくるが、ついても決して手を出さなかったようだ。

逮捕された時、Nはピンク色のフリルのついたパンティをはいていたことは、先に述べたが、彼は、においを嗅いだり、舐めたりするだけであきたらず、盗んだ下着を身につけなければならなくなっていたらしく、己の醜

い恥部を美しいパンティでおおう時、彼ははじめて恍惚感に浸ることが出来たという。パンティをはき、ストッキングをつけ、鏡の前で、彼は自らを慰めたにちがいない。たっぷり楽しんだあとも、Nはパンティを捨てることはせず、ノートに持ち主のデーターをメモして、ていねいに段ボールにしまい込んでいたのだ。

そのメモの一例を引用すると――

パンティ。白。洗濯未了。S市下町で蒐集持ち主は家庭の主婦。年齢二十五、六歳。身長約一六五センチ、やせ型。洋服、髪型からみて、派手好み。汚れ方は少ない。うすい黄色。縦八センチ、横二・五センチ。匂いは、やや薄い。

メンス・バンド。黒。洗濯未了。S市T病院の看護婦宿舎で蒐集。持ち主、不明。汚れかなりあり。匂い強烈。

パンティ。水色。S市H町で蒐集。持ち主はバーホステス、名前美沙。年齢二十二歳。身長約一六〇センチ、中肉。髪ブロンズに染色。顔立ちは派手で美人。やや汚れひどい。黄色で縦六センチ、横二センチ。三センチ程の間隔あって円形のよごれあり。匂いは、かなり強い。ヘア二本、長さ五センチと七セン

チあり。

といった具合である。

日記も終りに近づくと、盗みの時の感想はほとんど記録してなく、フェティシズムに関する彼の意見や感想が記載されている。

○

俺にとって、女性の肉体はもはや必要ではない。その分泌物と匂いさえあれば十分だ。相手に気兼ねすることもなく、自由に想像の翼をひろげることができる。俺にとってパンティは単なる繊維ではなく、甘美なる女体そのものだ。もの言わぬ、感情を示さない女性である。

○

愛されようとは思わぬ。愛しようとも思わぬ。愛するのは己だけか――ナルシズムの空しさ。

○

パンティに顔を埋めてその匂いを嗅ぎ、そのわずかに塩辛い味を舌に感じる時。この女性に強制され、匂いを嗅がされ、舐めさせられているのだと思う時――俺の心はマゾヒズムに満たされる。逆に、この誰にも見せないこのパンティの汚れを白日の下にさらしてや

るんだと思う時——俺の心はサジズムで一杯になる。俺の本当の心は一体どっちなのだ。

○ その分厚いNの告白日記を読み終わった頃

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送32円)
三月分	3冊	一一〇〇円(送共)
半年分	6冊	二二〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れた方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

東の空が白みかけていた。

私はその翌日、捜査主任にそのノートを返し、その足で、柔道場へ回って見た。

そこには、まだ下着類が山のように積まれ

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三八二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

ていた。

Nが十年の歳月を費やし、幾つもの危険を冒して、蒐集した収獲品である。おそらくNにしてみれば命の次に大切な、いや命よりも大切な宝物かもしれない。

私はなんとなく、多年の蓄積を一举に失うことになったNの気持がよく分かるように思えた。

警察の取り調べには、Nはすべて包みかくすことなくスラスラ自供したということ。私は捜査主任から聞いた。

そして、取り調べが終わった時、Nは捜査主任に、こういったという。

「刑期は何年になるかわかりませんが、若しまた、娑婆に出ることが出来たら、一から始めます。私には女性の下着より、ほかに生き甲斐はないのですから……」

まさに三つ子の魂百までのたとえの如く、私は下着に魅せられた男の執念をまざまざと見る思いだった。

Nは、いまN県の刑務所に、模範囚として服役している。

〔完〕